# 比恵遺跡群(20)

—比恵遺跡群第50次調査の概要・第53次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第451集

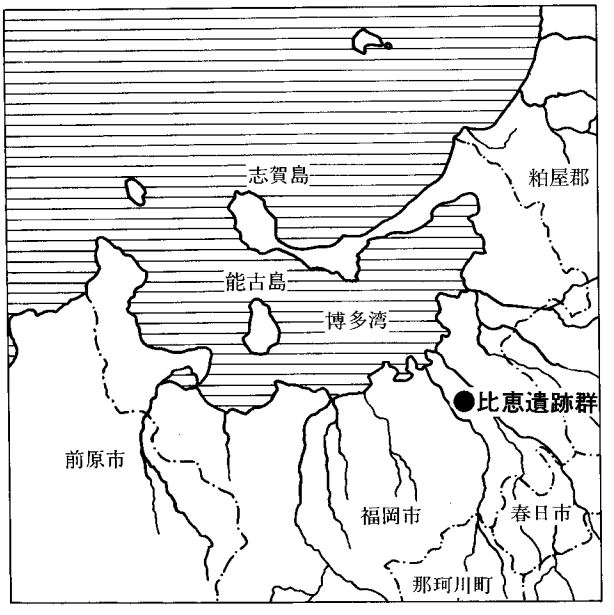
1996

福岡市教育委員会

# 比恵遺跡群(20)

—比恵遺跡群第50次調査の概要・第53次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第451集




遺跡調査番号　9329・9415

遺跡略号　HIE50・HIE53

1996

福岡市教育委員会

▲(1)第50次C区調査区全景(上空から)　▼(2)SC119・SB250大型建物出土状況(上空から)

▲(1)SB202・203・204出土状況(上空から)　▼(2)SB202・203・204出土状況(北から)

# 序

福岡市のほぼ中央部を南東から北西に延びる広大な那珂・比恵台地には、先人達の残した文化遺産が数多く分布しています。交通の要衝をひかえ、都心部に近いこの地域は、開発もまた活発に行なわれているところです。

福岡市教育委員会では、開発によってやむなく消滅するこれら文化遺産について、記録保存に努めているところであります。

このたび、民間開発によって比恵台地に広がる比恵遺跡群の一角を発掘調査いたしました。

発掘調査の結果、弥生時代の大型竪穴や大型掘立柱建物、環濠、古墳時代前期の住居址や溝、古墳時代後期の三棟連続する大型倉庫群、各時期の井戸や青銅器の鋳型など貴重な発見が相次ぎました。

本書は、これら発掘調査の成果を収録したものです。本書が、埋蔵文化財に対する認識と理解、さらには学術研究上役立つことができれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査から整理に至るまで株式会社キングオブラッキー、九商物産株式会社、株式会社シェルエンタープライズの各社をはじめ、多くの方々のご理解とご協力を賜わりましたことに対し、心より感謝の意を表します。

平成8年3月29日

福岡市教育委員会

教育長　尾　花　　剛

# 例　言

1．本書は、福岡市教育委員会が1993（平成５）年８月９日から1994（平成６）年４月28日までと、1994（平成６）年５月24日から同年９月22日にかけて発掘調査を実施した、ビル建設に伴う比恵遺跡群の第50次・第53次緊急発掘調査の報告書である。第50次調査分は整理途中での報告であるため概要報告にならざるを得なかった。機会をみて補遺を行ないたい。

2．遺構の呼称は記号化し、竪穴住居址→SC、掘立柱建物→SB、土坑→SK、井戸→SE、溝→SD、炉址→SR、ピット→SPとした。遺構番号は種類に関係なく各区通して連番とした。ただしSPはSPだけで各区通して番号を付している。

3．本書に使用した遺構図は、下村　智、加藤隆也、野村俊之、上方高弘、吉田香代、西谷彰、松尾龍子、中村ハツ子、河津マスヨ、田口都美子、江藤晴美、末次由紀恵、酒井香代子が作成した。現場写真は、下村　智、加藤隆也、野村俊之、上方高弘が撮影した。遺物実測図は、下村の他、加藤隆也、久住猛雄、田上勇一郎、野口未幾、北村幸子、今塩屋毅行、荒木寛一、桑野　力、寺崎夕起子があたった。トレース及び図版作成は、加藤隆也、久住猛雄、田上勇一郎、上方高弘、茨木浩一、吉田香代、佐田裕一、野口未幾、福本美智子、茨木式子、酒井香代子、長浦芙美子、末次由紀恵、鳥飼悦子、室　以佐子、持原良子、中　暢子、北村幸子が行なった。遺物写真は下村　智が撮影した。

4．本書で用いる遺構図の方位は全て磁北である。

5．比恵遺跡群第50次・53次に係る遺物、記録類（図面、写真、スライドなど）は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理される予定である。

6．本書の執筆は下村　智、比恵第50次調査A区・B区を加藤隆也、比恵第50次調査の古式土師器と第53次出土遺物の大部分を久住猛雄で分担した。加藤、久住の分は文末に表示した。編集は関係者と協議のうえ下村が行なった。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 遺跡調査番号 | 9329 | | 遺跡略号 | HIE－50 | |
| 調査地地籍 | 福岡市博多区博多駅南４丁目49 | | | 分布地図番号 | 037－A－1 |
| 開発面積 | 7,632㎡ | 調査対象面積 | 7,632㎡ | 調査実施面積 | 4,662㎡ |
| 調査期間 | 1993年８月９日～1994年４月28日 | | | 事前審査番号 | ５－２－91 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 遺跡調査番号 | 9415 | | 遺跡略号 | HIE－53 | |
| 調査地地籍 | 福岡市博多区博多駅南６丁目７番27号 | | | 分布地図番号 | 037－A－1 |
| 開発面積 | 1,609㎡ | 調査対象面積 | 1,400㎡ | 調査実施面積 | 1,095㎡ |
| 調査期間 | 1994年５月24日～1994年９月22日 | | | 事前審査番号 | ５－２－381 |

# 本 文 目 次

比恵50次調査
I　はじめに……1
　1　調査に至る経過……1
　2　調査の組織……1
II　遺跡の立地とこれまでの調査……3
　1　遺跡の立地……3
　2　これまでの調査……3
III　調査の記録……6
　概要……6
　1　A区・B区の調査……6
　　(1)　竪穴住居址……7
　　(2)　掘立柱建物……7
　　(3)　土坑……7
　　(4)　井戸……12
　　(5)　溝……12
　　(6)　小結……12
　2　C区・D区の調査……12
　　(1)　竪穴住居址……13
　　(2)　掘立柱建物……23
　　(3)　土坑……29
　　(4)　溝……30
　　(5)　井戸……34
IV　おわりに……73

比恵53次調査
I　はじめに……75
　1　調査に至る経過……75
　2　調査の組織……75
II　調査の記録……75
　概要……75
　1　竪穴住居址……76
　2　掘立柱建物……80
　3　井戸……84
　4　土坑……91
　5　溝……98
III　おわりに……112

# 挿 図 目 次

第50次調査


Fig. 1　周辺遺跡分布図（1/50,000）……2
Fig. 2　那珂・比恵遺跡群調査区位置図……4
Fig. 3　調査区位置図及び調査範囲図（1/2,500・1/750）……5
Fig. 4　A・B区遺構配置図（1/200）……8
Fig. 5　SC017・016・031遺構実測図（1/60）……9
Fig. 6　SK・SE・SD遺構実測図（1/20・1/30・1/60）……10
Fig. 7　A・B区出土遺物実測図（1/3）……11
Fig. 8　SC119遺構実測図（1/120）……13
Fig. 9　C区遺構全体図（1/250）……14・15
Fig. 10　D区遺構全体図（1/200）……16
Fig. 11　SC114遺構実測図（1/120）……17
Fig. 12　SC109・117・315遺構実測図（1/120）……18
Fig. 13　SC106遺構実測図（1/120）……19
Fig. 14　SC129・183遺構実測図（1/60）……20
Fig. 15　SC101・180遺構実測図（1/120）……21
Fig. 16　SB250遺構実測図（1/120）……23
Fig. 17　SB251・262・265・223遺構実測図（1/120）……24
Fig. 18　SB203・204遺構実測図（1/120）……25
Fig. 19　SB202・249・163・225遺構実測図（1/120）……26
Fig. 20　SB346遺構実測図（1/120）……27
Fig. 21　SK128・201・323・205・110遺構実測図（1/60）……29
Fig. 22　SD055・292II区・292III区・292IV区・294III区土層断面図及び遺構実測図（1/60）……31
Fig. 23　出土鋳型実測図（1/2）……33
Fig. 24　SE043井戸実測図（1/60）……34
Fig. 25　SE045・051・052井戸実測図（1/60）……36
Fig. 26　SE052出土遺物実測図（1/3・1/4）……37
Fig. 27　SE074井戸実測図（1/60）……40
Fig. 28　SE105井戸実測図（1/60）……41
Fig. 29　SE105出土遺物実測図（1/4）……43
Fig. 30　SE113・116・122井戸実測図（1/60）……44
Fig. 31　SE123～125・130井戸実測図（1/60）……45
Fig. 32　SE133・135井戸実測図（1/60）……46
Fig. 33　SE134井戸実測図（1/60）……47
Fig. 34　SE136井戸実測図（1/60）……48
Fig. 35　SE136出土遺物実測図(1)（1/4）……51
Fig. 36　SE136出土遺物実測図(2)（1/4）……53
Fig. 37　SE137・158・159井戸実測図（1/60）……54
Fig. 38　SE170・171井戸実測図（1/60）……56
Fig. 39　SE172井戸実測図（1/60）……57

Fig. 40　SE219井戸実測図（1/60）……59
Fig. 41　SE215・218井戸実測図（1/60）……60
Fig. 42　SE271・278井戸実測図（1/60）……61
Fig. 43　SE272井戸実測図（1/60）……61
Fig. 44　SE271・278出土遺物実測図（1/4）……63
Fig. 45　SE273井戸実測図（1/60）……64
Fig. 46　SE274井戸実測図（1/60）……65
Fig. 47　SE275井戸実測図（1/60）……66
Fig. 48　SE276・278～280井戸実測図（1/60）……67
Fig. 49　SE282井戸実測図（1/60）……68
Fig. 50　SE319井戸実測図（1/60）……69
Fig. 51　SE320・321井戸実測図（1/60）……72
第53次調査
Fig. 1　比恵53次調査区範囲図（1/400）……76
Fig. 2　SC24遺構実測図（1/60）……77
Fig. 3　SC47・51遺構実測図（1/60）……78
Fig. 4　第53次調査区全体図（1/150）……折込
Fig. 5　SC52・59遺構実測図（1/60）……79
Fig. 6　SB44・45遺構実測図（1/60）……81
Fig. 7　SB62・64遺構実測図（1/60）……82
Fig. 8　SB65・SP194（SB62）遺構実測図（1/60）……83
Fig. 9　SE06・14・21・27遺構実測図（1/40）……85
Fig. 10　SE27出土遺物実測図(1)（1/4）……87
Fig. 11　SE27出土遺物実測図(2)（1/3・1/4）……89
Fig. 12　SE30・46・53・54遺構実測図（1/40）……91
Fig. 13　SE06・30・SC24・検出時出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）……93
Fig. 14　SK04・05・07・11・13・16遺構実測図（1/40）……95
Fig. 15　SK18・22遺構実測図（1/40）……96
Fig. 16　SK17・23・25・31・32・37遺構実測図（1/40）……97
Fig. 17　SK05・18・25出土遺物実測図（1/3）……99
Fig. 18　SK13・14・25・SE46・SP280・347出土遺物実測図（1/3・1/4）……100
Fig. 19　SD01・10・15土層断面図（1/40）……101
Fig. 20　SD10出土遺物実測図(1)（1/4）……103
Fig. 21　SD10出土遺物実測図(2)（1/4・1/6）……105
Fig. 22　SD10出土遺物実測図(3)（1/3・1/4）……107
Fig. 23　SK11・SE54・SP194・SP694・SD10出土遺物実測図(4)（1/3・1/4）……108
Fig. 24　SD10出土遺物実測図(5)（1/4）……109
Fig. 25　SE46出土火鑽臼実測図（1/2）……109
Fig. 26　出土磁器・土製品・石製品・鉄製品・青銅製品実測図（1/2・1/4）……110

# 本文写真目次

第50次調査


PH. 1　竪穴住居址出土遺物 ……22
PH. 2　柱穴出土遺物 ……28
PH. 3　土坑出土遺物 ……30
PH. 4　溝出土遺物(1) ……32
PH. 5　溝出土遺物(2) ……33
PH. 6　SE043出土弥生土器(1)……34
PH. 7　SE043出土弥生土器(2)……35
PH. 8　SE045出土弥生土器……36
PH. 9　SE052出土古式土師器……39
PH. 10　SE074・075出土弥生土器 ……40
PH. 11　SE105出土古式土師器……41
PH. 12　SE108出土土師器、SE116・122出土弥生土器 ……44
PH. 13　SE124・125出土弥生土器 ……45
PH. 14　SE130出土須恵器……46
PH. 15　SE134出土弥生土器……47
PH. 16　SE136出土古式土師器(1)……48
PH. 17　SE136出土古式土師器(2)……49
PH. 18　SE137出土弥生土器……54
PH. 19　SE158出土須恵器……55
PH. 20　SE159出土須恵器・土師器……55
PH. 21　SE170出土弥生土器……56
PH. 22　SE172出土須恵器・土師器(1)……57
PH. 23　SE172出土土師器(2)……58
PH. 24　SE215・219出土弥生土器 ……59
PH. 25　SE215出土弥生土器……60
PH. 26　SE271・278出土弥生土器 ……61
PH. 27　SE273出土弥生土器……64
PH. 28　SE274出土弥生土器……65
PH. 29　SE274・275出土弥生土器 ……66
PH. 30　SE270・276出土弥生土器 ……67
PH. 31　SE282出土弥生土器……68
PH. 32　SE280出土弥生土器……68
PH. 33　SE319出土弥生土器(1)……69
PH. 34　SE319出土弥生土器(2)……70
PH. 35　SE319出土弥生土器(3)……71
PH. 36　SE320出土弥生土器……72
PH. 37　SE321出土弥生土器……72

# 図 版 目 次

第50次調査
PL. 1 (1) A区遺構出土状況全景（東から）
(2) B区遺構出土状況全景（西から）
PL. 2 (1) C区遺構出土状況全景（南上空から）
(2) D区遺構出土状況全景（西上空から）
PL. 3 (1) A区SC016出土状況（北から）
(2) A区SC017出土状況（北から）
PL. 4 (1) A区SC031出土状況（東から）
(2) C区SC041・SB140出土状況（西から）
PL. 5 (1) C区SC064出土状況（北から）
(2) C区SC067出土状況（東から）
PL. 6 (1) C区SC070出土状況（南から）
(2) C区SC070完掘状況（南から）
PL. 7 (1) C区SC076出土状況（北から）
(2) C区SC089・098出土状況（東から）
(3) C区SC101出土状況（南から）
(4) C区SC153出土状況（北から）
(5) C区SC154出土状況（東から）
(6) C区SC157出土状況（東から）
PL. 8 (1) C区SC106出土状況（上空から）
(2) C区SC106出土状況（北から）
PL. 9 (1) C区東半部遺構出土状況（西上空から）
(2) C区SC109・117出土状況（東から）
PL.10 (1) C区SC109・117出土状況（上空から）
(2) C区SC114出土状況（南から）
PL.11 (1) C区中央部遺構出土状況（上空から）
(2) C区SC114・127出土状況（北から）
PL.12 (1) C区SC117出土状況（東から）
(2) C区中央部遺構出土状況（上空から）
PL.13 (1) C区SC119出土状況（北から）
(2) C区SC119中央土坑（南から）
PL.14 (1) C区SC129出土状況（南から）
(2) C区SC129炉址（SR141）（東から）
PL.15 (1) C区SC132出土状況（南から）
(2) C区SC155出土状況（北から）
(3) C区SC160出土状況（東から）
(4) C区SC161出土状況（東から）
(5) C区SC163出土状況（東から）
(6) C区SC164出土状況（南から）
PL.16 (1) C区SC164IV区遺物出土状況（北から）

(2) C区SC165出土状況（東から）
(3) C区SC165遺物出土状況（南から）
(4) C区SC166出土状況（東から）
(5) C区SC179出土状況（東から）
(6) C区SC188出土状況（北から）
PL.17 (1) C区西側遺構出土状況（上空から）
(2) C区SC178出土状況（南から）
PL.18 (1) C区SC180出土状況（東から）
(2) C区SC180炉址遺物出土状況（東から）
PL.19 (1) C区SC183出土状況（東から）
(2) C区SC197出土状況（北東から）
PL.20 (1) C区SC198出土状況（西から）
(2) C区SC213・240出土状況（北から）
(3) C区SC213III区遺物出土状況（北から）
(4) C区SC213石剣出土状況（北から）
(5) C区SC220出土状況（西から）
(6) C区SC236出土状況（東から）
PL.21 (1) C区SC240出土状況（北から）
(2) C区SC259出土状況（西から）
(3) D区北側遺構出土状況（上空から）
(4) D区SC286出土状況（西から）
(5) D区SC287出土状況（北から）
(6) D区SC290出土状況（北から）
PL.22 (1) D区SC290出土状況（南上空から）
(2) D区東側遺構出土状況（南上空から）
(3) D区SC303出土状況（東から）
(4) D区SC304出土状況（南から）
(5) D区SC311出土状況（南から）
(6) D区SC315出土状況（東から）
PL.23 (1) C区東半部遺構全景（東から）
(2) C区SB163出土状況（東から）
PL.24 (1) C区SB202～204出土状況（上空から）
(2) C区SB202～204出土状況（北から）
PL.25 (1) C区SB203出土状況（上空から）
(2) C区SB203出土状況（東から）
PL.26 (1) C区SB202出土状況（北から）
(2) C区SB204出土状況（北から）
PL.27 (1) C区SB203・SP2005柱痕出土状況（西から）
(2) C区SB203・SP2009柱痕出土状況（西から）
(3) C区SB203・SP2010柱痕出土状況（西から）
(4) C区SB203・SP2012柱痕出土状況（西から）
(5) C区SB207出土状況（北から）
(6) C区SB223出土状況（南から）

PL.28 (1) C区SB224出土状況（南から）
(2) C区SB226出土状況（東から）
(3) C区SB245出土状況（西から）
(4) C区SB251出土状況（東から）
(5) C区SB251・262出土状況（西から）
(6) C区SB255出土状況（北から）
PL.29 (1) C区SB249・250出土状況（上空から）
(2) C区SB249・250出土状況（南から）
PL.30 (1) C区SB256出土状況（東から）
(2) C区SB257出土状況（東から）
(3) C区SB258出土状況（東から）
(4) C区SB262出土状況（西から）
(5) C区SB263出土状況（西から）
(6) C区SB264出土状況（西から）
PL.31 (1) C区SB265出土状況（南から）
(2) C区SB266出土状況（西から）
(3) C区SB267出土状況（西から）
(4) C区SB268出土状況（北から）
(5) D区SB337出土状況（南から）
(6) D区SB339出土状況（北から）
PL.32 (1) D区SB340出土状況（南から）
(2) D区SB341出土状況（南から）
(3) D区SB342出土状況（南から）
(4) D区SB343出土状況（南から）
(5) D区SB344出土状況（東から）
(6) D区SB346出土状況（北から）
PL.33 (1) A区SE005出土状況（西から）
(2) C区SE043遺物出土状況（南から）
PL.34 (1) C区SE045出土状況（南東から）
(2) C区SE045遺物出土状況（南東から）
(3) C区SE045遺物出土状況（南東から）
(4) C区SE051出土状況（北西から）
(5) C区SE052出土状況（南から）
(6) C区SE052遺物出土状況（南から）
PL.35 (1) C区SE068出土状況（南から）
(2) C区SE074出土状況（東から）
(3) C区SE075上層遺物出土状況（東から）
(4) C区SE105中層遺物出土状況（北東から）
(5) C区SE113出土状況（北から）
(6) C区SE105遺物出土状況（北東から）
PL.36 (1) C区SE123出土状況（南から）
(2) C区SE124出土状況（東から）
(3) C区SE125遺物出土状況（東から）

(4) C区SE130出土状況（西から）
(5) C区SE134出土状況（北から）
(6) C区SE134遺物出土状況（北から）

PL.37 (1) C区SE135出土状況（東から）
(2) C区SE136上層遺物出土状況（東から）
(3) C区SE136出土状況（東から）
(4) C区SE137遺物出土状況（北から）
(5) C区SE158出土状況（北から）
(6) C区SE158遺物出土状況（北から）

PL.38 (1) C区SE159遺物出土状況（東から）
(2) C区SE172遺物出土状況（西から）
(3) C区SE172出土状況（東から）
(4) C区SE182出土状況（南から）
(5) C区SE182遺物出土状況（南から）
(6) C区SE188出土状況（北から）

PL.39 (1) C区SE219下層遺物出土状況（東から）
(2) C区SE219中層遺物出土状況（東から）
(3) C区SE215遺物出土状況（東から）
(4) C区SE271遺物出土状況（北から）
(5) C区SE273遺物出土状況（東から）
(6) C区SE274出土状況（東から）

PL.40 (1) C区SE274遺物出土状況（東から）
(2) C区SE278遺物出土状況（北から）
(3) C区SE280出土状況（南から）
(4) C区SE280遺物出土状況（南から）
(5) C区SE319出土状況（北から）
(6) C区SE319遺物出土状況（北から）

PL.41 (1) C区SE320出土状況（北から）
(2) C区SE321出土状況（北から）
(3) C区SE321遺物出土状況（北から）
(4) A区SD002土層堆積状況（北から）
(5) C区SD001出土状況（北から）
(6) C区SD001土層堆積状況（北から）

PL.42 (1) C区SD055出土状況（上空から）
(2) C区SD055出土状況（北から）
(3) C区SD055土層堆積状況（南から）
(4) C区SD082出土状況（北西から）
(5) D区SD292出土状況（北から）
(6) D区SD292Ⅰ区遺物出土状況（北から）

PL.43 (1) D区SD292Ⅱ区遺物出土状況（東から）
(2) D区SD292Ⅱ区鉄器出土状況（東から）
(3) D区SD292Ⅱ区遺物出土状況（東から）
(4) D区SD292Ⅳ区遺物出土状況（南から）

(5) D区SD292II区土層堆積状況（北から）
(6) D区SD292IV区土層堆積状況（北から）

PL.44 (1) D区SD292・294出土状況（北から）
(2) D区SD294III区遺物出土状況（東から）
(3) D区SD314遺物出土状況（西から）
(4) A区SK008出土状況（西から）
(5) C区SK047出土状況（東から）
(6) C区SK049出土状況（南から）

PL.45 (1) C区SK058遺物出土状況（西から）
(2) C区SK062遺物出土状況（北東から）
(3) C区SK068出土状況（南から）
(4) C区SK103出土状況（北から）
(5) C区SK110遺物出土状況（南西から）
(6) C区SK115遺物出土状況（東から）

PL.46 (1) C区SK120出土状況（東から）
(2) C区SK128出土状況（南西から）
(3) C区SK142遺物出土状況（東から）
(4) C区SK169出土状況（北から）
(5) C区SK196遺物出土状況（西から）
(6) C区SK200出土状況（北から）

PL.47 (1) C区SK201出土状況（北から）
(2) C区SK205遺物出土状況（西から）
(3) C区SK221出土状況（南から）
(4) C区SK222出土状況（東から）
(5) D区SK299出土状況（東から）
(6) D区SK300出土状況（南から）

PL.48 (1) D区SK308出土状況（東から）
(2) D区SK308土層断面・遺物出土状況（南から）
(3) D区SK309出土状況（東から）
(4) D区SK323遺物出土状況（南から）
(5) D区SK325出土状況（西から）
(6) C区SK057（K－1）出土状況（北から）

第53次調査

PL.49 (1) 調査区東半部全景（西から）
(2) 調査区西半部全景（東から）

PL.50 (1) 調査区西半部全景（東から）
(2) SD03・SC24・SD38・SB44出土状況（西から）

PL.51 (1) SC47出土状況（南西から）
(2) SC51出土状況（西から）

PL.52 (1) SC52出土状況（東から）
(2) SC59出土状況（南から）

PL.53 (1) SB44出土状況（南から）
(2) SB45出土状況（南から）

PL.54　(1)　SB62出土状況（西から）
　　(2)　SB64出土状況（北東から）
PL.55　(1)　SE06出土状況（北から）
　　(2)　SE06遺物出土状況（北から）
PL.56　(1)　SE27上層遺物出土状況（東から）
　　(2)　SE27下層遺物出土状況（北から）
PL.57　(1)　SE30出土状況（東から）
　　(2)　SE30遺物出土状況（東から）
PL.58　(1)　SE46出土状況（北から）
　　(2)　SE53出土状況（南から）
PL.59　(1)　SE21出土状況（北から）
　　(2)　SK22出土状況（北から）
PL.60　(1)　SK13出土状況（南から）
　　(2)　SK18出土状況（西から）
PL.61　(1)　SK16出土状況（北から）
　　(2)　SK25出土状況（東から）
PL.62　(1)　SD01出土状況（南西から）
　　(2)　SD02出土状況（南西から）
PL.63　(1)　SD03・38出土状況（南から）
　　(2)　SD08出土状況（東から）
PL.64　(1)　SD10出土状況（南から）
　　(2)　SD10土層堆積状況（南から）
PL.65　(1)　SD10III区遺物出土状況（南から）
　　(2)　SD10III区遺物出土状況（西から）
PL.66　(1)　SD10Ⅰ区遺物出土状況（西から）
　　(2)　SD10Ⅰ区遺物出土状況（北から）
PL.67　(1)　SD11出土状況（北から）
　　(2)　SD12出土状況（北から）
PL.68　(1)　SD15出土状況（南から）
　　(2)　SD15土層堆積状況（南から）
PL.69　出土遺物(1)
PL.70　出土遺物(2)
PL.71　出土遺物(3)
PL.72　出土遺物(4)

## 付　図　目　次

付図１　比恵第50次調査区全体図（１/200）

# Ⅰ　はじめに

## 1．調査に至る経過

1993（平成5）年5月26日付で、福岡市博多区博多駅南4丁目21番10号九州機械伸鉄株式会社代表取締役　久保重磨氏から、福岡市博多区博多駅南4丁目49番地内におけるスーパーマーケット及び遊技場建設に伴う埋蔵文化財の事前調査願が教育委員会埋蔵文化財課に提出された。埋蔵文化財課では、比恵遺跡群の中心部であり、これまで、東側及び西側、北側の周辺部で埋蔵文化財の本調査を実施していることから、申請地内にも埋蔵文化財の包蔵することが容易に推測できた。周辺部では、弥生時代の集落や墓地、環溝、井戸、古墳時代の集落、奈良時代から中世にわたる遺構が密度濃く分布していた。そこで、既設建物の解体、基礎除去が終了した同年6月28日に試掘調査を実施したところ、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居址、井戸、溝、柱穴群などが密集して出土し、予想通り良好な状態で遺構群の広がりが確認できた。この試掘調査の結果をもとに遺跡の取り扱いについて関係者と協議を重ねたところ、建物建設によって破壊される遺構群については本調査を実施するということで協議がまとまった。ただ、今回の調査は建物部分のみとはいえ、これまで50次近くの調査の中では最も調査面積が広く、かつ事業自体が非常に緊急性が高かったので、建物建設4区画の内、2区画を先ず埋蔵文化財課第2係長山崎純男、事前審査主任文化財主事山口譲治を中心に、現場主任には九州大学の西健一郎氏をあてて調査を実施することになった。その後、あとの2区画を埋蔵文化財課担当職員があたることになった。本調査は施主の株式会社キングオブラッキーの受託調査として同年8月9日から着手した。

## 2．調査の組織

調査の組織は以下の通りである。

**調査委託**：株式会社　キングオブラッキー　代表取締役　新島　学

**調査受託**：福岡市　　福岡市長　桑原敬一

**調査総括**：埋蔵文化財課長　折尾　学　埋蔵文化財第2係長　山崎純男

**調査庶務**：埋蔵文化財第1係長　横山邦継　吉田麻由美

**調査担当**：山口譲治　菅波正人（試掘調査）　埋蔵文化財第2係　下村　智（本調査）

**調査協力**：西　健一郎（九州大学）

**調 査 員**：加藤隆也（現埋蔵文化財課）　野村俊之（前埋蔵文化財課）　上方高弘　吉田香代　西谷　彰

**調査作業**：赤星英子、足達美代子、安部カズエ、池田智子、池田富士江、伊藤美伸、稲永正子、上野龍夫、江嶋光子、江藤晴美、岡本妙子、緒方廣恵、小川保男、奥間真理、尾崎真佐子、鹿児嶋トシ子、蒲地純子、亀井好明、河津信子、久保山弓子、黒瀬千鶴、興善トモエ、小金丸絹江、柴田　博、柴田レイ、志堂寺　堂、大長正弘、田口都美子、武田潤子、竹本珠子、田中敏子、谷　英二、為房紋子、恒吉テルミ、鶴羽和生、寺崎夕紀子、徳永静雄、高野瑛子、永田幸子、永松伊都子、永松トミ子、那波幸子、西田幸子、西本スミ、野口ミヨ、野村弥生、播磨博子、日尾野典子、藤木泰子、藤野雅基、藤野保夫、藤野和代、藤原直子、船越エミ子、的野治郎、前田京子、前田チエ子、松井一美、森本良樹、

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | **比恵遺跡群** | 6 | 席田大谷遺跡 | 11 | 諸岡B遺跡群 |
| 2 | **那珂遺跡群** | 7 | 宝満尾遺跡 | 12 | 五十川遺跡群 |
| 3 | 席田青木遺跡 | 8 | 下月隈天神森遺跡 | 13 | 雀居遺跡2・3次調査地点 |
| 4 | 席田久保園遺跡 | 9 | 金隈遺跡 | 14 | 雀居遺跡4・5次調査地点 |
| 5 | 席田赤穂ノ浦遺跡 | 10 | 板付遺跡 | 15 | 博多遺跡群 |

Fig.1　周辺遺跡分布図(1/50,000)

下直子、和田トリ子、荒木寛一、梅木繁良、大津山晴夫、沖濱貴彦、尾花憲吾、鹿毛賢次郎、加生知彦、桑野　力、許斐博史、小森茂生、高橋　彬、立水　清、中村ハツ子、中尾武義、長浦芙美子、広田安平、松尾龍子、三浦貞男、右寺栄次、宮城祐幸、宮崎清、村山市次、本村久利、山脇光泉、安本　哲、吉住作美、脇田　栄、末次由紀恵、酒井香代子、松永由美、河津マスヨ

整理作業：茨木式子、酒井香代子、長浦芙美子、末次由紀恵、鳥飼悦子、室　以佐子、持原良子、宮原つや子

# II　遺跡の立地とこれまでの調査

## 1．遺跡の立地

那珂・比恵遺跡群は、福岡平野のほぼ中央部に位置し、平野を北西方向に流れる御笠川と那珂川に挟まれた標高5～11mの中位段丘上に分布している。遺跡の範囲は100haを超え、那珂遺跡と比恵遺跡との境は東側から入る浅い谷によって区分されている。この那珂・比恵遺跡の分布する台地は南側の春日丘陵に連なり、那珂遺跡の南側には五十川・井尻遺跡群が、さらに南側には須玖岡本遺跡を中心とする遺跡群が広がる。

比恵遺跡群は、その台地の先端部に位置し、1995年度までに57次の調査を実施している。一帯は現在市街化され平坦地になっているが、これは1933年頃から始まった区画整理事業によるものである。この事業に伴って1938年に故鏡山猛九州大学教授による第1次調査が実施され、わが国で初めて弥生集落の周りに溝を巡らすということが明らかにされた。これをもとに環溝住居址論が展開され、学史的にも重要な遺跡になっている。

## 2．これまでの調査

1995年度までに57次にわたる発掘調査を実施している。縄文晩期終末から中世にかけて各時期の遺構・遺物が多量に出土し、特に弥生時代から古墳時代にかけての遺構密度は非常に高い。福岡平野の中でも中心的な位置を占めていたことが容易に窺える。ここでは、これまで発掘調査された成果の内、弥生時代について各項目ごとに概略を記しておきたい。

**集落**　これまでの調査によって、開析された谷が複雑に入り込んでいる地形から明らかにされている。集落の形成は、縄文晩期終末から弥生前期にかけて、まず台地北側と西側で開始される。西側の3次調査では貯蔵穴8基が確認され、最下層で夜臼式土器と板付Ⅰ式土器の共伴が知られた。北側の25次・26次・28次調査では弥生前期末から中期初頭の円形竪穴住居址や貯蔵穴、4次・30次・31次・37次調査では前期を中心とする貯蔵穴群が多数検出されている。弥生中期になると集落は台地中央部へ拡大し、広い範囲で集落が形成されるようになる。中期後半代になると大型の円形竪穴が出現し、50次調査では最大直径が12.5mもあった。弥生後期には台地中央部が中心的な集落の範囲となる。後期には大型の掘立柱建物や柵列などが確認されており、台地中央部には、方形柵列で囲まれた掘立柱建物群の存在が推測される。

**環濠**　集落全体を取り囲む環濠はまだはっきりしないが、15次・35次・40次・41次・46次・53次調査で弥生中期後半から後期にかけての大溝の一部が確認されている。41次調査の大溝は幅4～5m、深1.5mを測る大規模なものである。1次調査では、中期から後期終末にかけて単位集落を囲むような4つの環濠（溝）が確認されている。隅丸方形を呈し、1号は30m、2号は40m、3号は70m、4号は90mとなっている。3号溝については9次調査で追認がなされている。

**大型掘立柱建物**　台地中央部の7次から50次調査区一帯にかけて分布している。主に弥生後期に属し、梁行1間、桁行3間の建物が多い。6次調査では桁行が8.5m、27次調査では7.5mと8.0mの2棟、48次調査では6.7m、50次調査では梁行1間4m、桁行3間が10mの建物が出土している。これらの建物は柱穴の掘方が大きく、木製の礎板を敷くものが多い。

**井戸**　弥生中期後半代から後期終末にかけて200基をはるかに超える井戸が出土し、多くは群集して

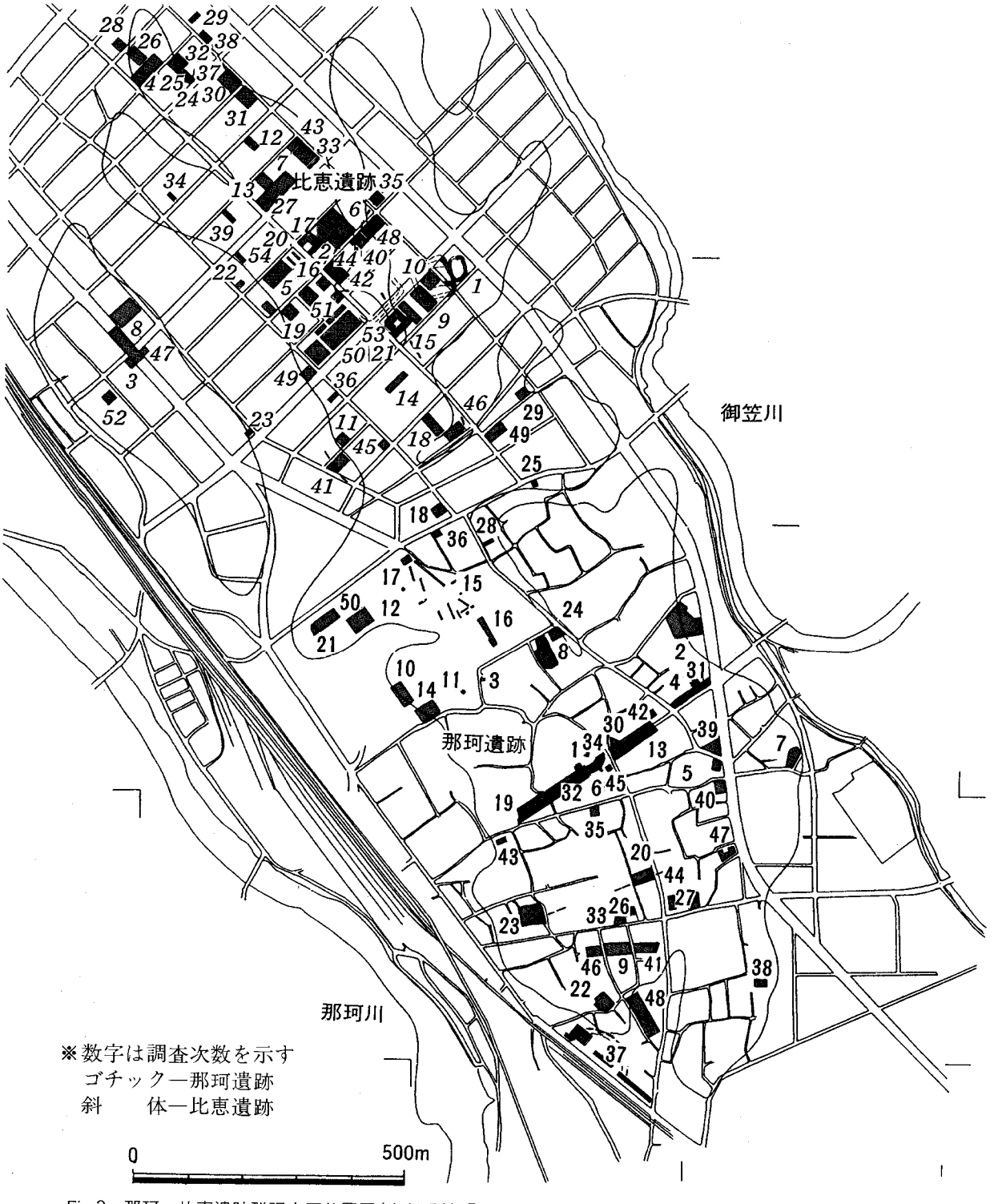



Fig.2　那珂・比恵遺跡群調査区位置図(吉留秀敏『那珂11』福岡市埋文報第366集1994に調査区を加筆)

分布している。井戸内からは完形の土器群、木製農工具類、容器、祭祀具などが出土している。土器群は、中期後半代から終末にかけて優美な形をした丹塗りの袋状口縁壺が目立って出土する。口縁部横に焼成前から２孔を開けた直口の壺も良く出土する。その他、丹塗りの甕形土器も出土する。中期の井戸は底から遺物の出土する比率が高く、多い時は20個体を越えることがある。弥生後期も遺物の出土する確率は高いが、後期終末になると出土個体数はぐっと減ってくる。後期後半代では複合口縁

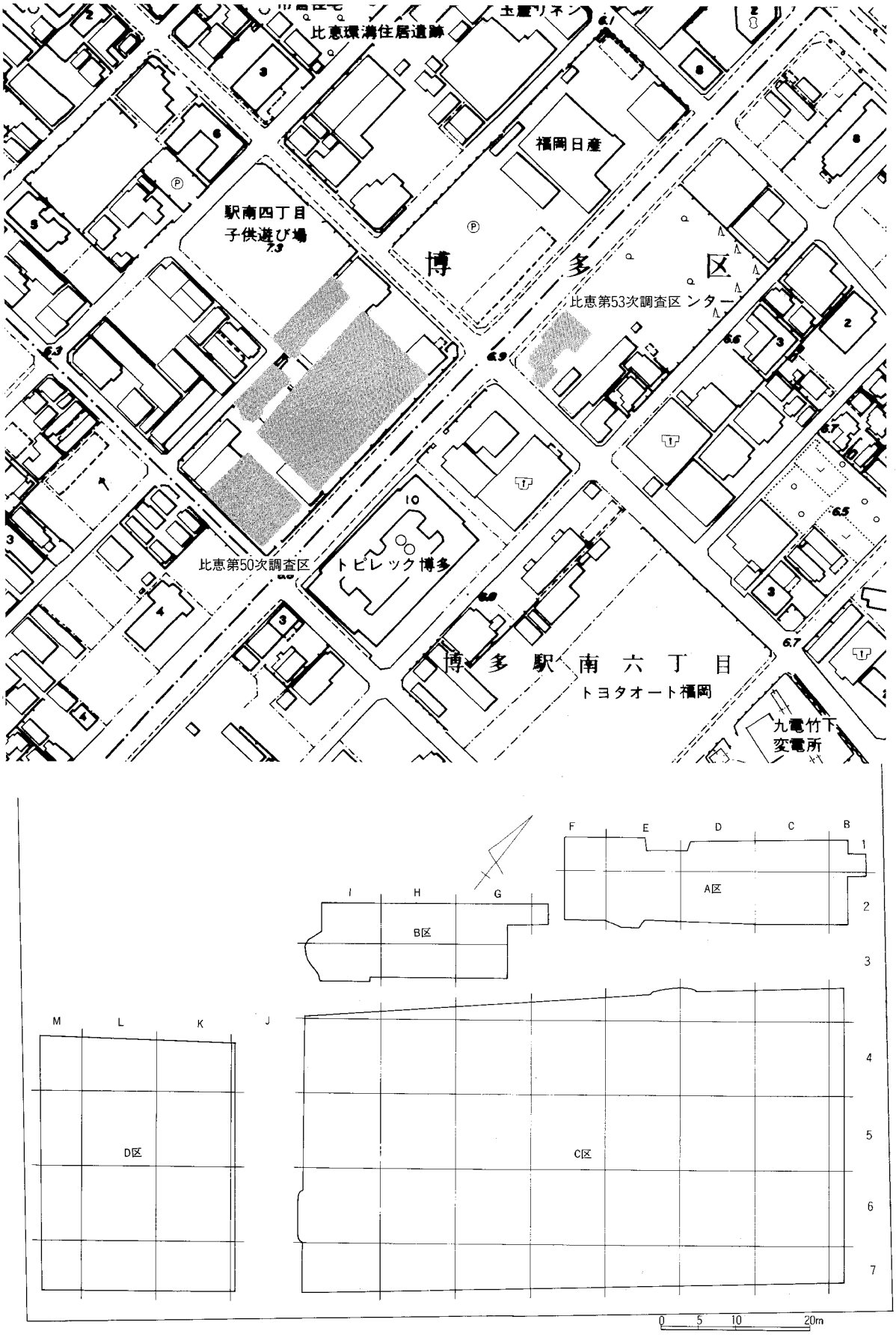



Fig.3　調査区位置図及び調査範囲図(1/2,500、1/750)

壺がまとまって出土する例があり、同時に出土した他の器種も含めると20個体から30個体を越えるものまである。井戸から出土する遺物は井戸底で一括して出土する場合が多いが、井戸底で一括して出土し、かつ中位段階でまとまって出土し、さらに上位段階でまとまって出土する例があり、器種の組み合わせと細かな編年序列を考える上で参考になることが多い。但し、井戸に投入された土器は選択的なものであり、生活土器の全てが出土する訳ではない。また、木製品の出土も多く時期を特定できるので、土器と同じように組み合わせや型式変化を考える上で重要である。

**墓地**　弥生中期から後期初めにかけての甕棺墓地が１次・３次・４次・６次調査区を中心とする地域の４ケ所で確認されている。６次調査区を中心とする地域以外は数基から10数基の小規模なものである。６次調査区を中心とする墓地は甕棺墓・木棺土壙墓が70基出土し、中期前葉のSK－28から和絹に巻かれた細形銅剣が１口出土している。墓地群の中心人物の墓とみられ、墳丘墓の可能性が指摘されている。

**金属器**　弥生中期から後期にかけて銅鏃、青銅鋤先、鉄器が出土している。銅鏃は有茎で、17次・18次・26次・32次・33次・35次・42次・48次調査で合わせて９本、鋤先は、５次・６次・９次・18次・53次調査で合計７例、最近調査された57次で３例が出土し、都合10例となっている。実用の利器として使用されたものであろう。また、鉄器は20次で鉄鏃、39次で鉄鏃と鉇、30次で板状鉄斧、51次で鍛造鉄斧２と鋳造鉄斧３、鉇１が出土している。

**鋳型**　鋳造関係遺物は、30次調査で両面に中細銅戈と中細銅矛を彫り込んだ鋳型、43次で鋳型の小片、40次で取瓶、42次で広形銅矛、50次で中細銅戈と広形銅矛の鋳型がそれぞれ出土している。また、６次調査ではガラス滓などが出土しており、青銅器鋳造やガラス鋳造に携わった集団がいたことを示している。

**木製品**　木製品は主に北側の木器貯蔵穴、中央部の環濠や井戸などから出土している。農具類、工具類、容器類などが中心であるが、25次調査では弥生前期の木剣と漆塗り脚付き杯が出土している。33次調査では中期の完形の木臼、ヤシの実容器、35次調査では樽、54次調査では水銀朱を塗った線刻文木製品が注目される。

# III　調査の記録

## 概要

調査は建築物の基礎によって破壊される部分のみを対象として行なった。調査区はA区からD区まで設定し、A区・B区は西健一郎氏を調査主任として実施し、C区・D区は下村が担当した。調査面積は、A区が340.91㎡、B区が237.48㎡、C区が2852.92㎡、D区が1107.64㎡である。合計するとこれまで調査した比恵遺跡群内の調査区では最大である。各区から出土した遺構数は約350あり、その内、竪穴住居址57軒以上、掘立柱建物38棟以上、井戸40基、溝37条と残りは土坑群などである。遺構の数は厖大で整理が追いついていない。以下、主な遺構と概要について報告しておきたい。

## １．A区・B区の調査

### 調査概要

調査は約70cm～80cmの盛土をバックホーにより除去した後に行った。盛土と20～30cmの遺物包含層

を除去すると、基盤の鳥栖ロームとなり、その面で遺構の検出作業を行った。遺構面の標高はA区で約6.3m～6.5m、B区で約6.6m～6.8mを測る。

A区においては近代に至るまで使われていた道路によって攪乱が著しく、B区においてはコンクリートによる基礎により著しく攪乱を受けていた。しかし、A・B調査地点において竪穴住居、掘立柱建物、土坑、井戸、溝、柱穴等の多くの遺構が調査された。

## 遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡（SC）

今回の調査において3棟の竪穴住居を調査した。

SC－017（A区）（Fig.5、Fig.9、PL.3）

A区調査地の中央より東よりにて検出された。遺構の南側は調査区外に延びる。平面形は不明であるが、現状での最大長は5.4mを測る。主柱穴は不明である。出土遺物は1須恵器坏蓋2須恵器坏身が出土した。遺構の時期は遺物から6世紀後半に位置づけられる。

SC－016（A区）（Fig.5、Fig.9、PL.3）

A区調査地のSC－01西側にて検出された。遺構の南側は調査区外に延びる。平面形は方形を呈し、確認された一辺は3.7m、残存する深さは約6cmを測る。主柱穴は不明である。住居内東より床面上において焼土・炭化物が確認されている。出土遺物は3須恵器壺底部が出土している。外面底部はヘラ削り後、カキ目を施している。遺構の時期は遺物から7世紀前半に位置づけられる。

SC－031（B区）（Fig.5、Fig.9、PL.41）

B区の中央北よりにて検出された。平面形は楕円形を呈し、長辺3.7m、短辺3.1m、深さ15cmを測る。主柱穴は不明である。出土遺物は4・5は甕の口縁、6は壺の口縁、7・8は甕の底部、9は壺の底部である。遺構の時期は遺物から弥生時代中期後半に位置づけられる。

(2) 掘立柱建物（SB）

A・B区では350個以上の柱穴が検出された。柱穴は調査区全域に分布する。そのうち、建物として確認されたのは、SB－021である。

SB－021（A区）

調査区東側にて確認された。N－16°－Wをとり、柱穴の規模は直径25cm～50cm、残存6cm～54cmを測る。建物の北側柱穴列の西側は柱穴規模が大小交互に配置することから、主柱穴と、その間の束柱の組み合わせと考えられる。ただし、北側柱穴列において東側と西側とではやや柱軸がずれることから、2軒の掘立柱建物の切り合いがある可能性も考えたい。遺構の時期はSC－017を切っていることから、6世紀後半以降と考えられる。

(3) 土坑（SK）

SK－008（A区）（Fig.6・9、PL.44）

平面形、長方形を呈する土坑である。東側をSD－002に切られる。残存は長辺1.1m、短辺80cm、深さ60cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土で最下層に4～5cmの炭火物の堆積層が見られる。出土遺物は10・11は甕の口縁、12は甕棺の口縁破片、13・14は甕の底部である。遺構の時期は遺物から弥生時代中期中頃に位置づけられる。

SK－010（A区）（Fig.6）

Fig.4　A・B区遺構配置図(1/200)

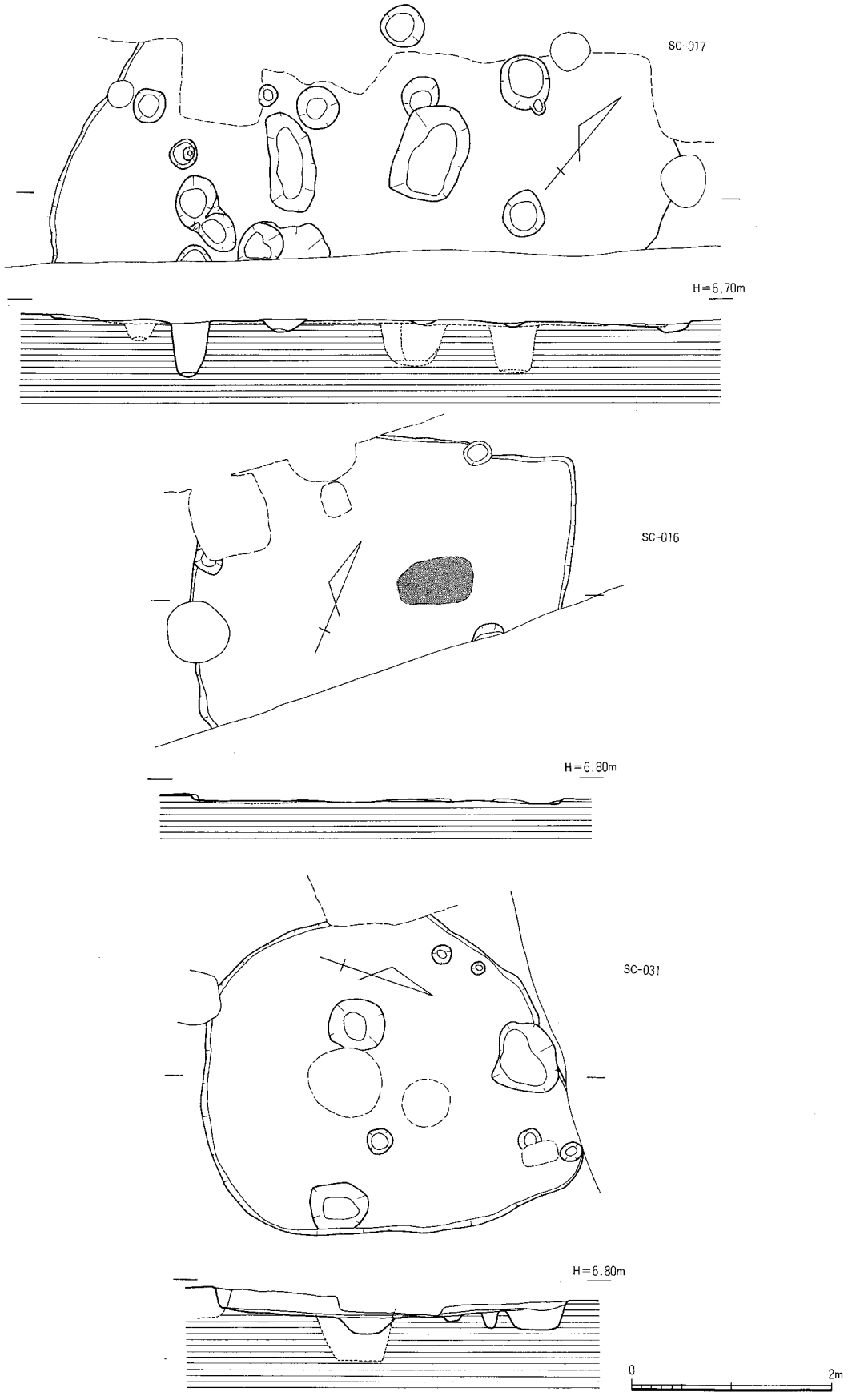



Fig.5　SC-017・016・031遺構実測図(1/60)

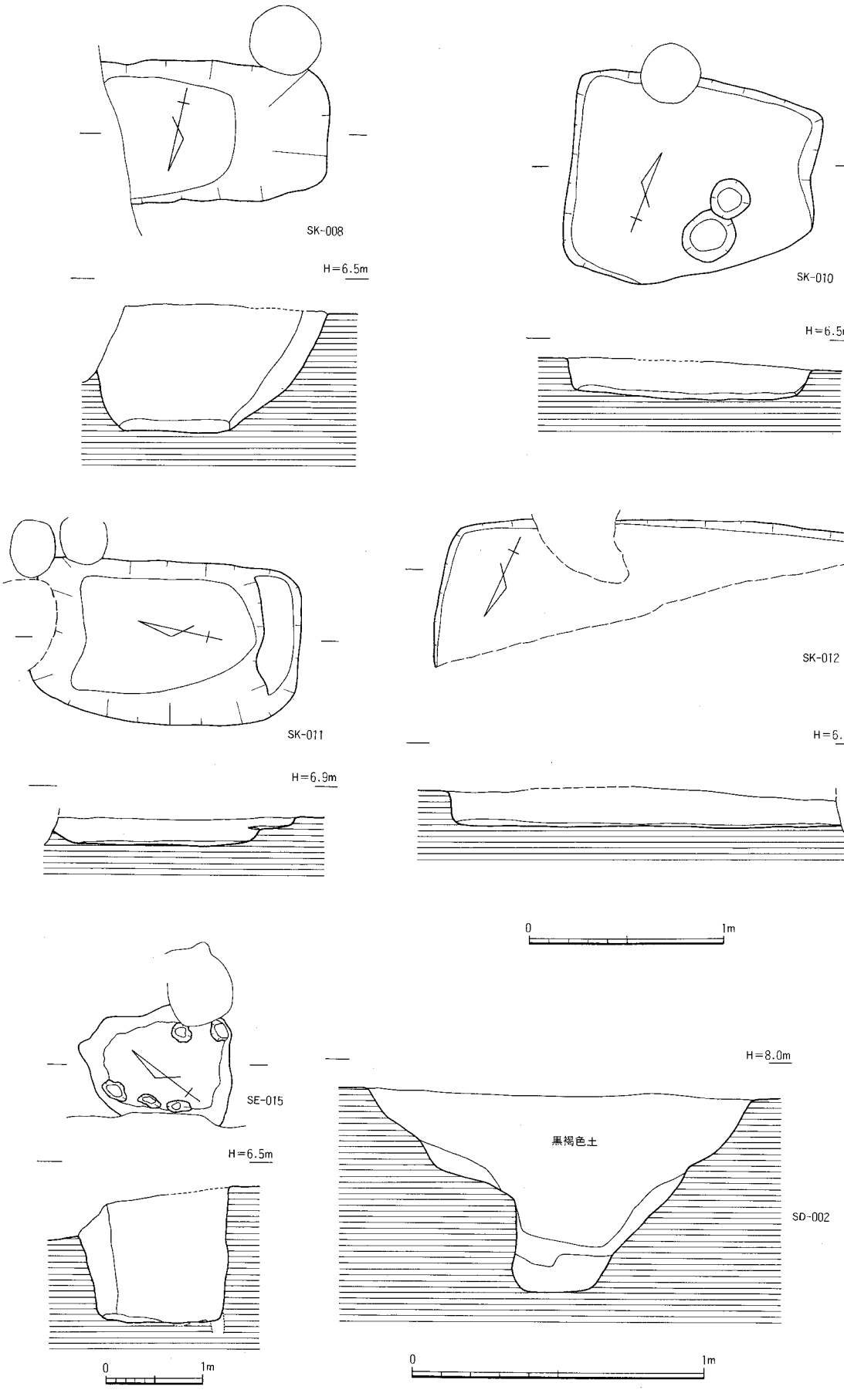



Fig.6　SK・SE・SD遺構実測図(1/60・1/30・1/20)

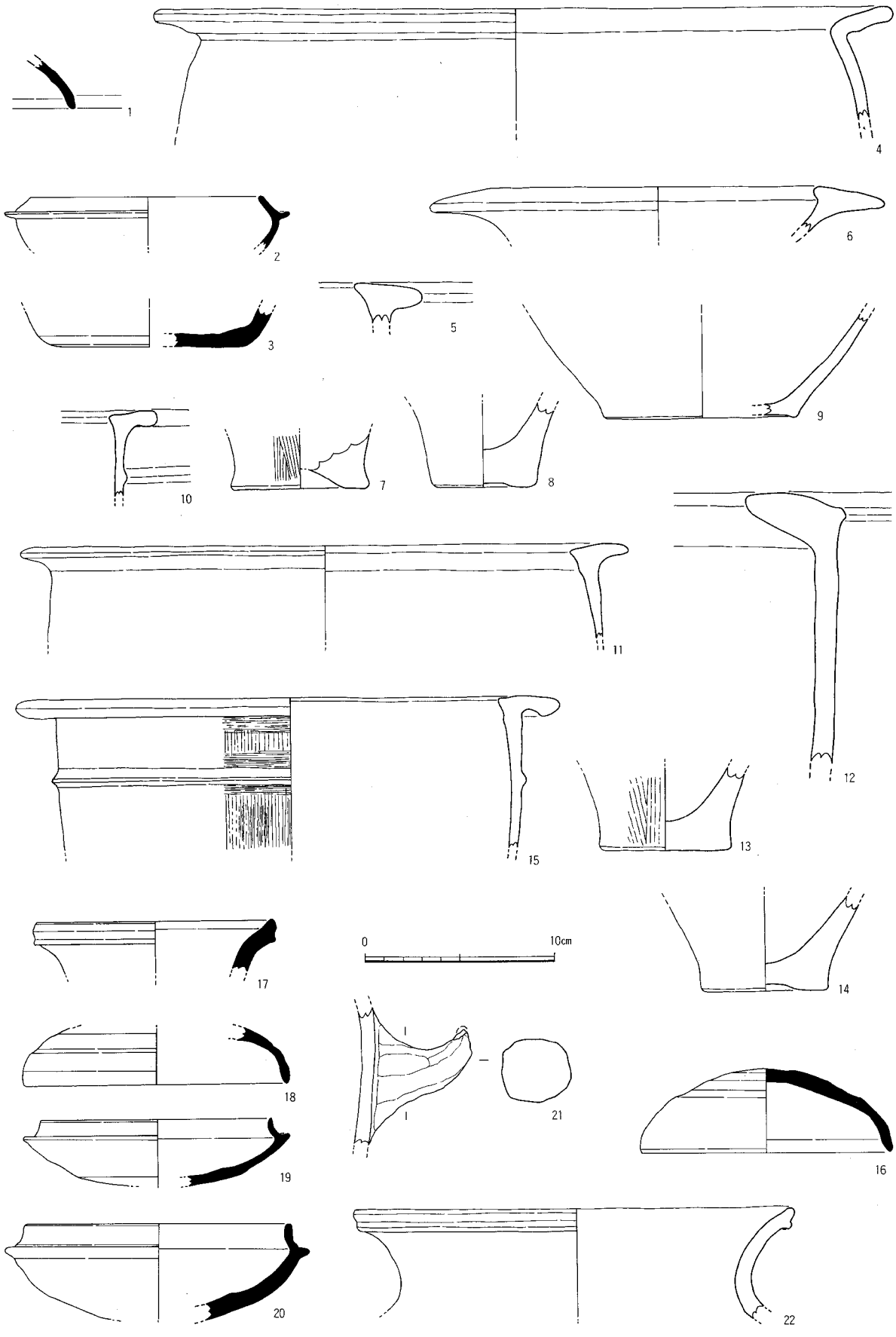



Fig.7　A・B区出土遺物実測図(1/3)

平面形、方形を呈する。南側を攪乱により切られる。残存は一辺1.2m、深さ20cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土である。出土遺物は弥生土器片が出土しているが図化できるものではない。

SK－011（A区）（Fig.6）

調査区西側に位置し、長方形を呈する。長辺約2.1m、短辺60cm、深さ20cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土である。出土遺物は弥生土器片が出土しているが図化できるものはない。

SK－012（A区）（Fig.6・9）

調査区西側に位置し、方形を呈すると思われるコーナーを検出した。深さは12cmを測る。覆土は暗黒褐色粘質土、淡茶褐色粘質土、黄褐色ロームブロック混じりである。出土遺物は15の甕の上部が出土している。胴部はタテハケを施し、口縁下に三角突帯を巡らせる。遺構の時期は遺物から弥生時代中期中頃に位置づけられる。

(4) 井戸（SE）

A区において2基確認された。調査区東端に位置するSE－003は攪乱により大きく削られている。

SE－015（A区）（Fig.6・9、PL.33）

A区の西端にて検出された。平面形は不定形を呈するもので深さは1.3mを測る。底部には浅い窪みが見られる。出土遺物は16の須恵器坏蓋である。口径は13.0cmを測る。遺構の時期は遺物から6世紀後半に位置づけられる。

(5) 溝（SD）

A区においては2条検出されたが、1条は遺物の残存が悪く図化できる遺物は出土していない。B区では調査区東端にて1条の溝が検出された。断面形は逆台形を呈し、中世に属する遺物が少量出土している。C区において同溝が検出しているためここでの記述は省略する。

SD－002（A区）（Fig.6・9、PL.41）

A区ほぼ中央部にて検出された。N－25°－Wをとり、やや府外側に弧を描く。断面形は「V」字形を呈する。出土遺物は17が須恵器壺の口縁である。口径12.4cmを測る。18は須恵器坏蓋で、口径13.8cmを測る。19・20は須恵器坏身である。19は口径12.0cm、20は口径14.0cmを測る。21は甑の取手である。22は土師器壺口縁で、口径は22.8cmを測る。遺構の時期は遺物から6世紀後半に位置づけられる。

(6) 小結

A・B区の調査面積は狭小なものであったが、弥生時代から中世にかかる遺構が検出された。後世の攪乱と削平が著しく、全体的に残存は良好とはいえないが、その中でも継続的に続く集落が調査された。比恵遺跡群は福岡平野でも特異な発展を遂げた遺跡であり、今回の調査においてもそれを裏付ける貴重な資料が得られた。（加藤隆也）

## 2．C区・D区の調査

### 概要

C区・D区は調査面積が広く、弥生時代から中世にわたる竪穴住居址、掘立柱建物、井戸、溝、袋状貯蔵穴、土坑などが激しく切り合って出土している。特に、C区は包含層状に黒い土が一面に広がっていたが全て遺構が切り合った埋土であった。C区では、弥生時代の大型円形竪穴建物が3軒、大型方形

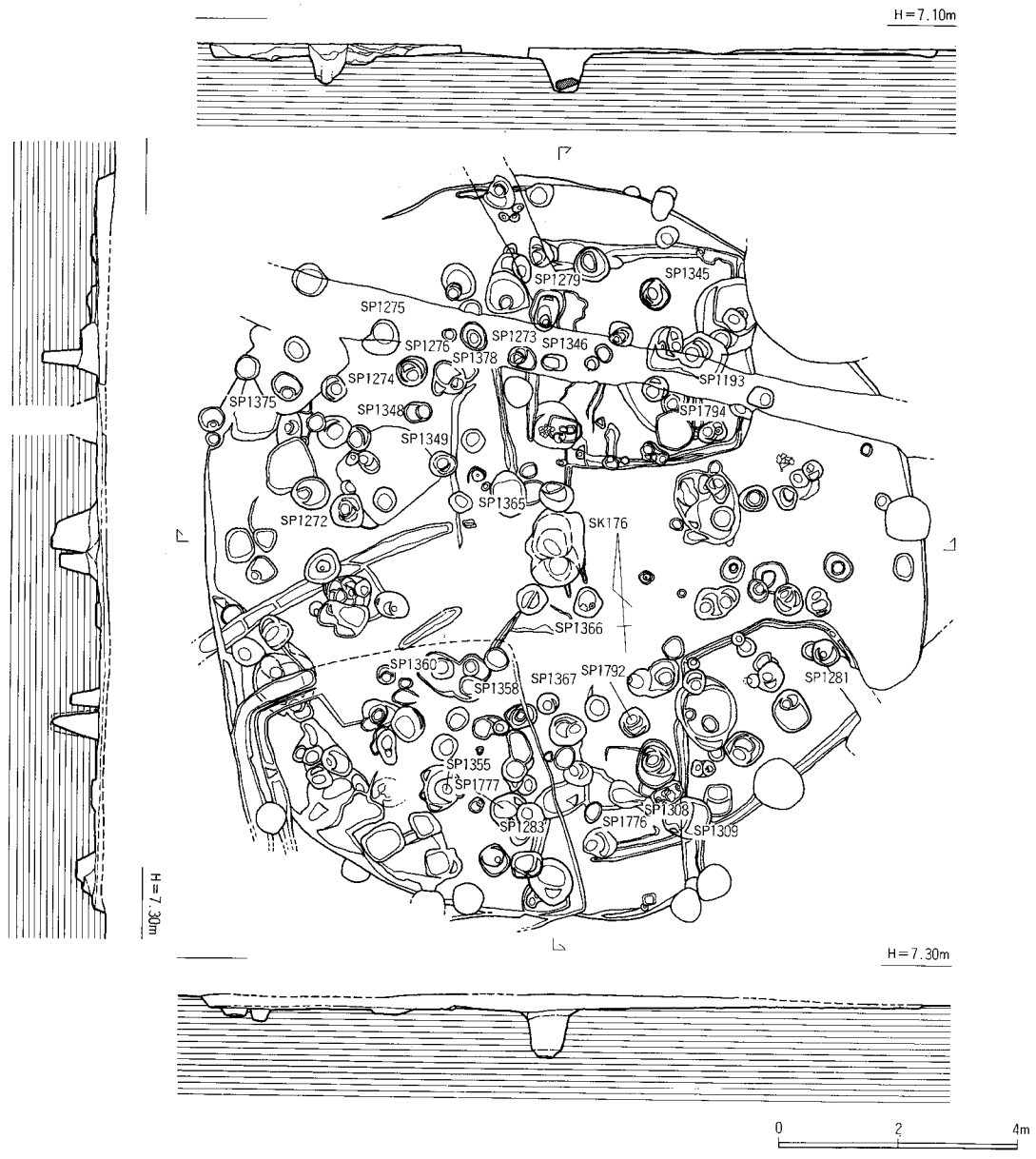



Fig.8　SC119遺構実測図(1/120)

竪穴建物が1軒、大型掘立柱建物が1棟、古墳時代の並び倉と考えられる3間×4間の総柱建物が3棟南北方向に並んで出土している。中央部から西側にかけては古式土師器を出土する竪穴住居址群が広がり、D区まで分布している。D区の西側には同期の溝が2本並行して略南北方向に延びている。弥生時代の円形竪穴住居址はC区・D区全面に分布している。また、中央部に地炉を持つ楕円形の竪穴は大型竪穴建物の周辺に多く分布している。1間×2間の掘立柱建物群はC区西側に集中して出土している。中世の掘立柱建物群はC区西側からD区にかけて主に分布する。各時期の井戸はC区中央部の大溝付近に集中し、それよりも東側には散発的に広がっているが、D区では全く検出されていない。

(1)　竪穴住居址

SC119（Fig.8、PL.12・13）　C区中央部で検出した直径12.5mの大型円形竪穴建物である。全体に削平を受けており、壁の残りは良くないが、北側は0.2m程残存していた。中央部に1.3×0.8mの中央土坑があり、坑底に大きな石が据えてあった。焼土は確認されていない。土坑の周りには4個の不規則に並ぶ柱穴がある。さらに外側に3.2m間隔の方形に並ぶ柱穴があり、その外側に4重に巡る主柱穴

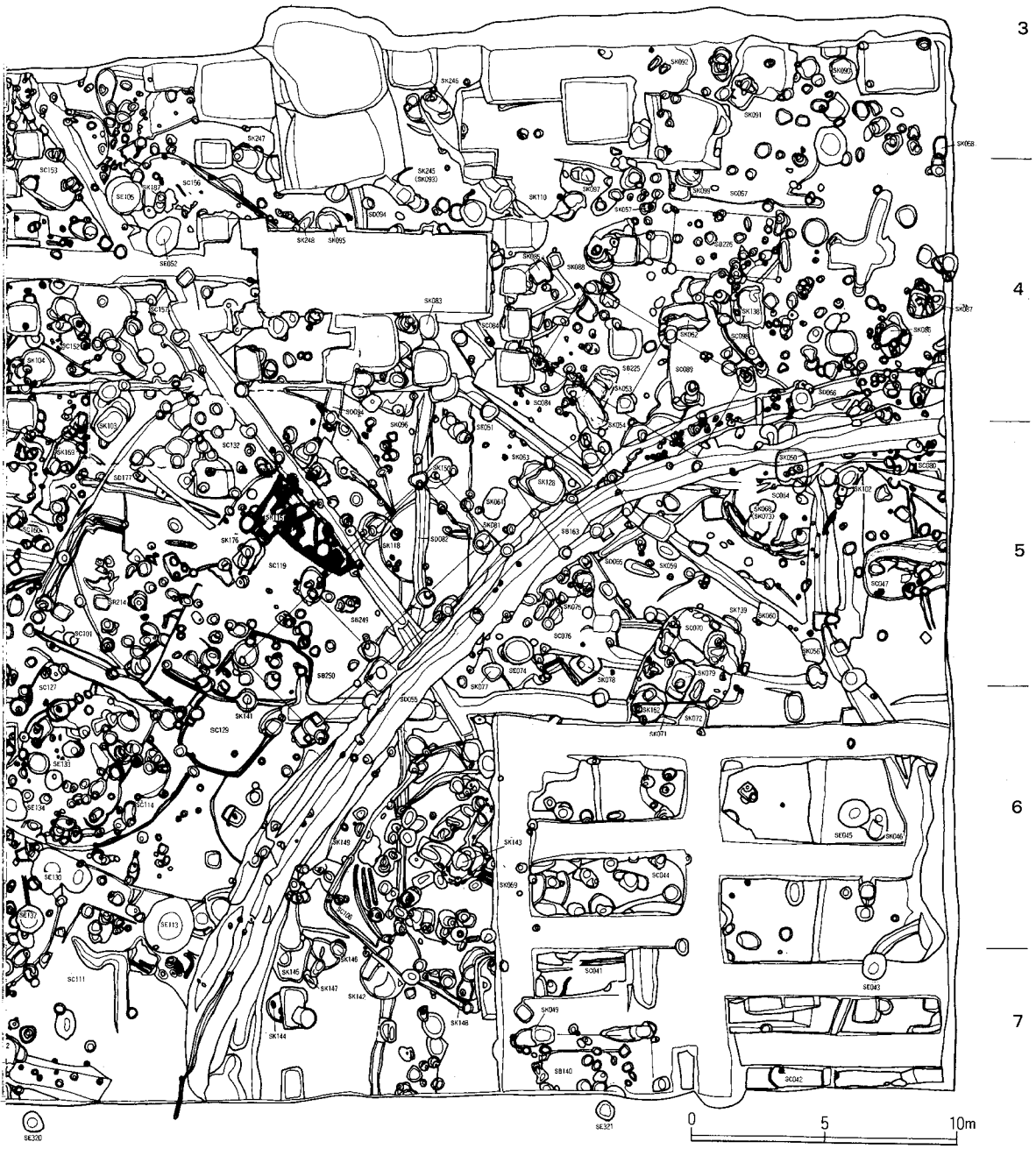



Fig.9　C区遺構全体図(1/250)

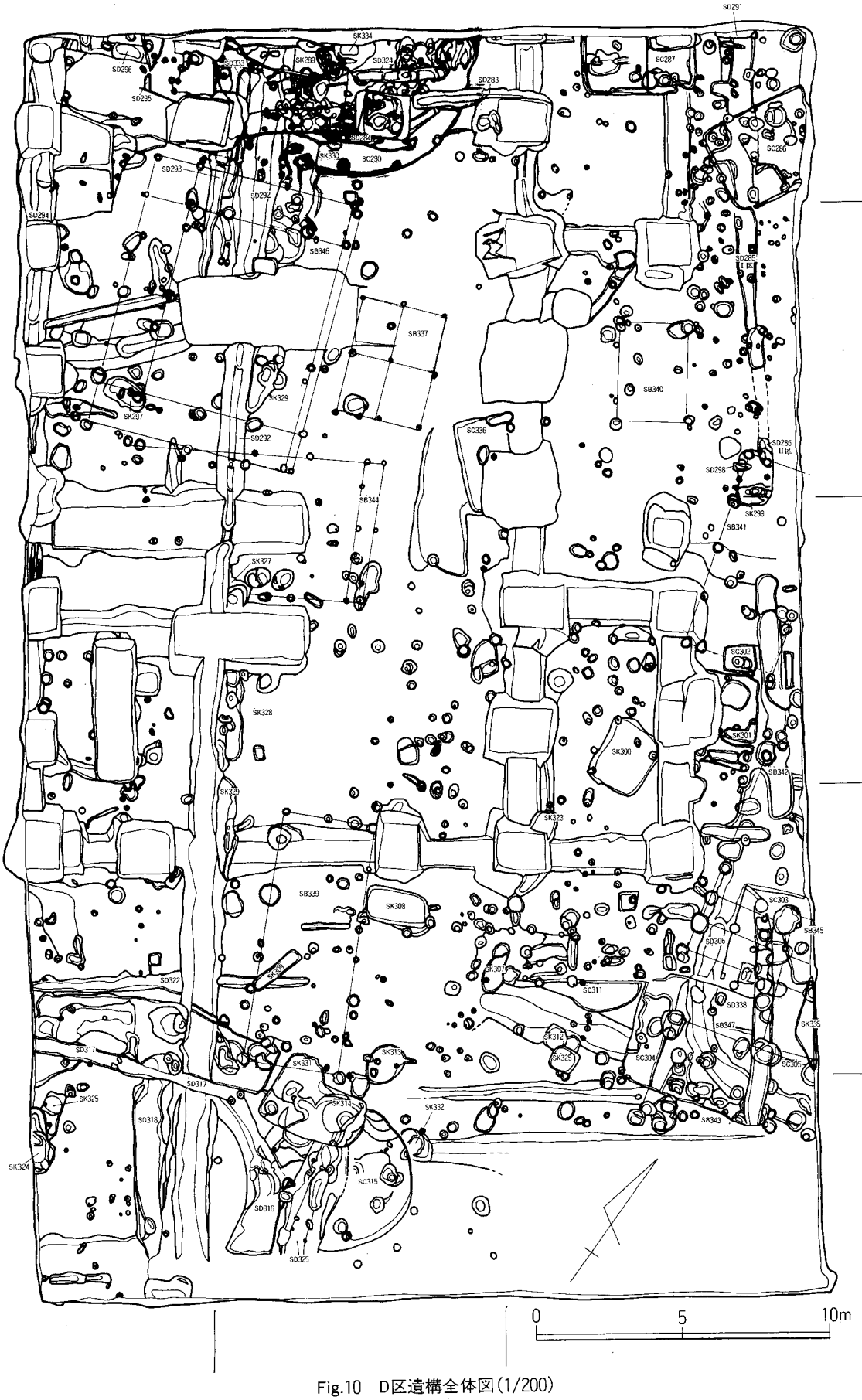



Fig.10　D区遺構全体図(1/200)

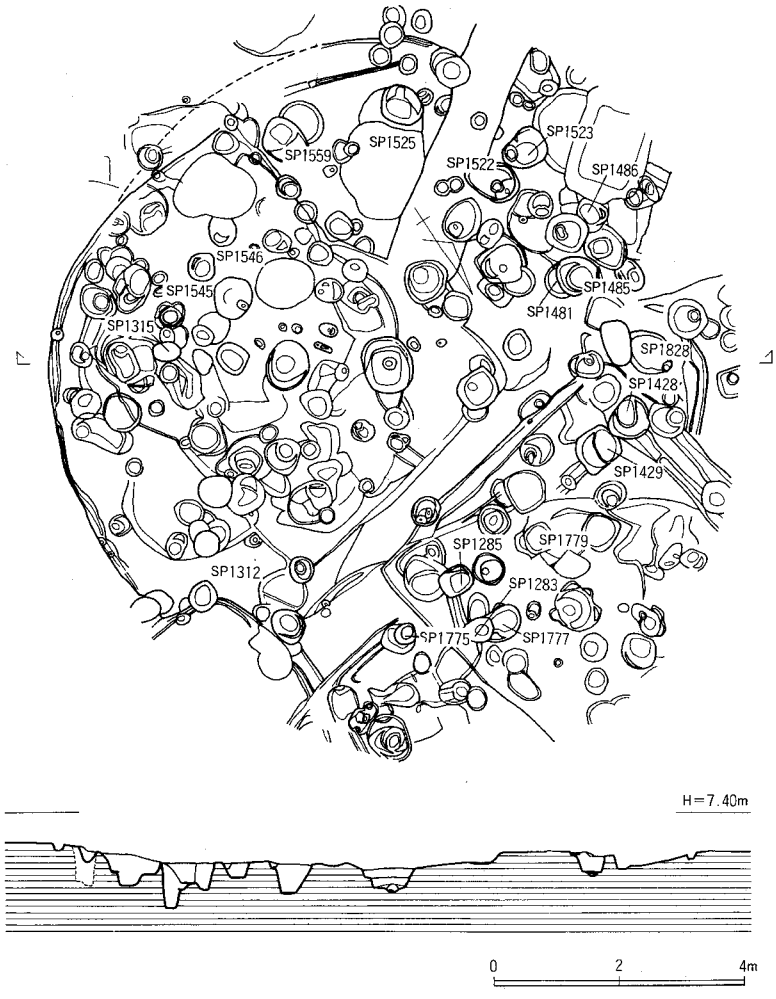
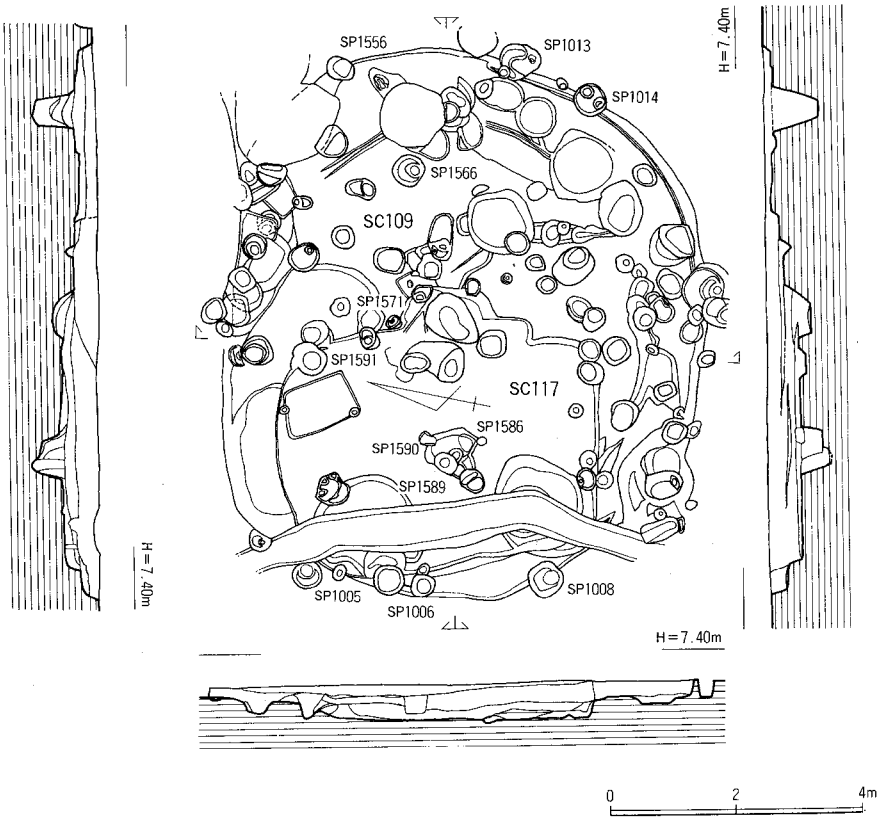



Fig.11　SC114遺構実測図(1/120)

群がある。南側には内側には入る壁溝が確認されており、最低２回の建て替えが行なわれたものと考えられる。最初の主柱穴群は内側から数えて１列目と３列目、建て替え後の主柱穴群は２列目と４列目になるとみられる。遺物は床面に近いところから、弥生中期の甕、壺、高坏、器台、支脚、丹塗りの甕･壺などがあり、甕の中には底部が厚く底面が窪むものもあるが平底が多い。口縁は「T」字もしくは逆「L」字状で「く」の字状を呈する甕は殆どない。中期の中葉から後半代でも古く位置づけられるものであろう。

SC114（Fig.11、PL.10）　C区中央部で検出した大型円形竪穴建物である。直径10.5m、中央部に0.92×0.8mの中央土坑がある。削平が激しく、かつ他の竪穴住居址で切られており残りは良くない。主柱穴群は２重になるとみられる。遺物は弥生中期の甕、高坏、支脚、丹塗りの高坏・甕・壺などが出土している。甕の口縁は「く」の字形を呈するものは殆どない。SC119が切っており、それよりも一時期古くなると考えられる。中期中葉を若干前後する時期であろうか。

SC109（Fig.12、PH.１、PL.９･10）　C区中央部南側で出土したやや楕円形を呈する大型竪穴建物である。長径8.8m、短径7.6mを測る。削平が激しく、壁は10cm程度しか残存していなかった。中央部に中央土坑を有し、主柱穴群は二重に巡る。西側にはSC117がすっぽり納まるように切り合っている。遺物は弥生中期の甕、壺、高坏、支脚、器台、鉢、丹塗りの甕・広口壺・高坏などが出土している。甕の口縁は「く」の字形を呈するものが多く、弥生中期末に属するとみられる。SC114を切っており、切り合い関係からもSC109の方が新しい。PH１－４は須恵器の坏身である。須恵IIIbの新相段階に属す



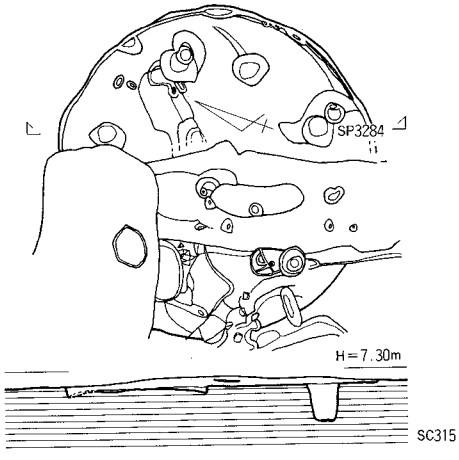




Fig.12　SC109・117・315遺構実測図(1/120)

るものでもある。調査当初SC117の切り合いに気づかず全てSC109として掘り下げてしまった。この須恵器はSC109に伴うものではなくSC117に属するものである。

SC117（Fig.12、PH.1、PL.9・10）　SC109の建物内に切り込まれた隅丸長方形の竪穴住居址である。長さ5.15m、幅3.9m、深さ0.6mを測る。途中まではSC109として掘り下げていたが、下に下がるに従って土色に変化が見られ、出土遺物も全く時期の異なるものであったから、別の住居址として掘り下げを行なった。遺物は須恵器坏身・坏蓋・甕・波状文の施文された大型器台、土師器甕・甑などが出土している。須恵器坏身・坏蓋はIIIb新相段階が中心であり、6世紀後半から末に相当しよう。PH.1－5・6は出土した須恵器坏蓋と坏身である。5は口径13.1cm、器高3.5cmで頂部3分の1がヘラケズリされる。6は受部径14.6cm、口径12.3cm、器高4.5cmを測る。立ち上りはあまり高くないが口径が大きく器体も深くなる。

SC315(Fig.12、PL.22)　D区南端部で出土した普通サイズの円形竪穴住居址である。直径5.0mで、壁は一部分しか残っていなかった。中央部には土坑があり、壁寄りに主柱穴群がとりまく。主柱穴は7本確認している。遺物は弥生中期の甕・壺・高坏・丹塗りの高坏などが出土している。中葉から後半代のものであろう。

SC106（Fig.13、PH.1、PL.8）　C区東側南寄りに位置する大型方形竪穴建物である。東側は撹乱によって破壊されている。南北8.1m、東西は7.5m以上になるものとみられる。中央には楕円形の中央土坑があり、長さ1.3m、幅0.8mを測る。床面には楕円形を呈する壁溝が3条確認される。もともと楕円形のプランであったものが3回建て替えられて、4回目には方形のプランに変更されたものであろ

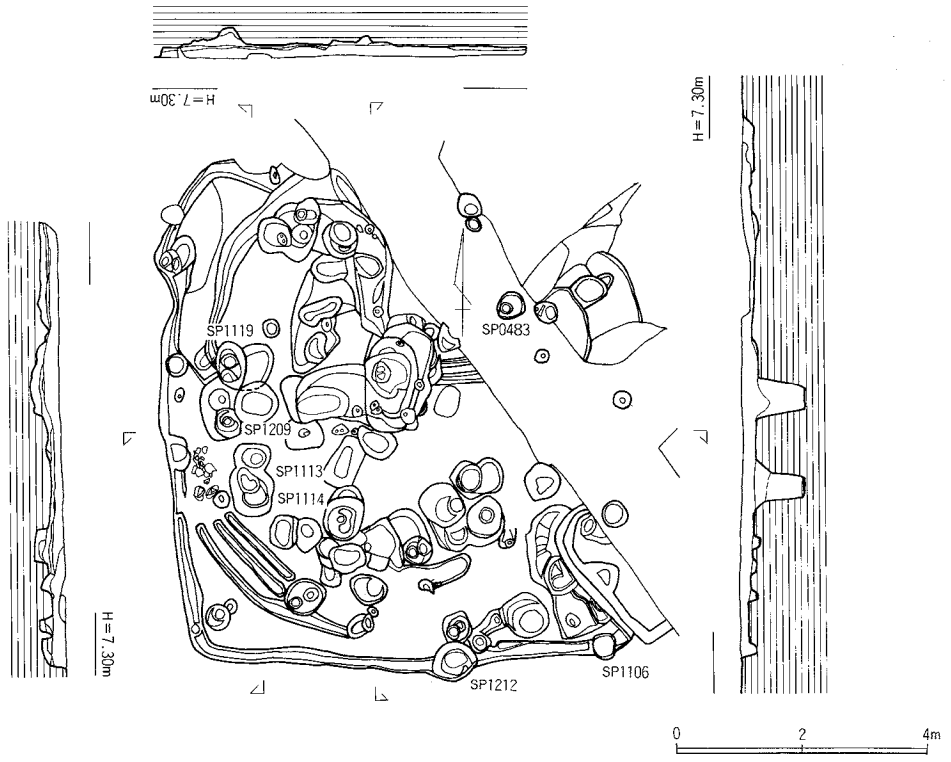



Fig.13　SC106遺構実測図(1/120)

う。遺物は、弥生中期の甕、壺、器台、高坏、支脚、ミニチュア、丹塗りの甕・高坏・鉢・瓢形土器・無頸壺・筒形器台などが出土している。甕の中には中期末に属する「く」字形口縁を有するものがかなり含まれ、後期初めの甕なども含まれることから、弥生中期末から後期初めの時期に相当しよう。後期初めになって、楕円形プランから方形プランに変更されることは興味深い。PH. 1－3は口径5.3cm、底径1.8cm、器高4.2cmを図るミニチュアの鉢である。 9は須恵器の鉢の底部である。切り合った柱穴などから混入したものであろう。

SC129（Fig.14、PL.14）　SC119を切って南側に位置する楕円形の竪穴住居址である。長さ5.9m、幅3.30m、深さ0.30mを測る。中央部に地炉を持っており、炉の径は0.85mで、中に焼土が広がっている。主柱穴は判然としないが周りに壁溝を巡らしていて、小穴が幾つかみられる。この地炉を持つタイプの住居址は他にも数軒出土している。遺物は、炉址から石包丁、覆土から弥生中期前半～中期末の甕、壺、器台、小壺、丹塗りの壺などが出土している。時期は、切り合い関係からSC119よりも新しく、遺物からみれば、中期後半の終りから中期末の時期に相当すると考えられる。

SC183（Fig.14、PH.1、PL.19）　C区西側のやや南寄りに位置し、古式土師器を出土するSC178、SC179、SC180に切られている略長方形の竪穴住居址である。長さ5.40m、幅3.30m、深さ0.30mを測り、中央部に地炉を持つ。地炉の径は0.85mで、中央部には赤く焼けた焼土が広がる。周縁には部分的に壁溝が巡り、小穴が点在する。主柱穴ははっきりしない。遺物は弥生中期の甕、高坏、器台、丹塗りの壺・大型器台などと共に、古式土師器の甕、丸底壺なども出土している。弥生終末期から古墳時代初頭に属する時期のものであろう。PH. 1－13は古式土師器の鉢形土器である。口径16cm、器高5.2cmを測る。

中央部に地炉を持つ竪穴住居址は、楕円形を呈するもの、長楕円形を呈するもの、長方形に近いが両端がやや丸味を持つもの、略長方形に近いものなどがある。炉は建物の中心部に設けられ、円形を呈するものが多い。やや掘り窪められた中に丸く焼土が広がる。焼土は良く焼けて赤変しているもの

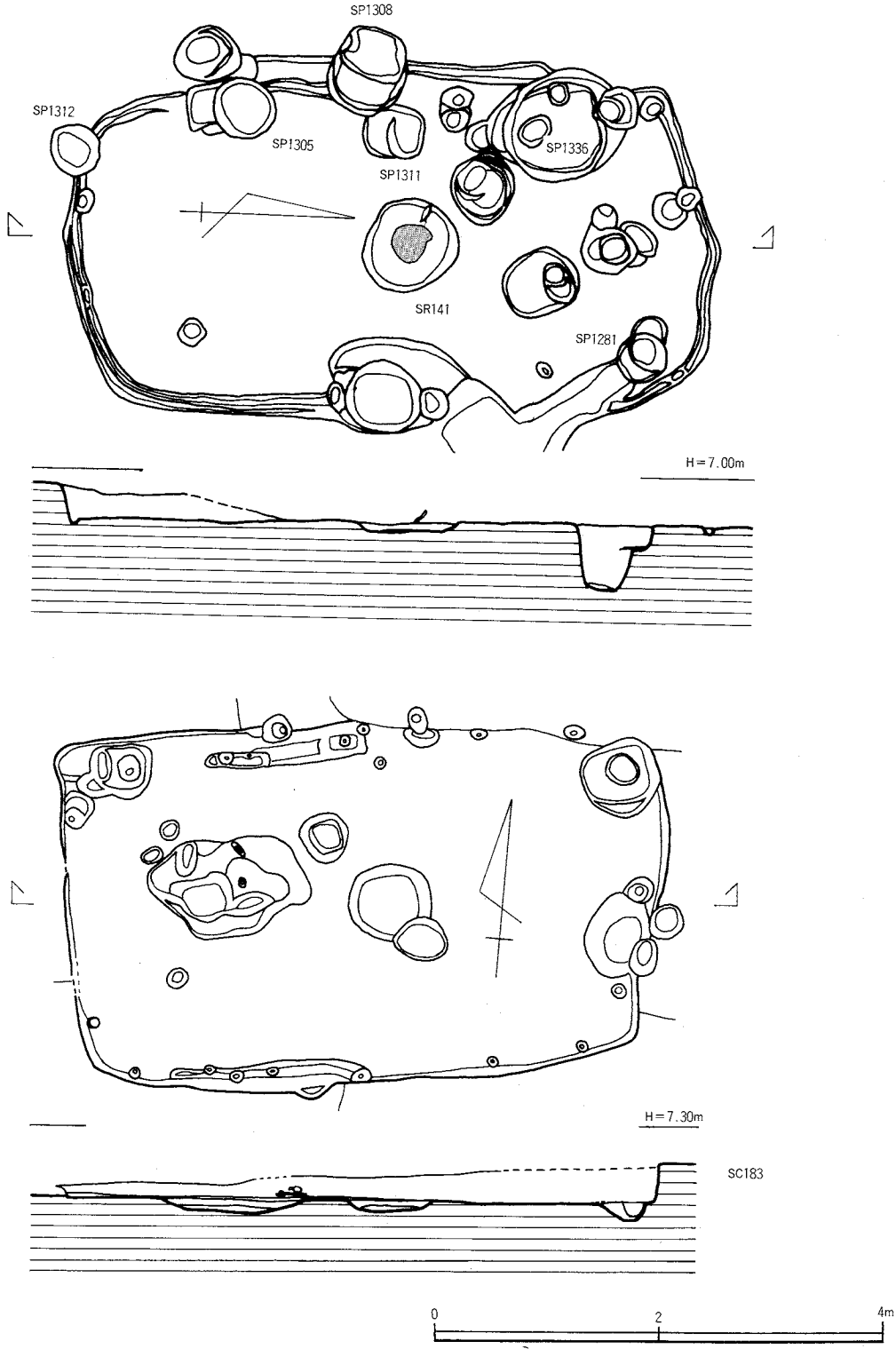



Fig.14　SC129・183遺構実測図(1/60)

が多く見られるが、あまり焼けていないものも存在する。竪穴の周壁には周溝を巡らし、小穴が掘り込まれている。中心となるような柱穴は殆ど確認されない。時期的には楕円形を呈し小型のプランを持つものが古く、弥生中期後半代から出現する。弥生後期終末から古式土師器を出土する古墳時代初頭のものは略長方形を呈し、時期が新しくなると長方形気味になるようである。分布はC区の大型円形竪穴建物の周辺に多く見られ、D区からは一軒も発見されていない。このタイプの竪穴住居址は北側に

隣接する第51次調査でも数軒出土している。

SC101（Fig.15、PL.7） C区中央部に位置し、SC119を切っている方形竪穴住居址である。西側には壁溝が二重に巡り一度建て替えられていることが分る。新しい時期の建物規模は東西5.0m，南北5.30mで、主柱は4本柱である。柱は全て2.50m間隔である。中央部に焼土があり、地炉が存在したことを示している。古い方の建物規模は東西4.60m、南北4.90mで、やや南北に長い長方形を呈する。主柱は2本で、柱間隔は2.70mである。竪穴の深さは0.2m前後残存していた。遺物は古式土師器がまとまって出土している。床面からは布留式の甕、炉付近からは高坏、その他の覆土からは小型丸底壺、脚台付鉢、高坏、短脚の高坏、小型器台などが出土している。竪穴住居址の時期は古墳時代初頭であろう。

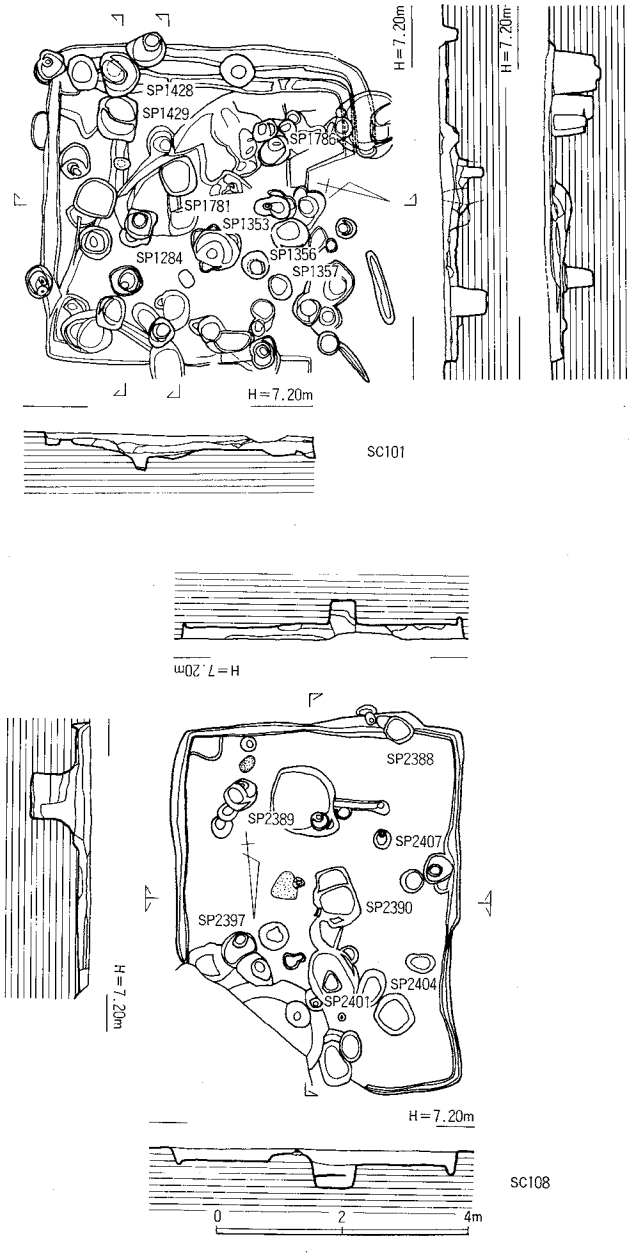
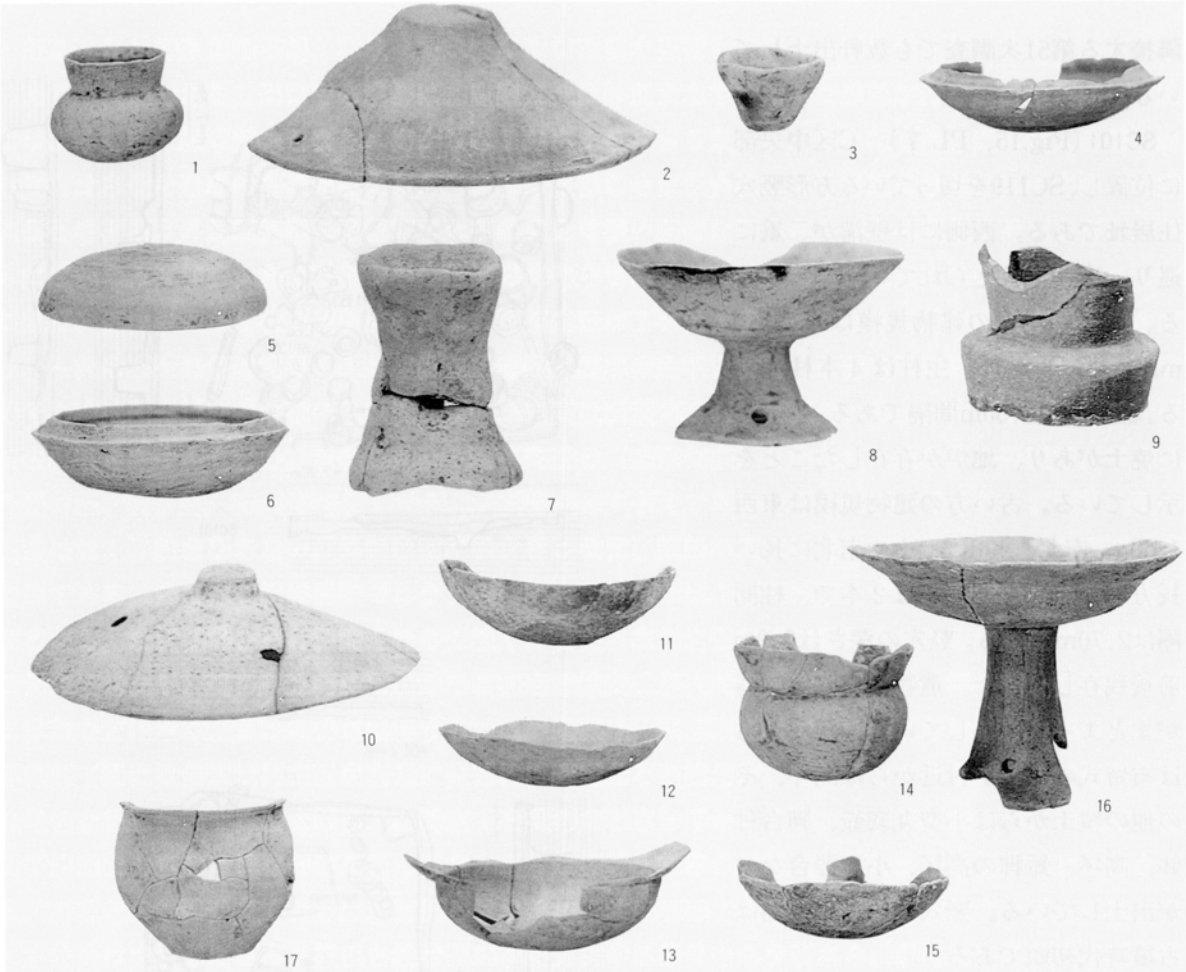


Fig.15 SC101・108遺構実測図(1/120)

SC180（Fig.15、PH.1、PL.18） C区西側やや南寄りで検出された長方形の竪穴住居址である。北側が撹乱で一部破壊されているが、南北6.0m前後、東西4.60m、深さ0.22mを測る。主柱は2本で、柱間隔は3.0mである。中央部には地炉が設けられ焼土がかたまって分布していた。焼土の上には高坏が倒立した状態で出土している。周壁には壁溝を巡らす。遺物は古式土師器がまとまって出土している。外面にタタキを施し器壁が薄い庄内甕、口縁内面をややや肥厚させる布留式の甕、高坏、小型の高坏、小型丸底壺、脚台、小型器台、小型の丸底鉢などである。PH1－11は口径12.7cm、器高4.3cmを測る椀形土器である。12も同様な椀形土器で、口径12.5cm、器高3.2cmを測る。14は小型丸底壺である。口径10cm、胴径9.1cm、器高7.3cmである。16は炉址から出土した高坏である。口径18cm、残高13.6cmである。

その他、個別に取りあげることはできなかったが、弥生中期の円形竪穴はSC067（PL.5）、SC197（PL.19、PH.1－17）、SC213（PL.20）、SC290（PL.21・22）、SC311（PL.227）などがある。SC197からは丹塗りの小型甕（器高8.7cm、胴径10cm）が出土している。方形竪穴はSC240（PL.20・21）がある。弥生中期後半からそれ以降にかけて出土する略楕円形・楕円形タイプの竪穴は、SC064（PL.5）、SC070（PL.



PH.1　竪穴住居址出土遺物

1：SC41　2：SC127　3：SC106　4：SC109　5・6：SC117　7：SC161
8：SC165　9：SC106　10：SC178　11・12・14・16：SC180　13：SC183　15：SC303　17：SC197

6）、SC153（PL.7）、SC154（PL.7）、SC157（PL.7）、SC220（PL.20）などがある。今回の調査で特に多かったのは古式土師器を出土する長方形ないし方形の竪穴住居址である。SC041（PL.4、PH1－1）、SC127（PL.11、PH.1－2）、SC132（PL.15）、SC160（PL.15）、SC161（PL.15、PL.1－7）、SC163（PL.15）、SC164（PL.15･16）、SC165（PL.16、PH.1－8）、SC166（PL.16）、SC179（PL.16）、SC188（PL.16）、SC178（PL.17、PH.1－10）、SC259（PL.21）、SC286（PL.21）、SC287（PL.21）、SC303（PL.22、PH.1－15）、SC304（PL.22）などである。PH1－1はSC041から出土した小型丸底壺、2はSC127から出土した脚台部、7はSC161から出土した弥生中期の器台でこれは混入したものであろう。8はSC165から出土した高坏、10はSC178から出土した脚台部、15はSC303から出土した丸底の鉢形土器である。古墳時代後期の6世紀代の竪穴住居址はSC155（PL.15）である。この時期の住居址はあまり多くは出土していない。時期がはっきりしない竪穴住居址はSC076（PL.7）、SC198（PL.20）、SC236（PL.20）などである。この他に、全く写真にも記載していない竪穴住居址が十数軒以上もある。遺構の切り合いが激しく、かつ削平されているものが多いので、竪穴住居址の一部として特定できないものがさらに幾つか存在している。

(2) 掘立柱建物

弥生中期から中世まで36棟の掘立柱建物を確認している。調査では3,000をはるかに超える柱穴群が出土しているので、さらに多数の掘立柱建物が存在したと推測されるが、柱穴群の切り合いが激しく、なかなか建物として柱の関係をまとめることができなかった。以下、数棟分の掘立柱建物について概要を記しておきたい。

SB250(Fig.16、PL.29) C区中央部に位置する梁行1間、桁行3間の大型掘立柱建物である。SC119を切り、SD055に切られている。主軸は略南北方向をとり、梁行4.0m、桁行10.0mを測る。柱間隔は北側の1間分が3.20m、あとは3.40mづつである。柱穴の掘り方は略方形から長方形を呈し、一辺が1.2m前後、深さは0.55m程度残存していた。柱痕跡は30～40cmで、大きな柱を使用していたものと考えられる。柱穴からの出土遺物は、弥生中期後半の甕、壺、器台、鉢、丹塗りの甕・広口壺・高坏、中期末の甕、石包丁などがある。遺物からみれば弥生中期末に相当し、新しい時期の大型竪穴建物と並存していた可能性がある。また，SB250を切ってSB249が出土している。梁行1間3.2m、桁行2間5.8mの建物である。

SB262(Fig.17、PL.28)は梁行1間2.5m、桁行2間5.5mの建物で弥生中期後半から末、SB265(Fig.17、PL.31)は梁行1間3.2m、桁行2間5.8mで弥生中期後半、SB251(Fig.17、PL.28)は梁行1間3.2m、桁行2間5.5mで弥生中期後半、SB223(Fig.17、PL.27)は梁行1間3.4m、桁行2間6.5mで弥生中期後半代に相当すると考えられる。

SB202・203・204(Fig.18・19、PL.24～27) C区西端部で検出した梁行3間、桁行4間の総柱建物である。略南北方向(N－15°～17°－W)に軒を揃えて直列に配列されている。北側及び西側は未調査区になっており、建物群は未調査区へ延びている。建物の全容が分るのはSB203である。梁行3間6.0m、桁行4間7.0m前後で梁行側の柱間隔が2.0m、桁行側の柱間隔が1.7m前後である。柱穴の掘り方は方形を意識しており、確認面で一辺が0.6m前後である。柱穴の深さは深いもので0.3～0.4m程度し

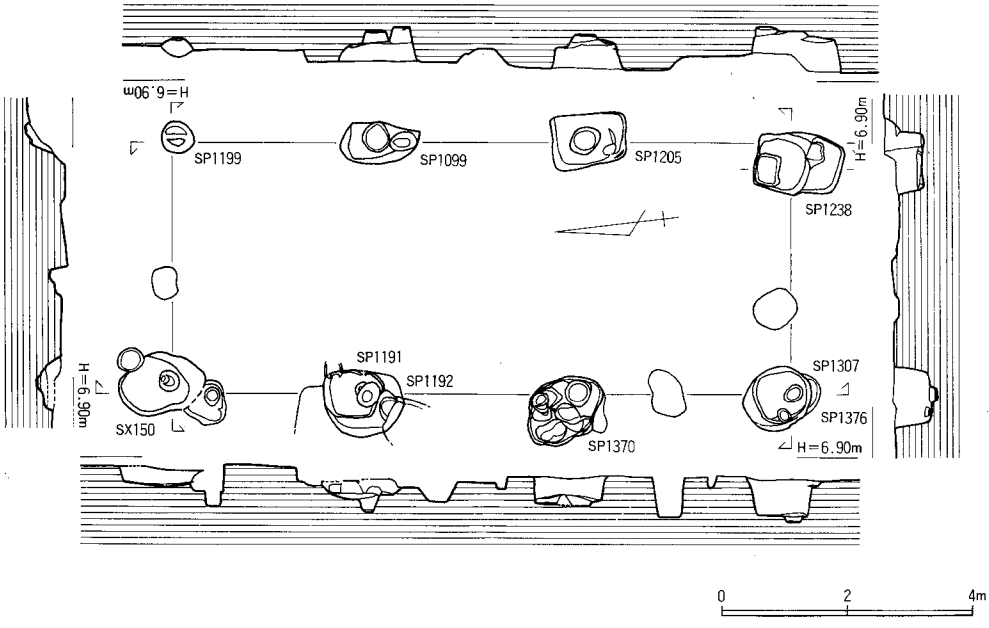



Fig.16 SB250遺構実測図(1/120)

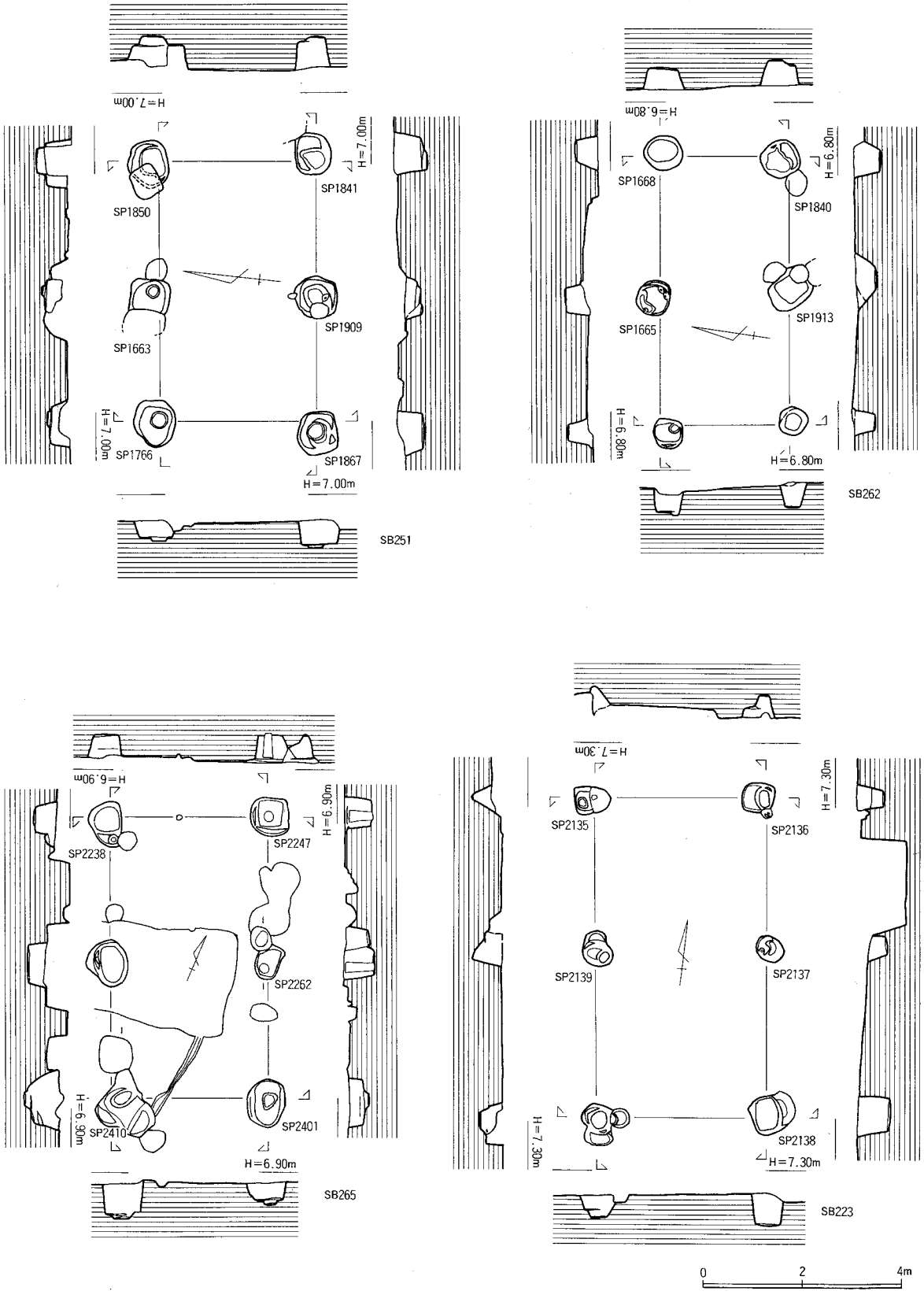
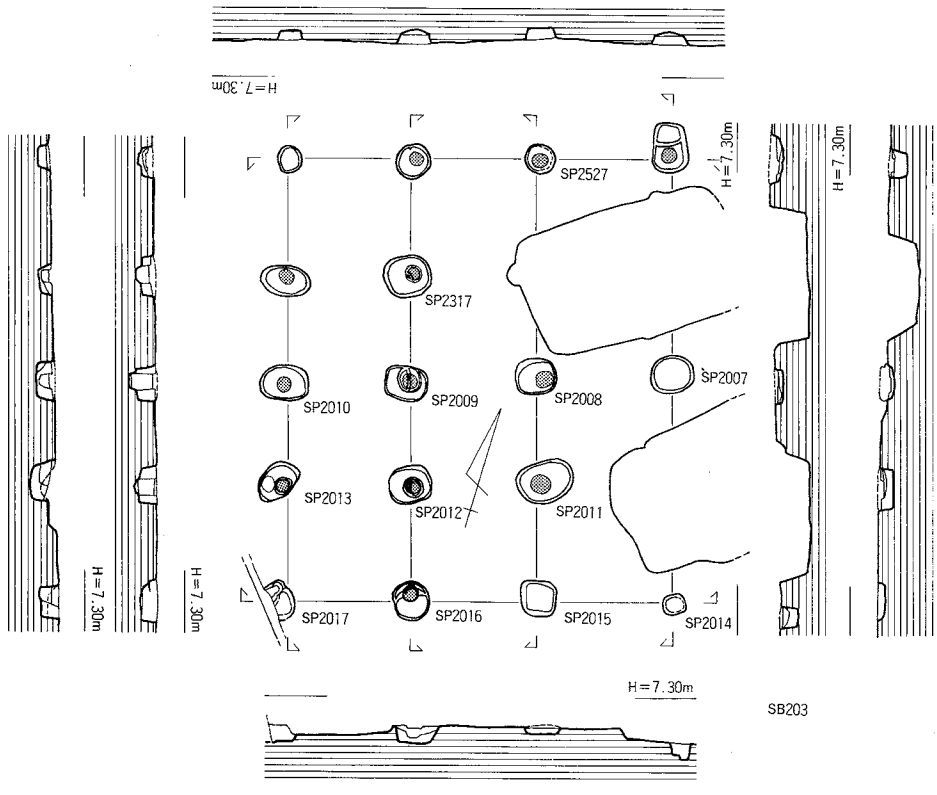



Fig.17　SB251・262・265・223遺構実測図(1/120)



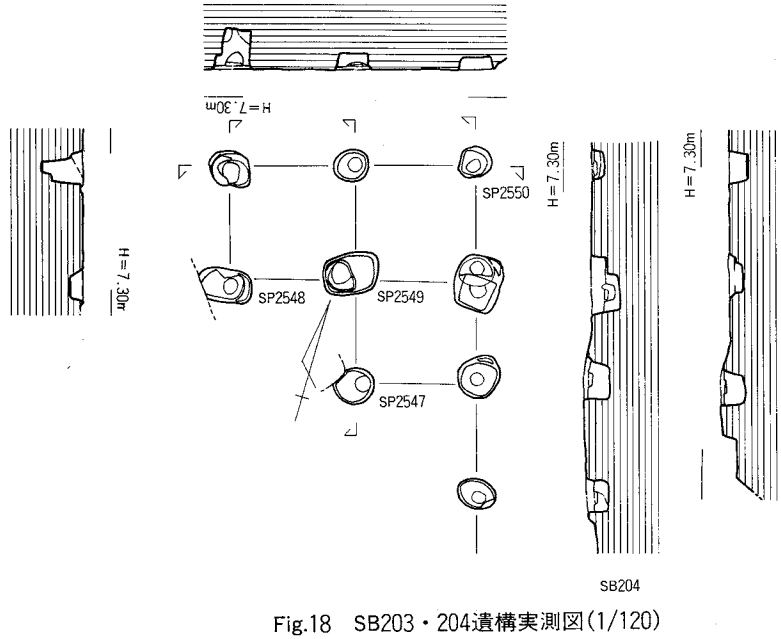




Fig.18　SB203・204遺構実測図(1/120)

0　2　4m

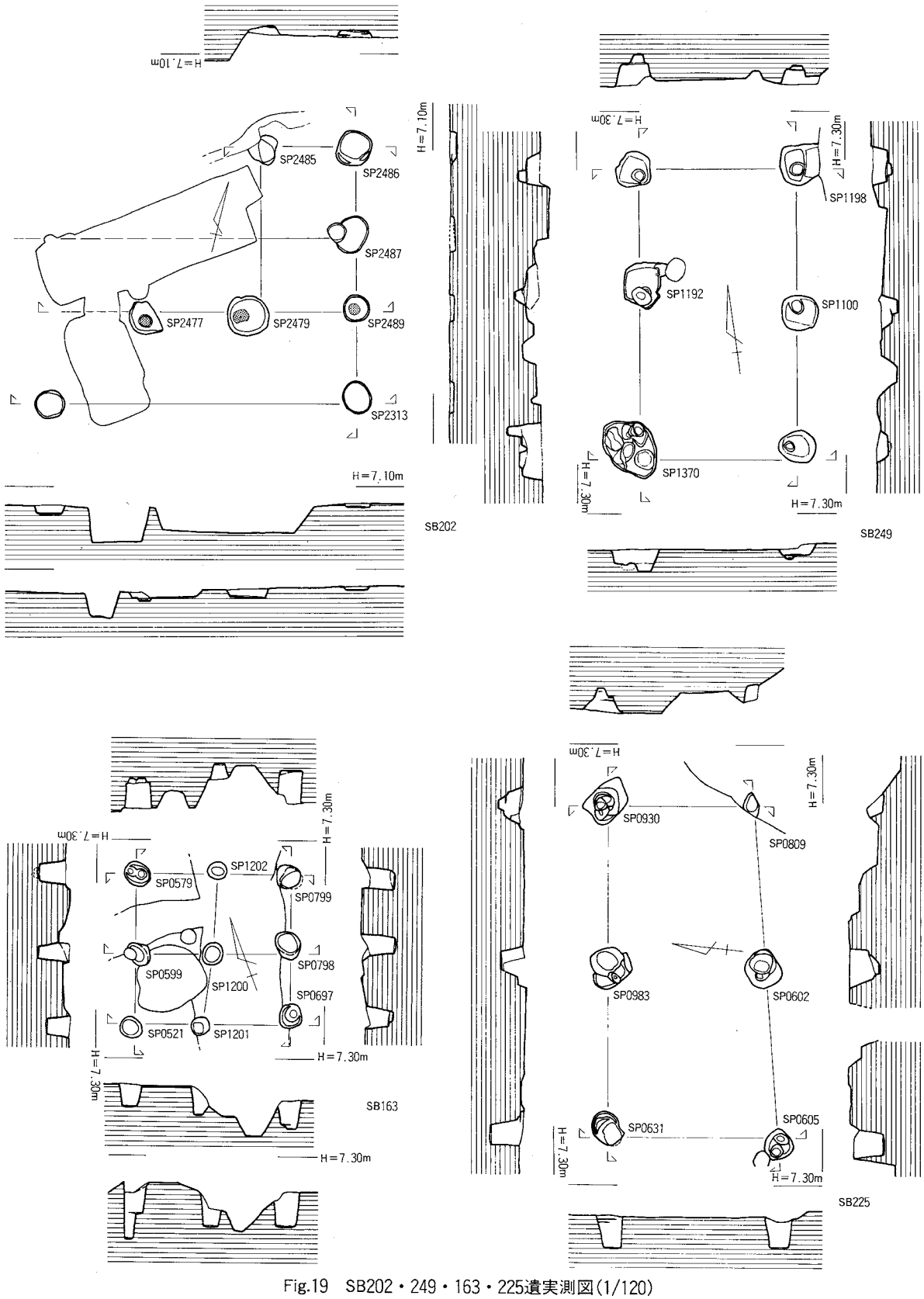



Fig.19　SB202・249・163・225遺実測図(1/120)

0　2　4m

か残存していなかった。柱根は確認できるものが多く、径22～26cmである。柱穴からの出土遺物は弥生中期から土師器まで含み、SP2021からは須恵器坏蓋片が出土している。端部はないが、上半はヘラ削りされ、一部カキ目が施されている。須恵IIIb段階のものとみられる。したがって、これらの建物の時期は、6世紀後半代から末に相当しよう。東側を略南北方向に延びるSD181から須恵IIIbの新相段階からIVaの坏が出土している。この溝は方位をやや異にするが、建物群と伴う可能性が高く、時期的にもほぼ合致するものと考えられる。建物は3棟以上に延びる可能性があり、並び倉であろう。

SB249（Fig.19、PL.29）はSB250を切って建てられている梁行1間3.2m、桁行2間5.8mの建物で、

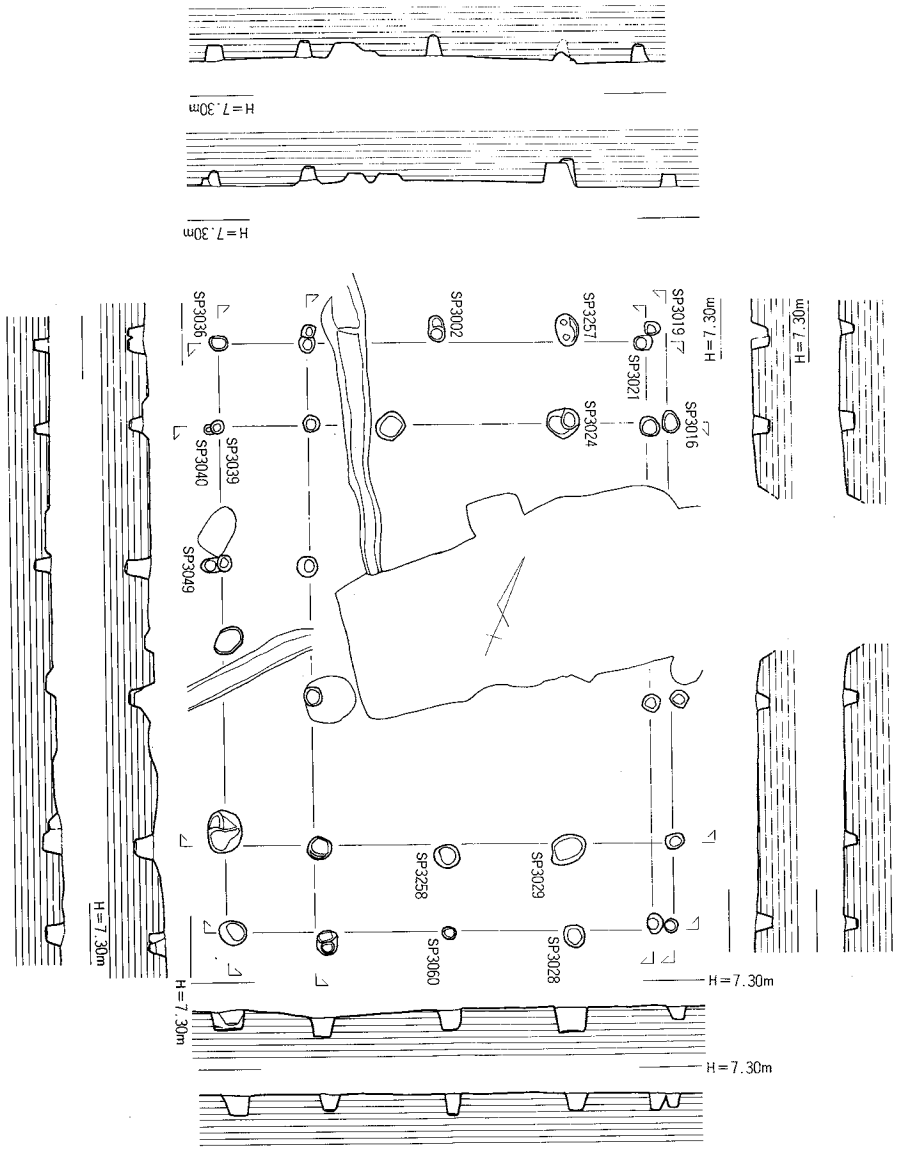



Fig.20　SB346遺構実測図(1/120)　0　2　4m

弥生後半前期、SB225（Fig.19）は梁行１間3.5m、桁行２間6.8mである。柱穴から須恵器坏身・蓋片が出土している。坏身はIVaまであり、建物の時期は６世紀末から７世紀初頭であろう。SB163（Fig.19、PL.23）は梁行２間、桁行２間の総柱建物である。梁行3.1m、桁行3.2mで柱の並びが少しズレている。柱穴の径は0.4～0.5mで、深さは0.5～0.7mである。柱穴から土師器甕・甑、須恵器壺・坏身・坏蓋などが出土している。坏蓋はIVa段階まであり、建物の時期は６世紀末から７世紀初頭であろう。SB346（Fig.20、PL.32）は梁行２間4.0m、桁行３間6.8mの身舎に４面廂が付く建物である。柱間隔は梁側が2.0m、桁側は2.2m前後である。建物総長は梁側が7.10m、桁側は9.40mを測る。遺物は弥生時代に属するものが多いが、須恵器の甕片、高台付坏の口縁部破片などが出土しており奈良・平安期以降のものであろう。柱穴の大きさや埋土の状態から中世に属するものと考えられる。

その他、図版だけ示したものに次のようなものがある。梁行１間、桁行１間で弥生時代に属するものは、SB207（PL.27）、SB226（PL.31）、SB257（PL.30）、SB258（PL.30）、SB263（PL.30）、SB267（PL.31）、SB268（PL.31）などがあり、古墳時代のものはSB255（PL.28）、SB340（PL.32）、などである。１間×２間で弥生時代のものはSB245（PL.28）、SB264（PL.30）、古墳時代のものはSB226（PL.28）、SB343（PL.32）、がある。SB256（PL.30）は中世に属するものである。２間×２間では、SB337（PL.31）が中世のものである。２間×３間ではSB341（PL.32）、SB342（PL.32）が古墳時代、SB344（PL.32）が中世である。２間×４間の建物ではSB224（PL.28）と２間×５間の建物ではSB339（PL.31）が共に中世に属する。

PH．２は掘立柱の柱穴に限らず、柱穴全般から出土した遺物の一部である。18は弥生中期後半の器台、19はミニチュアの鉢、20は須恵器の脚台、21は弥生後期の小型壺、22は弥生中期の高坏、23は弥生中期末の小型壺、24は弥生後期前半の小型鉢、25・26は古式土師器の小型器台と高坏である。

PH.2　柱穴出土遺物

18：SP0827　19：SP1001　20：SP1029　21：SP1580　22：SP1879　23：SP2029　24：SP2373　25：SP3265　26：SP3309

(3) 土坑

土坑はC区・D区で180基近く出土している。時期や用途は多様である。SK110・128・201（Fig.21、PL.45～47）は弥生中期前半から中葉の袋状貯蔵穴である。SK205・323（Fig.21、PL.47・48）は弥生中期後半～末の土坑である。SK205からは筒部に透しの入った丹塗りの大型器台が出土している。PH. 3－33・34・39はSK205から出土した器台と鋤先状口縁を有する壺である。35～38は器台である。その他、弥生中期後半から一部中期末に属する土坑は、SK058（PL.45）、SK103（PL.45）、SK120（PL.46）、SK169（PL.46）、SK196（PL.46）、SK200（PL.46）、SK221（PL.47）、SK222（PL.47）、SK299（PL.47）、SK300（PL.47）SK309（PL.48）などがある。後期初頭ではSK142（PL.46）がある。PH. 3－31は同土坑から出土した袋状口縁壺である。古墳時代前期のものはSK115（PL.45）、SK308（PL.48）、SK325（PL.48）などがある。布留式の甕が出土する。古墳時代後期の須恵器を出土する土坑はSK047（PL.44）とSK062（PL.45）である。6世紀後半から末に属する。PH. 3－27はSK047から出土した須恵器の

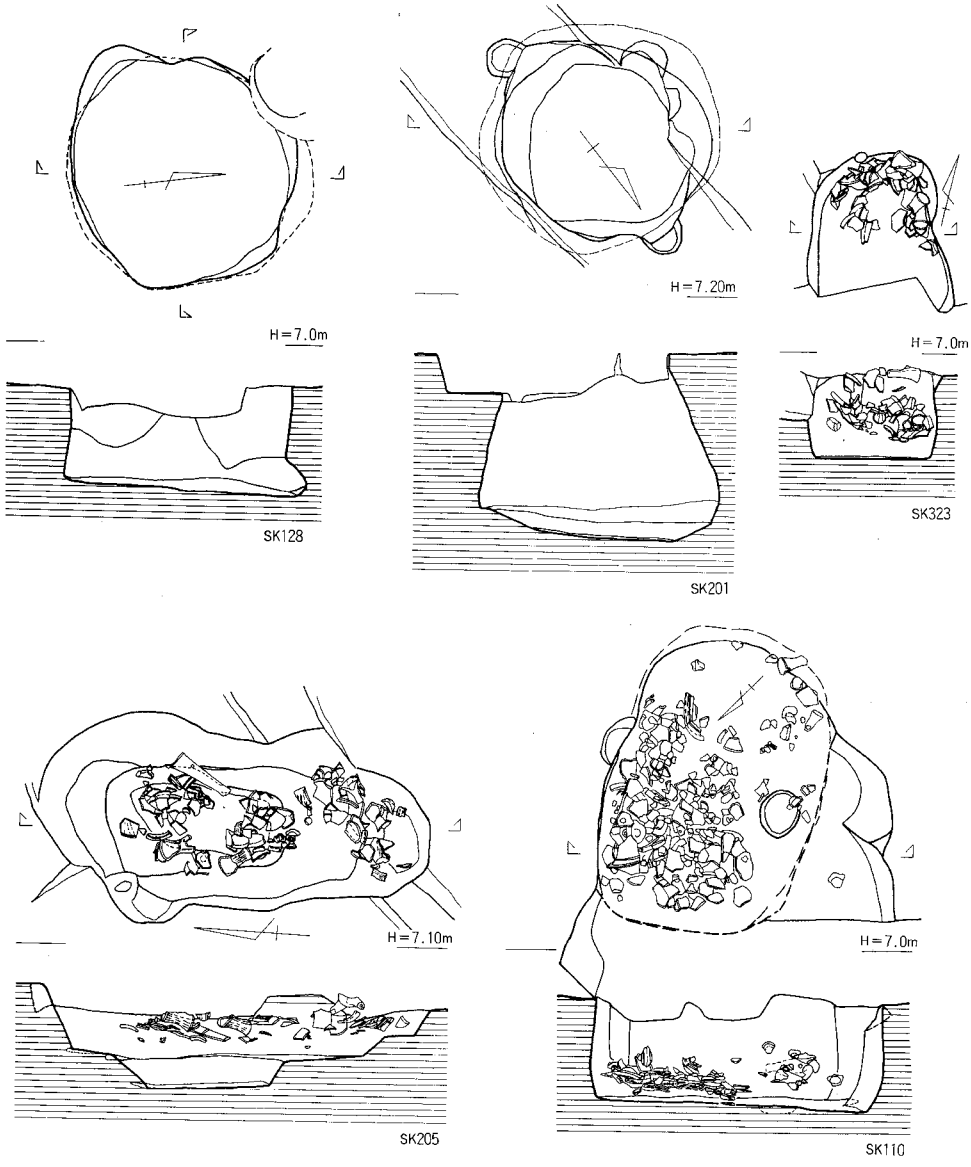



Fig.21 SK128・201・323・205・110遺構実測図(1/60)

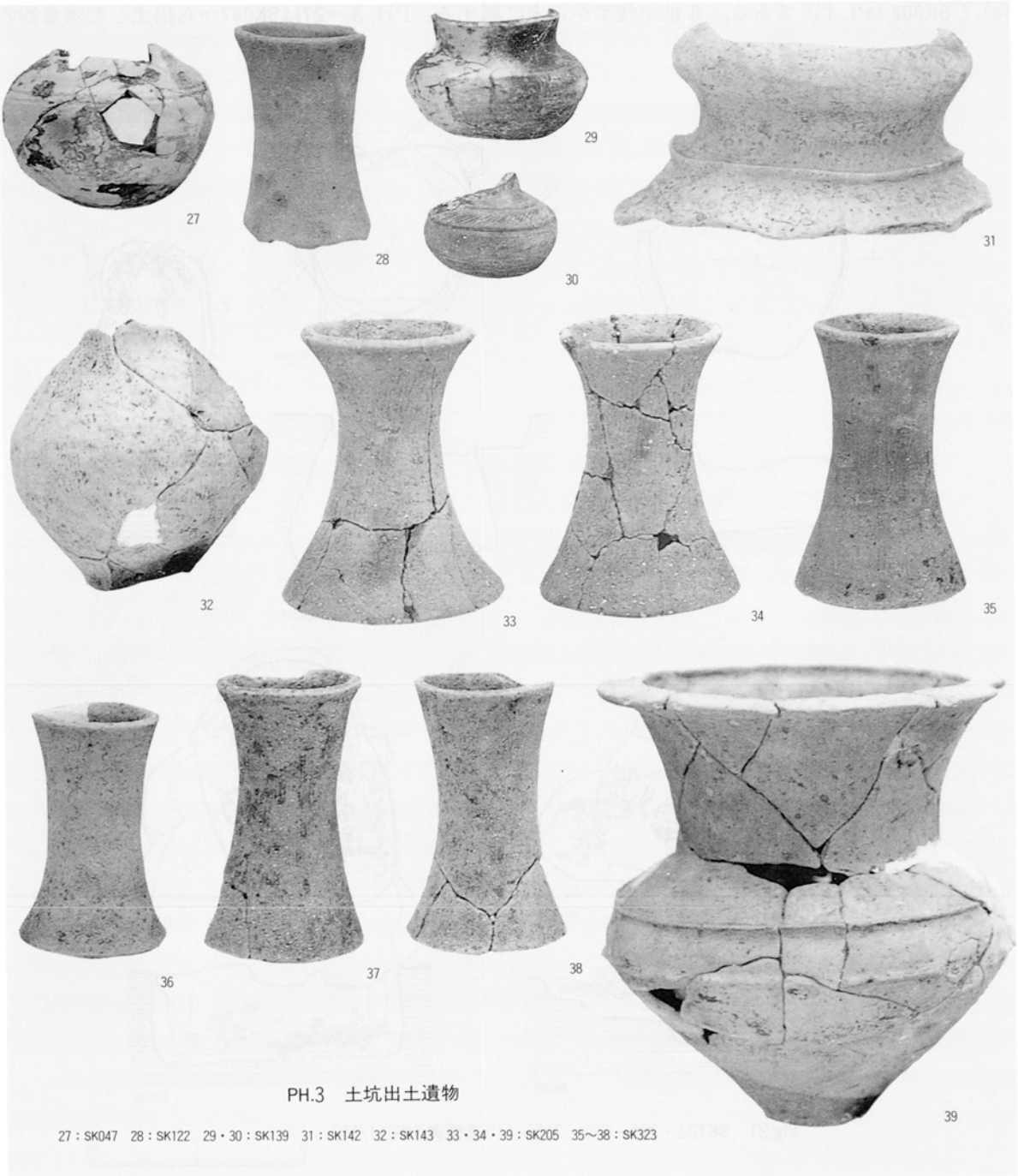
0 1 2m

壺である。時期のはっきりしないものにSK049（PL.44）とSK068（PL.45）がある。SK057（K－1）、（PL.48）は弥生後期前半の小児甕棺である。

PH．3－28はSK122から出土した弥生中期に器台である。29・30はSK139から出土した須恵器の直口壺と瓶である。32はSK143から出土した弥生後期の壺形土器である。

(4) 溝

溝状遺構は大小合わせて30条以上出土している。弥生時代の環濠は調査区内では発見されなかった。SD001（PL.41、PH.4） C区中央部を南北に走る大溝である。南側は幅5.0m、北側は幅10mを測る。深さは0.9m前後である。西側には側溝が付く。時期は中世から近世まで継続している。明治33年




PH.3 土坑出土遺物

27：SK047 28：SK122 29・30：SK139 31：SK142 32：SK143 33・34・39：SK205 35～38：SK323

の地図には調査区の真中に道が通っており、SD001がこれに相当すると考えられる。PH. 4－40は流れ込んだとみられる須恵器の坏身である。

SE055（Fig.22、PH.4、PL.42）　C区南側から弧を描いて東側に延びる「V」に近い断面逆台形の溝である。幅2.50～2.60m、深さ1.2m、底幅0.25mを測る。延長41mまで確認した。6世紀後半から7世紀初めにかけての遺物がまとまって出土している。PH. 4－41～46は溝から出土した遺物である。41～45は須恵器坏身と蓋である。IIIb新相段階からIVaに相当しよう。46は平行タタキのある丸瓦である。

SD081（PH.4）　C区西側で検出された溝である。幅0.5～0.7m、深さ0.2mの「U」字溝である。

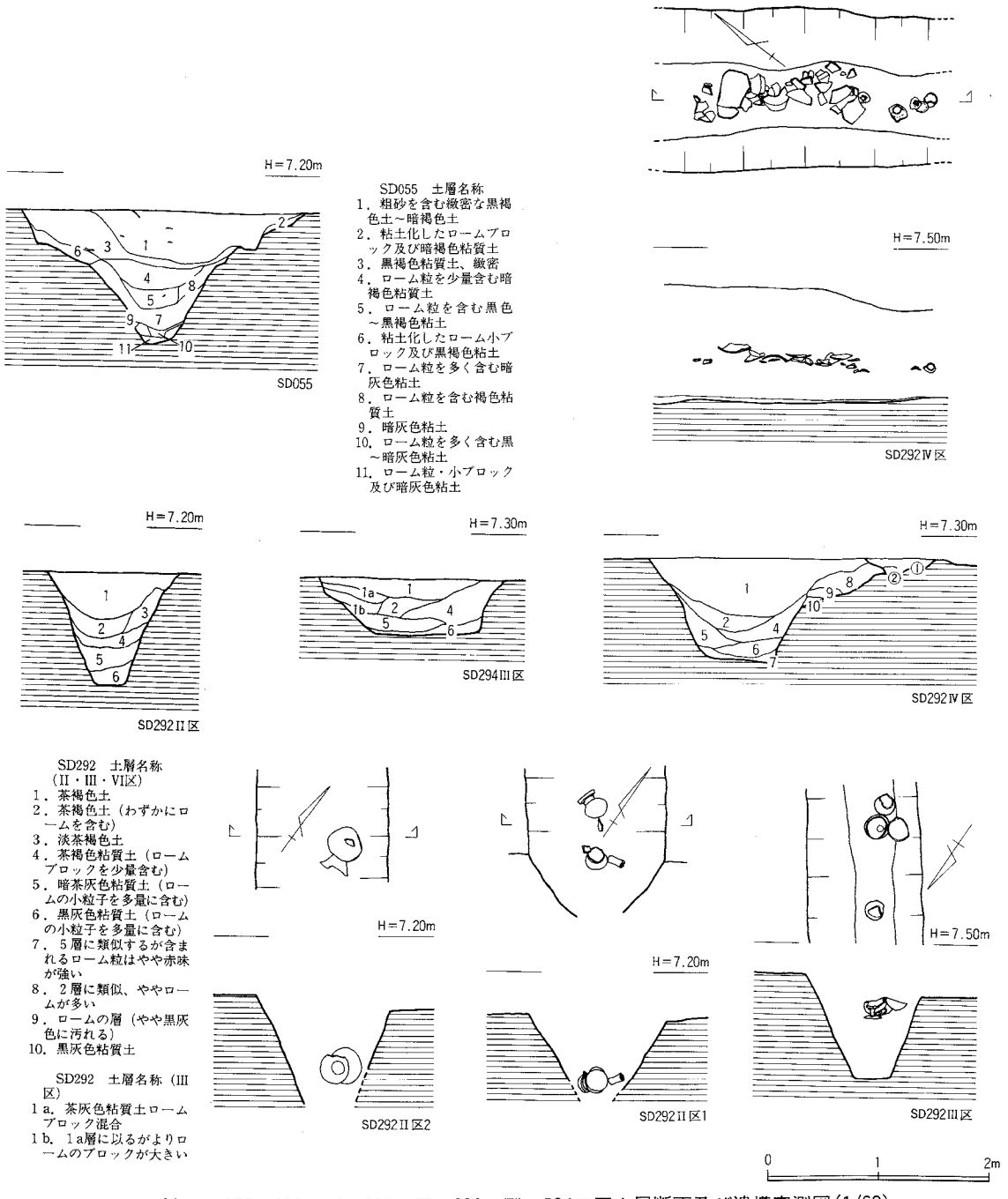
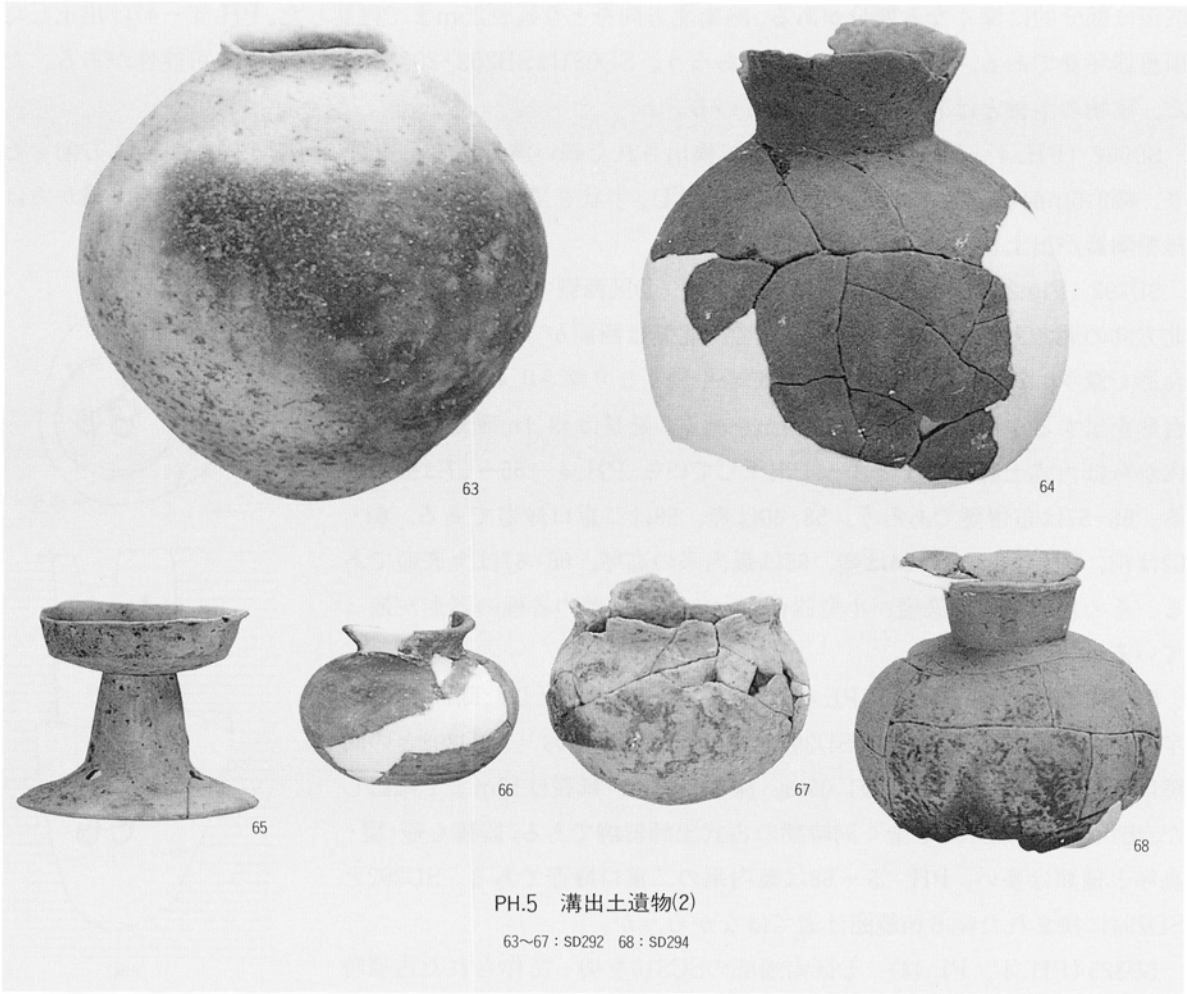



Fig.22　SD055・292II区・292III区・292IV区・294III区土層断面及び遺構実測図(1/60)

PH.4　溝出土遺物(I)

40 : SD001　41~46 : SD055　47 : SD181　48~54 : SD325　55~60 : SD292




PH.5　溝出土遺物(2)

63～67：SD292　68：SD294

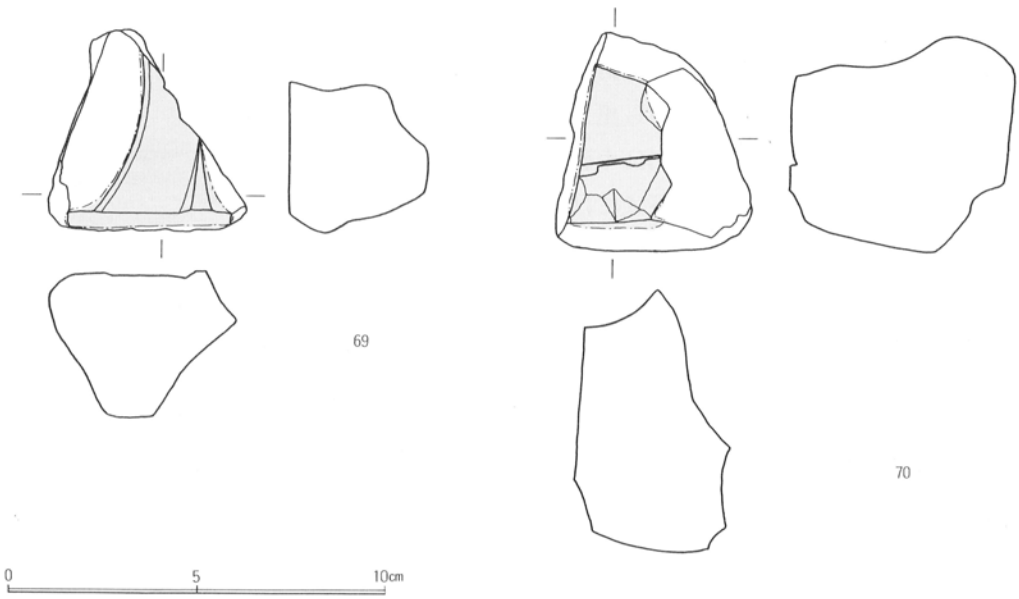



Fig.23　出土鋳型実測図(1/2)

底面は部分的に深くなる部分がある。略南北方向をとり延長25mまで確認した。PH. 4 －47は出土した須恵器坏身である。 6 世紀末のものであろう。SD081はSB202・203・204と関連する可能性がある。ただ、建物の主軸とは若干方向がズレている。

SD082（PH. 4 、PL.42） C区東側で検出された細い溝である。現在の町割と同じ略南北方向をとり、幅0.5m前後、深さは0.2m前後で断面「U」字状を呈する。延長は26.8mまで確認した。溝からは緑釉陶器が出土している。古代の溝であろう。

SD292（Fig.22、PH. 4・5 、PL.42～44） D区西側で検出された略南北方向の溝である。幅は0.9～1.25mで、北側は断面が「V」字に近い逆台形で深さ0.75m、中央部は逆台形でやや浅くなり深さ0.4m、南側は逆台形を呈するが再度深くなって0.7mを測る。延長は43.1m確認した。溝内からは古式土師器がまとまって出土している。PH. 4 －55～57は甕である。56・57は布留甕であろう。58・60は壺、59は二重口縁壺である。61・62は椀、PH. 5 －63・64は壺、65は畿内系の高坏、66・67は丸底壺である。その他、小型丸底壺、小型器台など古式土師器の各種の器形が揃っている。

SD294（Fig.22、PH. 5 、PL.44） D区西端部で出土した断面が「V」字に近い逆台形の溝である。SD292と並行して延びており、SD292との間隔は溝端で6.0mである。幅1.05m、深さ0.95m、延長は15mまで確認した。出土遺物はSD292と全く同時期の古式土師器群である。器種も壺・甕・高坏と種類は多い。PH. 5 －68は畿内系の二重口縁壺である。SD292とSD294に挟まれた幅 6 m範囲は道ではなかろうか。

SD325（PH. 4 、PL.44） D区南端部のSC315を切って作られた古墳時代後期の溝である。幅2.5m、深さ0.8mを測る断面逆台形の溝である。溝は南側に延びており、土師器、須恵器がまとまって出土している。PH. 4 －48は須恵器坏蓋、49・50は坏身、51・53は坩、52は蓋、54は 2 段透しの高坏である。 6 世紀後半代のものであろう。

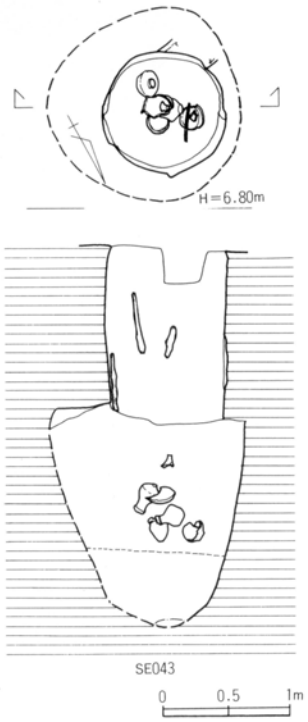


Fig.24 SE043井戸実測図(1/60)

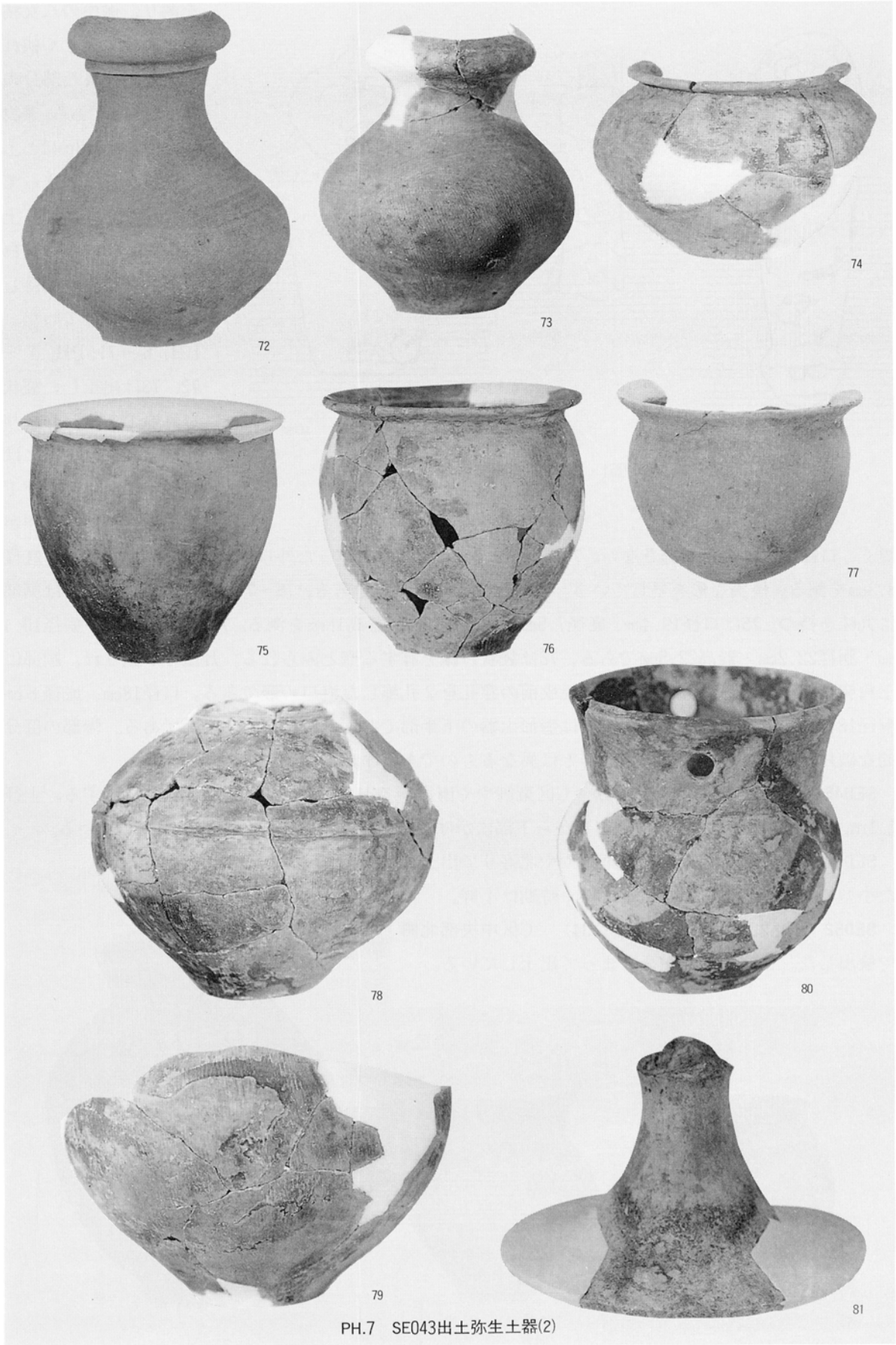
Fig.23－69・70は、SD001とSD055から出土した鋳型片である。69は広形銅矛の袋部の破片、70は中細銅戈の関から身下半部の鋳型片であろう。石材は正式には鑑定してもらっていないが石英・長石斑岩によく類似している。

(5) 井戸

井戸はC区から40基近く出土している。D区では全く出土しなかった。C区中央部南側に集中して出土しており、SD001より東側に多く分布する。さらに東側にも散発的に広がっている。井戸の集中する地域は地層の関係から水の出が良かったのかも知れない。比恵遺跡群内では他の調査区でも井戸は集中して分布していることが多い。

SE043 （Fig.24、PH. 6・7 、PL.33） C区東側南寄りに位置する弥生中期末の井戸である。上径0.98m, 深さ3.02m

PH.6 SE043出土弥生土器(1)




PH.7　SE043出土弥生土器(2)

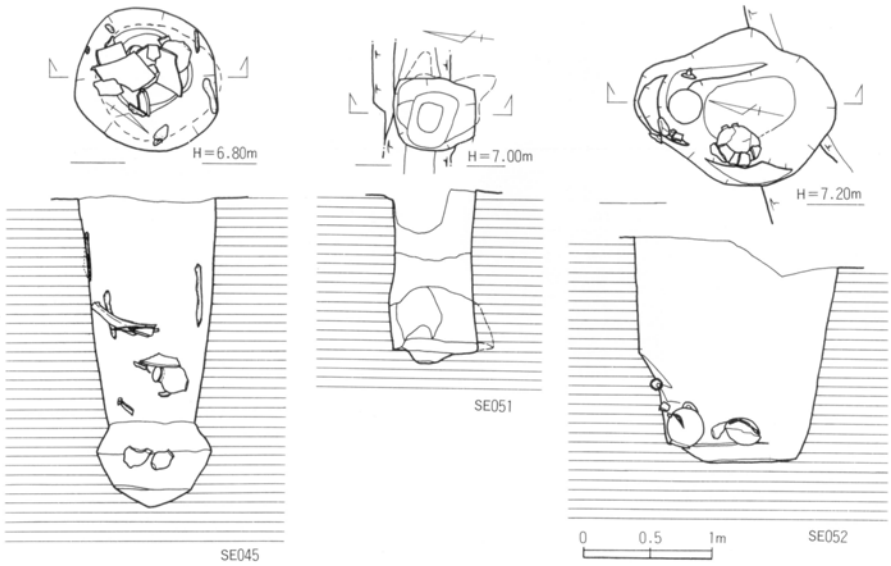



Fig.25　SE045・051・052井戸実測図(1/60)

を測り、途中の八女粘土との境で大きく抉れている。抉れた部分の幅は1.54mである。遺物は底面より0.7mほど上の位置からまとまって出土した。底面より上部の約0.6mまでは黄白色の八女粘土が崩落した土で埋まっていた。PH. 6－71、PH. 7－72、73は出土した袋状口縁壺である。丹塗りが施され、71・72には口縁下に三角突帯が1条巡る。73はやや頸が短く、口縁下には突帯を施さない。71は口径9.8cm、袋状に広がった外口径は12.5cm、胴径20cm、底径8.3cmを測る。優美な形を呈している。74は丹塗りの無頸壺である。75～77は甕である。76、77は胴部に丸味を持つ。75は口径19.4cm、底径7.5cm、胴径17.3cm、器高18cmを測る。76は口径21.9cm・底径10.4cm・胴径22.2cm・器高22.5cmである。78は袋状口縁を有する壺とみられる。丹塗りが施され、胴部に三角突帯が一条巡る。80は口縁部に焼成前の穿孔を2孔施した直口の壺である。口径18cm、底径8cm、胴径18.7cm、器高20.2cmを測る。79は壺形土器の下半部である。81は高坏の脚部である。脚部の部分的な破片であり、一括投棄の土器群とは異なるものであろう。

SE045 (Fig.25、PH. 8、PL.34)　C区東側やや南寄りで出土し、SE043より北側に位置する。上径1.1m，深さ2.45mである。中位下半から下部にかけて弥生後期前半の壺形土器が出土している。

SE051 (Fig.25. PL.34)　C区東側やや北寄りで出土した小型の井戸である。出土遺物は無く時期は不詳。

SE052 (Fig.25･26、PH. 9、PL.34)　C区中央部北側で検出した。古式土師器がまとまって出土している。

PH.8　SD045出土弥生土器

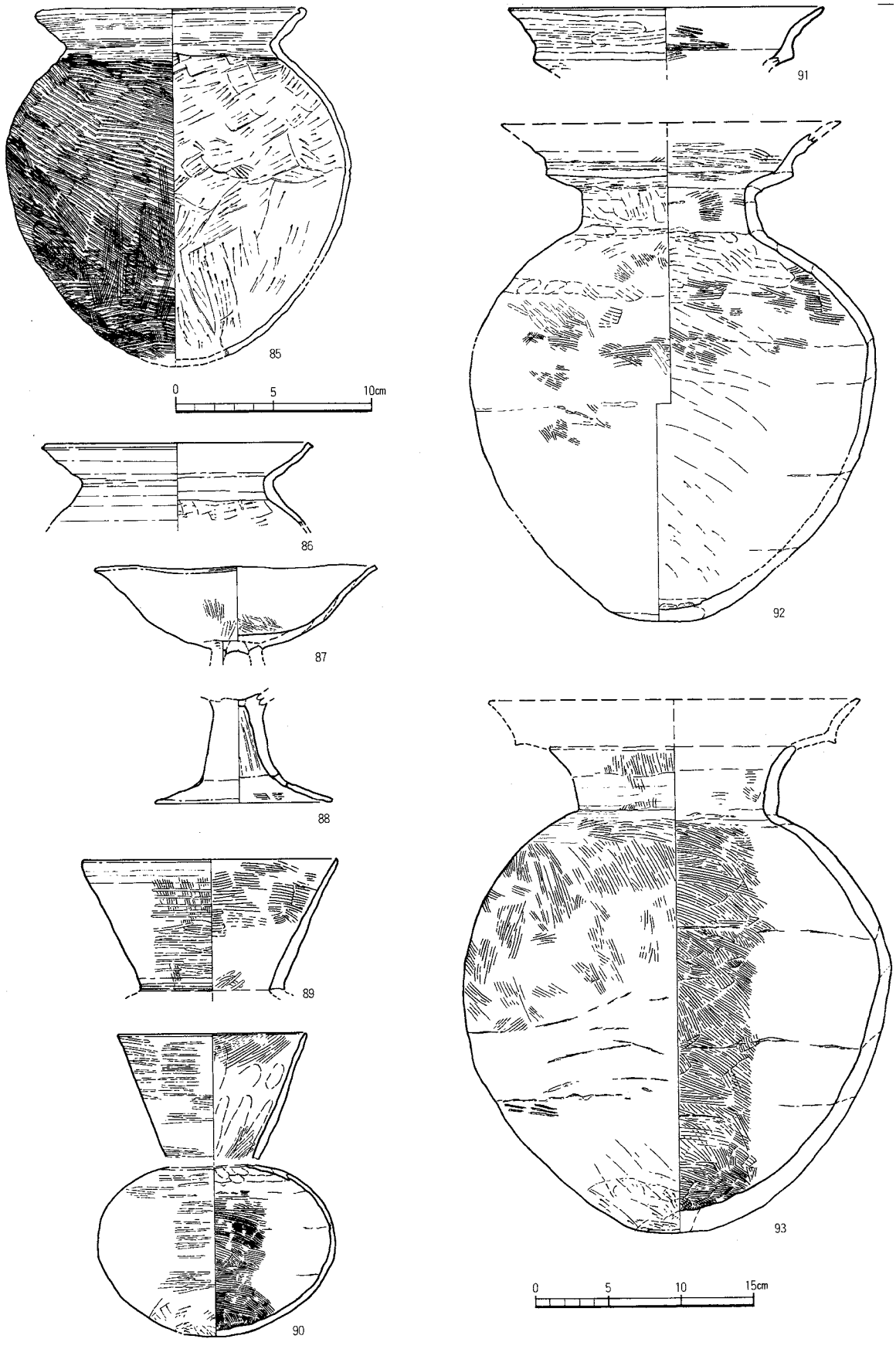
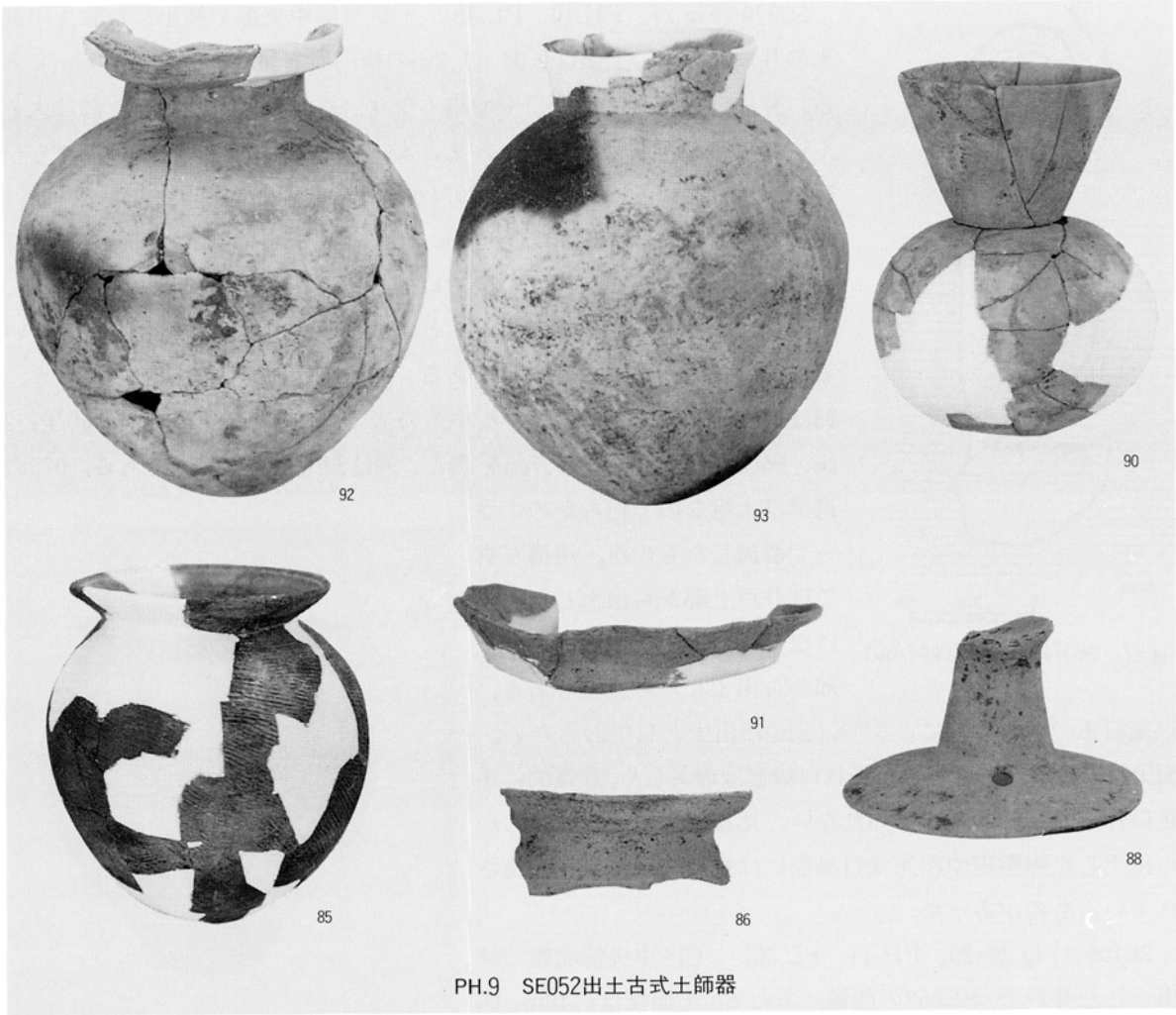



Fig.26　SE052出土遺物実測図(1/3・1/4)

SE052出土土器（Fig.26）

85は庄内甕である。倒卵形の底部に、直線気味に外反するやや短い口縁部が付く。口縁端部は、内につまみ上げ、肥厚気味となる。タタキは1cmあたり5～6条だが、やや粗く鋭く条痕が入る感じがあり、比恵遺跡通有のものと異なる。口縁部の特徴も考え、大和における纒向3式相当の庄内甕の搬入品と考える。外面調整は、胴部下半水平のタタキ後、胴部全面を左上がりの連続ラセンタタキ、さらに底部のみ再びタタキ、胴部下半は若干のタテハケあり。口縁部外面は擦痕ある回転的なヨコナデ。口縁部内面はヨコハケ後ヨコナデである。胴部内面は下半はタテのケズリ後、上半は右上のヘラケズリ、一部にハケの痕跡あり。ケズリは口縁部付け根のやや下までで、頸部内面はヨコハケ後ヨコナデでその稜はやや甘い。外面の色は浅黄橙色、内面は灰黄色から淡褐灰色。胎土はやや密で、石英・長石の細粒をやや多く含む。口径13.8cm、現存高18cm（底部欠損）を測る。86は布留系の甕で、復元口径18.7cm、現存高5.8cmを測る。口縁部は内湾気味に外反し、端部は斜めの面取りを施す。頸部内面の屈曲は甘く、稜をなさない。外面は回転的なヨコナデ、頸部～肩部はヨコのスリナデ。なお肩部はなで肩である。内面は口縁部回転ヨコナデ、胴部ヘラケズリは、頸部の下までで、頸部はヨコハケ後ナデである。浅黄橙色を呈し、胎土はやや粗く、石英・花崗岩と微量の雲母を含む。87は高坏の坏部で、復元口径19.5cm、現存高6.2cmである。口縁部は波打ち、歪んで正円をなさない。坏底部と口縁部の間には稜などはなく、丸味を持ち移行する。口縁端部は一部面取り状で、弱い沈線状になる部分がある。坏底部下面には針穴状の凹みがある。全体的に磨滅し不明確だが、内外面ともヘラミガキであろう。淡橙色を呈し、胎土は密で精良、花崗岩・石英の細粒をわずかに含む。なお86・87は中層出土で、他の下層出土のものに比べやや新しい傾向があるか。88は高坏の脚部。脚部径12.3cm、現存高7.5cmを測る。脚裾部の端部は丸くおさめ、裾部と柱状部の屈曲は明確である。柱状部上方はすぐ坏底部に移行し、中央は充塡している。裾部と柱状部の境に対向する穿孔が2ケ所ある。調整は、外面は不明、裾部内面はヨコハケの痕跡があり、柱状部はシボリ、橙色～黄橙色を呈し、胎土は非常に密で精良で、長石・石英の砂粒はわずかである。89は直口壷の口縁部で、口径17.7cm、高さ9.1cmを測る。口縁部は直線的に外反し、端部はやや内にすぼめる感じ。外面は、タテハケ後ヨコナデ及びヨコの細かいミガキ、端部はヨコナデ、内面はヨコハケ、下部は若干ヘラミガキである。明褐色から浅黄橙色、胎土は非常に精良で、石英・雲母をわずかに含む。90は直口壷。口縁部と胴部は別々に実測しているが、両者は同一で接合する。口径13.1cm、高さ20.5cmを測る。胴部は扁球形で口縁部はわずかに中ぶくらみだが直線的にのび、端部はすぼめ丸める。外面調整は底部がケズリの他は全面細かくストロークの長いヨコのヘラミガキ、内面は底部簾状のヨコハケ後ナナメハケ、胴部はやや左上のヨコハケ、上方はナデ又は押捺、口縁部は強いナデの後、下方はタテの細かいミガキ、口縁部にはナナメハケを施す。橙色～赤橙色で、赤彩の可能性もある（器面磨滅気味）。胎土は非常に密で精良で、砂粒はごくわずかである。91は二重口縁壷の口縁部で、口径21.7cm、現存高4.5cmである。端部はややすぼめ丸くおさめる。口縁の外反度はやや弱く、あまり長くのびないタイプである。外面調整は、一次口縁部はヘラケズリ後ナデ、口縁部はやや粗雑な断続的なヨコナデである。内面はヨコナデ後、口縁部下半から屈曲部をヘラミガキ。橙色からにぶい橙色、胎土は石英の砂粒を若干含む。92は二重口縁壷で、口縁部を若干欠損する。現存高28.5cm、胴部最大径は28cmを測る。底部は丸底に近いレンズ底で胴部は倒卵形、頸部は短く直立し口縁部に続く。口縁部は91に似るか、もう少し外反するタイプであろう（同一個体の可能性もある）。底部は在地の円板底部か畿内系の輪台底部か判別できない。外面は、胴部下半は磨滅し不明、上半はハケ後ナデ、頸部から一次口縁部はケズリ後ナデ、口縁部はヨコナデで強く擦痕が付く。内面は、底部が押捺・ナデ、胴部下半はナナメの板ナデ又はヘラケズリ、上半は左上のヨコハ




PH.9　SE052出土古式土師器

ケ後板ナデ、頸部近くは押捺後ヘラナデ(ケズリ気味)、頸部はヨコハケ後ナデ、口縁部はヨコハケ後ヨコナデさらにヨコのミガキである。外面は下部と頸部は橙色、他は浅黄橙色、内面は口縁部は灰白色、胴部は表面が褐灰色を呈する。焼成はやや甘く、胴部外面に対向して２つの黒斑がある。胎土は、石英を主に花崗岩、長石を若干含む。93は広口壷状となっているが二重口縁壷と考える。現状の口縁部は、直立して中程から外反し、端部は丸くおさめるが、調整は雑で、二重口縁壷の頸部の擬口縁と考える(ただし以下の説明は頸部とする)。胴部は卵形を呈し、底部は平底気味のレンズ底で厚い。頸部と胴部の屈曲は内外とも明確である。外面は、底部がケズリ、胴部下半はナデ、上半はタテハケ一部ヨコハケ、頸部のやや下はヨコハケ、頸部はタテハケ後若干のヨコナデ。内面は、底部は崩れた乱雑な簾状のヨコハケ、胴部は全体的に左上のヨコハケおよびナナメハケで丁寧に調整され、頸部は磨滅し不明だがヨコハケ後ナデか。色調は浅黄橙色～明橙色、内面は一部灰白色。磨滅し不明確だが口縁部～頸部は赤彩の可能性あり。胎土は粗く、石英・花崗岩・長石の粗砂粒を多く含む。底部の周囲と頸部から肩部にかけての一部に大きく黒斑がある。なお、内外面に粘土帯の継ぎ目の痕跡の亀裂がいくつか残る。以上のSE052出土土器は、中層の86･87を除けば下層の一括資料で、85の庄内甕や直口壷の型式から、畿内の布留O式併行の古墳初頭である。この時期は一般的に、在地系の土器が多少なりともまだ残るのが普通だが、畿内系で占められる本資料は比恵遺跡の土器相の特殊性を示し、85の大和型庄内甕の搬入品の存在は、畿内中枢部との特殊な交流関係を推定させる。　　(久住猛雄)

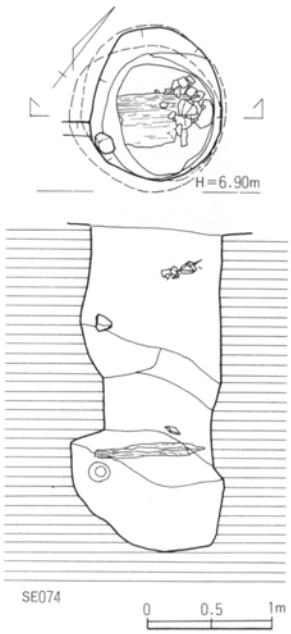
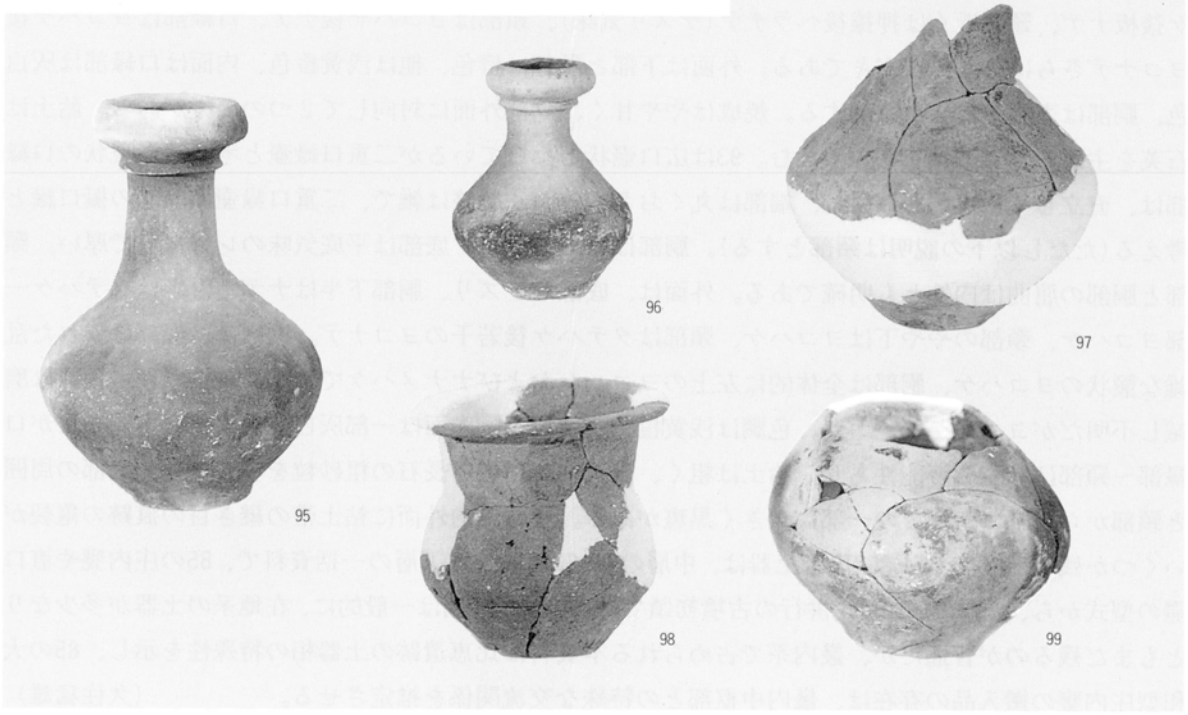


Fig.27　SE074井戸実測図(1/60)

SC074（Fig.27、PH.10、PL.35）　C区東側中央部で検出した弥生中期末の井戸である。上径は1.04×1.2mの楕円形を呈し、深さは2.55mである。井戸の掘り方は中位でやや細くなり、八女粘土との境で下部は大きく抉れている。遺物は下部からまとまって出土した。大きめの板材も一緒に出土している。PH.10はSE074から出土した土器群である。95・96は袋状口縁壺である。95は口径8.4cm、外口径9.8cm、底径は8.3cm、胴径18cm、器高25cmを測る。96は小型で口径4.7cm、外口径5.6cm、底径5.3cm、胴径11.2cm、器高14.6cmである。ともに丹塗りではなく黒色を呈している。97は丹塗りの袋状口縁壺である。99も袋状口縁壺の胴部であろう。98は逆L字状の口縁部を有する小型の壺である。。口径15.2cm、底径7.2cm、胴径15.5cm、器高15.7cmを測る。94はSE075出土の甕である。075の遺構は土坑なので何らかのエラーで混同したものか。遺構写真では井戸上部から出土したようになっているので他の井戸の上部から出土した可能性もある。以後訂正できるようにここではSE075出土としておきたい。SE074出土の黒色を呈した袋状口縁壺は珍らしく、意識的に黒色に作られているのかも知れない。比恵33次の袋状貯蔵穴から出土した無頸壺や鋤先状口縁壺には意識的に黒塗りが施されているものがあった。

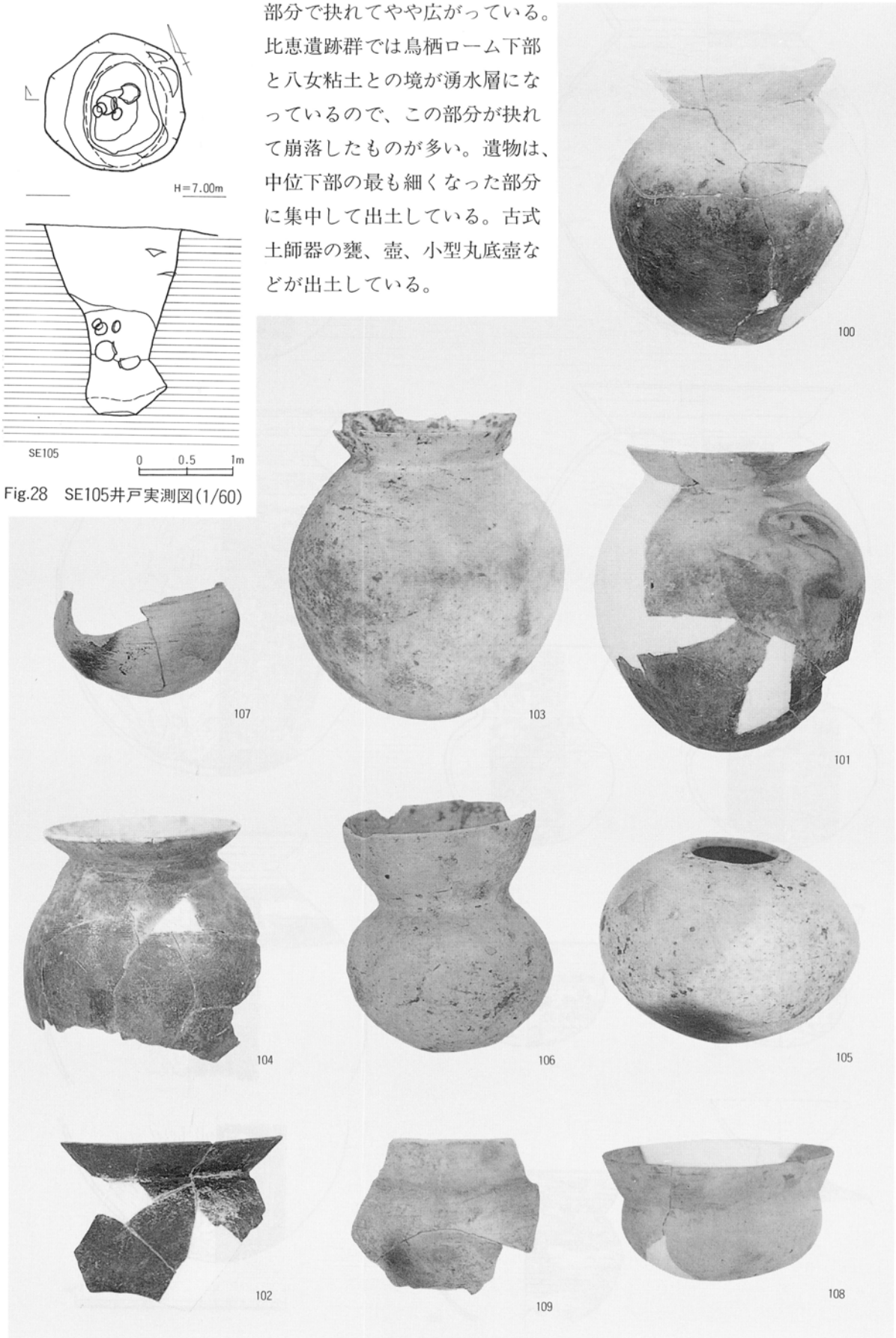
SE105（Fig.28・29、PH.11、PL.35）　C区中央部北側で検出された井戸で、SE052の西側にあたる。上面径は1.46m、深さ2.0mである。上面から窄まりながら底に向い、八女粘土の



PH.10　SE074・075出土弥生土器
94：SE075　95～99：SE074

Fig.28　SE105井戸実測図(1/60)

部分で抉れてやや広がっている。比恵遺跡群では鳥栖ローム下部と八女粘土との境が湧水層になっているので、この部分が抉れて崩落したものが多い。遺物は、中位下部の最も細くなった部分に集中して出土している。古式土師器の甕、壺、小型丸底壺などが出土している。




PH.11　SE105出土古式土師器

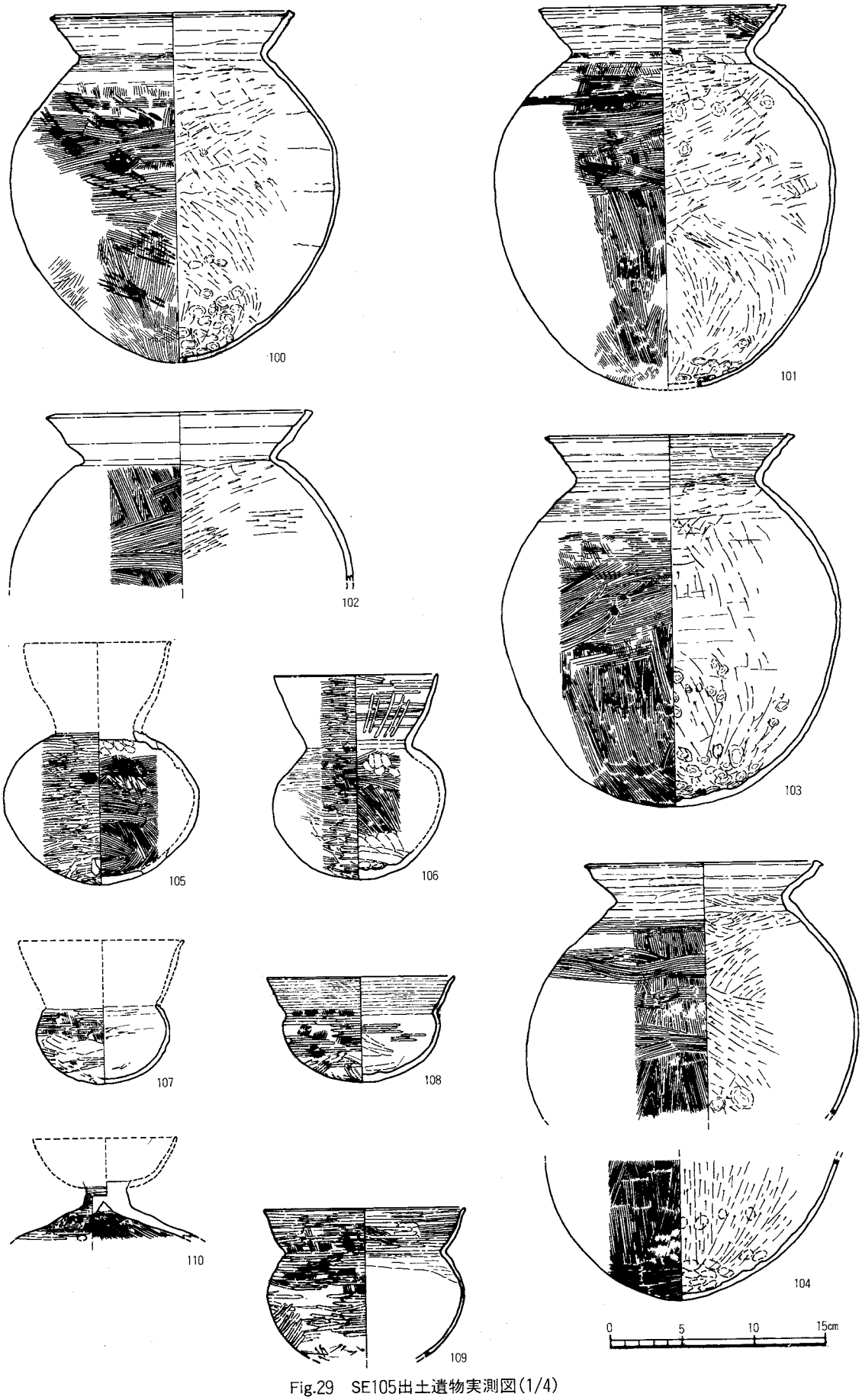



Fig.29　SE105出土遺物実測図(1/4)

SE105出土土器（Fig. 29）

100～104は布留系甕。100は復元口径17cm、高さ24.3cm。最大径に比し頸部がしまる。丸底球形胴部、外方に開く直線的な口縁部。口縁端部は面取り、斜め（外傾）であるが水平にも近い。肩部外面にはハケメ工具先端による斜めの刺突文が間隔をおいてある。外面は、胴部に左上のタタキ条痕が少し残り、タテハケを施し、中位～肩部はヨコハケ、下半は一部ナナメハケ。肩部上半から頸部はヨコスリナデ、口縁部は回転ヨコナデである。内面は、底部から胴部下位は押捺（工具使用？）の後タテのケズリ、中位は左上のケズリ、胴部上位は右方向のケズリ、中位はケズリ後ナデ。ケズリの稜はくびれのやや下で曖昧、頸部はナデ、口縁部は回転ヨコナデ。明灰白色を呈し、石英・花崗岩と少量の長石の砂粒、微量の雲母を含む。101は口径17.2cm、高さ26.8cm。底部は若干欠損し、丸味のある倒卵形(やや長胴か)、肩がやや張り、頸部はしまる。口縁部は直線的に外に開き、端部は面取りでほぼ水平。外面は、胴部がタテハケ後、中位より上に断続ヨコハケ、肩部回転ヨコハケ、さらに肩部にクシ状条痕によるヨコハケ施文、頸部～口縁部は回転ヨコナデ。内面は、底部押捺後、胴部下半タテないし左上のケズリ、上半は右上のケズリ、下半はケズリ後ナデ。肩部には押捺痕がある。ケズリはくびれのやや下までで稜は曖昧、頸部は押捺・ナデ、口縁部はナナメハケ後、擦痕の強い回転ヨコナデ。灰白色ないし内面浅黄橙色、胎土は100と同じ。102は下半欠損。復元口径18.6cm、現存高12.1cm。胴部は球形だろう。口縁部はヨコナデの凹凸が強いが直線的に外方にのび、端部は若干斜めの面だが水平に近い。胴部は、外面タテハケ後肩部やや下にヨコハケ、内面は右のケズリ。口縁部は内外回転ヨコナデ。浅黄橙色～灰白色。胎土は100・101に同じ。103は口径17.4cm、高さ26cm。底部は広い丸底、胴部下ぶくれ気味球形、口縁部は直線的に外に開き、端部は面取りでやや凹むが、ほぼ水平である。胴部外面タテハケ後中位ナナメハケ、肩部ヨコハケ、肩部上半ヨコスリナデである。頸部～口縁部内外回転ヨコナデで、口縁部内面擦痕強く工具使用か。内面は、底部から下半が押捺およびタテのケズリ、下位はケズリ後にも押捺およびナデ、中位～肩部はタテのケズリ後ヨコのナデ、くびれ直下は右のケズリ。ケズリはくびれ直下まで入るが、稜はやや曖昧、頸部はナデないしミガキ残る。灰白色～黄橙色、胎土には石英･花崗岩の砂粒少しと、雲母を微量含む。104は、上下別々に実測しているが同一個体である。口径16.6cm、復元高27.1cm。底部は丸底、胴部は左右非対称だが倒卵形気味の球形胴でなで肩。口縁部は外反し、上半は内湾、端部は斜め（外傾）の面になる。胴部外面は、タテハケ後底部ナナメハケ、中位断続ヨコハケ、肩部と頸部やや下回転ヨコハケ。条痕は消えるが全体にタタキの凹凸面残る。口縁部は内外回転ヨコナデ。内面は、底部と下位の一部に押捺後、下半タテケズリ、上半右上ケズリ後中位左上ケズリ。ケズリはくびれ１cm程下までだが、稜は比較的明確。頸部はハケ後ナデ。外面は明褐灰色～灰色、内面にぶい橙色。外面煤付着が顕著、底部内面コゲ付着。石英･長石･雲母を少量含む。105・106はやや小形の直口壷。105は口縁を欠損するが頸部のしまりから106と同様。現存高10.7cm。外面は下半ケズリ後ミガキ、上半はタテハケ後ヨコの回転的ミガキ。内面は、底部が簾状ハケ後放射状のナナメハケ、下半は左上のハケ、中位より上ヨコハケ後一部ヘラミガキ、頸部直下は押捺、ナデ。橙色を呈し、胎土は密で精良、長石の砂粒を少量含む。底部付近に焼成後の小穿孔。106は口径11.4cm、高さ14.3cm。胴部は左右非対称な扁球形。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部はすぼめる。粗雑傾向と合わせ、新しい型式か。外面は、胴部下半ケズリ後ヨコのミガキ、上半タテハケ後回転的ヨコミガキ、口縁部もヨコの回転的ミガキ。内面は、底部が押捺・ナデ、中位ナナメハケ、上位ヨコハケ後押捺、ナデ、口縁部はヨコナデ後ヨコの回転的ミガキおよびタテの若干のミガキ、橙色又はにぶい橙色。胎土は密で精良、石英の細粒を少し含む。107は小型丸底壷。口縁部欠損するも、頸部がしまらないタイプは口縁がのびるものか。現存高5.6cm。外面は下半ケズリ後ミガキ、上半タテ

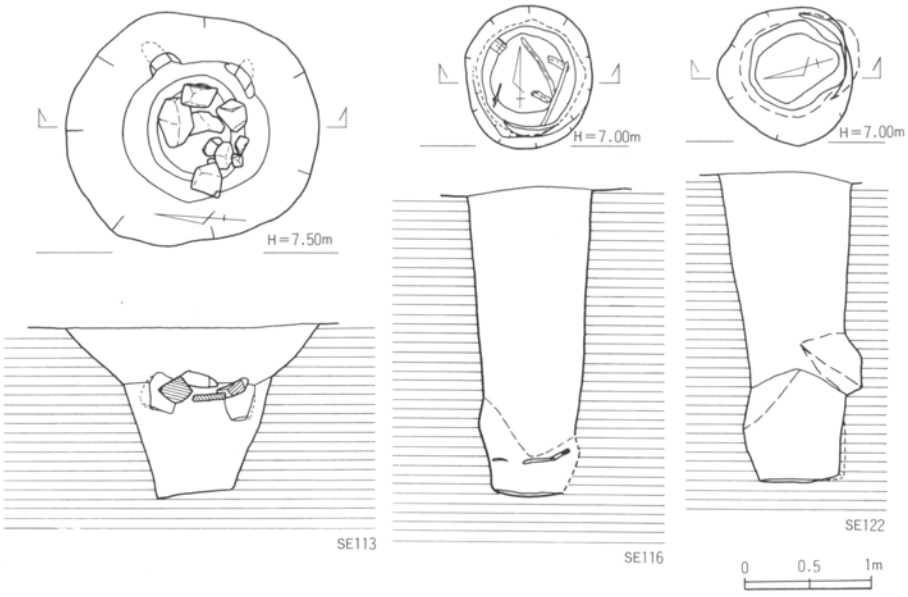



Fig.30　SE113・116・122井戸実測図(1/60)

ハケ後ヨコの回転的ミガキ、中位はさらにヘラナデを施す。内面は下半ケズリ後ナデ、上半ヨコナデ。外面淡橙色(灰白色気味)、内面褐灰色。胎土は密で非常に精良、砂粒は僅か。108は口縁部が外に若干のびる小型丸底鉢。口径13.1cm、高さ7.4cm。口縁の端部は外に少し折れてすぼめる。外面は、体部下半ケズリ後ミガキ、上半タテハケ後ヨコの回転的ミガキ、口縁部タテハケ後、擦痕のある回転ヨコナデ。内面は、体部下半が板ナデ(ハケ?)後ナデ、上半ケズリ後ヨコミガキ、口縁部は外面に同じ。橙色～淡橙色、胎土は107などと同じ。109は小型丸底の広口壷。体部は扁球形で、頸部のしまりが甘く、口縁部は内湾してあまりのびずに外へ立ち上がり、端部は108に似る。外面は、体部下半が手持ちのミガキ、上半および口縁部はタテハケ後ヨコの回転的ミガキ。内面は、体部上位に工具ヨコナデ残り、他はナデ仕上げ、口縁部ヨコハケ後ヨコの回転的ミガキ。橙色を呈し、胎土は107などと同じ。110は椀状の坏部の付く、脚部が低く大きく開く高坏の一部。外面はタテハケ後ヨコの回転的なミガキ。内面は一部は簾状のヨコハケ後放射状のナナメハケを広く施す。脚裾部に穿孔あり(個数不明)。にぶい橙色を呈し、胎土は非常に精良で密、砂粒ほとんどなし。107～110のミガキはいずれも幅1～2㎜の細密なヘラミガキ。以上のうち106・105・103・101は各々P－1～4として他よりやや上(井戸の中位)で取上げられ(一括出土)、型式も新相。また104・109は下層出土で、特に104の甕は型式学的にやや古相。他の土器は両者の間の出土である。即ち、層位的及び型式学的に、本資料は三つの小様式に分離できる。下層は布留式古相に、101他の井戸中位の一群は布留式中相に、その他は後述のSE136と同じく、その両者の中間的な小様式に各々位置付けられる。

(久住)

PH.12　SE108　出土土師器、SE116・122出土弥生土器

111：SE108　112：SE116　113：SE122

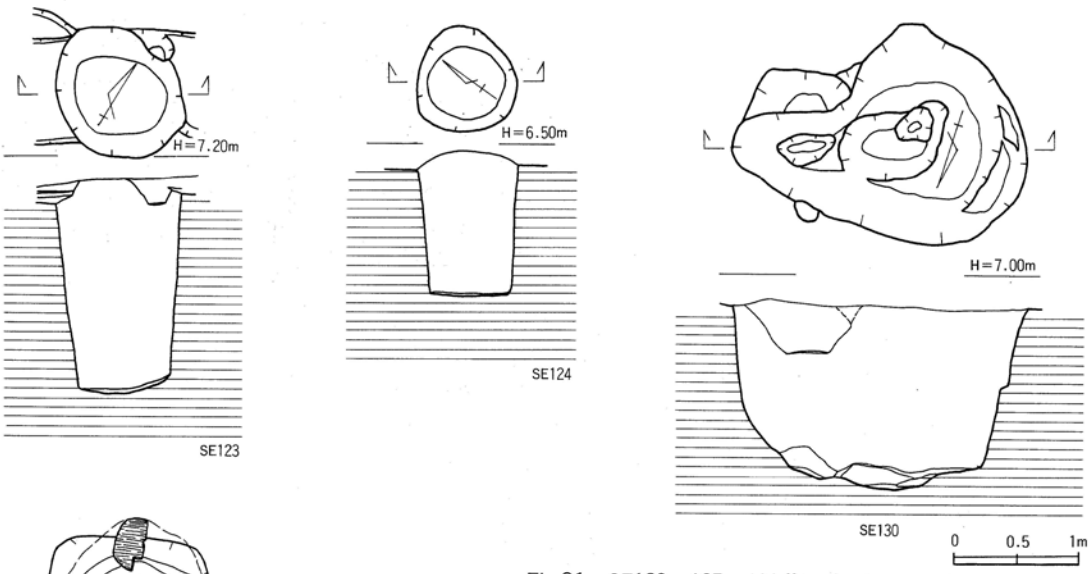
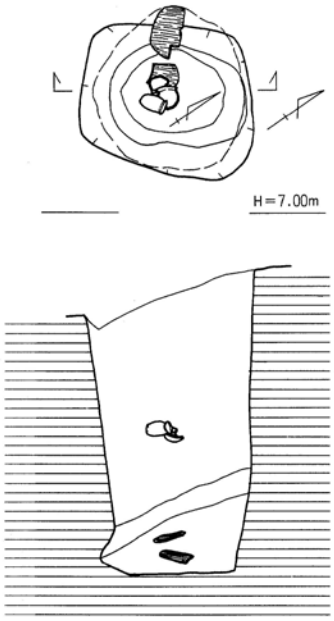



Fig.31　SE123～125・130井戸実測図(1/60)



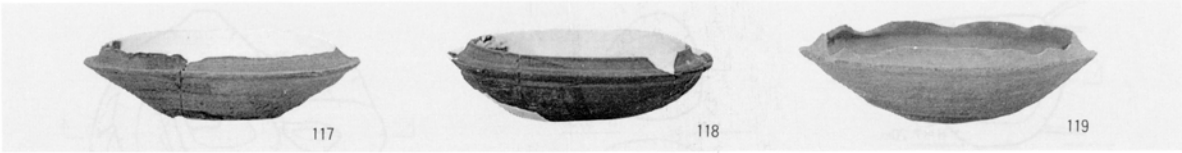

SE108（Fig.9、PH.12）　C区中央部南側で出土した浅い井戸で、SC109を切って掘り込まれている。上面径1.1m，深さ1.2mの単純な形の素掘井戸である。PH.12－111は井戸から出土した底面ヘラ切りの土師皿である。古代末から中世に属するものであろう。

SE113(Fig.30、PL.35)　C区中央部南よりで検出した井戸で、上面径は1.8×2.0m、深さ1.3mを測る。上半部は皿状に窪み、途中で折れて底径0.6mの底部に至る。途中の掘り方が変わる部分に20～30cm大の礫を多く混入する。井戸内からは土師皿が出土しており中世に属するものであろう。

SE116(Fig.30、PH.12)　C区中央部南よりに位置し、SC109を切って作られている。上面径1.0×1.1m、深さは2.45mで、やや窄まりながら底径0.55mの底部へ至る。途中八女粘土の部分で壁が崩落し、やや抉れている。PH.12－112は出土した複合口縁壺である。頸部から口縁にかけて残存している。弥生後期後半代のものであろう。

SE122(Fig.30、PH.12)　C区中央部南寄りに位置し、SD001の東側にあたる。上面径1.1m、深さ2.46m、底径0.65mで、単

PH.13　SE124・125出土弥生土器
114：SE124　115・116：SE125




PH.14　SE130出土須恵器

純に窄まりながら底面に至る。途中八女粘土に変化する部分で若干抉れている。PH.12－113は出土した弥生後期前半の壺形土器である。口径17.2cm、底径10.5cm、胴径28.3cm、器高33.1cmを測る。

SE123（Fig.31、PL.36）　C区中央部南側に位置し、SE122の南側で出土した単純な掘り方の素掘り井戸である。上径1.0m、深さ1.72m、底径0.74mである。明確な出土遺物はなく時期を決め難いが、弥生後期位に相当するものであろう。

SE124（Fig.31、PH.13、PL.36）　C区中央部南寄りで出土した単純な掘り方の素掘り井戸である。SD001東肩に位置し、上部は削平されている。上面径0.8×0.85m、深さ1.15m、底径0.63mを測る。PH.13－114は上面から出土した小形の壺である。弥生後期終末期に属するものであろう。

SE125（Fig.31、PH.13、PL.36）　C区中央部南よりのSD001東肩部分で検出した井戸である。上面掘方は略方形で1.18×1.38m、深さは2.42mである。単純に窄まりながら底径0.8mの底に至る。途中八女粘土へ変化する部分で壁が若干崩落し抉れている。井戸内からはネズミ返し・板材などの木製品と、中位で壺と甕が出土している。PH.13－115は鉢形に近い甕形土器である。口径20.2cm、底径8.5cm、器高12.6cmを測る。116は壺形土器である。やや歪つで、口径11.8cm、底径8.6cm、胴径13.9cm、器高19.1cmを測る。ともに弥生後期前半に属するものであろう。

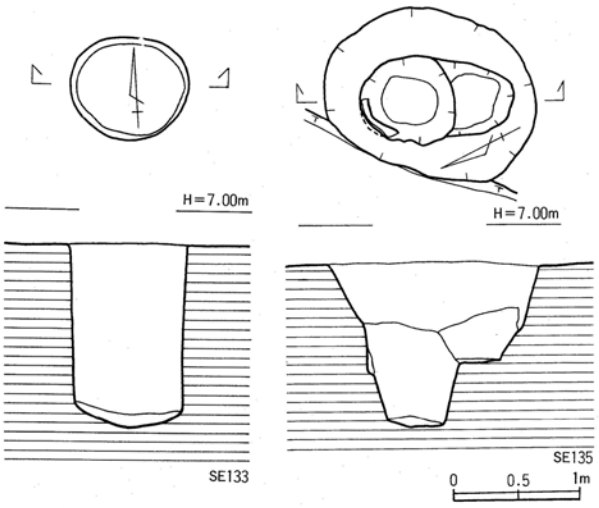



Fig.32　SE133・135井戸実測図(1/60)

SE130（Fig.31、PH.14、PL.36）　C区中央部やや南よりに位置し、SC109を切っている古墳時代後期の井戸である。上面径はやや楕円形を呈し、長径2.36m、短径1.7m、深さ1.46mをを測る。井戸底は段々に窪み、東側は「U」字状に張り出し、一段浅くなっている。東側の壁は丸く抉れており汲み上げ口になっている。井戸内からは須恵器がまとまって出土している。PH.14は須恵器の坏身である。117は口径10.2cm、受部径14.3cm、器高3.8cm、118は口径11.5cm、受部径14.2cm、器高4.0cm、119は口径13.5cm、受部径15.7cm、器高4.5cmをそれぞれ測る。蓋受けの立ち上りはさほど高くはないが、全体的な径はやや大きい。須恵IIIb新相段階に相当するものであろう。6世紀後半から末の時期と考えられる。

SE133（Fig.33）　C区中央部やや南寄りに位置し、SC114とSC117のプラン内で検出した井戸である。上面径は0.82×0.93m、深さは1.47m、底径0.85mを測る。単純な掘り方の井戸である。弥生後期後半以降のものであろう。

SE135（Fig.32、PL.37）　C区中央部やや南寄りに位置し、SE133の西側にあたる。SC114のプラン内で検出された井戸である。上面形は楕円形を呈し、長径1.7m、短径1.3m，深さ1.3mを測る。上半部は傾斜を持ったやや大型の掘り方で、途中で段が付き、窄まりながら底径0.45mの底に至る。弥生後期後半以降のものであろう。井戸の形態からは中世に属するものであろうか。

SE134（Fig.33、PH.15、PL.36）　C区中央部やや南寄りに位置し、SC114を切ってプラン内で検出された井戸である。SE133の南側にあたる。上面は楕円形を呈し、長径1.32m、短径1.0m、深さは2.70mである。掘方は徐々に窄まり、中位下半で最も挟くなる。径は0.7mである。下部は八女粘土との境で最も抉れて広くなり、底径0.55mの底へ続く。遺物は下部からまとまって出土している。

PH.15－120は複合口縁壺である。口径20.6cm、外口縁24cm、底径７cm、胴径24cm、器高36.8cmを測る。口縁部は丸味を持って内湾し、頸部はあまり窄まらず、下位に２条の「コ」の字状突帯を貼付する。胴部は張りが弱くラグビーボール状を呈し、胴中位に「コ」の字状突帯を一条巡らす。底径は７cmで小さい。全体に細長い感じを受ける。121は壺形土器の胴部下半である。底径8.5cm、胴径22.8cm、残高18.6cmを測る。おそらくこれも複合口縁壺になるものとみられる。122は甕である。口径19.2cm、底径７cm、胴径21.9cm、器高21.1cmを測る。口縁部は外反し、胴最大径は中位よりやや上にある。123は細頸壺である。口径8.8cm、底径４cm、胴径15cm、器高21cmを測る。これらの土器は底部が丸平気味で残っており、弥生後期後半から終末に近い時期であろう。弥生後期の井戸は前半期のものから終末にかけて10基以上が出土しており、ある程度編年的に並べることができる。中でも弥生後期後半代の井戸が最も多い。ところが、この時期の竪穴住居址は殆ど確認されていない。調査区内の遺構は全体的にかなり削平を受けており、既に削られた可能性もある。比恵遺跡群ではこれまでの調査で後期の時期もかなりまとまって井戸群が出土していることが分かっている。この時期の集落もかなり密集していたことが推測される。

比恵50次調査では、方形竪穴住居址の多くが古式土師器の時期に相当することが明らかになってい

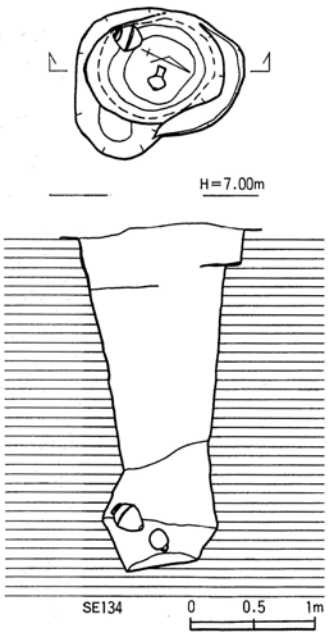



Fig.33　SE134井戸実測図(1/60)

PH.15　SE134出土弥生土器

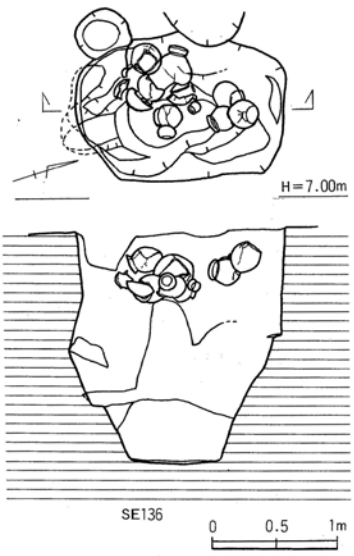
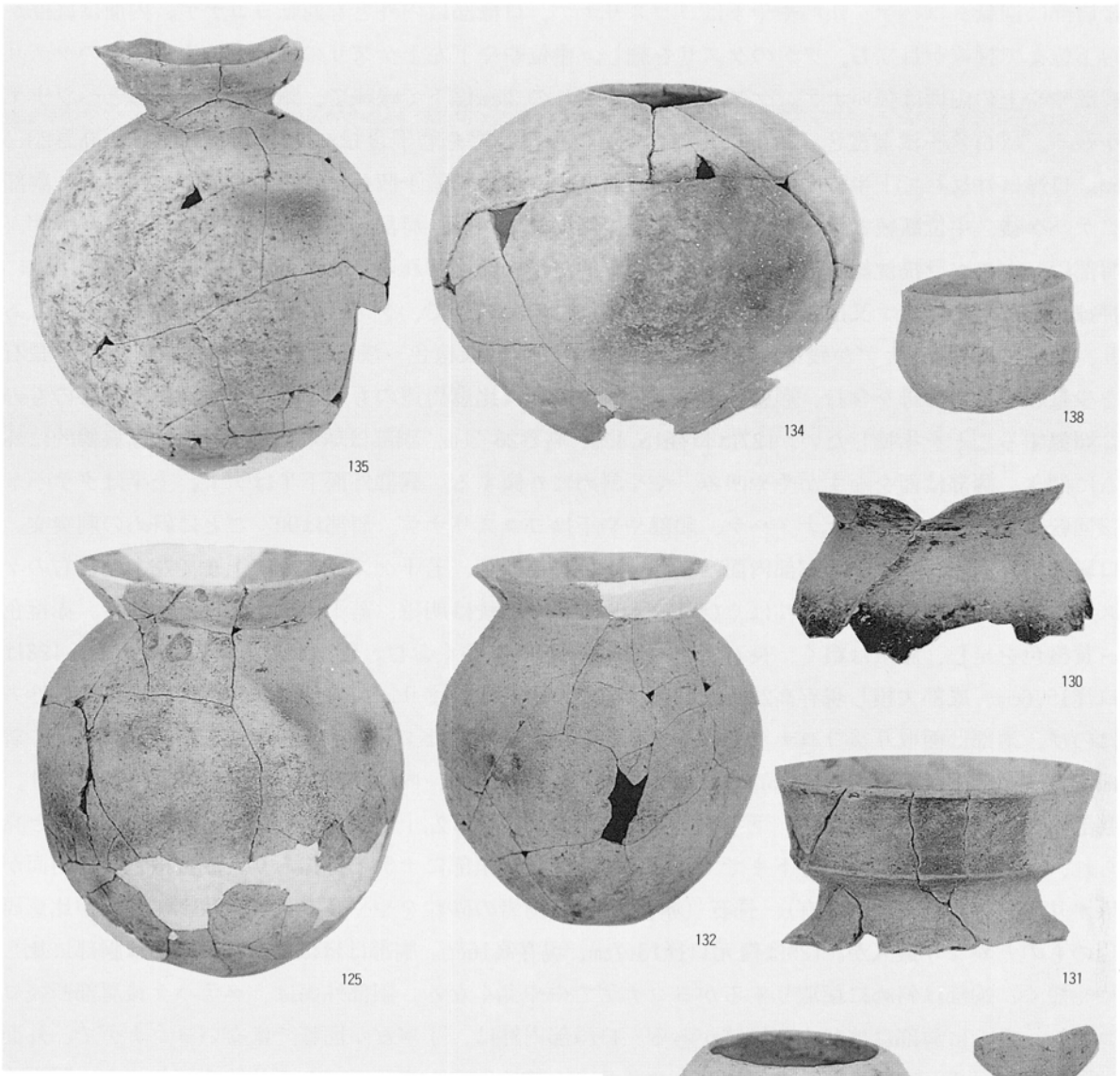


Fig.34　SE136井戸実測図(1/60)

る。集落に関係する溝も確認され、これらから外来系の土器が数多く出土している。また、井戸にもこの時期に属するものが多く検出されている。井戸内からは、外来系の土器が数多く出土しており、外来土器の流入拠点のひとつとして重要な地域であったことが窺える。

SE136 (Fig.34～36、PH.16～17，PL.37)　C区中央部南寄りに位置し、SD001の東側にあたる。このあたりには弥生中期後半から奈良時代にかけての井戸が密集している地域である。湧水層との関係が深いものと推察される。SE136は掘方上面が略長方形を呈し、長辺1.65m、短辺1.20m、深さは1.86mである。掘り方は歪つで、底面は0.7mを測る。遺物は上面から、折り重なるような状態で出土している。殆どが古式土師器の甕、壺、ミニチュア土器などである。井戸の底からは目立った遺物は出土しなかった。PH．16･17は出土した古式土師器である。

PH.16　SE136出土古式土師器(1)




PH.17　SE136出土古式土師器(2)

SE136出土土器（Fig. 35－36）

124～130・132・133は布留系甕。全体として胴部に比して頸部がしまり、口縁端部の面が水平に近いものが多数なのは新しい要素か。124～126は長胴気味の卵形胴部、124・125は下ぶくれ気味。胴部の法量は布留系の球胴甕と在地系長胴甕の中間形態と言え、技法は全面的に外来系だが、在来の使用範型が形に要請されているか。但し125は球胴にも近い。124は口径16.7cm、底部僅か欠損するが高さ25.6cm。口縁部は直線的に外に開き、中位肥厚気味、端部は少しすぼめる。外面は胴部が左上タタキ後タテハケ、中位断続ヨコハケ、肩部回転ヨコハケ、頸部やや下は断続的なヨコスリナデ。口縁部内外のヨコナデは丁寧だが回転ではない。内面は、底部が押捺後、下半左上のタテケズリ、上半右のケズリ後ナデ。ケズリはくびれの少し下まで、稜は曖昧で頸部はナデ。外面は煤の付着顕著だが底部は赤く被熱痕か。灰白色～浅黄橙色。内面は淡橙色。胎土に石英・花崗岩の砂粒を少し含む。125は口径15.9cm、高さ25.6cm。口縁は直線的、端部は面取りでわずかに凹み、水平に近い。胴部外面は下半から中位までタテハケ一部ヨコハケ、上位はタテハケ

後肩部に回転ヨコハケ、頸部やや下はヨコスリナデ、口縁部は内外とも回転ヨコナデ。内面は底部から下位まで押捺が目立ち、タテのケズリを施し、中位やや下左上ケズリの後、上位まで右上のケズリ。肩部やや上の内面は強いナデ。ケズリの後はくびれの2㎝程下で曖昧で、頸部には押捺痕とヘラナデが残る。灰白色～浅黄橙色。胎土に花崗岩。石英の細砂粒を若干含む。126は口径15.3cm、高さ23.4cm。口縁は外反して上半やや内湾し、端部の面はやや斜めで若干凹む。また多少波打つ。外面は胴部タテハケ後、中位断続ヨコハケ、中位やや上は回転ヨコハケ、肩部と頸部のやや下はヨコスリナデ、肩部に一本のヘラ描沈線が巡り、口縁部は回転的だが一部途切れるヨコナデ。内面は、底部と下位に押捺、胴部下半はタテ又は左上のケズリ、上半は右のケズリで、ケズリの稜はくびれの1㎝程下にあり、頸部には押捺・ナデが残り、口縁部は回転ヨコナデ。淡橙色～浅黄橙色。石英（赤色含む）・長石を少量と微量の雲母を含む。形態・胎土・色調が微妙に比恵周辺のものと異なり、西新町遺跡のものに類似することを指摘したい。127は口径15.4cm、高さ26.3cm。胴部は球形に近く、口縁は直線的に外方に開き、端部は面をなすがやや凹み、やや斜めに外傾する。胴部外面下半はナデ、上半はタテハケ後回転ヨコハケ、さらにナナメハケ、頸部やや下はヨコスリナデ、肩部は90°ごとに斜めの刺突文。口縁部内外回転ヨコナデ。胴部内面は底部・下位押捺顕著、若干ケズリ。他は上まで左上の後右のケズリ。肩部にも押捺痕。ケズリはくびれ直下まで入り、稜は明確、若干のナデ、押捺が残る。赤橙色～黄橙色を呈し、胎土は粗く、長石（琉紋岩？）・石英を多く含む。質感が重く搬入品である。128は口径15.6cm、底部欠損し現存高23cm。胴部は球形、頸部はしまり、口縁部はわずかに内湾気味に外方にのび、端部は面取り後ヨコナデでやや丸くなる。胴部外面はタテハケ後、中位を断続ヨコハケ、肩部上方～頸部下は擦痕ある回転的なヨコスリナデ。口縁部は、内外回転ヨコナデ、外面は擦痕あり。胴部内面は磨滅し不明確だが、下半タテ又は左上の、中位は左上ナナメ、上位は右方向のケズリと見られ、ケズリはくびれのやや下までで、稜はやや曖昧、頸部にナデ・押捺あり。浅黄橙色又は内面が灰オリーブ色。石英（赤色有）、長石（赤色有）・花崗岩の砂粒をやや多く含む。胎土・色調が比恵周辺のものと異なり搬入か。129は復元口径15.7cm、現存高16cm。胴部はほぼ球形、口縁部は胴部に比しやや短く、端部は斜めに面取りするがヨコナデでやや丸くなる。胴部外面は、タテハケ後肩部断続ヨコハケ、さらに肩部に波状文の痕跡がある。口縁部内外は、丁寧だが回転ではないヨコナデで、外面は頸部にかかる。内面は胴部中位は左上ケズリ、上位は右のケズリで、ケズリはくびれの1㎝程下までで、稜は曖昧、頸部にナデ残る。浅黄橙～橙色。胎土はやや粗く、花崗岩・長石・石英の粗砂粒を多く含む。質感が重く、胎土が異質で、比恵周辺の製作ではなく、那珂川上流域のものであろう。130は口径16.7cm、現存高9.7cm。胴部はなで肩で、倒卵形となるだろう。口縁部はわずかに内湾気味に外反し、端部は水平に近いがやや外傾する面をなし、ヨコナデで若干丸まる。胴部外面はタテハケ後中位断続ヨコハケ、肩部回転ヨコハケ、頸部やや下はヨコスリナデ、さらに肩部に波状文。タタキ痕がわずかにある。口縁部内外回転ヨコナデ。胴部内面は左上ケズリ後右のケズリ、ケズリはくびれの少し下まで、稜はやや曖昧で頸部にナデあり。橙色～淡橙色。石英（赤色少し有）や花崗岩・長石（赤色少し有）をやや多く含む。質感やや重く、比恵周辺の製品ではない可能性あり。131は山陰系の壷の頸部～口縁部。口径20.7cm、現存高10.5cm、胴部と頸部、さらに一次口縁部との各々の間は屈曲がやや甘く、一次口縁部外方は角をなし、二次口縁部はやや外方に開いて直立、端部は上方にやや外傾する面をなし、凹みがあり、外につまみ出すように拡張する。外面は頸部～口縁部とも回転ヨコナデ、胴部はタテハケ若干残る。内面は、胴部がケズリで稜は曖昧、頸部はナデ、口縁部は回転ヨコナデで一部擦痕を伴う。淡橙色から浅黄橙色。胎土は細かい土に、石英（赤色少し有）・花崗岩・長石（及び琉紋岩？）の細砂粒をやや多く、及び雲母と角閃石を微量含む。比恵周辺製作ではない可能性あり。

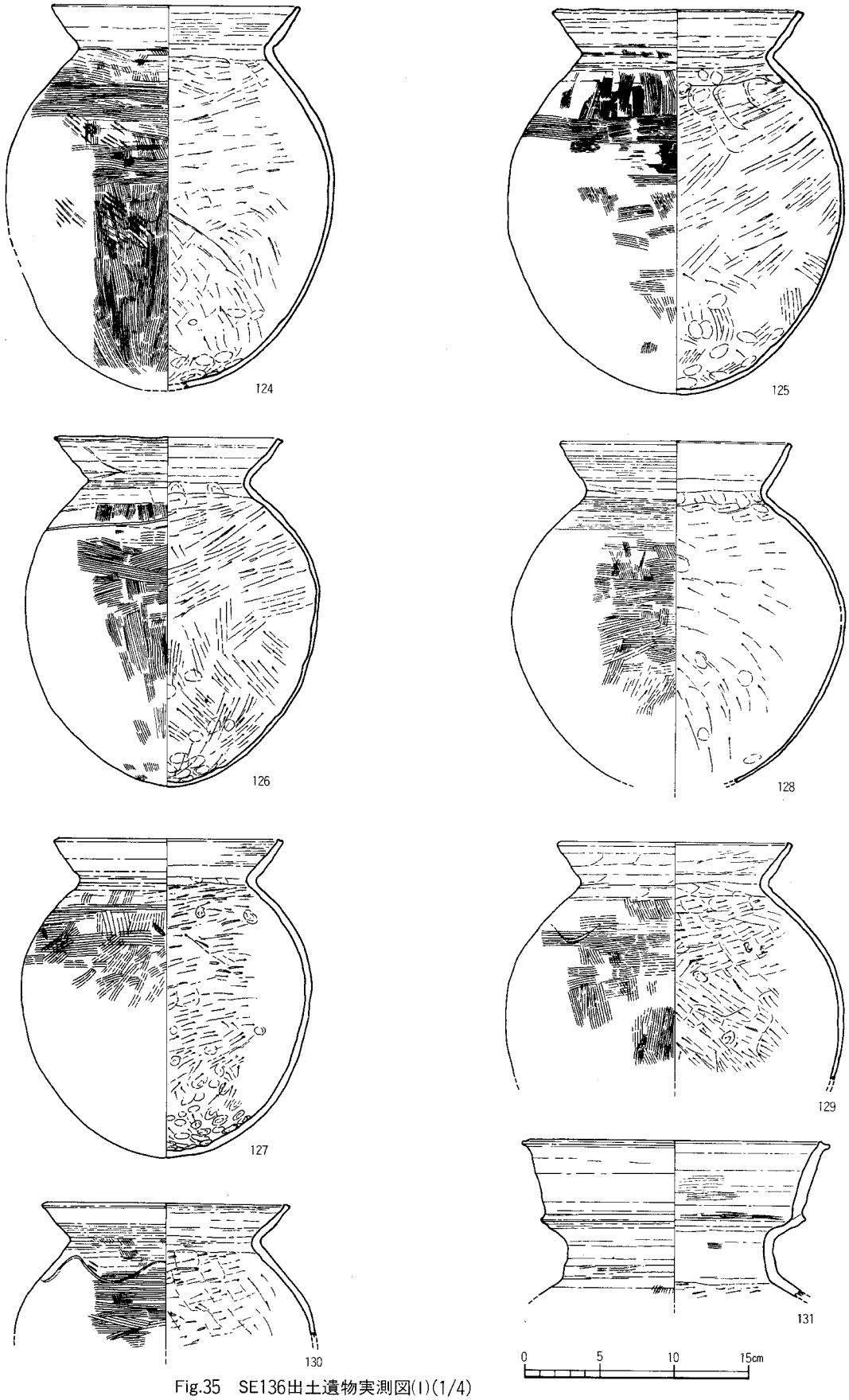



Fig.35　SE136出土遺物実測図(1)(1/4)

132は口径15cm、底部はわずかに欠損、現存高21.6cmの甕。胴部はやや長胴の球形、口縁部は外反気味に外へのび、端部は外傾する面取り後強いヨコナデが内外に入り、少し丸くなる。胴部外面はタテハケ後、中位断続ヨコハケ、肩部回転ヨコハケ、頸部から口縁部内外は回転ヨコナデで若干の擦痕あり。内面は底部は押捺、胴部下位はタテ又は左上の、中位より上は左のケズリを施し、ケズリは一部くびれの少し下まで入るが、頸部の下は不徹底であり、シボリ・押捺・タテのナデの下調整を残す。頸部はナデ。灰白色～浅黄橙色。胎土は細い土に、花崗岩・石英（赤色含む）・長石（赤色含む）の砂粒と微量の角閃石を含む。比恵周辺の製作ではない。133は口径16.6cm、高さ23.1cmの甕。底部は丸味あるが平底風、胴部は倒卵形で頸部はあまりしまらないなど一見古相だが、底部の押捺は広く新相で、全体的に稚拙で比恵産ではないことがその理由を説明するものになる。口縁部は内湾し、端部は丸味を持ち、外に強いヨコナデの凹みがある。肩部に焼成後の穿孔が２つある。胴部外面はタテハケ後、底部一部ナナメハケ、中位ヨコハケ、肩部ヨコスリナデ、頸部から口縁部内外にかけて回転ヨコナデ。内面は、底部および胴部下位は押捺後タテのケズリ、中位はかなり上まで左上の、肩部より上が右のケズリ。ケズリは、くびれの1.5cm程下までで、稜はやや曖昧、頸部はナデ。にぶい黄橙色～浅黄橙色。石英・花崗岩の砂粒多数と長石若干、角閃石を少し含み、胎土は比恵周辺のものとは異質である。134は二重口縁壷の胴部と推定する。胴部は扁球形で、頸部への屈曲は明は明確で、つけねの薄い直立する頸部になるだろう。外面は、下半タテハケ後に下部を不定ヨコハケ、一部ヘラミガキ、中位はヘラナデ、上半はタテハケ及びナナメハケの後ナデ。内面は、下部ハケ後ナデ、中位より上は左上のハケを丁寧に施し、肩部より上は粘土紐接合痕が残る。頸部直下は押捺・ナデ、頸部はナナメ又はヨコのハケ。明赤褐色からにぶい赤褐色を呈し、胴部外面中位には対向した２ケ所に大きく黒斑がある。胎土には、石英と雲母をやや多く、少量の長石、微量の角閃石を含む。比恵周辺の製作ではなく、あるいは畿内の何処かの製品の搬入か。135は口縁部が胴部に比して広がらず、頸部と一次口縁部の屈曲が明瞭ではなく、また口縁の段もやや曖昧なタイプの二重口縁壷である。底部は欠損するが平底と見られ、胴部はやや長胴気味の球胴、口縁部は外反するが一部直立に近く、端部は丸くおさめる。外面は、底部（逆円錐台部）はハケ後ナデ、これより上の胴部は左上のヨコ又はナナメハケ、頸部はタテハケ後に、口縁部はヨコハケ後にいずれも断続ヨコナデ。内面は、胴部はナデとみられ、頸部ナデ、口縁部ヨコハケ後ヨコナデ。胴部の内外と、肩部内面に粘土帯(紐)接合痕が残る。外面は淡橙色～浅黄橙色、内面は灰黄褐色又は灰白色。胎土は密で、長石（赤色少し有）・花崗岩および石英（琉紋岩？）を含み、比恵周辺の製作ではない可能性あり。質的にもやや野放ったい。口径17.1cm、現存高34.5cm、復元高35cm。136は小型丸底壷。口縁部は欠損するが、短く立ち上がるタイプか。現存高9.3cm。外面は底部ケズリ後、下半タタキ？、上半ナナメハケ、さらに下半は手持ちの、上半はヨコの回転的な細密なヘラミガキ。内面は、下半はハケ後ナデで、ハケの起点が残り、上半はハケ後ケズリ。外面浅黄橙色、内面赤褐色。胎土は非常に密で精良、砂粒なく僅か。赤彩の可能性あり。137は手ずくねの鉢。口径7.1cm、高さ5.2cm。底部は突出する平底。外面は押捺、内面ナデ。橙色、石英・長石を少し含む。138は粗製の鉢。体部は下ぶくれで口縁は直立。外面はハケ後ナデ、口縁部ヨコハケ後、内外ヨコナデ、体部内面は下半ナデ、上半ハケメ。橙色、石英・長石を少し含む。以上のSE136出土土器は、134が北部九州外の製作の可能性があるが、他は形態的に北部九州内で矛盾ないが、胎土・色調及び形態と技法の微妙な部分で比恵遺跡周辺とは異質なものが多く、その可能性のあるものも含めると、大半が北部九州各地からの搬入品とみられ、非常に特異な土器群と言える。様式的には、畿内の布留式古相から中相の移行期に併行する一括資料と考える。（久住）

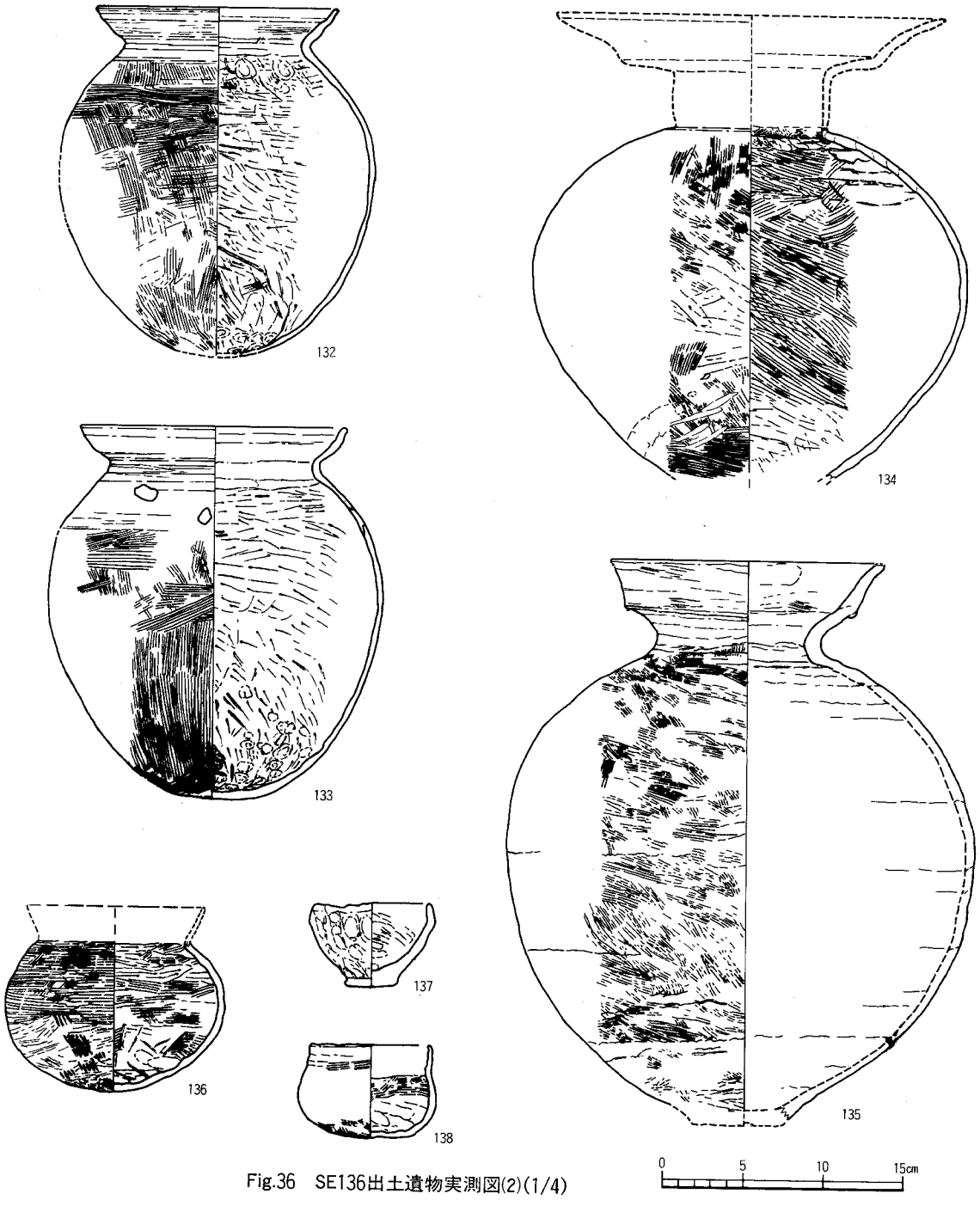



Fig.36　SE136出土遺物実測図(2)(1/4)

SE137 (Fig.37、PH.18、PL.37)　C区中央部南側のSC109を切って作られている単純な掘り方の素掘り井戸である。上面径1.0m、深さ2.4m、底径0.53mを測る。掘り方は緩やかに窄まりながら底へ達する。下部から複合口縁壺が２個体出土している。PH.18－139は口径20.4cm、外口径24.8cm、底径８cm、胴径27.1cm、器高37cmを測る。頸部に三角突帯一条、胴部に「コ」字状突帯一条を巡らす。底面はやや丸味を持っている。140も良く似た器形の複合口縁壺である。口縁部は一部しか残ってないが、

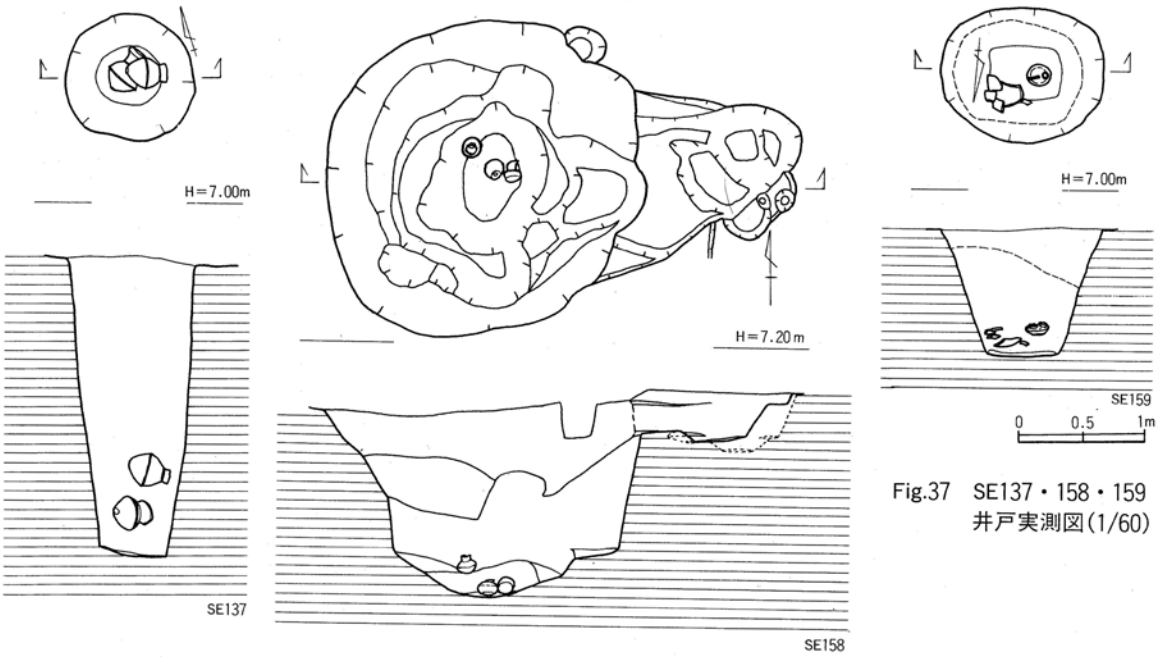
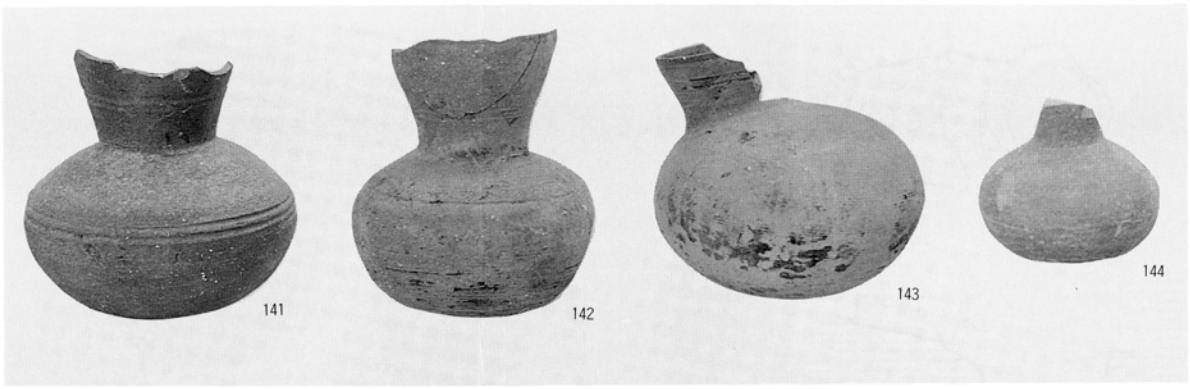



Fig.37　SE137・158・159
井戸実測図(1/60)

底径7.3cm、胴径25.4cm、器高34.5cmを測る。139に比べてほんの僅か小さい。頸部に三角突帯一条と、胴部に「コ」の字状突帯を一条巡らす。底面はやや丸味を持っている。弥生後期後半代の新しい時期に属すると考えられる。

SE158 (Fig.37、PH.19、PL.37)　C区中央部やや南よりから検出されたもので、SD001の東側に位置する。上面径2.55m、深さ1.5mで、底面は皿状に窪む。東壁には半円形の窪みがみられ汲み上げ口となっている。さらに東側には土坑状の落ち込みがあり、井戸に併設された汲み場であろうか。遺物は底面から須恵器の壺、横瓶などが出土している。PH.19－141・142はやや長頸の壺である。141は口

PH.18　SE137出土弥生土器




PH.19　SE158出土須恵器

縁端部を欠いており、胴径15.0cm、残高15.5cmを測る。胴部に二条の沈線が巡る。142は141より胴径がやや小さく、13.5cm、器高15.7cmを測る。胴部に沈線が巡る。143は横瓶である。口径6.3cm、胴径14.8cm、器高13.5cmを測る。肩に把手の退化した貼付文を施す。144は甕である。胴径10.0cmで、残高9.2cmである。頸部は細く締まっている。これらの須恵器の時期は6世紀後半代から末に相当しよう。

SE159 (Fig.37、PH.20、PL.38)　C区ほぼ中央部のSD001東側に位置する。上面径1.1×1.3m、深さ1.0mで、底面は長方形を呈し、0.43×0.57mである。底面は八女粘土を少し掘り込んだ所で止まっている。全体的に小型で浅い井戸である。遺物は底面よりやや浮いた状態で須恵器横瓶、土師器甕などが出土している。PH.20－145・146・148は土師器の甕である。147は須恵器の横瓶である。把手が付き、底径9.8cm、胴径18.6cmを測る。土師器甕は145が器高27.0cmである。これらの遺物は8世紀後半代に属するものであろう。

SE170 (Fig.38、PH.21)　C区中央部南寄りに位置し、SE136の南側にあたる。この一帯は井戸が密集して出土する区域である。上面径は0.92×1.36m、深さ2.18m、底径は0.7mである。掘り方は単純に窄まりながら底に達する。底面からは弥生後期初めの甕、壺形土器、ミニチュアの鉢などが出土している。PH.21－149は袋状口縁壺である。口径8.2cm、外口径9.8cm、底径7cm、胴径14.3cm、器高17.1

PH.20　SE159出土須恵器・土師器

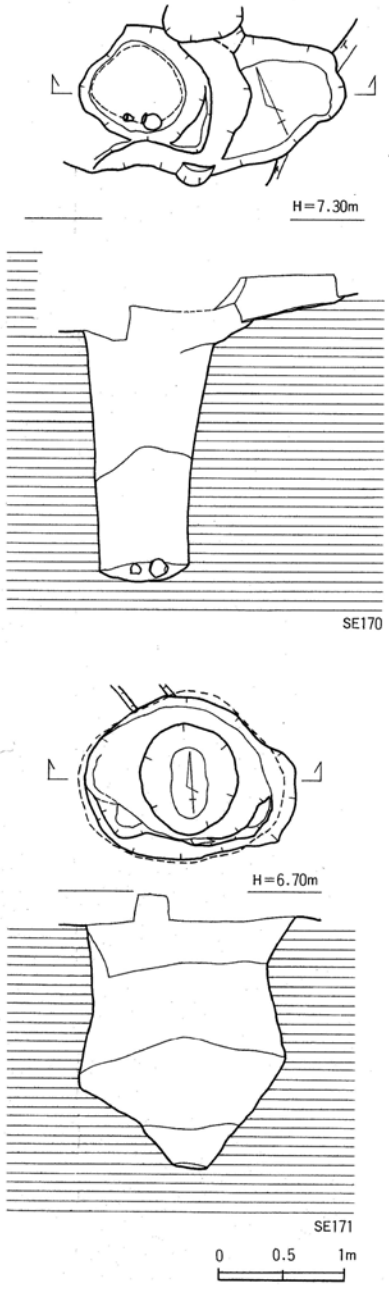
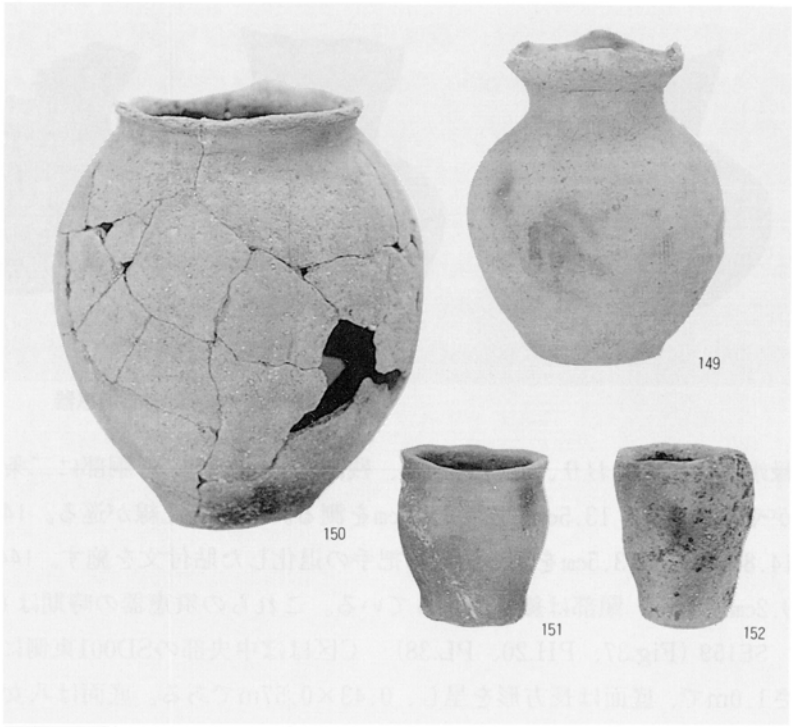



Fig.38　SE170・171井戸実測図(1/60)



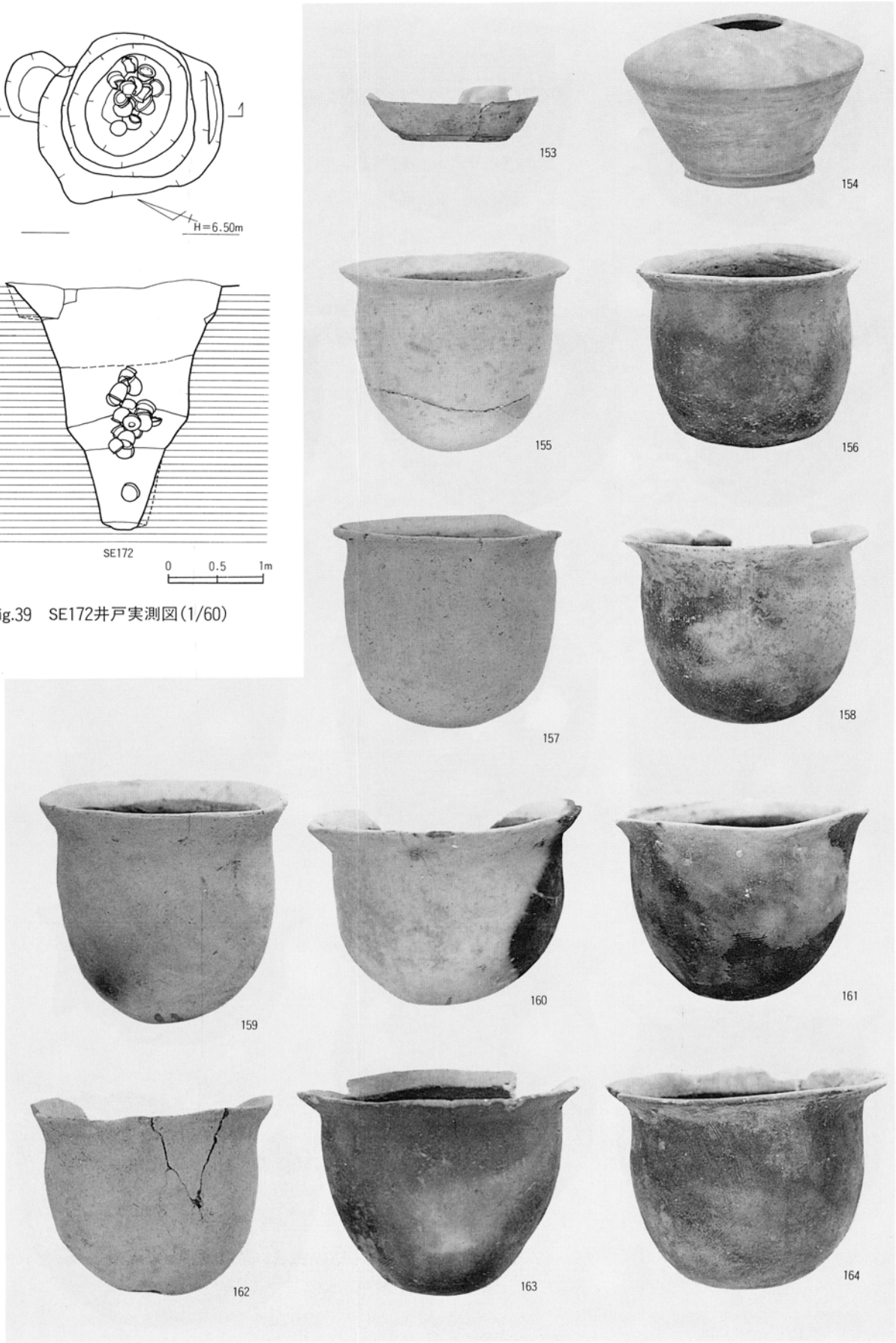

PH.21　SE170出土弥生土器

cmを測る小型品である。頸部は短かい。150は甕形土器である。頸部は締まり、口縁部は打ち欠いている。底径8.3cm、胴径20.6cm、残高23.6cmを測る。151・152は小型の壺か鉢形のミニチュア土器である。152は中層からの出土である。151は口径8.2cm、底径5.7cm、器高9cm、152は口径5.9cm、底径4cm、器高6.8cmを測る。井戸祭祀に使用されたものであろう。

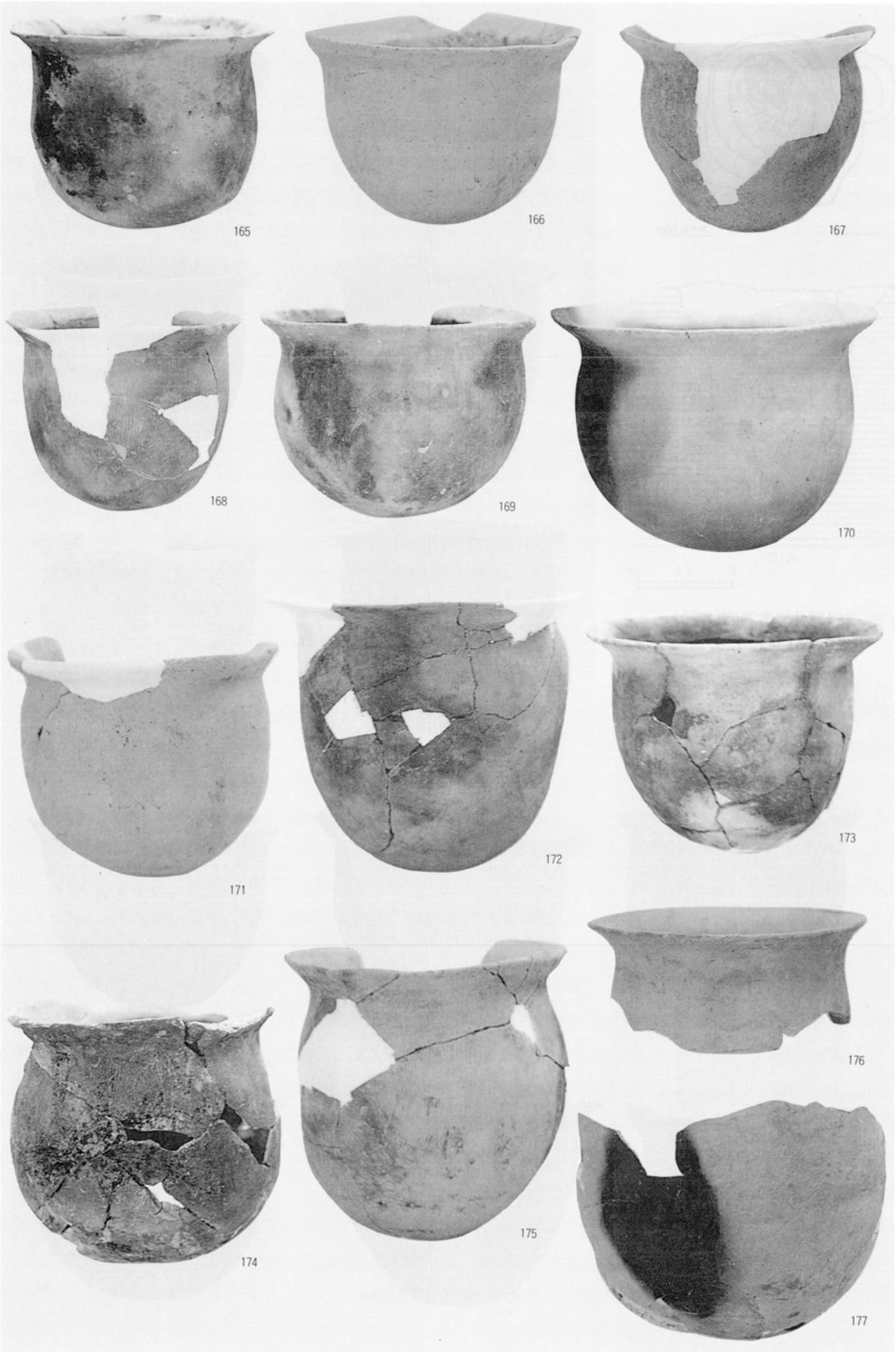
SE171（Fig.38）　C区中央部のSC166を切って造られた井戸でSD001の東側に位置する。上面径は1.35×1.73mの楕円形を呈する。掘方は中位で幅1.65mまで広がり、底径0.28mの細かい底に至る。まとまった遺物が出土していないので時期を決め難いが、古墳時代以降のものであろう。

SE172（Fig.39、PH.22・23、PL.38）　C区中央部北寄りに位置し、SD001の溝底で検出された井戸である。上面径は1.72×1.93m、深さ2.56mで、掘り方は段を有しながら窄まり、底径0.38mの底に達する。段は、調査GLから0.8m、1.3m、1.7mの深さにそれぞれついている。八女粘土は上面から認められ、殆ど八女粘土とその下の溶結凝灰岩風下層に掘り込まれている。遺物は中位段階で30個体以上の土師器甕、須恵器高台付坏・壺などが出土している。上位からは土師器のカマドが出土している。下位には、中位と同じ土師器の甕が出土している。PH.22・23は井戸から出土した遺物である。実際はこれよりも出土個体数は多い。153は須恵器の高台が付いた坏である。口径13.1cm、底径9.8cm、器高3.6cmである。154は須恵器の壺胴部である。高台が付き、底径11.1cm、胴径19.9cm、残高12.3cmを測る。口縁部がやや開いた細頸の頸部が付くものとみられる。155～177は土師器の甕である。口径は20cm前後、器高は15cm前後で、口縁部はやや内湾気味で外傾し、底部は丸底となる。外面は刷毛目調整、内面は粗いヘラ削りが施され

Fig.39　SE172井戸実測図(1/60)




PH.22　SE172出土須恵器・土師器(I)




PH.23　SE172出土土師器(2)

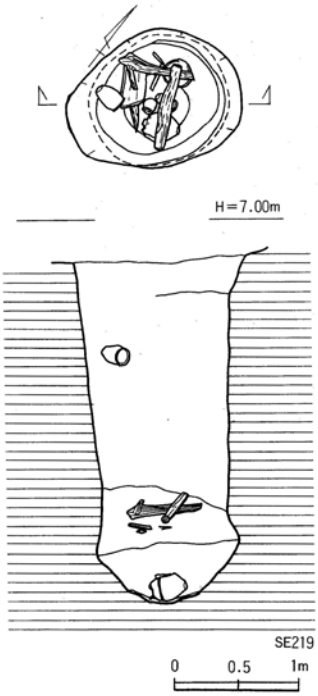
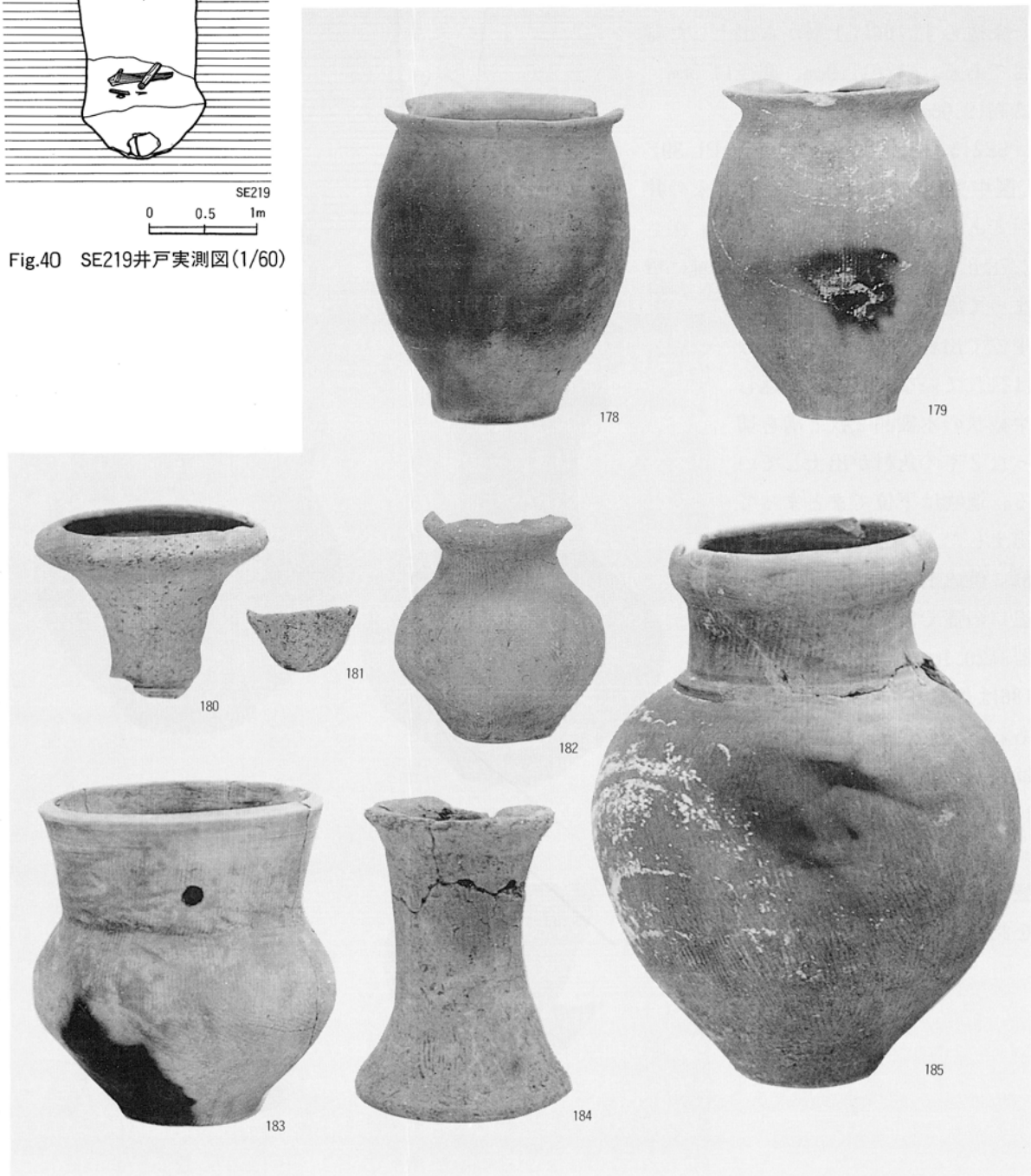



Fig.40　SE219井戸実測図(1/60)

ている。出土遺物は８世紀後半代に相当すると考えられる。

SE219（Fig.40、PH.24、PL.39）　C区西側中央部で検出された井戸で、SC197を切ってSC197プラン内に位置している。上面径は1.07×1.38mの楕円形を呈し、深さは2.75mである。掘り方は、上位から中位までは徐々に窄まり、下位で八女粘土に到達し、その部分が幅1.1mに抉れて崩落している。遺物は数本の木材と共に下位でまとまって出土している。上位でも１点甕が出土している。下位の遺物群は弥生後期初め頃に位置づけられるものである。上位出土の甕もさほど時期差は認められない。PH.24－178は上位から出土した甕である。口径15.3cm、底




PH.24　SE215・SE219出土弥生土器

178～182・184・185：SE219　183：SE215

径8.2cm、器高19.5cmを測る。179は下位から出土した甕である。口径13.5cm、底径７cm、胴径15.9cm、器高20.8cmである。180は袋状口縁壺の口頸部、181はミニチュアの鉢である。182・185は袋状口縁壺である。外口径9.6cm、底径6.7cm、胴径13.6cm、器高14.3cmを測る。185は口径15.9cm、外口径17.4cm、底径9.5cm、胴径28.4cm、器高36.2cmのやや大型品である。頸部に三角突帯を一条巡らす。184は上層から出土した器台である。口径11.9cm、底径14.5cm、器高19.0cmである。

SE215（Fig.41、PH.24･25、PL.39）

C区中央部に位置する弥生中期末の井戸である。上面径は1.37×1.52m、深さ2.78m、底径0.55mで掘り方は単純に窄まって底に至る。八女粘土は中位で出現するが、その部分は抉れていない。ネズミ返し半截状の木製品２枚と溝を切った２本の角材が出土している。遺物は下位でまとまって出土した。PH.24－183は口縁部に焼成前の穿孔が２孔ある直口の壺である。口径17.7cm、器高20.1cmを測る。PH.25－186は丹塗りの袋状口縁壺である。器高26.8cmを測る。188は183と同類の壺である。口径17.3cm、底径8.5cm、胴径19.7cm、器高21.0cmである。187は甕の胴部である。残高13.6cmを測る。189は器台である。

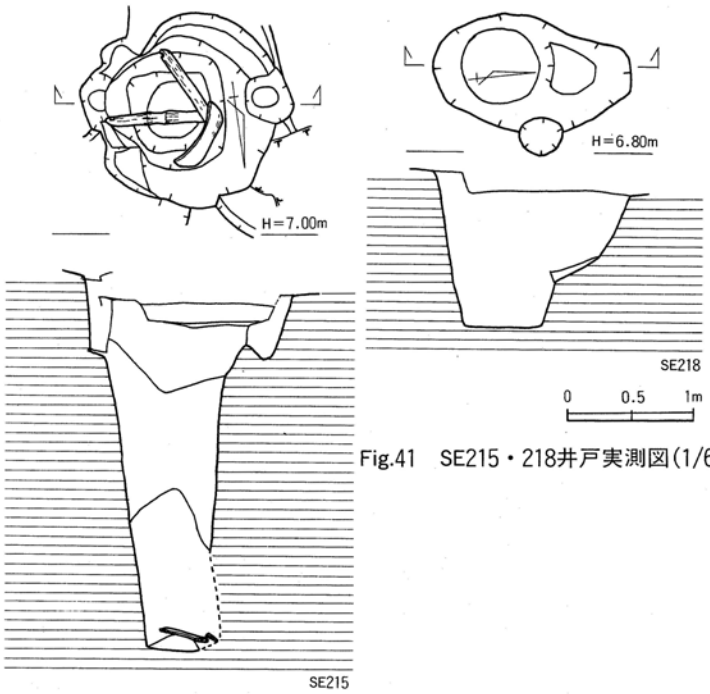


Fig.41　SE215・218井戸実測図(1/60)

PH.25　SE215出土弥生土器

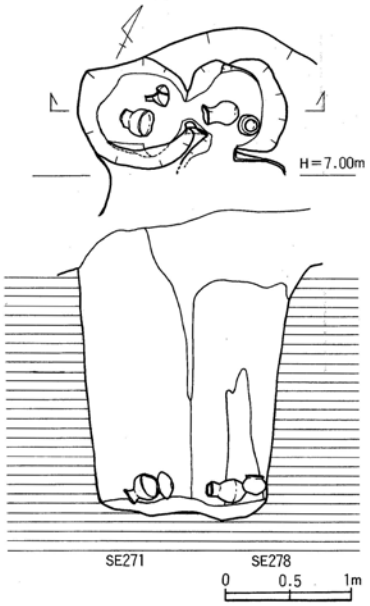



Fig.42　SE271・278井戸実測図(1/60)

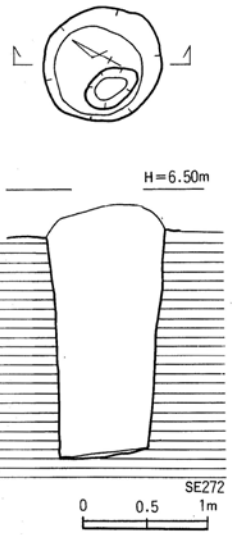
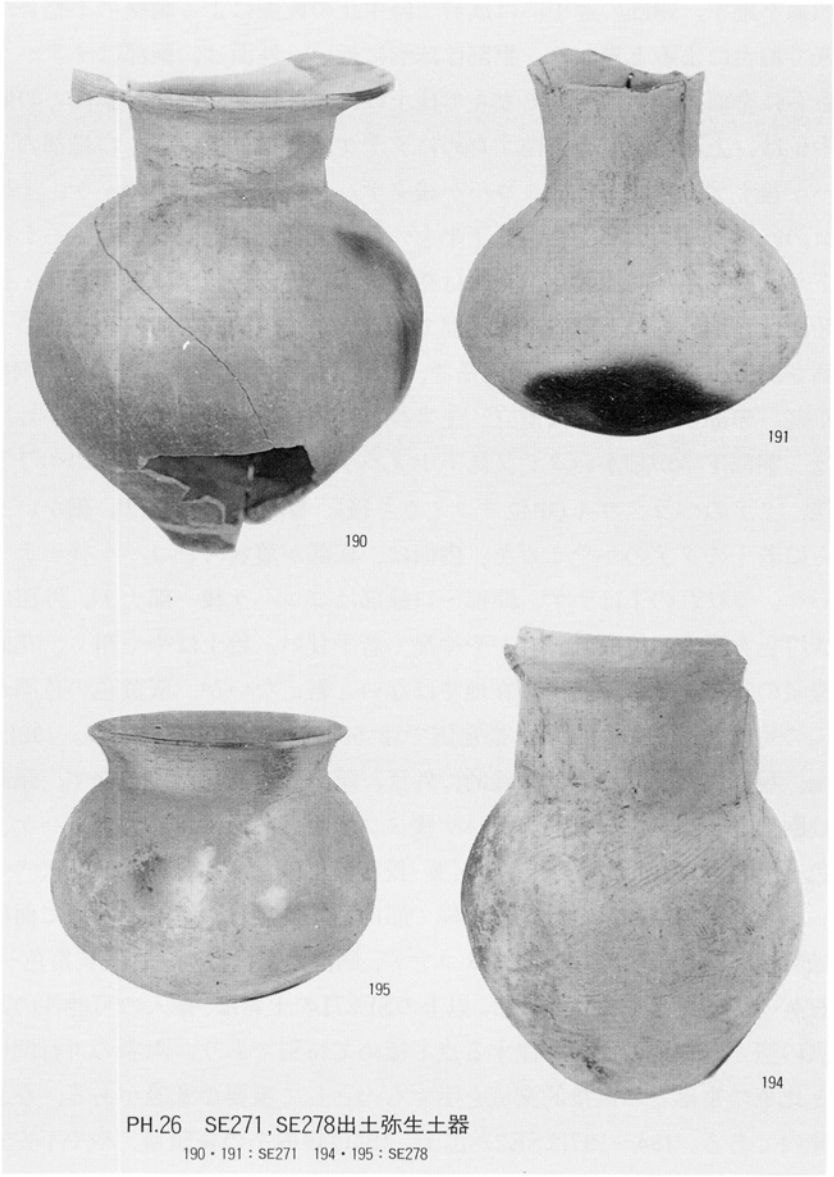



Fig.43　SE272井戸実測図(1/60)




PH.26　SE271, SE278出土弥生土器

190・191：SE271　194・195：SE278

SE218（Fig.41）　C区北西端で検出した小型の井戸である。上面は楕円形を呈し、0.92×1.57m、深さ1.24m、底径0.64mを測る。SC240を切っており、古墳時代以降か。東側は汲み出し口であろうか。段が一段設けられている。

SE271（Fig.42、PH.26、PL.39）　C区中央部南端近くで出土した井戸で、SE278と切り合っている。調査時点では切り合い関係は確認できなかった。上面径は0.9m、深さ2.28mである。掘り方は単純な形を呈している。中から畿内系の壺が出土している。弥生後期終末であろう。

SE278（Fig.42、PH.26、PL.40）　SE271に接して東側に位置する単純な素掘りの井戸である。上面径0.8m、深さ2.45m、底径0.5mを測る。弥生後期終末の搬入品と考えられる壺が出土している。これら2基の井戸から出土した遺物は重要である。

SE271・278出土土器（Fig. 44）

190～193がSE271、194～197がSE278の出土。190は畿内第Ⅴ様式新相と見られる広口壷。頸部は直立、口縁部は屈曲して外方にのび、端部は逆L字状に垂下する部分を貼付け、外の幅2㎝程の面には擬

凹線を施す。頸部の途中には成形一時中止の乾燥による調整の不整合がある。底部はやや不安定な平底で輪台によると思われ、胴部は球形に近い。外面は、胴部はタテハケ後、中位のやや下ヨコハケ、さらに全面のタテのヘラミガキで仕上げ、頸部はタテハケ、胴部との間のくびれをヨコミガキ、頸部中位は、上記の不整合を消すためにタテケズリ後ヨコナデ。口縁部の下方もタテハケ、内面は、底部ハケ後ナデ、胴部下位はヨコハケ後タテハケ、中位は左上のハケ、上位はナデ、頸部はナナメ又はヨコのハケ後ヨコナデ、さらに下半をヘラケズリ、口縁部はナナメハケ後端部をヨコナデ。内外ともに下半は灰褐色～明赤褐色、上半はややにぶい橙色。胎土は密で石英・長石を若干と雲母を少し含む。胎土は在地のものと明確には区別できないが、色調的に河内の土器の一類型で搬入品か。口径22cm、高さ23.7cmを測る。191も畿内系で、V様式末頃と見られる細頸壷。胴部は扁球形、底部は輪台充塡の平底。頸部から口縁部は直立、上半少し外向し、端部は欠損するが外反してすぼめて終わるか。外面は、胴部下半が細かいタテ又はナナメハケ後、ヨコ又はナナメのヘラミガキ、上半が細かいタテハケ後、タテのヘラミガキ(中位ヨコミガキ後)、頸部～口縁部は、細かいタテハケ後、粗いタテハケ、さらに若干のタテのヘラミガキ、内面は、底部が簾状のヨコハケ後ナナメハケ、中位から肩部までヨコハケ、くびれの下はナデ、頸部～口縁部はヨコハケ後一部ナデ。外面は灰黄色から浅黄橙色、内面が淡橙色を呈す。焼成は、芯がやや黒く若干甘い。胎土はやや粗く、花崗岩・石英・長石の砂粒を若干、微量の雲母を含む。胎土は在地ではないと言えないが、灰黄色の色調からすると河内か大和からの搬入の可能性もある。口径は推定値で12.5cm前後、現存高23.7cm。192は在地の大形甕。復元口径32.2cm、現存高11cm。口縁は直線的に外反、端部は直立した面をなす。頸部くびれ直下に三角突帯。外面は胴部タテハケ、口縁部タテハケ後ヨコナデ。内面は胴部ナナメハケ、口縁部ヨコハケ。にぶい黄橙色～灰白色。胎土はやや粗く、石英・長石の粗砂を多く含む。193はやや小形の在地の甕。復元口径17.9cm、現存高10.3cm。口縁部は中程で屈曲して外反し、端部は斜めに面取り。胴部外面はタテハケ、口縁部は磨滅し不明瞭だが内外ヨコナデ、胴部内面は板ナデ、浅黄橙色～橙色。胎土やや密で、花崗岩・石英の細砂粒をやや多く含む。以上のSE271の土器は、搬入の可能性のある畿内V様式新相～末頃の2点の壷と、在地の甕が共伴する点で極めて特別であり、両者の併行関係が推定できるとともに、畿内と比恵の集落との直接的交流を示すものとして重要な意義がある。なお在地の編年では、後期後半の枠内である。194～197はSE278出土。194は畿内系の長頸壷。やや不安定で突出しない平底に卵形の胴部、直立する頸部と、複合口縁状の短く直立する口縁部である。端部は丸くおさめる。外面は、胴部が右上のタタキの後に、下半はタテ又は左上のハケ、上半は左上ナナメハケ、中位にはヨコハケ。頸部～口縁部はナナメハケ後タテハケ、口縁部はヨコナデ仕上げ。内面は底部が放射状のナナメハケ後ナデ、胴部下半は左上ナナメハケ、上半はヨコハケ後一部ナデ、頸部は丁寧なヨコハケ、口縁部はヨコナデ。淡橙色を呈す。胎土は密、長石・石英・花崗岩の砂粒を少し、雲母を微量含む。底部外面に籾圧痕。底部は輪台と推定するが突出しない円板状をなすことや、複合口縁状になることから、V様式末の粗雑な長頸壷の系譜下ながら、在地の形態の影響を受けている可能性がある。即ち在地産か。口径18cm、高さ28.8cm。195は、技法上は在地系ではありえず、畿内系とすべきだが、形態は在地の短頸広口壷の小形のもの。広いレンズ状の底部、扁球形の胴部、口縁部は直立気味だが外反、端部は外方に斜めの面取りを施し一部沈線状の凹みが巡る。底部は推定輪台充塡の突出底部を外面ケズリで整形する。胴部中位やや下に成形画期あり。外面は、胴部下半はヨコハケ、上半は左上タテハケ、肩部から口縁部まで、丁寧なヨコスリナデ又はヨコナデで、擦痕を伴う。内面は底部がやや崩れた簾状ハケ後、放射状のナナメハケ、胴部下位は左上ナナメハケ、中位より上はヨコハケ。口縁部はヨコハケ後ヨコナデ。外面は浅黄橙色～橙色。内面赤褐色～明褐灰色。胎土やや密、長石・石英の細砂粒を少

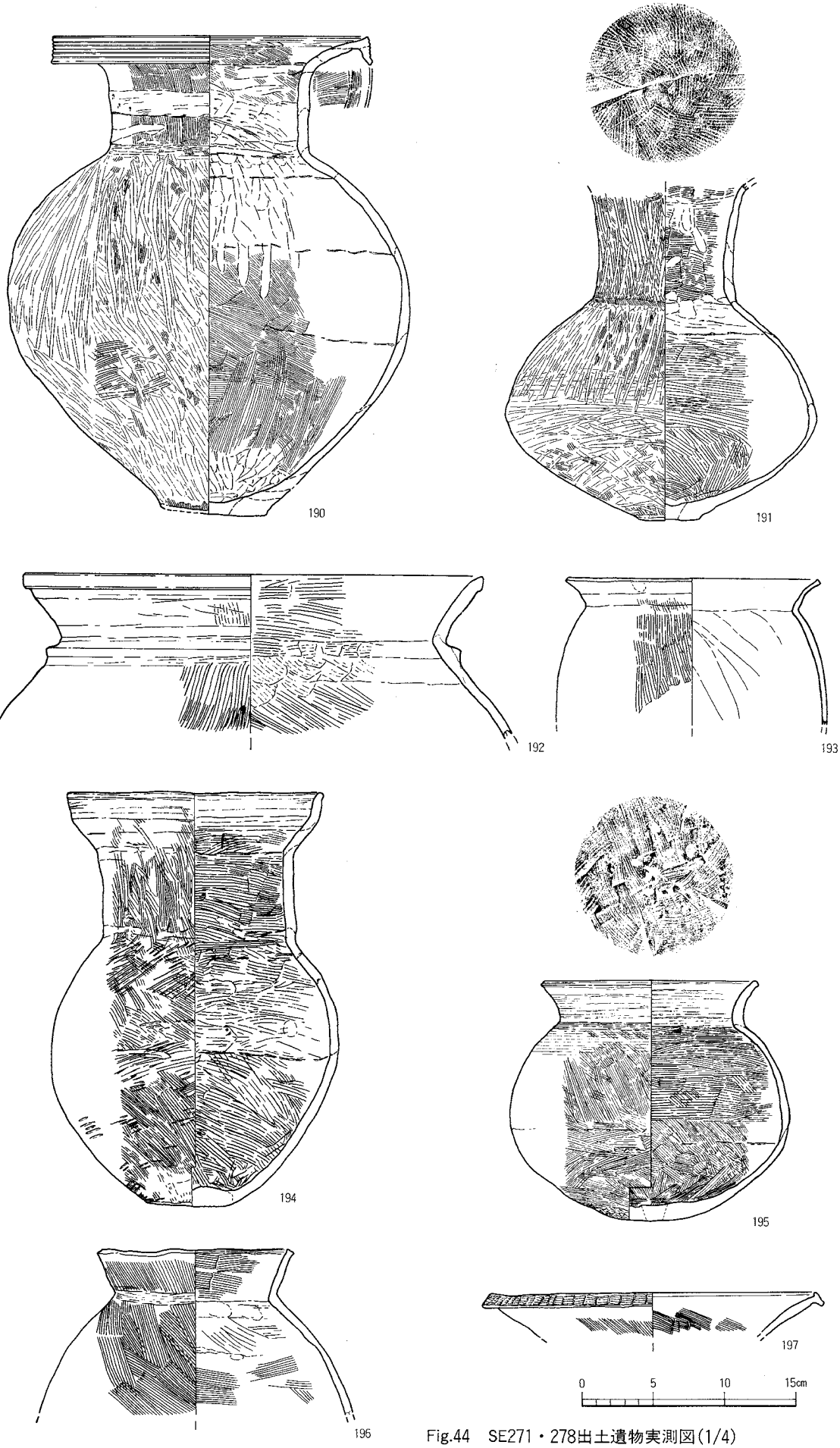



Fig.44　SE271・278出土遺物実測図(1/4)

190～193：SE271　194～197：SE278

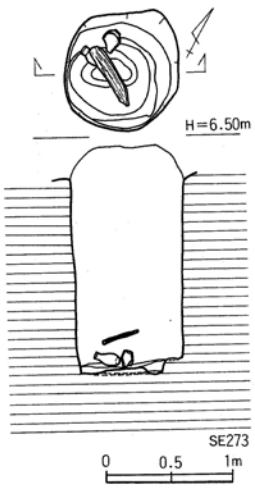
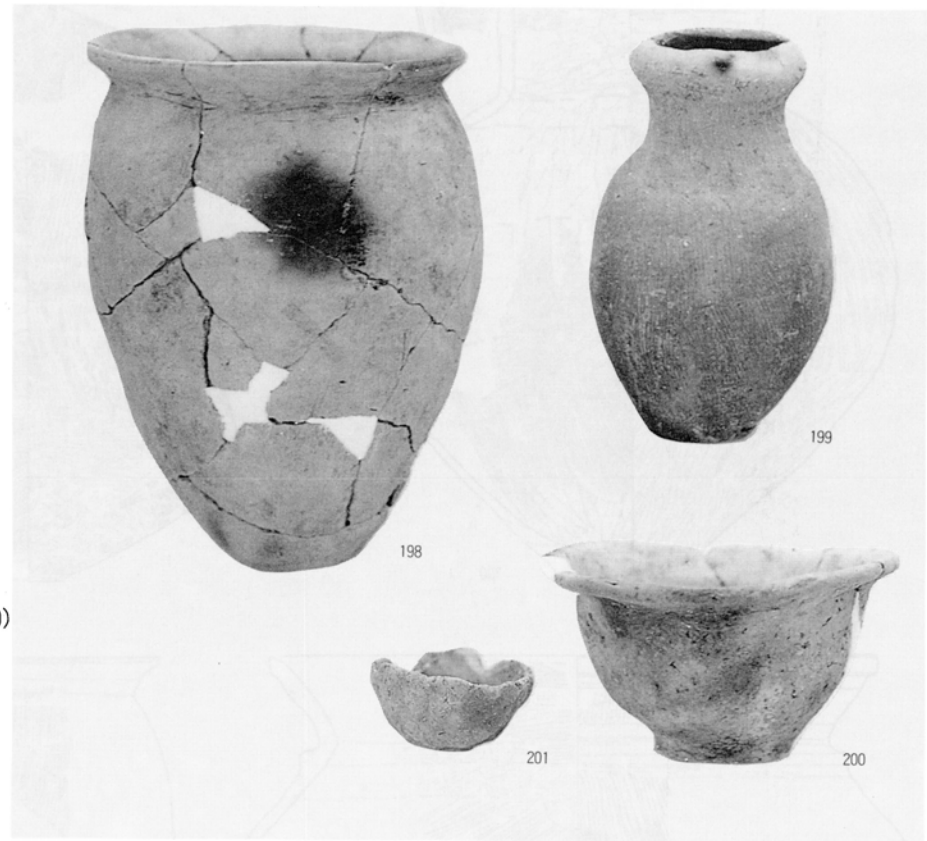



Fig.45　SE273井戸実測図(1/60)




PH.27　SE273出土弥生土器

し含む。底部に黒斑。口径15.2cm、高さ16.8cm。在地産と考え、類品は比恵51次SE203でも出土し、庄内式古相併行以降、比恵の集落には伝統的V様式の製作範型が、在地の土器の中に埋没しているのかもしれない。196は在地の短頸壷。口縁部は直線的にやや外に開き、端部は面取り。外面は胴部ナナメハケ、中位はヨコハケに近く、口縁部はナナメハケ後に頸部と口縁端部をヨコナデ。内面は胴部がヨコないしナナメハケ後ナデ、口縁部ヨコハケ。明赤褐色を呈し、石英・長石の砂粒と微量の雲母を含む。復元口径13.7cm、現存高11.6cm。197は壷の口縁部。口縁は強く外反し、端部は外傾する面をなし内外に拡張、下方は垂下気味。端部の面にはハケメ工具による簾状文ないし連続の押引があり、少し波打つ。外面はナナメハケ後ヨコナデ、内面はヨコハケ後ヨコナデ。外面明赤褐色、内面暗灰色。長石と雲母を含む。胎土は在地のものではなく搬入品であろう。確証はないが、瀬戸内系ではないか。復元口径24cm、現存高3.1cm。以上のSE278では、弥生終末の在地系土器と畿内系の技法による在地系の土器、瀬戸内系？の搬入品が共伴し、複雑な様相を見せる。時期は弥生終末でも古相、畿内の庄内式初頭併行と考える。これらから、SE271とSE278の前後関係は、遺物からは前者が古いであろう。

（久住）

SE272(Fig.43)　C区中央部南端に位置し、SD001の東肩で検出した井戸である。上面径は0.9×1.0m、深さ2.0m、底径は0.7mである。弥生後期かそれ以降のものであろう。

SE273（Fig.45、PH.27、PL.39）　C区中央部南端の井戸が集中して分布する地域に位置している。SD001の東肩で検出した井戸である。上面径は0.89×0.94m、深さ1.82m、底径0.62mを測る。ほぼ円筒形の掘り方を呈する。遺物は底面から出土した。PH.27－198は口径20.7cm、器高29.0cmの甕である。199は袋状口縁壺で、口径7.1cm、外口径9.5cm、底径6.7cm、胴径12.5cm、器高21.9cmを測る。200は口径19.8cm、底径7.5cm、器高11cmを測る鉢型土器である。201はミニチュアの鉢である。口径は8.8

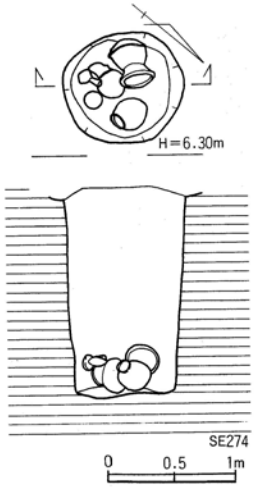
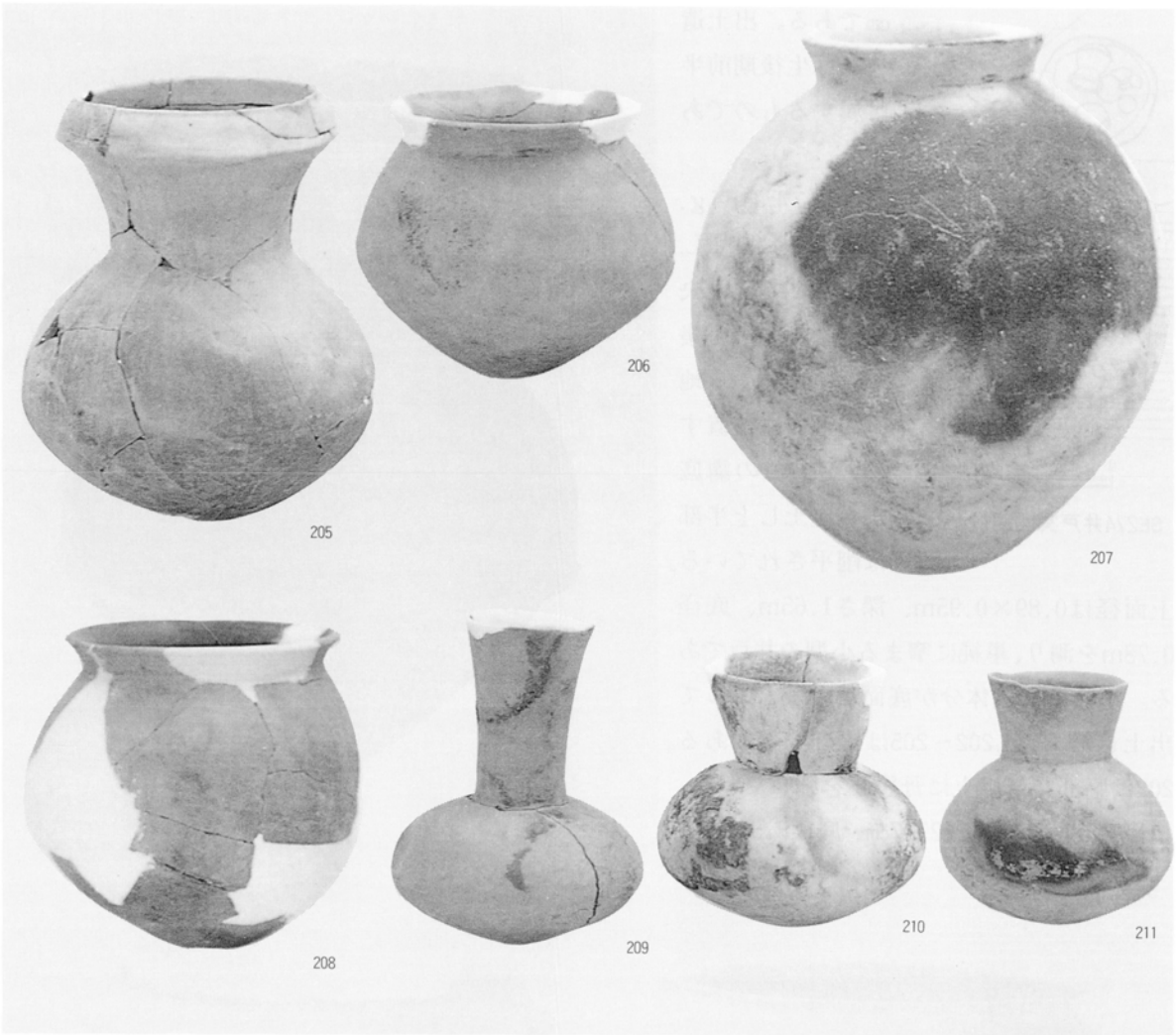



Fig.46　SE274井戸実測図(1/60)

cmである。出土遺物は弥生後期前半に属するものであろう。

SE274（Fig.46、PH.28・29、PL.39・40）　C区中央部南端の井戸が集中して分布する地区の西側に位置する。SD001の溝底から出土し上半部は削平されている。上面径は0.89×0.95m、深さ1.65m、底径0.78mを測り、単純に窄まる小型の井戸である。遺物は10個体分が底面からまとまって出土した。PH.202～205は複合縁壺である。202は胴部突帯以上に丹塗りを施している。口径23.8cm、外口径27.7cm、底径8.5cm、胴

PH.28　SE274出土弥生土器




径28.7cm、器高37.4を測る。頸部及び胴部やや下位に突帯を巡らす。203は口径24.8cm、外口径27.1cm、底径8.2cm、胴径28.9cm、器高40.2cmを測る。202に比べやや胴が長い。胴部やや下位に刻目突帯を施す。204は口径22.2cm、外口径26cm、底径７cm、胴径27.1cm、器高36cmを測り、胴部は丸味を持つ。突帯は施さない。これらの壺の口縁端部はやや外方に引き出されている。205は小型で口径13.5cm、外口径15.6cm、胴径19.1cm、器高23.5cmである。頸部及び胴部には突帯を施さない。206～208は甕である。206は口径14.5cm、底径4.2cm、器高14.8cm、207は頸部が締まり胴が張った器形で、口径は13.6cm、底径６cm、胴径25cm、器高28.5cmを測る。208は口径14.4cm、器高16.3cmを測る。これらの甕は

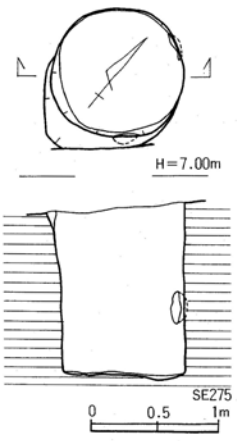
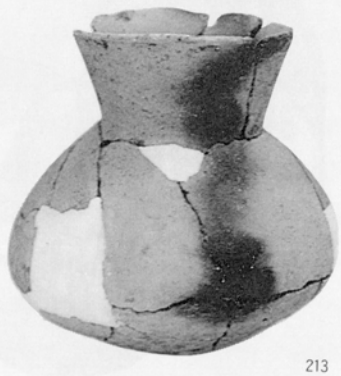



Fig.47　SE275井戸実測図(1/60)

212


213

PH.29　SE274・275出土弥生土器　205～221：SE274　212・213：SE275

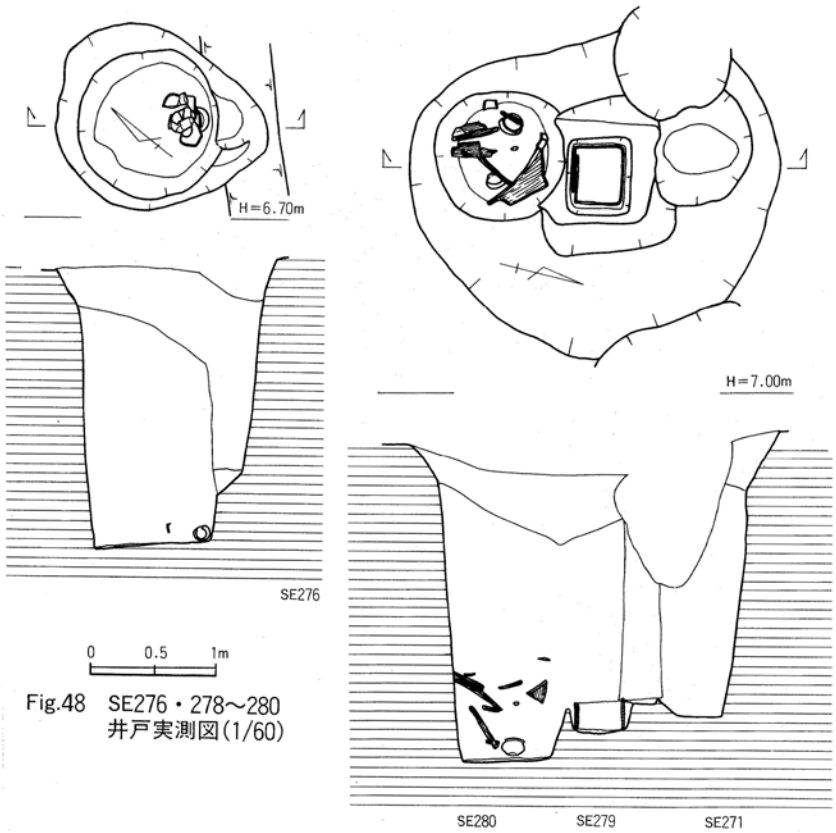



Fig.48　SE276・278～280
井戸実測図(1/60)

口縁部が短く外反し、小さな底部を有する。209～211は扁球形の胴部を持つ直口ないし長頸の壺である。209は長頸壺で、胴径13.9cm、残高18.3cmを測る。210は直口縁を持つ壺で、口径10cm、底径4cm、胴径15cm、器高14.7cm、211はやや頸が細く、口径7.8cm、底径3.5cm、胴径13.2cm、器高13.8cmを測る。SE274出土の土器群は弥生後期後半代でも新しい時期に位置づけられよう。

SE275（Fig.47、PH.29）

C区中央部南端の井戸が集中する地区で検出した小型で浅い井戸である。上面径は1.02×1.04mのほぼ円形を呈し、底径0.96m、深さ1.40mを測る。井戸内からは弥生後期終末に属する壺形土器が出土している。PH.29－212は直口の小型壺である。口径7cm、胴形9cm、器高7cmで径1.5cmの小さな底部が付く。213は胴部下位に最大径があり、急に窄まって不明瞭な小さい底部に移行する壺である。口径12.5

PH.30　SE270,276出土弥生土器　214：SE270　215～217：SE276

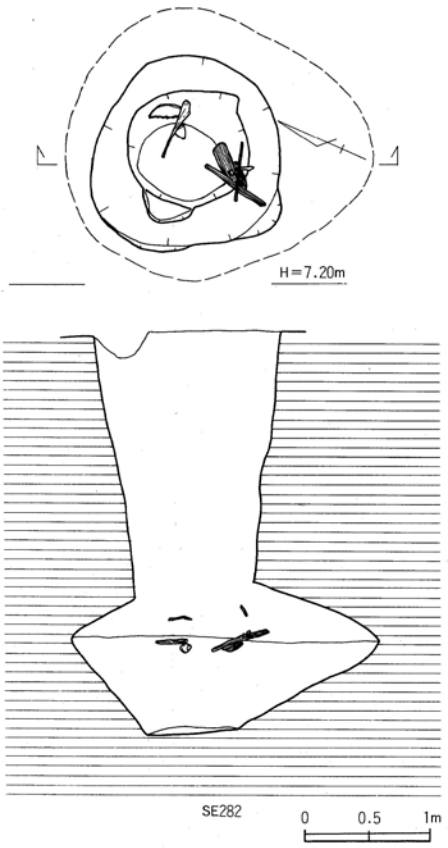
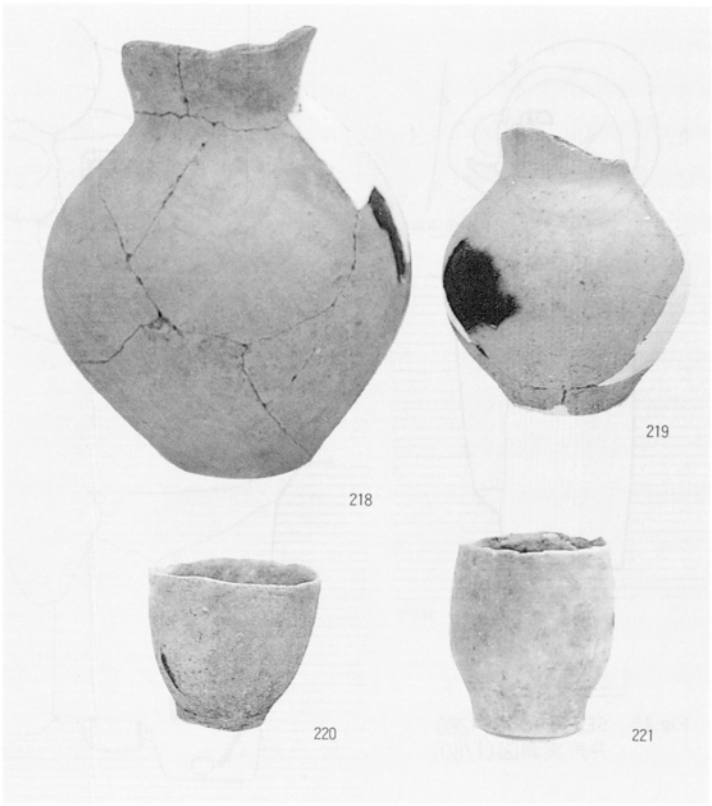



Fig.49　SE282井戸実測図(1/60)




PH.31　SE282出土弥生土器

cm、胴径17.9cm、器高18.0cmを測る。

SE276（Fig.48、PH.30）　C区中央部南端の井戸が集中する地区の東側で検出した井戸である。上面径は1.50m、底径0.94m、深さ2.20mを測る。東南部には径0.3m程の窪みがあり、汲み出し口であろう。PH.30－214は複合口縁壺である。口径20cm、外口径23.5cm、底径７cm、胴径25.7cm、器高37.6cmを測る。頸部と胴部やや下位に突帯を巡らす。215は上層から出土した器台である。混入したものであろう。216は細頸壺である。口縁部は欠失しているが、胴部は扁球形を呈する。胴径17cm、残高10.6cmを測る。217はジョッキ形土器である。井戸からの出土は珍らしい。口縁部と把手を欠失している。底径9.5cm、残高6.3cmである。SE276は出土の遺物は弥生後期後半の新しい時期に相当しよう。

SE279（Fig.48）　SE271･278とSE280の間に掘り込まれた奈良～平安前期の方形井戸である。遺構確認時で大型の井戸と認識し掘り下げたところ４基の井戸の切り合いと判明した。この井戸は下位で確認したものである。井筒には40×48cm、深さ24cmの方形曲物を使用していた。井筒からの遺物の出土はなかったが上部から須恵器の大甕破片が出土している。

SE280（Fig.48、PH.32、PL.40）　C区中央部南端の井戸が集中している地区からSE279と切り合って出土した。上面径は1.05mのほぼ円形で、底径0.7

PH.32　SE280出土弥生土器

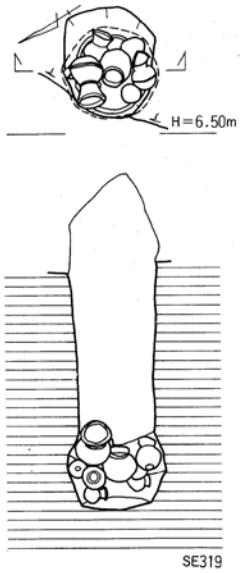
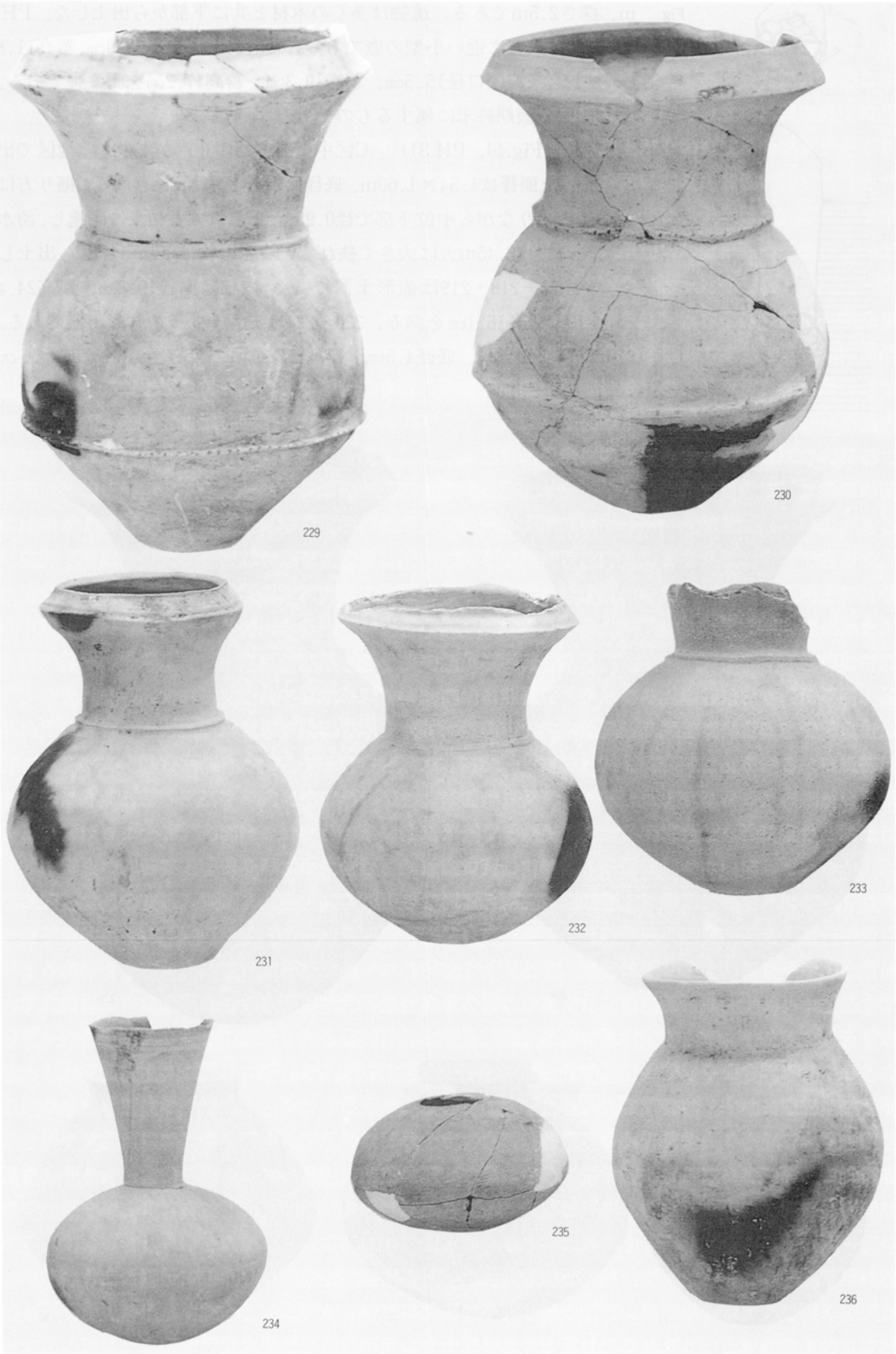



Fig. 50 SE319井戸実測図 1/60

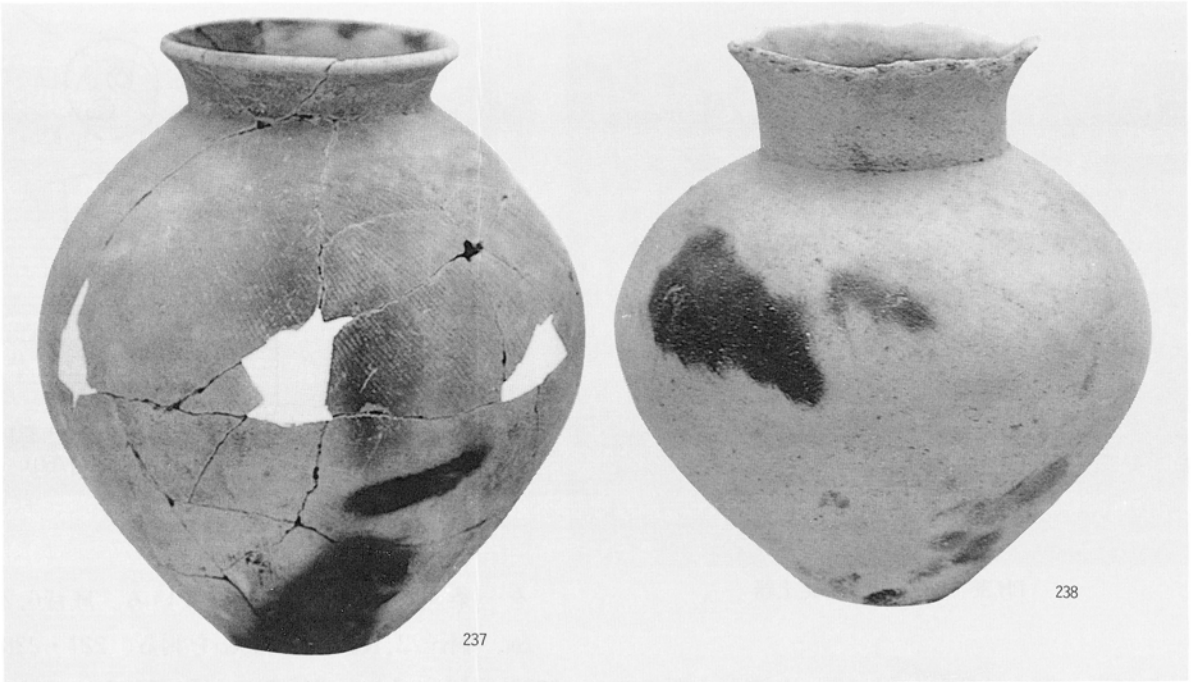
m、深さ2.5mである。遺物は多くの木材と共に下部から出土した。PH.32－222は丸底に近い小型の壺である。口径11.3cm、胴径13.9cm、器高11.8cmを測る。223は口径15.5cm、胴径19.3cm、器高17.2cmを測る甕である。ともに弥生後期終末に属するものであろう。

SE282（Fig.49、PH.31）　C区中央部南端の井戸が集中する地区で出土した。上面径は1.54×1.60m、底径0.7m、深さ3.2mを測る。掘り方は徐々に窄まりながら中位下部で径0.95m、下部は八女粘土に到達し、湧水点で径2.15×2.45m大に大きく抉れている。遺物は下部中位から出土した。PH.31－218・219は壺形土器である。218は胴径19.8cm、残高24.4cm、219は残高16.1cmを測る。220・221はミニチュアの鉢形土器である。220は、口径9.2cm、底径4.5cm、器高8.7cm、221は口径8.5cm、底径6cm、

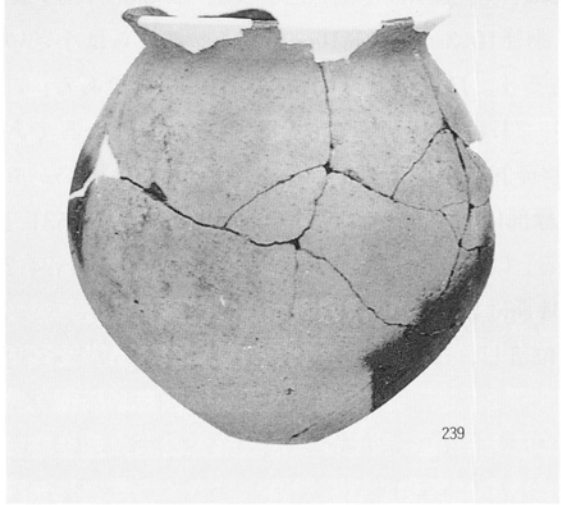
PH.33　SE319出土弥生土器(1)




PH.34　SE319出土弥生土器(2)




PH.35　SE319出土弥生土器(3)




器高10.2cmを測る。これらの遺物は弥生後期中葉頃のものであろうか。木製品では杓文字が出土している。

SE319 (Fig.50、PH.33～35、PL.40)　C区中央部南端のSD001西側で出土した井戸である。壁際にかかっており上面径は0.85m以上になろう。確認した深さは2.7m、底径は0.55mである。掘り方は細く、下位で八女粘土に達し、その部分が抉れて広くなっている。遺物は抉れて広くなった部分にギッシリ詰って20個体近くが出土した。PH.33～35は出土した土器群である。224～226、229～233は複合口縁壺である。224は口径21.7cm、外口径24.2cm、底径９cm、胴径27.4cm、器高36.7を測る。胴部は丸味を持ち頸部との境に三角突帯を一条巡らす。胴部には突帯は施さない。225は胴部がやや長目で、頸部に三角突帯、胴部やや下半に刻目突帯を施す。口径21.2cm、外口径24.3cm、底径10cm、胴径28.3cm、器高41.4cmを測る。226は小型の複合口縁壺である。口径11cm、外口径12.7cm、底径６cm、胴径16.2cm、器高21.7cmを測る。229は225と似た形態であるが口頸部の径がやや大きい。口径23.4cm、外口径26.3cm、底径8.5cm、胴径25.1cm、器高36.5cmである。230は、口頸部が広く、胴部に丸味を持っている。頸部と胴部にやや太目の突帯を巡らす。口径21.5cm、外口径24cm、底径８cm、胴径26.8cm、器高33.4cmを測る。231は口頸部が締まり、胴部が張った器形を有する中型の複合口縁壺である。口径は12.7cm、外口径15cm、底径９cm、胴径21.6cm、器高28.1cmを測る。頸部に三角突帯を一条巡らす。232は口径がやや大きくなり球形の胴部を有する中型の壺である。外口径17.7cm、底径7.5cm、胴径20.1cm、器高25.3cmを測る。頸部に三角突帯を一条巡らす。233は口縁部を欠失しているが複合口縁壺と考えられる。頸部に三角突帯

PH.36　SE320出土弥生土器

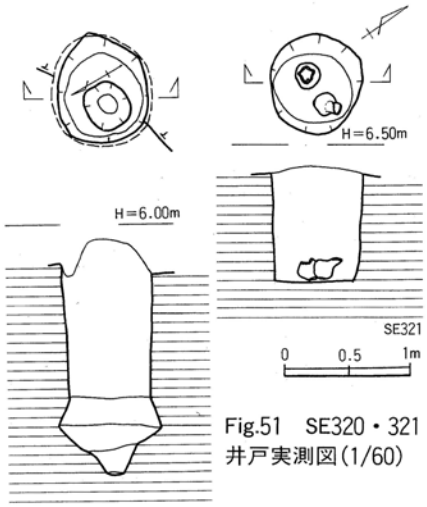
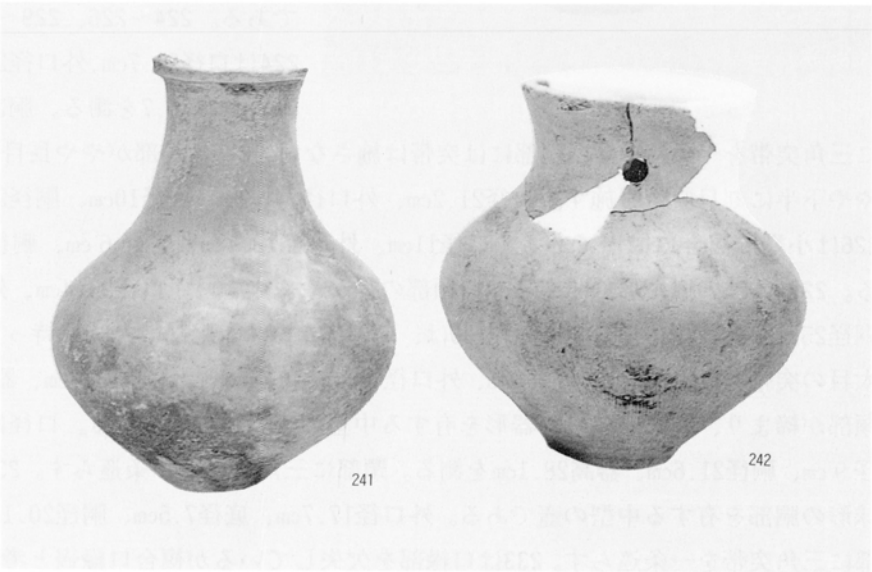



Fig.51　SE320・321
井戸実測図(1/60)

を一条巡らし、胴部は張っている。底径6.2cm、胴径22.1cm、残高23cmを測る。227・228は口縁部が短く外反し、胴が張った壺形土器である。227は口径14.1cm、底径5cm、胴径21.2cm、器高18.1cmで、228は口径11.5cm、底径6cm、胴径20.5cm、器高18.2cmを測る。234・235は長頸壺である。胴部は扁球形を呈するが、丸味が強い。234は口径9.3cm、底径5.5cm、胴径16.2cm、器高23.7cmを測る。235は口頸部を欠失し胴部のみである。底径4cm、胴径16.3cm、残高10cmを測る。これらは小さいながらも平底の底部が残っている。236は長胴の壺であろう。口頸部がやや長く、胴も長目である。口径14.7cm、底径7cm、胴径19.9cm、器高24.2cmである。237は頸部が締まり胴が張った壺形土器である。口縁部は短く外反する。口径16.1cm、底径10cm、胴径29.7cm、器高33.3cmを測る。238は頸部が直に立ち、胴部は上位で張りが強い壺形土器である。口縁部は打ち欠かれていて不明である。残高31.1cm、胴径29.6cm、底径8cmを測る。239は甕形土器である。口径18cm、底径7cm、胴径24.2cm、器高24.2cmを測る。SE319出土土器は弥生後期後半でも新しい時期に相当すると考えられる。

SE320（Fig.51、PH.36、PL.41）　C区中央部南端に位置し、工事で削平されることになったので追加調査したものである。

上面径は0.72×0.88m、深さ1.88mを測る。下位で八女粘土に到達しその部分は径0.8m程に抉れて崩落している。底部は中央が細く深くなっている。PH.36－240は丹塗りの壺である。口縁部は逆「L」字状を呈し、頸部は締まり、胴部が大きく張った器形を有する。頸部に一条、胴部に一条の三角突帯を施す。弥生中期後半




PH.37　SE321出土弥生土器

のものであろう。

SE321（Fig.51、PH.37、PL.41）　C区東側南端部に位置し、工事によって削平されることになったので追加調査したものである。上部は大きくカットされ下半部だけしか残っていなかった。上面径は0.73×0.78m、深さ0.92m、底径0.62mを測る。底面から2個体分の弥生中期末の土器が出土している。PH.37－241は丹塗りの袋状口縁壺である。口縁部は欠失し、やや長目の頸部に扁球形の胴部を有する。口縁下には一条の三角突帯が巡る。底径6㎝、胴径18.7㎝、残高24㎝を測る。242は口縁部に焼成前の穿孔を2孔施した壺形土器である。口縁部は破損して一部しか残存していない。底径7.1㎝、胴径20.3㎝、器高20.3㎝を測る。SE321は過去に一度調査された形跡があった。当初検出した時は灰色味の強い締りのない土であったので新しい時期の撹乱と考えていた。しかし、確認面は現地表から2m近く下がっていたので、単なる撹乱とは異なると思い掘り下げてみた。掘り方はしっかりしており井戸に間違いないと推察された。途中近現代の染付磁器などが出土し、掘り下げを断念しようと思っていたところ、黒色土が現われ、上部をカットされた弥生土器が出土した。黒色土は掘り下げが及んでいない井戸の埋土である。この部分の調査は、福岡市では前例がないので、戦前の区画整理に伴う時の調査ではなかろうか。土器の一部は九州大学に収蔵されているかも知れない。

## IV　おわりに

比恵50次調査では各区合わせて347の遺構と3,000穴を越える柱穴群が出土している。遺構は切り合いが激しく、かつ削平されているので分りにくいものも多かった。井戸は40基、竪穴住居址は円形・方形合わせて57軒、掘立柱建物は38棟、溝32条、土坑他180基である。弥生中期から中世、一部近世まで及んでいる。実際にはもっと多くの遺構が存在すると考えられ、掘立柱建物の数はさらに増加するとみられる。

弥生時代では、竪穴住居址、掘立柱建物、井戸、土坑などが出土している。竪穴住居址は、円形、楕円形、略長方形、方形などのプランが検出されている。円形を呈する竪穴の中に、特に大型のものが3基出土している。最も大きいSC119は直径が12.5mもあった。上屋を支える主柱穴も二重に巡っている。他の大型竪穴であるSC114・SC109も主柱穴列が二重に巡る。3基の大型竪穴は共に中央土坑を有している。これらはそれぞれに切り合い関係があり、出土遺物も時期差がある。最も古いものはSC114である。これを切っているSC119が2番目に古く、SC114を切ってやや楕円形状を呈する109が3番目に古くなる。また、方形を呈する竪穴も1基存在する。SC106は本来円形かやや楕円形を呈する竪穴が建て替えられたものである。中央土坑があり遺物からみれば、これが一番新しい。

方形竪穴も含め、4基の大型竪穴は中期中葉から中期末、後期初頭まで連続してつながっていることが判明した。これらの大型竪穴は、規模から言っても、配置から言っても一般の住居とは考えにくい。集団の共同利用施設か、あるいは住居とすれば集団のトップの人の住居になるのではなかろうか。ただし、それを裏付ける出土遺物は今のところ発見されていない。直径が11～12mクラスの円形竪穴は、比恵遺跡群以外では、筑紫野市や小郡市、夜須町、甘木市などで出土している。ただ、直径12mをはるかに越えるような円形竪穴の発見例は今のところ無い。竪穴状建物では、12mクラスが構造的に限界ではないかと推測される。建築学的な検討も今後の重要な課題である。比恵遺跡群では、円形竪穴住居址も概して大きいものが多い。

竪穴住居址の中では、中央部に地炉を持つタイプが注目される。楕円形、略長方形を呈するものが多く、弥生中期後半から後期終末まで存在している。古いものは楕円形を呈するものが多く、時期が

新しくなるにつれて略長方形から長方形に変化するようである。中央部には平面円形を呈する地炉があり、中央部は焼けて焼土が残っている。円形竪穴住居址は、中央部に土坑を有するものの、焼土は殆ど発見されない。円形竪穴建物もしくは円形竪穴住居址と、地炉を持つ竪穴住居址とは何らかの密接な関係があるのではなかろうか。

掘立柱建物で注目されるのは、SB250の大型掘立柱建物である。桁行が10mあり、大型の柱穴掘方に大径の柱が使用されている。梁行1間、桁行3間で各柱間隔が広い。特別な建物であった可能性がある。また、弥生中期後半代を中心とする時期に、C区西側に集中して梁行1間、桁行1間、あるいは梁行1間、桁行2間の掘立柱建物が集中して建てられている。倉庫群であろう。調査区全面に広がるのではなく範囲をある程度限定して建てられているようであり興味深い。

弥生時代の井戸からは、完形か完形に近い土器が100個体以上出土している。弥生中期後半から後期終末までの時期を含んでいる。一括して10数個体以上出土した例もあり、各時期の土器の組み合わせや編年序列を検討する上で重要な資料である。後期の後半以降には畿内系や瀬戸内系の搬入土器も出土しており、編年的な位置づけや他地域とのつながりを明らかにするための基礎資料となるものである。

土坑は弥生中期前半から中葉にかけて袋状貯蔵穴が出現する。ただし数は多くない。中期末ではSK205から丹塗りの祭祀土器がまとまって出土している。中には筒部に透しの入った筒形器台も出土している。その他、土坑は各時期のものが多数検出されている。

古墳時代では、大きく分けて初頭と後期のものが出土している。古墳時代初頭では、古式土師器を出土する竪穴住居址と井戸がある。比恵50次で検出した長方形もしくは方形の竪穴住居址の大部分は古式土師器の時期である。数は弥生期をはるかに凌ぐ。長方形プランを有し、主柱穴は2本でベッド状遺構を持つ竪穴住居址もある。古式土師器を出土する竪穴住居址の多さと同様に井戸も多く出土し、古式土師器がまとまって出土している。また、古式土師器を出土する溝がD区西側に2本並行して略南北方向に延びている。溝からは古式土師器のセットが一括して出土しており、外来系の土器も含まれている。この2本の溝は、間隔が6mである。比恵50次調査では、この溝の東側に集落が広がっている。近年、那珂・比恵遺跡では古式土師器を出す溝が明らかになりつつあり、今回出土した溝と一連のものになるかも知れない。溝に挟まれた幅6mの空間地は道の可能性がある。この溝の方向を南に延ばせば剣塚古墳の東を通って那珂八幡古墳の西側に至る。さらに南の那珂台地中央部へ続く可能性がある。那珂八幡古墳の成立と、那珂・比恵台地に広がる古式土師器を出土する集落とは密接な関係があるものと考えられる。

古墳時代後期には、梁行3間、桁行4間の掘立柱建物3棟と溝、竪穴住居址、井戸などが出土している。掘立柱建物は総柱であり、倉庫建築であろう。3棟が略南北方向に並んでいる。建物の間隔からすれば棟を繋げた並び倉であろう。6世紀後半代の新しい時期であろうか。那珂・比恵遺跡では、6世紀から7世紀にかけて比恵7・8・13・39次、那珂23次などで大規模な掘立柱建物群が出土し、「那津官家」との関係が注目されている。那珂・比恵遺跡にはまだ同様の倉庫群が点々と所存すると考えられ、これらの総体が「那津官家」と称されるものに相当するかも知れない。建物群は那珂遺跡のものより比恵遺跡の方が一時期古いので、比恵から那珂へと移動し、奈良時代に現在の三宅へさらに移動し整備されたのではなかろうか。ただし、三宅の発掘調査は一部分のみであり具体的な倉庫群の遺構が出土している訳ではない。これはあくまでも推測の域を出ないものである。

以上、思いつくまま羅列したが、比恵50次調査の遺物は整理途中での概要報告であり、未報告資料が多量にある。機会があれば、少しづつでも追加報告ができればと念じている。

# 比恵遺跡群第53次調査

# I　はじめに

## 1　調査に至る経過

1993（平成５）年12月18日付で、東京都港区三田一丁目２番16号－903の株式会社シェル・エンタープライズから、博多区博多駅南六丁目７番27号における事務所ビル建設に伴う埋蔵文化財の事前調査願が市教育委員会埋蔵文化財課に提出された。埋蔵文化財課では、比恵遺跡群の範囲内であり、これまで東側及び南側、道路をはさんだ西側の隣接地で埋蔵文化財の本調査を実施していることから、埋蔵文化財の包蔵される可能性が非常に高いと判断した。隣接地では、弥生時代から古墳時代、古代・中世と良好な遺構・遺物群が検出されており、遺構の連続性が容易に推測できた。そこで、1994（平成６）年２月８日に試掘を実施したところ、鳥栖ローム面で柱穴が確認され、弥生土器・土師器を含む包含層が残っていたことから、周辺調査の成果も考慮に入れると、弥生時代～古墳時代の環濠・竪穴住居址などが存在すると判断された。そこで、関係者と遺跡の取り扱について協議を重ね、建物の建設によって破壊される遺構について本調査を実施することになった。本調査は株式会社シェルエンタープライズの受託調査として1994年５月24日から着手した。

## 2　調査の組織

調査の組織は以下の通りである。

調査委託：株式会社　シェルエンタープライズ　代表取締役社長　貝島義雄
調査受託：福岡市　福岡市長　桑原敬一
調査主体：福岡市教育委員会　教育長　尾花　剛
調査総括：埋蔵文化財課長　折尾　学　埋蔵文化財第２係長　山崎純男
調査庶務：埋蔵文化財第１係長　横山邦継　吉田麻由美
調査担当：山口譲治　菅波正人（試掘調査）　埋蔵文化財第２係　下村　智（本調査）
調 査 員：上方高弘　茨木浩一　吉田香代
調査作業：上野龍雄、梅木繁良、江嶋光子、黒瀬千鶴、志堂寺　堂、高野瑛子、武田潤子、立水清、谷　英二、大長正弘、徳永榮彦、徳永静雄、永松伊都子、永松トミ子、野口ミヨ、西本スミ、日尾野典子、広田安平、松井一美、森山恭助、森山タツエ、山下智子、山本后代、吉住作美、村山市次、本村久利

# II　調査の記録

## 概要

比恵第53次調査では、調査対象面積1,400㎡の内1,095㎡を調査した。調査区の中央部は１段低くなり浅い谷状地形が延びてきている。この部分には主に溝、土坑、井戸などが集中して検出された。弥生時代中期から中世に亘る時期のものである。東側と西側は鳥栖ロームの台地面が広がり１段高くなる。東側の第９・10次調査に続く台地部には、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居址、掘立柱建物、細い溝、柱穴群が検出された。西側はさらに高くなり、東側と同様に、弥生時代から古墳時代

にかけての竪穴住居址、掘立柱建物、井戸、細い溝、柱穴群などが密集して出土している。また、中世の遺構も存在し、井戸や柱穴群などが確認されている。井戸からは後で報告するが火鑽臼が出土している。台地部の遺構は、旧鉄工所の建物や植木畑の植栽で上面がかなり削平を受けている。竪穴住居址の壁面の残りは良くなく、壁溝などでかろうじて竪穴住居址と確認されるものがあった。柱穴群の密集した切り合いからすると、かなり多くの竪穴住居址が削平された可能性がある。柱穴の多くは、また、掘立柱建物群の柱穴とも考えられるが、柱の並びから掘立柱建物として復元し得たのは数棟にすぎなかった。未調査区の中で、道路に面した周縁は重機で深く掘り返えされていて、遺構は殆ど残っていなかった。中央部南側の未調査区は今回建物建築によって破壊される範囲内には入っていなかったので調査は実施していない。弥生中期後半代の溝の延長がこの下に埋まっており、第15次調査の遺物を多量に含む溝に連続するものと考えられる。

## 1　竪穴住居址

竪穴住居址は全部で5軒出土している。

SC24（Fig.2・13、PL.50）　調査区東南部で出土した長さ5.4m、幅3.5m前後の長方形を呈する竪穴住居址である。削平が激しく殆ど床面部分だけしか残っていなかった。主柱は2本柱と考えられる

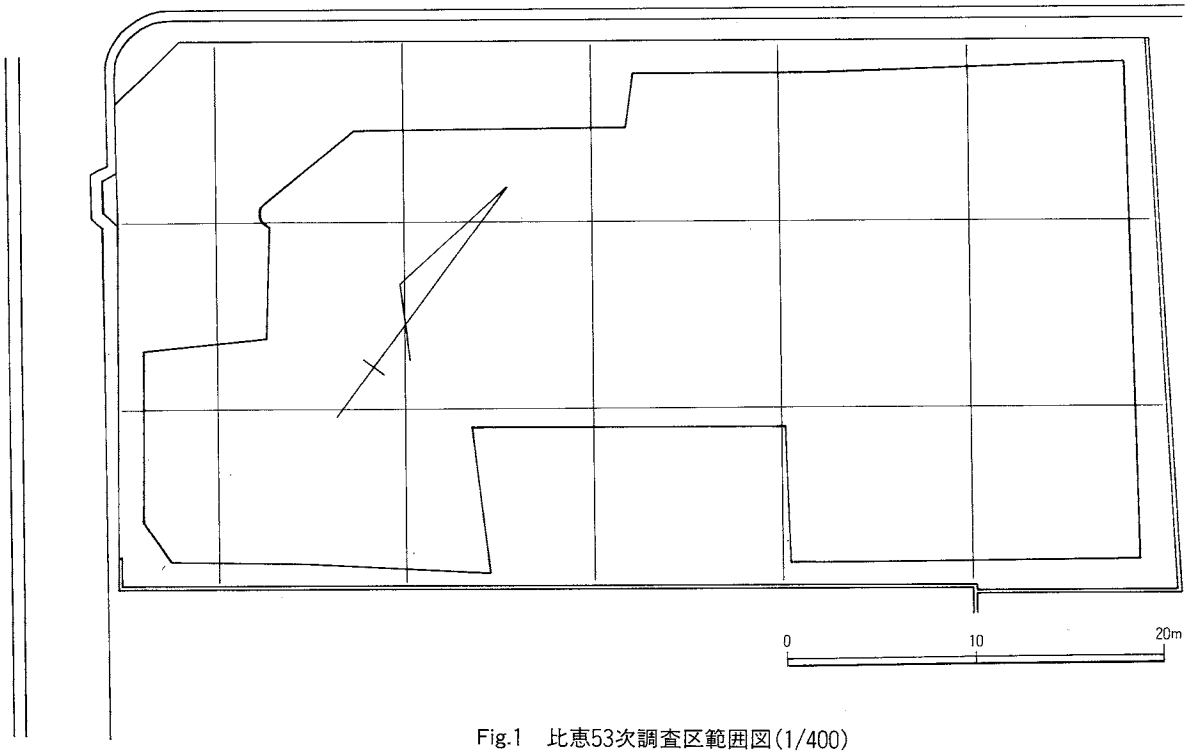



Fig.1　比恵53次調査区範囲図(1/400)

が、他の遺構との切り合いが多く明確にし得なかった。出土遺物は、弥生中期後半の甕、後期後半のタタキ痕のある器台片、胴部に幅広の低い突帯を貼り付け刻み目を入れる甕片、古式土師器の庄内甕、高坏、青銅鋤先、須恵器IIb、IVaの坏蓋などがある。弥生土器は古い時期のものが混入したものであろう。また、2片の須恵器は柱穴などの切り合いが多く、これも混入したものであろう。切り合った柱穴は6世紀初めと6世紀末のものが存在すると推察される。床面から出土した遺物は古式土師器である。上層からは青銅製鋤先も出土している。

Fig.13－20は庄内甕である。復元口径18.5cmをはかる。胴部は肩がやや張るものになると推定され、口縁部は薄く丁寧で、強く外反して微妙に屈曲し、端部は若干つまみ上げる。外面調整は胴部が水平に近い左上の連続タタキであるが、口縁部もタタキ整形された後にヨコナデを施す。内面は、頸部の下方肩部まで、押捺及びナデでヘラケズリを省略するが薄く、さらに肩部以下は丁寧にヘラケズリを施す。口縁部はヨコハケ後ヨコナデか（磨滅して不明確）。色は橙色、胎土は精選された土に石英･花崗岩とわずかに雲母を含む。大和における纒向2式前半の資料に酷似するが、胎土が若干異なり、灰白色の胎土を精選する以前の、比恵遺跡における最古の庄内甕の可能性がある。21は畿内系の高坏である。口径21.6cm、高さ15.1cm、脚部径14.7cmをはかる。脚部・柱状部・坏部の各間の屈曲は比較的はっきりしている。坏底部から口縁部への移行部はあいまいであるが一部に微妙な段を有する口縁端部は面取り後ヨコナデで丸くなるが、一部に沈線状の凹みがある。柱状部は直立する。外面調整は脚部タテハケ、柱状部タテのヘラナデ、坏部は磨滅して不明だがナデ後一部ミガキか。内面は脚部止続ヨコハケから上部はナデ、柱状部はシボリ後ナデ、坏部は磨滅しているが、タテヘラミガキか。柱状部上部は軸穴状になっている。色はにぶい黄橙色、胎土は2㎜前後の石英・花崗岩をやや多く含む。以上のようにSC24の土器は畿内の庄内式中頃（纒向2式）に併行するであろう。（久住）

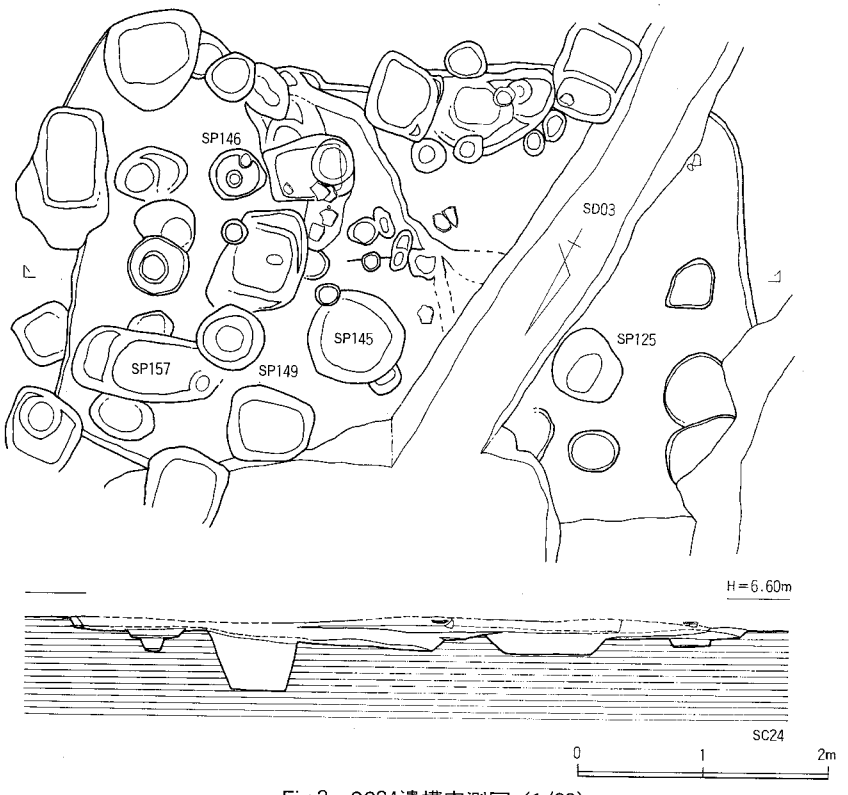



Fig.2　SC24遺構実測図（1/60）

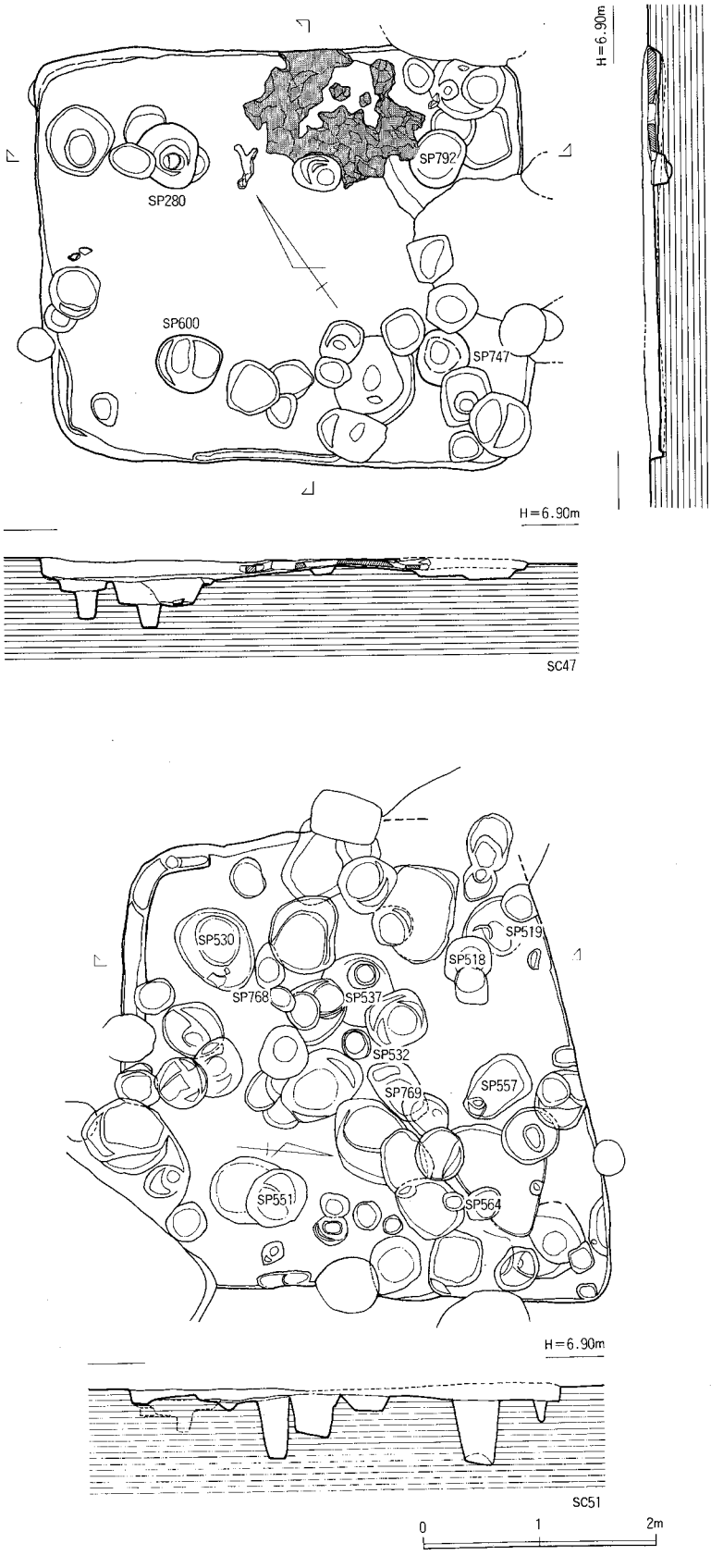



Fig.3　SC47・51遺構実測図(1/60)

Fig.26－101は青銅鋤先の破片である。残高3.0cm、残幅2.4cm、残厚1.3cm、器壁厚3.5mmを測る。全体に錆化して器面が粗く剝げ落ちている。両面には土が錆着しており細かいことを観察することができない。古式土師器に共伴するかあるいはそれ以前の時期に属するものであろう。

SC47（Fig.3、PL.51）

調査区西側ほぼ中央部に位置し、長さ4.2m、幅3.5mを測るやや東西に長い長方形気味の竪穴住居址である。壁の深さは10～15cm程度残存しているに過ぎなく大部分は削平されている。主柱は4本柱で北側にカマドを付設する。カマドの粘土は広く流れており、基底部のみが残っていた。主柱穴は径50cm前後で、柱間隔は東西方向が2.25～2.3m、南北方向が1.7mである。

出土遺物は、須恵器坏身・蓋・甕、土師器甕などが出土している。坏身はIIIa・IIIb・IVa、蓋はやや古く、IIa、IIbとIVが存在する。坏身の底部には「＋」「八」などのヘラ記号がある。新しい遺物からみれば6世紀後半から末に属する時期のものであろう。

SC51（Fig.3、PL.51）

調査区西側中央部で出土した方形を呈する竪穴住居址である。削平が激しく壁高は10cm未満である。一部に壁溝が巡る。プランは長さ4.2m、幅3.5mを測る。殆ど床面だけし

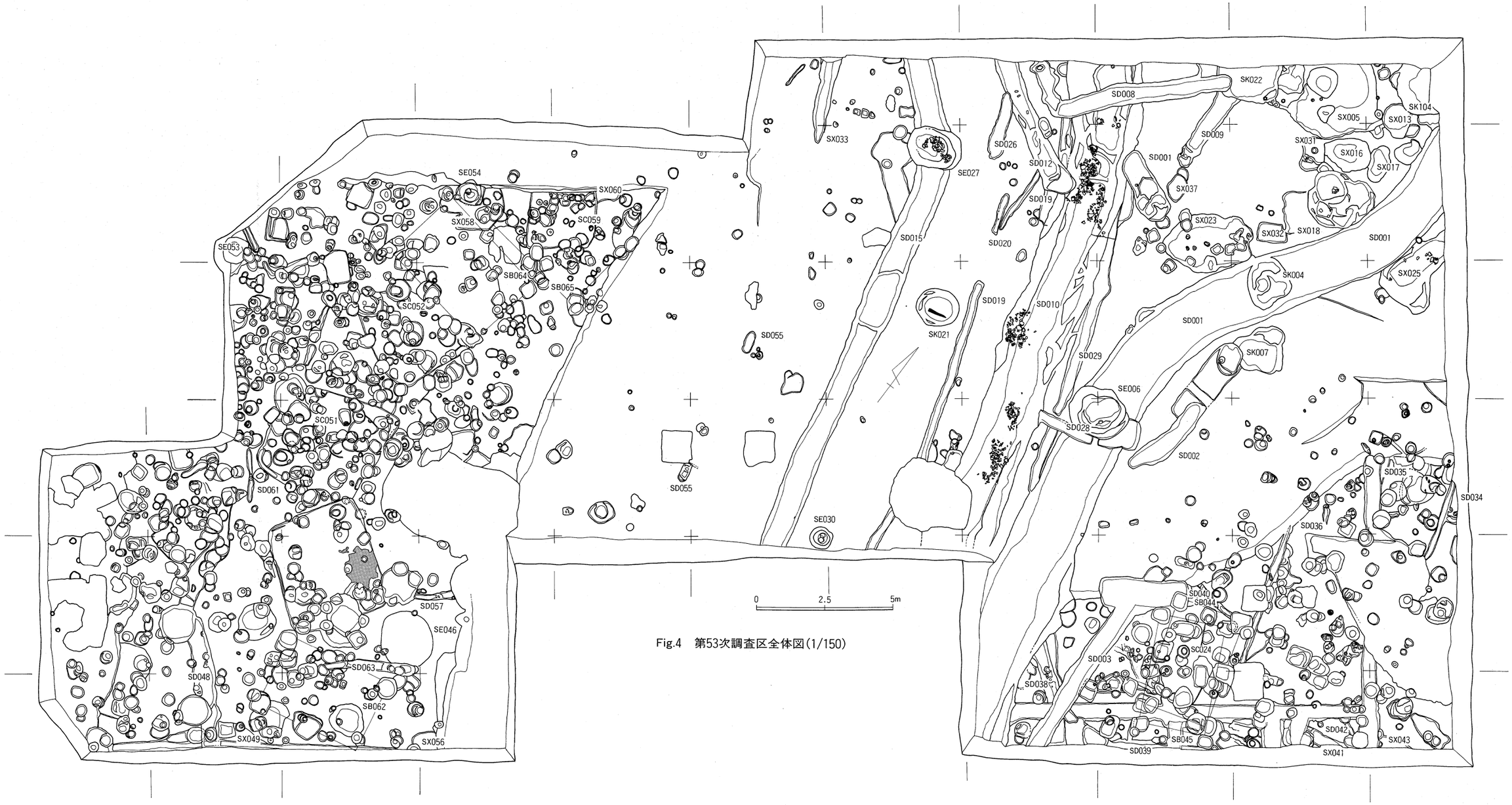



Fig.4　第53次調査区全体図(1/150)

か残っていなかったのでカマドは確認できなかった。主柱は4本で、主柱穴は径30～40cm、深さ56～57cmである。主柱穴の間隔は、東西方向が2.1m、南北方向が1.75mである。多くの柱穴群が切り合うため、遺物も混りが多い。遺物は古式土師器の甕、高坏、丸底壺から、須恵器坏身・甕・壺、土師器の甕などが出土している。須恵器の坏身は小破片であるが須恵IVの時期のものであろう。土師器甕の中には胴部最上部に径1.2cmの竹管文を二個一対で施文する破片も出土している。SC51は切り合いが激しく出土遺物の大きなものはみられないが、須恵器の時期からみれば、6世紀後半から末に属するものであろう。

SC52 (Fig. 5、PL.52)　調査区西側やや北寄りで検出されたもので、かなり削平されており、全体のプランは明確でない。長さ、幅とも3.2mをやや越える規模になると考えられる。方形でやや小型の住居址である。主柱は4本柱と考えられるが、柱穴は切り合いが多く4個とも特定はできなかった。柱間隔は東西方向が1.5m、南北方向が1.8mになるとみられる。出土遺物は弥生後期の壺・甕片に混じって須恵器の坏蓋片が出土している。6世紀後半代のものであろうか。住居址内からはカマドの痕跡は確認していない。

SC59 (Fig. 5、PL.52)　調査区西側の北端部で検出された小型の竪穴である。かなり削平されており壁高は10cm未満である。他の柱穴群との切り合いも激しい。規模は東西が2.5m、南北方向は2mまで確認できるが、北側は撹乱によって破壊されているので全体の様子は分らない。長方形か方形を呈するものとみられる。主柱は明確に判断できなかった。出土遺物は弥生土器、土師器片などがあるが時期を特定できる遺物は殆ど見当らない。新しい時期の遺物から古墳時代後期のものと考えておきたい。

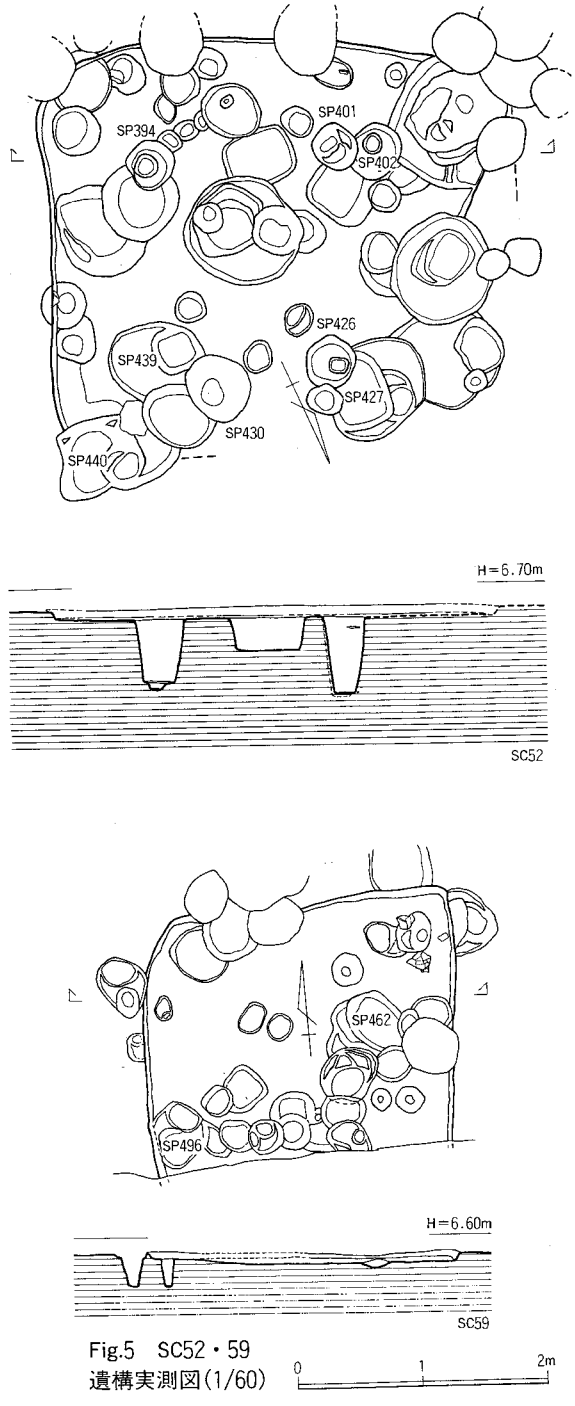



Fig.5　SC52・59
遺構実測図(1/60)

## 2　掘立柱建物

掘立柱建物は5棟確認している。柱穴の数は800近くあり、中には掘り方の立派な柱穴も数多く存在するので、まだ他に建物の復元は可能であろう。ただ、切り合いが激しく、柱穴群は未調査区へも広がっているため建物の復元を困難にしている。また、径があまり大きくなく深い柱穴は、弥生時代から古墳時代の削平された竪穴住居址の主柱穴群に相当するものがあるかも知れない。今回検出した柱穴群には埋土にいくつかの違いがみられた。黒色を呈するもの、やや褐味を帯びた黒褐色を呈するもの、灰味を帯びた灰黒褐色を呈するもの、うすい灰褐色を呈するものなどである。うすい灰褐色を呈するものは径が小さく、中世に属するものであろう。それ以外は弥生時代から古墳時代、古代にかけてのものであろう。黒色味の強い埋土に古い時期のものが多い。

SB44（Fig.6・26、PL.53）　調査区東側南寄りで出土した梁行1間、桁行2間の掘立柱建物である。略南北棟で、梁行2.6m、桁行4.1mを測る。桁行側の柱間隔は2.05mである。柱穴の掘り方は一辺が0.6m前後の方形を呈し、掘り込みの深さは確認面から0.5～0.6mの深さである。柱痕は確認できなかった。遺物は各柱穴から弥生中期後半～末の甕や壺・丹塗り高坏などが出土し、上部には切り合いや撹乱によってそれよりも新しい遺物が混入していた。Fig.26－99はSP103から出土した砥石である。残長6.2cm、残存幅4.1cm、残存厚1.0cmで、青灰色を呈する頁岩製である。砥面には擦痕が残り、左側面の一部に敲打痕がみられる。下面は剝落している。柱穴の埋土は黒色を呈し、中位から下半部にかけて出土する遺物は全て弥生中期後半から末にかけてのものであるので、建物の時期も弥生時代の中期末と考えて差しつかえなかろう。

SB45（Fig.6・26、PL.53）　SB44に一部切られてほぼ同じ位置から検出された梁行1間、桁行2間の掘立柱建物である。やはり略南北棟で、梁行2.5m、桁行4.1mを測る。桁行側の柱間隔は2.05m前後である。柱穴の掘り方は一辺が0.5～0.6m前後の方形を呈し、掘り込みの深さは確認面から0.4m前後の深さである。柱痕は判然としなかった。遺物は各柱穴から弥生中期後半から末の甕・高坏・丹塗り甕・丹塗り高坏、SP168からは「T」字状口縁を有する甕棺の口縁部片などが出土している。上層部の切り合いや撹乱がある部分からは時期的に新しい遺物も出土している。SP168から170の柱穴確認の際、鋳造鉄斧が出土している。Fig.26－100は、残存長5.0cm、幅3.9cm、厚さ2.3cmを測る鋳造鉄斧の下半部である。厚く鉄錆に巻かれており、実際の大きさは実測できない。錆落しもしていないので詳細は分からない。破断面による推定では身幅3.3cm、厚さ1.4cm、身の厚さ0.4～0.5cmになるものとみられる。SB45は柱穴埋土が黒色で、弥生中期後半代の遺物を多く含むことから、時期的にも弥生中期後半から末に属すると考えられる。SB44よりもやや古いとみられ、規模はSB44、45とも全く同一であることから、SB44はSB45の建て替えであるとみられる。

SB62（Fig.7・8・23、PL.54）　調査区西側南寄りで出土した梁行1間、桁行2間の掘立柱建物である。東西棟で、梁行2.8m、桁行4.0mを測る。桁行側の柱間隔は2.0mである。柱穴の内、東南隅の柱穴は未調査区へかかっており確認することができなかった。柱穴の掘り方は一辺が0.7～0.8m前後の略方形を呈し、掘り込みの深さは確認面から0.5～0.6m前後である。柱痕はSP763だけ確認でき、径16cmを測る。SP763の柱穴は南北に長く、段掘りになっている。遺物は各柱穴から弥生中期後半代から末の甕、丹塗り甕・壺・無頸壺、器台、支脚などが出土している。上部には一部後期の甕片、古式土師器片がみられた。SP194にはまとまって遺物が出土している。

Fig.23－71はSB62のSP194よりの出土。器台ないし支脚。高さ11.1cm。器壁は厚く、外面の調整は汚ないナデである。内面はシボリか。外面に二次焼成と見られる赤変部多くあり。橙色ないし明赤橙

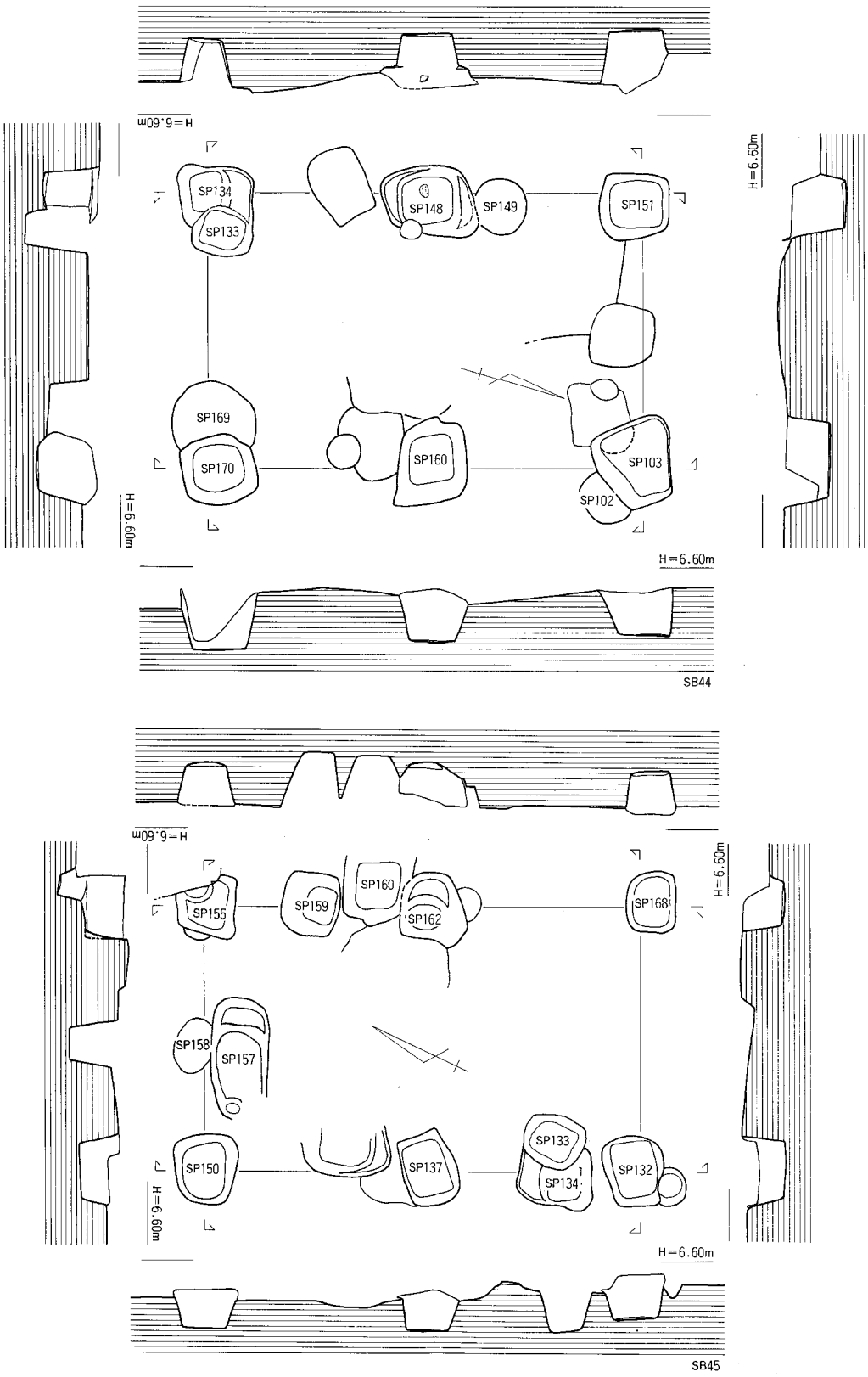



Fig.6　SB44・45遺構実測図(1/60)

0　1　2m

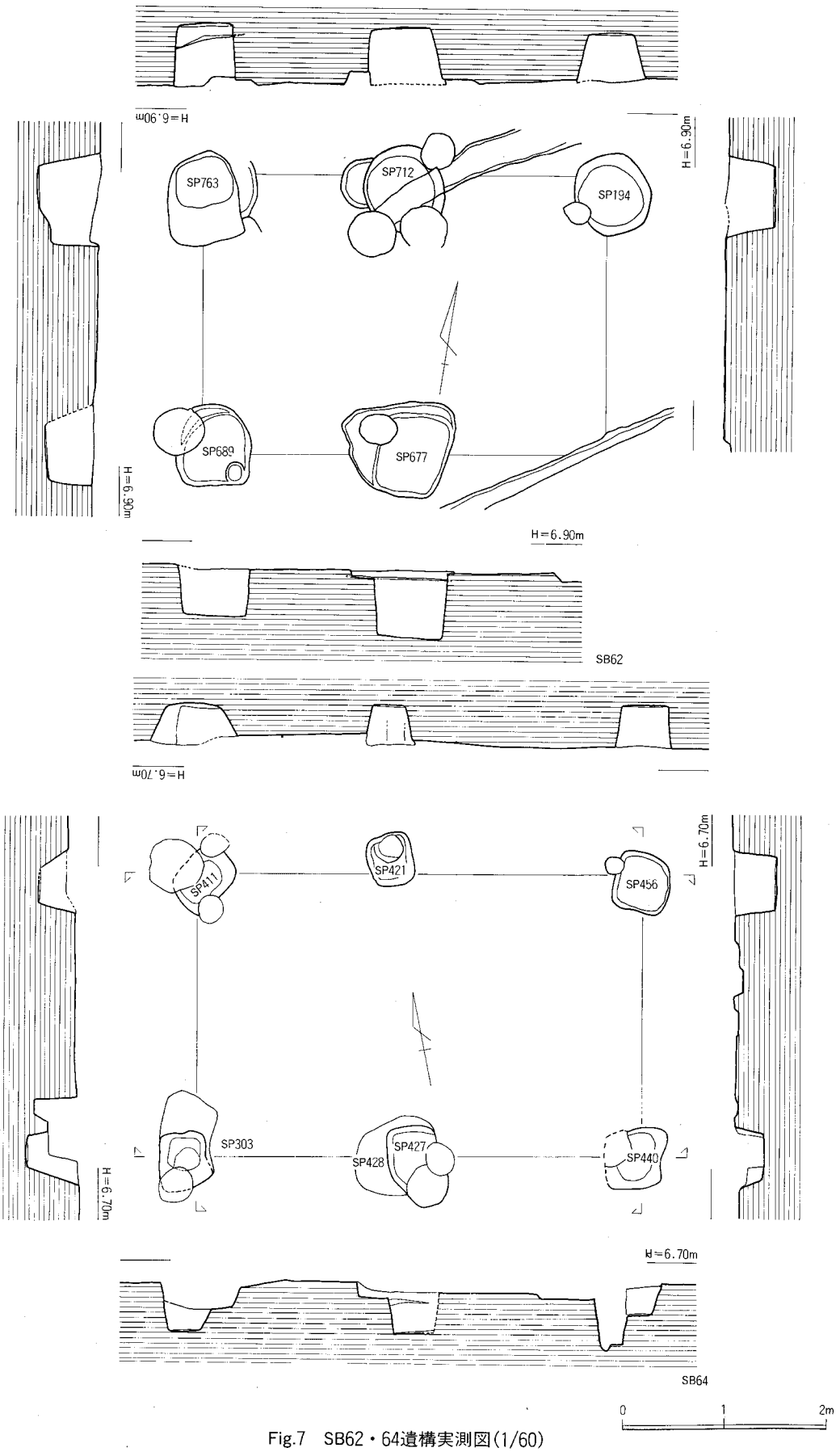



Fig.7　SB62・64遺構実測図(1/60)

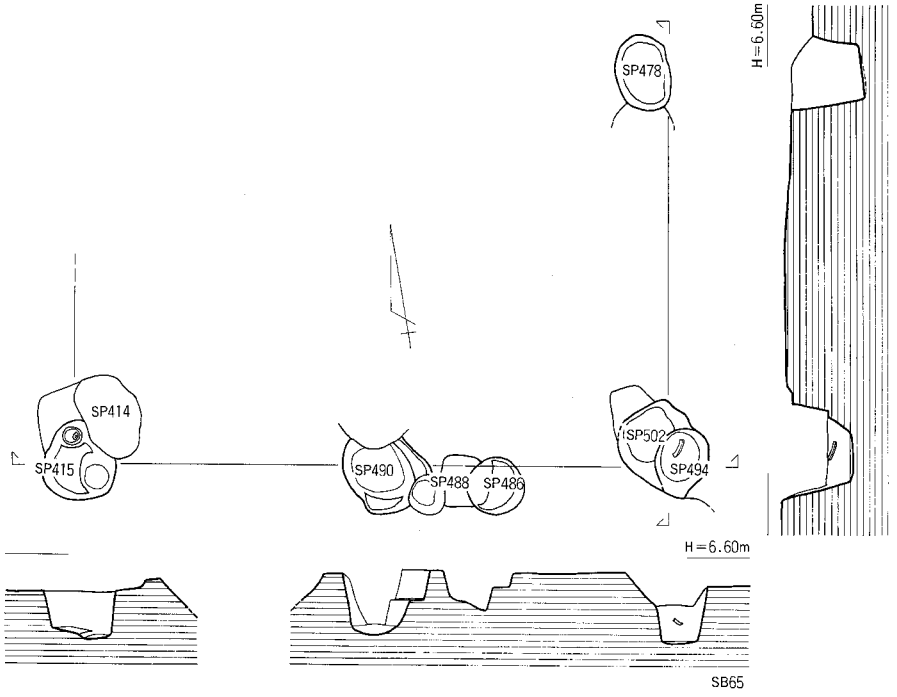
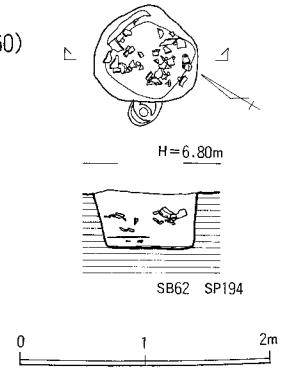



Fig.8　SB65・SP194(SB62)遺構実測図(1/60)




色。石英・長石をやや多く含む。今回調査のSD10より類品が多く出土し、中期後半から末か。(久住)

SB62の柱穴は割と大型で、同様な柱穴群は南側隣接地の調査区でも確認されている。埋土は黒色土で、出土遺物から、建物は弥生中期後半～末の時期に属すると考えられる。弥生時代の掘立柱建物は大型で方形基調の柱穴をもつものが多く、方向も東西か南北方向をとるものが多い。

SB64 (Fig. 7 、PL.54)　調査区西側北寄りで検出した梁行１間、桁行２間の掘立柱建物である。略東西棟で、梁行2.8m、桁行4.4mを測る。桁行側の柱間隔は南側が2.2m、北側はややズレて1.9mと2.5mである。柱穴の掘り方は0.5m前後の略方形で、掘り込みの深さは確認面から0.5m前後である。柱痕はSP421だけ確認することができ、径17cmを測る。各柱穴からの出土遺物は、弥生中期後半から末に属する甕、丹塗りの甕・壺・鉢と弥生後期の甕、土師器の甕、丸底壺、須恵器の坏身IIIa、坏蓋IIbなどがある。建物の柱間隔は長く、柱穴は方形基調であり、埋土も黒色土であるので、時期は弥生中期末と考えている。弥生後期以降の遺物は、柱穴群の切り合いを見落して混入したものか調査エラーによるものであろう。

SB65 (Fig. 8 )　調査区西側北寄りで検出した掘立柱建物で、梁行は１間以上、桁行は２間以上になるものとみられる。東側は段落ち、西側及び北側は削平されていて、全体の様子は分からない。主軸は略東西方向をとり、梁行側の柱間隔は2.6m、桁行側の柱間隔は2.4mである。柱穴の掘り方は方形を意識しつつも楕円形状を呈するものがあり、径は0.5～0.7m前後である。各柱穴からの出土遺物は、弥生中期後半から末にかけての甕、丹塗りの甕、支脚などである。それよりも新しい遺物も若干混入する。柱穴の切り合いが多いため見落したのかも知れない。柱穴の埋土は黒色であり、柱間隔も長いことから弥生中期末の時期を考えておきたい。

その他、明らかに古墳時代の遺物を出土する柱穴や、中世に属する柱穴も存在するが建物としてま

とめることができなかった。本来は掘立柱建物が数多く存在したものと推測される。

## 3　井戸

調査区内から8基の井戸が出土した。主に中央部の一段低い地域に分布しているが、西側の台地部にも3基存在する。中央部に位置するものは概して浅いものが多い。

SE06（Fig.9・13、PL.55・69）　調査区中央部東寄りのSD01を切って掘り込まれた井戸である。長径2.04m、短径1.70mの楕円形を呈し、深さ1.46mである。検出面下0.5mで八女粘土に達し湧水が認められる。0.9m下がると灰緑色を呈した凝灰岩の風化砂層に達する。遺物は、弥生土器片、古式土師器、甑把手、須恵器坏身（ⅠかⅡ）・甕・高坏、土師器椀などが出土している。

Fig.13－19は土師器椀である。平底に近い丸底で、口縁の端部は丸くおさめる。口径14.9cmである。外面はハケ後ナデ、内面はヘラミガキ、口縁部はヨコナデである。灰白色から褐灰色を呈し、胎土は精選され、砂粒は花崗岩・雲母をわずかに含む。22は形態的には6世紀代の甕にも一見似るが、内面がケズリではなく板ナデ後ナデであり、外面に右上りのタタキの押圧と推定される凹凸が看取されることから、外反し端部をややすぼめる口縁部の特徴も考え、畿内伝統的Ⅴ様式系甕の変容と考える。外面は胴部タテハケ、口縁部はナデである。色は浅黄橙色、胎土はやや粗いが砂粒をあまり含まない。SE06は土師器の丸底坏が完形で出土しており、11世紀代に属するものであろう。（久住）

SE14（Fig.9・18）　調査区北東隅に位置し、一部分しか掘り下げることができなかった。推定上面径は2.2m、深さは確認面から0.95mまでしか掘り下げていない。遺物は、縦耳のついた滑石製石鍋、玉縁口縁の白磁碗片、瓦器椀、須恵器坏・壺・高坏、土師器の甑、カマド、弥生土器片などが出土。

Fig.18－39は瓦器椀で、脚部が剝落している。口径16.5cm、現存高5.2cm。口縁端部は丸くおさめる。外面はナデ後ミガキ、底部付近はケズリ痕。内面は顕著なヘラミガキ。内外の炭素吸着は不十分で、内面の8割程度が黒色化している。外面中位は沈線風に凹む部分あり。11世紀頃の瓦器椀か。（久住）

SE21（Fig.9、PL.59）　調査区中央部に位置する浅い井戸である。上面径は1.55×1.40m、深さは1.1mである。調査面下0.4mで黄白色の八女粘土に達する。井戸内からは長さ0.7mの棒材と須恵器坏、土師器の二重口縁壺・高坏、弥生の甕片などが出土している。6世紀代のものであろうか。

SE27（Fig.9～11、PL.56・69・70）　調査区中央部北寄りに位置し、SD15に切られている。上面径はSD15によって削平されているので楕円形状を呈し、長径2.0m、短径1.5mとなっている。調査面下0.7mで八女粘土の層になり、－1.6mで底に達する。遺物は割とまとまって出土している。出土層位も中層のグループと下層のグループに分かれている。

Fig.10－1は在地系の大形甕である。口径27.9cm、高さ41.2cmをはかる。口縁部は外方に直立し、端部は面取りを施す。頸部には断面三角形の突帯を巡らし、刻み目を施す。頸部内面の稜はかなり甘い。底部は丸底を呈する。外面調整は、胴部粗いタタキの後タテハケメ、口縁部はタテハケ後ヨコナデである。ハケ条痕には疎密2種ある。胴部内面はナナメハケ、口縁部は断続的なヨコハケである。色は浅黄橙色から灰白色、胎土は1～3㎜の石英・長石を多く含み、雲母がわずかにある。5は在地系のやや小形の甕である。口縁部を欠損し、残存高は19.4cmである。底部は厚く、丸底に近いレンズ底である。外面調整は、やや右上がりのタタキの後、上半部は水平のタタキを施し、さらに全体にタテハケを施す。内面調整は、底部は強いナデ、中位はハケメ後粗いケズリ、肩部はナデである。外面には煤が付着する。色は淡橙色、胎土は1㎜前後の長石・石英を含む。2は布留系の甕である。口径16.4cm、高さ24cmをはかる。丸底倒卵形の胴部に、やや内湾しながら外方に立ち上がる口縁部が付く。胴

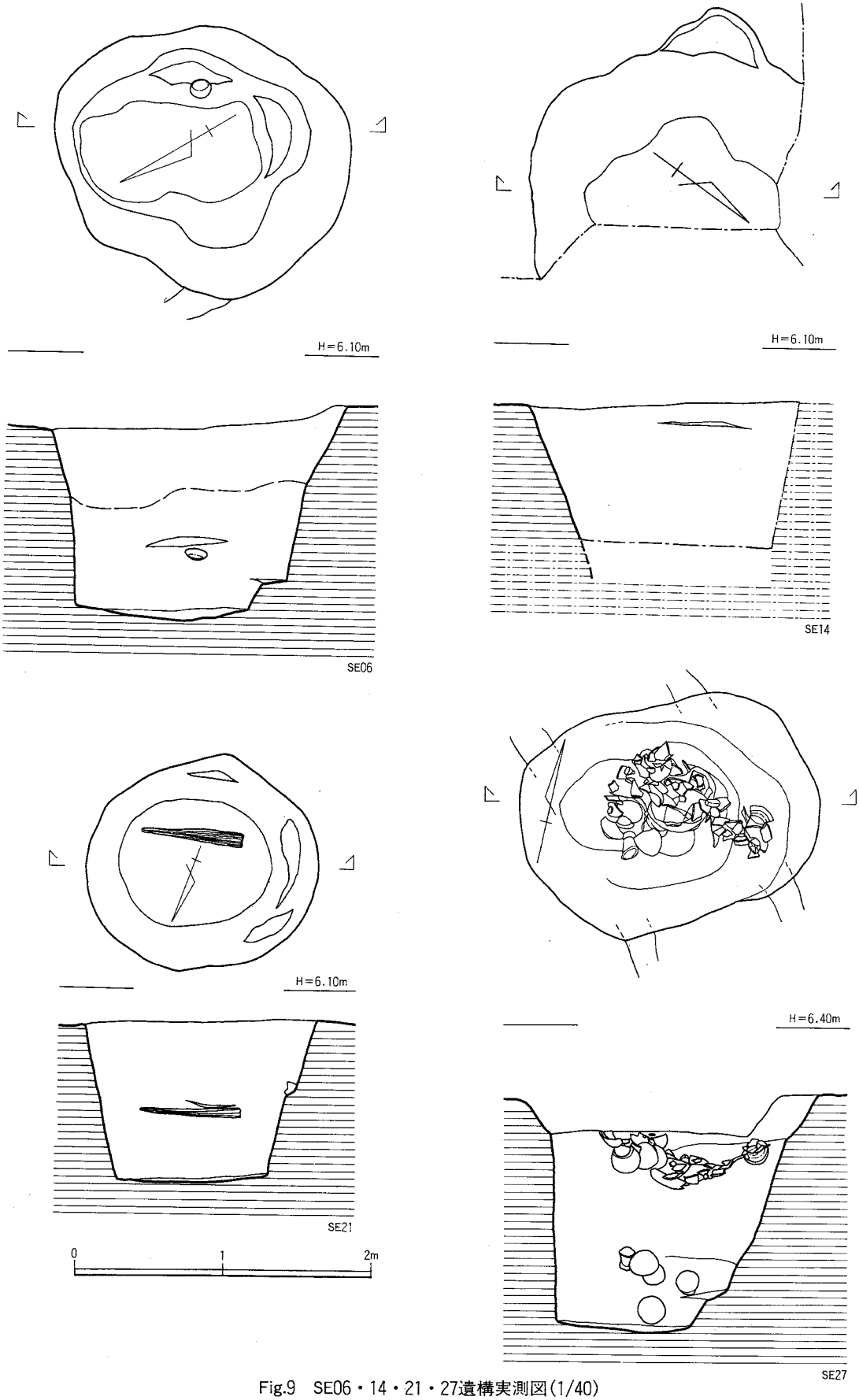



Fig.9　SE06・14・21・27遺構実測図(1/40)

部上半はなで肩を呈する。口縁部は薄く丁寧に作られ、庄内甕のなごりを残す。口縁部は内外とも回転的なヨコナデを施す。胴部外面は、タテハケの後上半に粗いナナメハケ、さらに中位にヨコハケを施す。胴部内面は、底部から中位にかけて押捺痕があり、ヘラケズリで仕上げられる。頸部内面の屈曲は甘く、ケズリはこれよりやや下までである。なお中位以下はケズリ後ナデか。また器壁は3㎜前後である。色は浅黄橙色、胎土は細かい土に1㎜前後の長石粒等が少量含まれる。3は外反して単純にすぼまる口縁部の形状と調整から、畿内伝統的V様式系甕が変容した甕と考える。胴部は球形に近く、底部は丸底に近いと推定される。外面調整は、胴部タテハケ又はナナメハケの後断続的なヨコハケで、口縁部は雑なヨコナデである。内面は、胴部は粗いヘラケズリ、口縁部はヨコハケである。色は淡橙色で、胎土は、1～2㎜の長石・石英をやや多く含む。口径14cm、現存高（底部欠損）21cmである。4も同様にV様式系甕の変容である。口径14cm、高さ16.1cmをはかる。口縁は外反し、端部は丸くおさめる。底部は本来輪台充塡のものである可能性がある。胴部外面は粗いタテのケズリ、口縁部は内外とも断続的なヨコナデ、胴部内面は粗いヘラケズリ、一部ナデである。色は橙灰色、胎土は2㎜前後の石英・花崗岩をやや多く含む。3・4とも内面ケズリだが、あまり薄くなっていない。6・7は畿内系の壺である。底部はいずれもレンズ底風だが、在地の底部ではなく、突出する輪台充塡底部の変容である。6は口径12.3cm、高さ21.1cmをはかる。胴部外面は、下方1／3の逆円錐台部にやや右上のタタキ痕跡があり、後ハケ、さらにケズリに近いナデを施す。これより上はタテハケ後一部ナナメハケ、さらに一部は粗いミガキを施す。右上のタタキ痕もある。口縁部の外面はタテハケ後やや雑なヨコナデ、内面は断続的なヨコナデである。胴部内面は、逆円錐台部がミガキ、これより上はヨコハケ後ナデ、さらに一部にミガキを施す。肩部内面には巻上げと見られる接合痕が残る。色は淡橙色、胎土は1～3㎜の石英・長石を少量含む。7は口径13cm、高さ21.5cmである。6に比べ口縁は直立し、胴部の肩が張る。胴部外面は、タテハケ後ヨコのナデ、下半から底部はケズリ気味のナデである。口縁部外面は頸部にかけて丁寧なヨコナデ、内面はヨコハケ後軽いヨコナデである。胴部内面はタテハケ後ナデを一部施し、さらにヘラミガキが若干かかる。底部内面は断続的なヨコハケ後左上ハケだが、これは廉状ハケメの崩れたものであろう。色は橙白色、胎土は細かい土に、長石・花崗岩の粗砂をやや多く含む。8は二重口縁壺だが、底部は在地のレンズ底に近い丸底である。器壁がかなり厚い。口径11.1cm、高さ16.1cmである。外面調整は、胴部は細かいハケメの後ナデ、頸部はヨコナデ、口縁部は擦痕を伴う断続的だが丁寧なヨコナデ、内面調整は、底部はヨコハケと左上ハケを交互に、胴部はやや左上のハケを丁寧に施し、頸部はヨコハケ後ナデ、口縁は擦痕を伴う連続的なヨコナデである。口縁端部は丸くおさめる。色は灰白色、胎土は細かい土に1～5㎜の花崗岩・石英をやや多く含む。なお5～8は下層からの一括出土で、他の個体群より様式的にやや古い様相を示す。Fig.11－9は壺であるが、在地系とも外来系ともつかない。ほぼ球形の胴部に、やや外反して立ち上がる口縁部が付く。端部は丁寧にすぼめ丸める。口径16.7cm、高さ26.7cmである。外面調整は、胴部の下半はタテハケ、中位～肩部はタテハケ後左上ハケを施し、さらに粗いヘラミガキを若干施す。口縁部はタテハケ後ナデ若干、ミガキが少しかかる。内面調整は、胴部は全体的にナデ仕上げ、底部はしぼり痕があり、口縁は断続的なやや左上のハケである。色は淡橙色、胎土は精選され、石英等をわずかに含む。10は畿内系の壺であるが、二重口縁壺になる可能性が高い。現存高は25.2cmである。胴部は球形に近く、底部は平底のなごりのある丸底だが、在地系ではなく輪台充塡の底部の変容であろう。外面調整は、胴部の下半はハケメ、中位から頸部直下まで右上の連続タタキで一部タテハケ、頸部はヨコナデである。内面は、下半は押捺痕があり、タテハケ後？ナデ、中位より上は左上ハケ後ナデ、頸部は磨滅し不明である。色は浅黄橙色、内面は褐灰色を呈し、胎土は2㎜前後の長石・石英を多く含む。

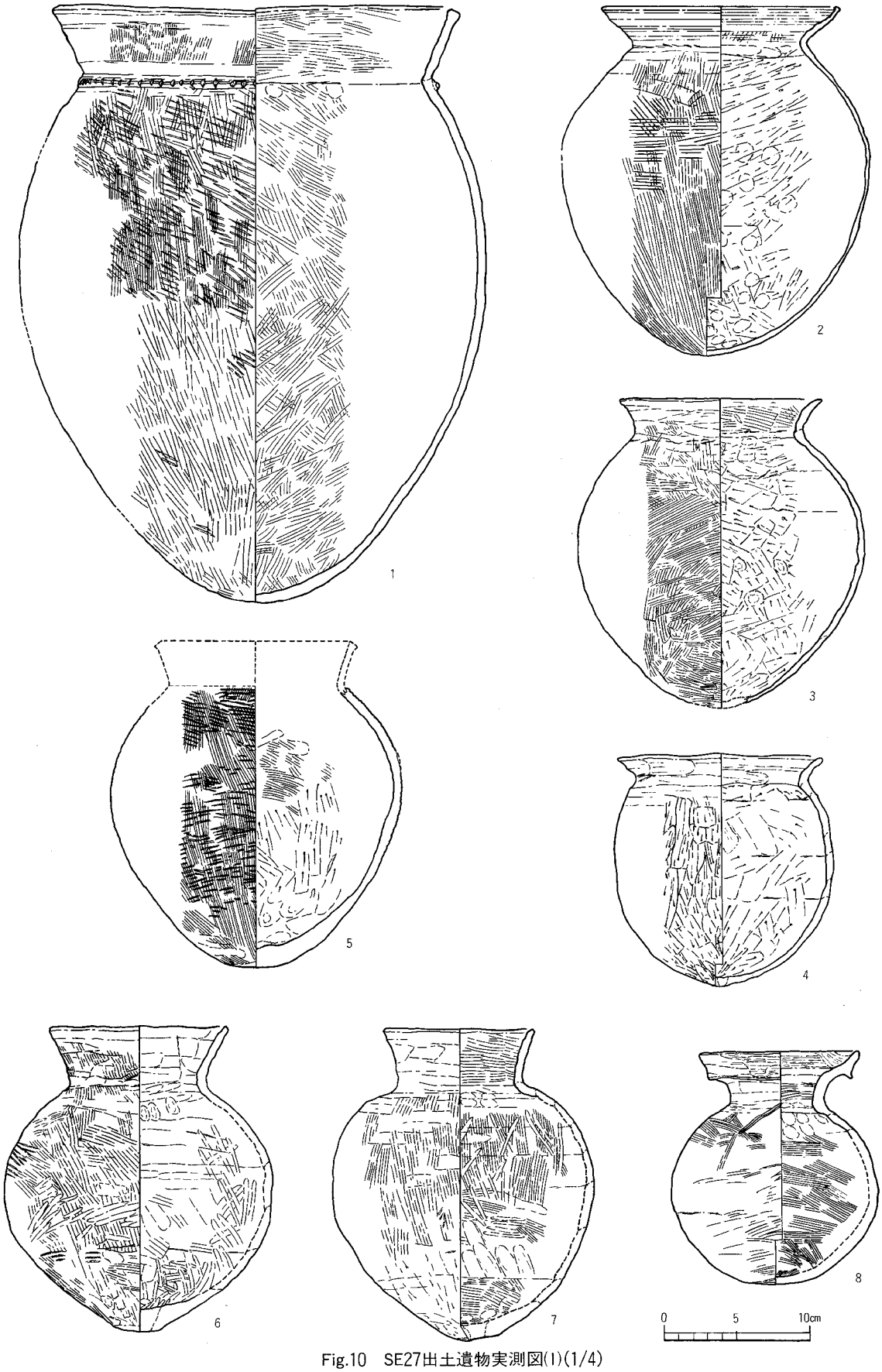



Fig.10　SE27出土遺物実測図(1)(1/4)

11は山陰系の二重口縁の壺である。口径17.8cm、現存高12.4cmをはかる。胴部はなで肩気味で、頸部への屈曲は甘く、直立しない。一次口縁と二次口縁の端部はともにシャープに外方に拡張する。外面調整は、胴部はタテハケ後に中位断続ヨコハケ、肩部は回転的なヨコハケ、頸部の下半はタテハケ、上半は回転的なヨコナデ、口縁部は内外とも回転的なヨコナデ、内面は、胴部はストロークの長い粗いケズリ後に丁寧なヘラケズリ、頸部は強いナデである。色調は淡橙色から灰白色で、胎土は石英および長石又は琉紋岩およびわずかな雲母を含む。山陰地方からの搬入品と推定される。12は畿内系の二重口縁壺である。胴部と頸部の屈曲は11よりは明確で、一次口縁は水平で中位が下方にややふくらみ、二次口縁は外反し、端部はすぼめ丸める。外面は胴部はタテハケ後一部ヨコハケ（タタキ痕あり）、頸部から一次口縁下方はナナメハケ、口縁部はナナメハケ後雑なヨコナデ、内面は胴部はナデ、頸部はヨコハケ、口縁部は断続的なヨコハケで端部はヨコナデを施す。淡橙色から灰白色で、胎土は比較的精良で石英少し雲母をわずか含む。口径19.9cm、現存高13.6cmである。13上は畿内系高坏である。復元口径22.9cmである。坏底部から口縁の間に若干の稜が入り、口縁は外反し端部はすぼめ丸める。調整は磨滅し不明確だが、外面はタテハケ後ヘラミガキか。橙色を呈し、胎土は緻密だが1～3㎜の石英・花崗岩をやや多く含む。13下も畿内系高坏で、13上より精巧な作りである。現存高は9.7cm、脚部径は14.4cmである。脚部・柱状部・坏部の各間の屈曲は比較的はっきりしている。全体的に磨滅し調整は不明瞭だが、外面は脚部は不明、柱状部はタテのヘラナデ後ヨコミガキ？、坏底部はケズリ後ヨコの細かいミガキと思われ、内面は脚部ヨコハケ後ヨコナデ、柱状部はシボリ後ナデ、坏底部はヘラミガキか。柱状部内面上部は針穴状になっている。脚部に4方向の穿孔がある。色は淡橙色を呈し、胎土は緻密精良で石英を少量含む。14は在地系の器台である。口縁部は袋状となり、上部は平坦になっている。煤の付着と二次焼成が認められ、支脚として使用か。外面は台部はタテのタタキ後左上の連続タタキ、屈曲部から受部はタタキ後ナデを施し、タタキは粗い。内面は、台部下半はヨコハケ、上半から屈曲部はシボリ及びナデ、口縁部は止続するヨコハケ、端部はナデである。色は褐灰色から灰色を呈し、胎土は粗く、花崗岩・長石・石英の粗粒を多く含む。5～8とともに下層の出土である。15と16はともに庄内甕である。左上がりの連続タタキは大和型甕と同技法だが、タタキ条痕はcmあたり、15は6～7条、16は5条とやや細かい傾向にあり、色調は灰白色で、胎土は花崗岩・長石・石英の小粒を少しと雲母をわずかに含む在地のものと考える。ともに破片のため径の復元はやや無理な推定である。15のタタキは水平に近く、内面は頸部下方数cmは押捺のままでケズリを省略し器壁は厚い。断面の芯が黒く焼成される。16の内面は丁寧なヘラケズリである。以上述べてきたSE27出土土器は、一部に在地系を含み（1・5・8・9？・14）、外来系が比較的多い資料であるが、外来系でも器壁がやや厚く、調整など全体的に野放ったい印象を受けるもの（3・4・6・7・10・12）と、より精巧なもの（2・13・15・16）の二者があり、この両者はともに畿内系であるが、前者は伝統的第Ⅴ様式系の、後者は庄内－布留式系の製作範型にそれぞれ対応する。さらに11の山陰系の搬入品も特筆される。これらの時期は5～8・14の下層資料は庄内式のやや新しい段階に、他は布留0式に併行し、全体として在地の土器編年では西新町式に対応する（1の大形甕を参照）であろう。（久住）

SE30（Fig.12・13、PL.57・70）　調査区中央部南寄りで検出した小型の井戸である。上面径は0.85m、深さ1.27m、底径0.34mである。確認面下－0.35mで黄白色の八女粘土に達する。井戸内からは布留系の甕が2個体出土している。

Fig.13－17は布留系の甕である。口径14.9cm、高さ20.2cmをはかる。胴部は球形に近い倒卵形で、底部は丸底、口縁部は直線的に外方にのびるが比較的短い。口縁端部は上方にややはね上げられ外方に斜めの面取りを施すがヨコナデによりやや丸くなる。外面調整は底部から胴部中位にかけてタテハケ、

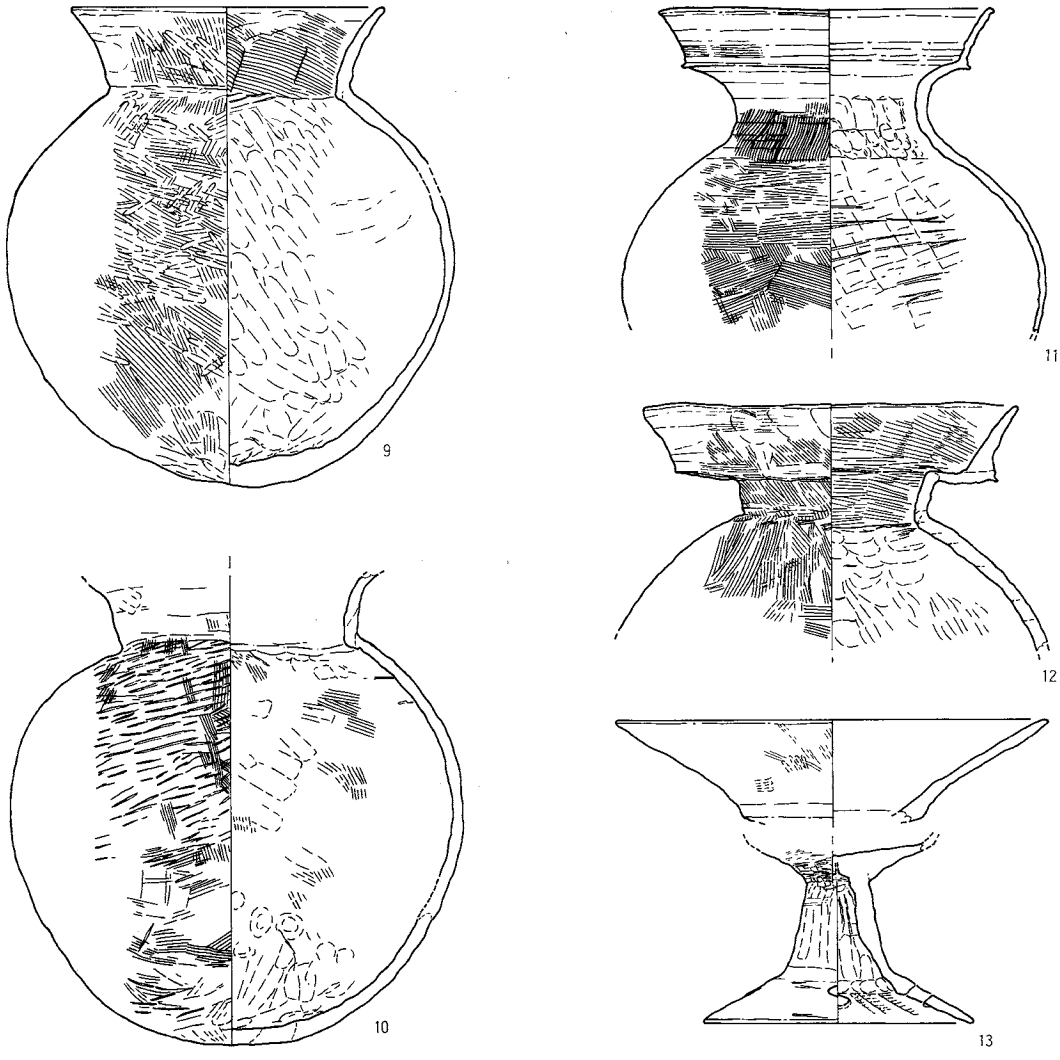



Fig.11　SE27出土遺物実測図(2)(1/3・1/4)

肩部は右上のハケメの後回転的なヨコハケ及び頸部にかけてヨコのスリナデを行う。口縁部は内外ともに丁寧な回転ヨコナデである。内面は、胴部下半はタテのヘラケズリ、中位に押捺痕があるがこれより上は右上のケズリを頸部直下まで施す。上半のケズリはやや不徹底で器壁が薄くなっていない。色は浅黄橙色から淡黄色で、胎土は1㎜未満の赤色長石(やや多)、白色長石、石英及びわずかな雲母・角閃石を含む。胎土より、比恵遺跡周辺製作ではなく、北部九州内の別地域からの搬入品であろう。18も布留系の甕だが、口縁・胴部とも薄く精巧である。口縁部は外反し微妙に屈曲し、端部は外へややつまみながらすぼめて終わり、庄内甕の口縁の一類型に近い。外面は、胴部タテハケ後肩部に丁寧な回転ヨコハケ、頸部から口縁部は回転ヨコナデを施す。内面胴部は丁寧なヘラケズリで、頸部までシャープに入る。口縁部は丁寧なヨコナデである。口縁部の内外のヨコナデは強い擦痕を有する。色は灰白色又は明褐灰色で、胎土は緻密で1㎜位の長石・雲母を含む。口径14.4cm、現存高16.3cmである。SE30の土器は、甕の型式学的な位置より、SE27とほぼ同じの布留0式併行である。なお、18は搬入品ではなく比恵遺跡周辺の製作であろう。(久住)

SE46 (Fig.12・18・25、PL.58・70)　調査区西側南寄りで出土した中世の井戸である。上面掘方径は2.18×1.85mで、すぼまりながら深さ2.2mで底部に達する。底径は0.55mである。井戸の掘り方は那珂・比恵遺跡群でみられる古代から中世にかけての掘り方と通有のものである。八女粘土は底面で確認され、かろうじて湧水層まで掘り下げられていた。遺物は弥生・古墳時代の土器、土師器、須恵器甕・坏などを多く含むが、中層から下層にかけては石鍋、陶器平鉢、火鑽臼などが出土している。陶器平鉢は博多遺跡群で多量に出土しており、中国からの輸入陶器である。

Fig.18－40は炻器質の陶器平鉢である。復元口径(上端で)31.1cm、高さ7.3cm。体部は直線的にのび口縁部下で若干内湾し、口縁部は外に折れT字状となる。体部外面中位に重ね焼き痕があり、この高さの上に釉がかかる。外面は口縁部下は回転ヘラ削り、中位より下は横のヘラ削り。内面は回転ナデ。灰茶褐色から灰色。12世紀後半か。(久住)

Fig.25－103は火鑽臼である。残存長20cm、幅4.2cm、厚さ1.1cmを測る。片面に11箇所と裏の片面に9箇所(内1箇所は未使用)の臼がある。両端は折損しており、本来はもっと多くの臼が並んでいたものと考えられる。臼の径は1.2cm程度である。臼の内面は黒色に炭化し、何度も使用したものは裏側に突き貫ける程深くなり、使用回数の少ないものは途中まで窪んでいる。臼の外端部には切り目を入れて切灰を落ち易くしている。未使用の臼の部分にはあらかじめ浅い「V」字状の削り込みが施されている。臼の径及び形状は極めて均一になっているので、杵には舞錐が使用されたものであろうか。材は未鑑定で分らないが、目の詰った柾目材を使用し、年輪があまり目立たない軟わらかい木材が使用されている。所属時期は中世なので、神事か特別の採火に使用されたものであろう。その他、滑石製の石鍋が出土している。口径23.8cm、鍔の径が27.8cmで、器壁は口縁部が1.5cm、体部が1.1cmである。底部は欠失しているので詳細は分らない。鍔の断面は三角形に近い台形状を呈している。

SE53 (Fig.12・26、PL.58)　調査区西側の北西隅で検出した井戸である。径0.96mの略円形を呈し、深さは1.95mで底に達する。底径は0.5mである。井戸から時期を決める明確な遺物の出土がないので時期を決め難いが、埋土の状況などを考慮すると古墳時代に相当するものではなかろうか。井戸確認時の掘り下げで青銅製鋤先の破片が出土している。

Fig.26－102は青銅製鋤先の体部の一部である。残存幅2.8cm、残存高2.7cmで、器体の厚さは平面部が3㎜、湾曲部が4㎜である。平面部分には使用で生じた擦痕が観察される。破壊して廃棄されたものであろう。

SE54(Fig.12・23)　調査区西側北端部で出土した小型の井戸である。上面は略円形を呈し、径0.8～0.84

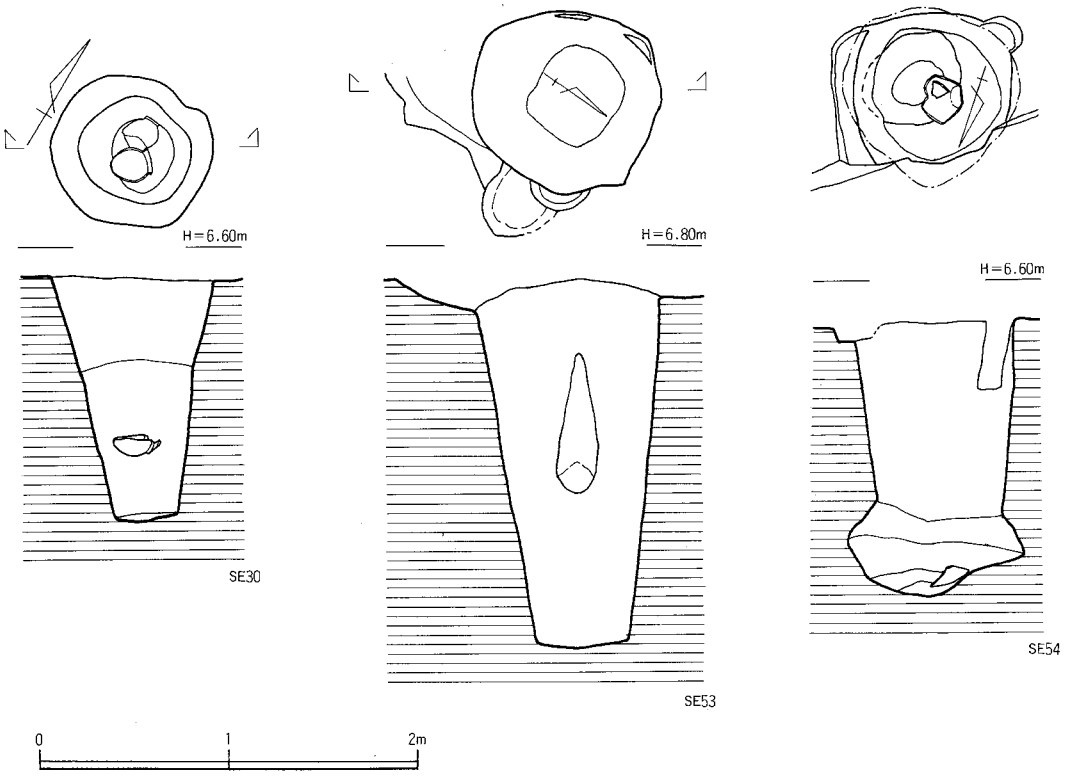


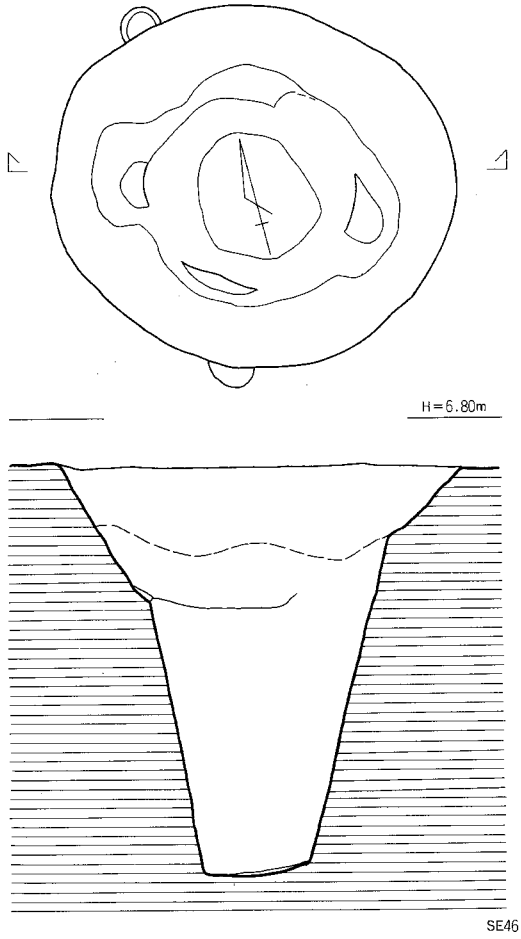

Fig.12　SE30・46・53・54遺構実測図(1/40)

mである。深さは1.48mを測り、調査面下1.15mで黄白色の八女粘土に達する。この部分は湧水点であり、径0.95mの広さに周囲が抉れて崩落している。遺物の出土はあまり多くなく、底から弥生中期後半の甕底部が出土している。井戸の時期もほぼ同時期であろう。

Fig.23－73は、弥生中期後半の大形甕の底部である。現存高14.0cm、底径11.6cmを測り、底部は上げ底になっている。外面はタテハケ、内面は丁寧なナデ、底外面もナデである。灰白色～浅黄橙色を呈し、石英・長石を含む。外面の一部に黒斑がある。(久住)

## 4　土坑

土坑としたものは23基出土している。主に中央部の低い部分に集中するが、それ以外にも分布している。小型のものや不定形のもの、浅いものなども含めて土坑とした。用途はそれぞれ異なっていると考えられるが、ここでは一括して取りあげ



ておきたい。

SK04(Fig.14)　調査区中央部東寄りのSD01に切られて溝底から出土した土坑である。上面径は1.9×1.6mの略楕円形を呈し、底面は段状に深くなる。最深部で0.27mを測る。遺物の出土量は極端に少なく、弥生中期の甕片が少量出土しているに過ぎない。埋土は黒色を呈するので、弥生期の遺構としておきたい。

SK05（Fig.14・17・26）　調査区北東隅に位置する不定形の土坑である。最大幅3.33m、長さは2.7mまで確認でき、さらに北側の未調査区まで広がっている。底面は緩やかに窪み、部分的に深い所がある。深さは0.2～0.3mを測る。溜状の遺構である。遺物は、須恵器の坏身・坏蓋（IIb、IIIb、IVa)・甕・高台付の鉢・高坏、土師器の甕、ミニチュア土器、弥生中期の土器片、投弾、石庖丁片などが出土している。

Fig.17－24・25・27は須恵器、26は須恵器とほぼ同じ技法・形態だが焼成は土師質。24は脚付の鉢で、口縁は大きく歪み口径は11.8～15.2cm、高さは8.4cm。外面には２本一組の沈線が２ケ所巡る。外面ヨコナデ、鉢底部はケズリ、内面は回転ナデ・ヨコナデ、脚は高台状でヨコナデを施す。青灰色～青黒色。26は須恵器坏身とほぼ同じだが底面が広く扁平であるのがやや異なるか。底部外面も一回転で削られていない。口径12.0cm、高さ3.0cm。25は坏蓋で口径12.2cm、高さ4.0cm。頂部に「×」のヘラ記号。27は坏身で口径10.8cm、高さ3.7cm。立ち上がりは短いが、付け根内面は非常にシャープである。「よ」のヘラ記号あり。外面ヘラ削りの全体の器高に占める範囲はそれぞれ、25は約1／３、26は約１／５、27は約1／３である。以上よりSK05は九州須恵器編年IIIb期でもやや新相、６世紀末頃か。（久住）

Fig.26－87は投弾である。全長2.6cm、径1.7×1.5cmの小型品である。褐色を呈し、胎土は精良で角閃石を少量含む。焼成は良好である。弥生中期のものが混入したのであろう。89・90は手捏ねのミニチュア土器である。89は口径3.4cm、器高3.1cmで、褐色を呈し、胎土は精良、焼成はあまり良くない。厚い粗雑な作りで外面に指オサエの痕が残っている。90は、口径1.6×1.9cm、器高2.2cm、胴径2.6×2.3cmを測る。明褐色を呈し、胎土に１～２㎜大の石英砂を含む。焼成は良好である。全体に歪つで、上半部に指オサエの圧痕が残っている。ともに古墳時代後期のものであろう。

SK07(Fig.14)　調査区東側中央部に位置する不定形土坑である。長さ、幅ともに1.75mを測り、深さは0.2mである。北側は部分的に張り出して浅くなる。出土遺物は弥生中期後半の甕片である。遺物からみれば弥生時代中期とみられるが、断定はできない。

SK11（Fig.14・23、PL.67）　調査区東側北寄りで出土した長楕円形土坑である。SD10を切っている。全長2.76m・最大幅1.14m、底面は段状に深くなり、最深部で0.2mを測る。須恵器甕、坏蓋（IIIb)、土師器甕、弥生後期の甕底部などが出土している。出土須恵器からみれば、６世紀後半代に属するものであろう。

Fig.23－70はSK11出土である。弥生後期前半の小形の甕の底部だろう。現存高9.5cm、底径7.2cm。底部は平底だがわずかにレンズ底気味である。外面は粗い条痕のタテハケ、内面はハケ後ナデ、灰白色から褐灰色、胎土は粗く、石英・花崗岩の粗粒を多く含む。（久住）

SK13（Fig.14・18、PL.60・70）　調査区北東隅に位置する略楕円形の土坑である。上面径は1.25×1.05m、深さは0.22mである。遺物は須恵器坏蓋・壺、土師器甕片などがある。

Fig.18－35・36は須恵器、35は高坏の蓋と思われ頂部に宝珠状のつまみがつく、口径12.5cm、高さ5.0cm。回転ヘラ削りは蓋部の頂部付近のみで他は回転ナデ。赤灰色～青灰色。36は広口壷。口縁端部は玉縁状に肥厚し外方に微妙な凹線が巡る。焼け歪みで口縁が著しく歪むが復元口径12.1cm。現存高10.5

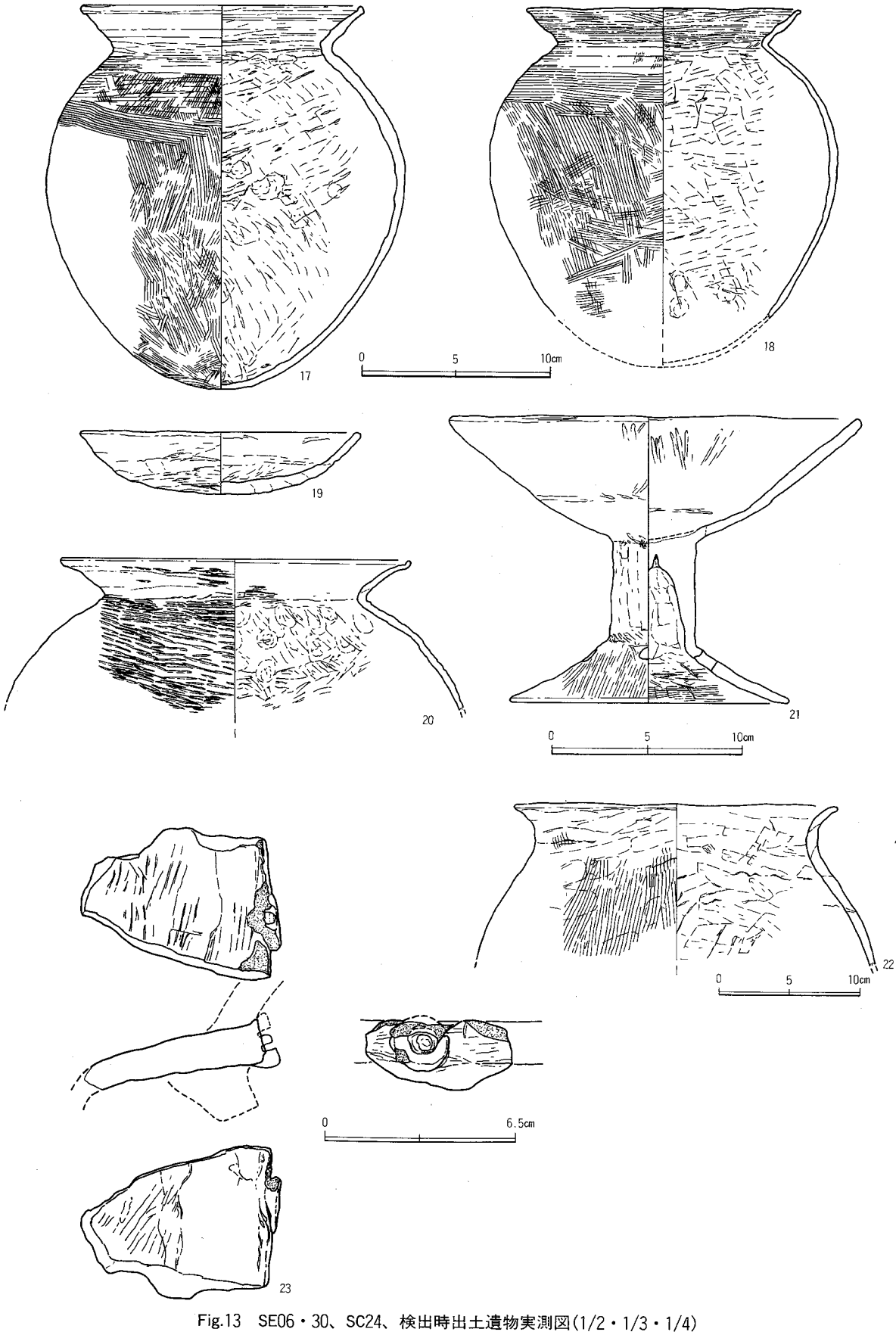



Fig.13　SE06・30、SC24、検出時出土遺物実測図(1/2・1/3・1/4)

cm。胴部外面は顕著なカキメ。内面は回転ナデ。青灰色。SK13の須恵器はIIIA期で6世紀中頃か。(久住)

SK16 (Fig.14、PL.61)　調査区北東隅に位置し、SK05のすぐ南側で検出された略楕円形を呈する土坑である。長さ1.75m、幅1.25m、底面は皿状に窪み深さ0.2mを測る。遺物は須恵IIIb期の坏蓋、土師器甕片などが出土している。6世紀後半代に属するものであろう。

SK17(Fig.16)　SK16の東側に隣接する楕円形状の土坑である。SK16との切り合いは判然としなかった。遺物は須恵器坏身・高坏、土師器甕などが出土している。須恵器坏はIIIb期かIVa期、高坏はIIIb期とみられる。6世紀後半から終末にかけての時期であろう。

SK18 (Fig.15・17、PL.60・70)　調査区北東側で検出した不定形土坑である。SK16の南側に隣接する。やや大型で、長さ2.5m、幅2.2mを測る。底面は階段状に深くなり、西側は独立した土坑状を呈する。深さは最も深い所で0.45mである。遺物は須恵器壷・坏・高坏、土師器甕などが出土している。6世紀後半代に属するものであろう。

Fig.17－28は須恵器坏身で口径9.8cm、高さ3.6cm。立ち上がりは短いが、付け根内面はシャープで内に食い込み受部外面は沈線状となる。回転ヘラ削りの範囲は全体の器高の約1／4強である。32は須恵器広口壷で口縁部が肥厚し外に段を有するものである。口縁部外面の段はかなり甘くなり凹線状となっている。胴部外面下半は叩き整形後カキメ、中位はカキメ、肩部はカキメ後回転ナデ、頸部から口縁部はヨコナデ、内面は胴部下半には同心円文の叩き当て具痕が残るが、中位より上は回転ナデでかき消され、口縁部はヨコナデ、口径14.4cm、現存高24.3cm、胴部最大径23.7cmをはかる。SX18出土の須恵器はIIIb期新相か。(久住)

SK22(Fig.15)　調査区東側北端部で出土した土坑である。北側部分は未調査区へ広がって全体の様子は分からないが、調査した部分は方形を呈し、壁は直に立つ部分がある。現存幅2.87m、現存長1.34mを測り、深さは0.38mである。出土遺物は、須恵器壷・高坏、古式土師器の高坏などがある。6世紀後半から末頃にかけての時期であろう。

SK23 (Fig.16)　調査区東側のSD01北側で検出された略楕円形の浅い土坑である。長さ3.35m、幅2.12mを測り、深さは10cmである。底面には凹凸がみられる。出土遺物は非常に少なく弥生土器片が少量出土しているに過ぎない。弥生時代のものか古墳時代のものかは判断できなかった。

SK25 (Fig.16～18、PL.61・70)　調査区東端部に位置する土坑で、一部は未調査区へ広がっている。基本的には長方形を呈するが、周りに段が付き不定形状になる。長さ3.1m以上、幅2.4m、深さ0.5mを測る。遺物は須恵器坏身・蓋・甕・鉢・高坏、土師器甕などが出土している。

Fig.17－29は焼成は土師質で赤色から橙色を呈するが、形態、技法は須恵器坏身と同じ。ただし底部内面を回転ナデの後に丁寧に再度ナデを施すのが異なる。口径11.6cm、高さ4.0cm。体部外面は底部付近が回転ヘラ削りの他は回転的でないナデである点もやや異なるか。「><」のヘラ記号あり。30・31は須恵器坏身でいずれも立ち上がりがかなり短い。30は口径11.7cm、高さ3.3cm。立ち上がり付け根受部外面は沈線状。体部外面は回転ナデだが凹凸に乏しい。欠損して全体は不明だが29と同様のヘラ記号を持つようである。31は口径10.7cm、高さ4.1cm。体部外面は著しく凹凸があり、体部は口径に比し深く、底部は厚い。表面は青灰色で他と同じだが断面紫灰色でやや特異で産地が別か。「十」のヘラ記号有。全体の高さにおける回転ヘラ削りの範囲は、29が約1／5、30が約1／10、31が約1／4である。Fig.18－33・34は土師器の粗製の甕である。33は現存高24.5cm。底部は丸底に近い広いレンズ状底。外面タテハケ、内面は板ナデ(ケズリ？)。34は復元口径17.9cm、高さ26.5cm。底部は平底に近い広いレンズ状底で、胴部は下ぶくれ気味、口縁部は直立し端部を丸くおさめる。胴部外面は板ナデ（ハケメ

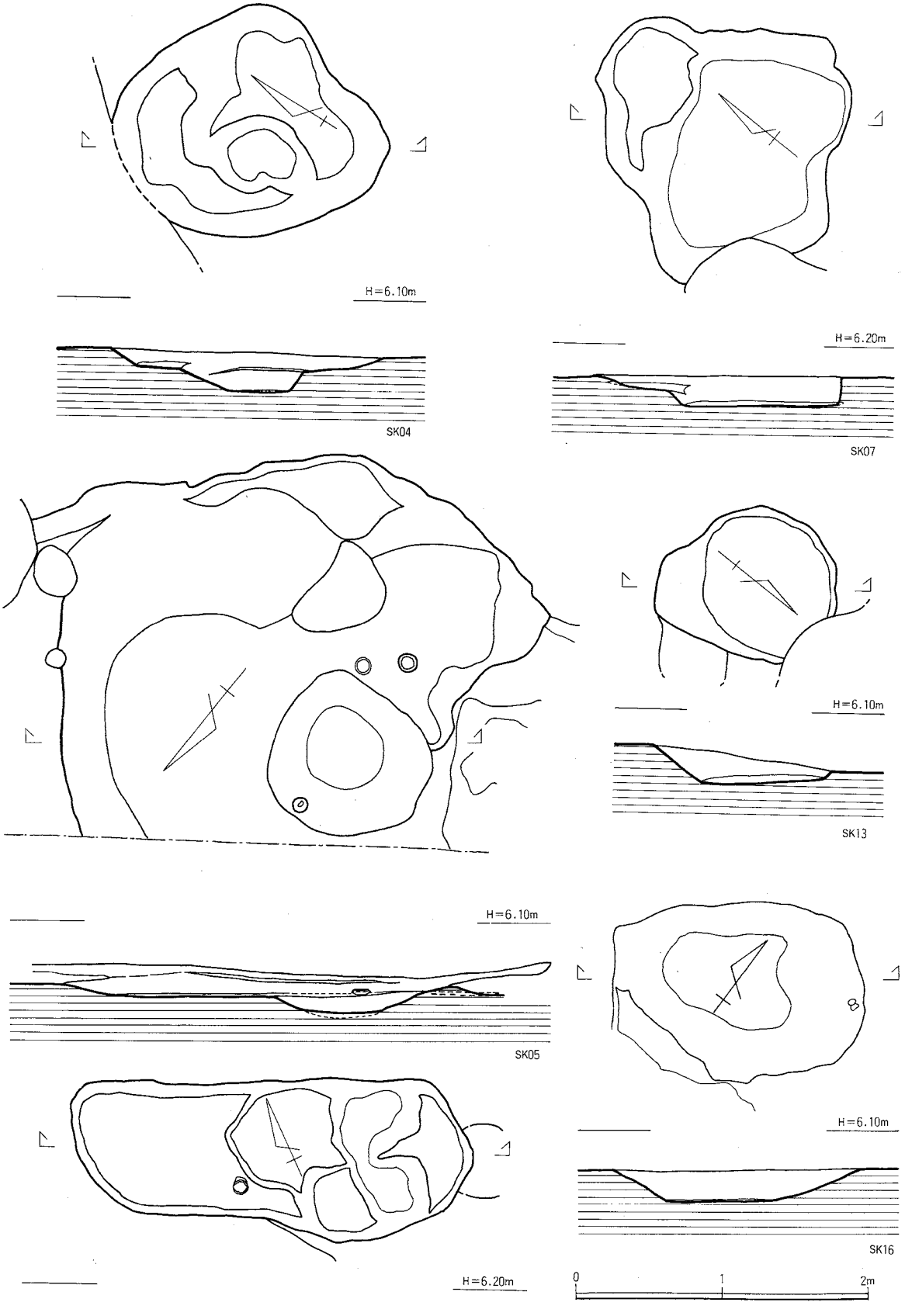



Fig.14　SK04・05・07・11・13・16
遺構実測図(1/40)

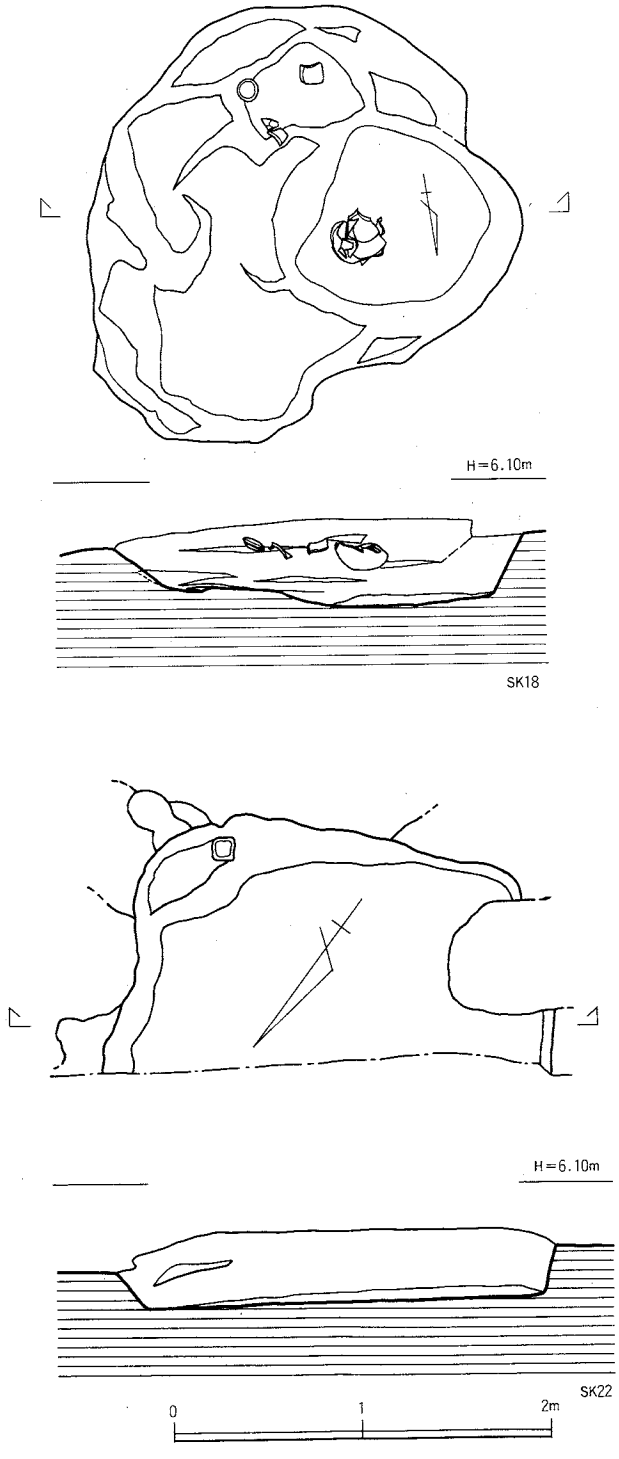



Fig.15　SK18・22遺構実測図(1/40)

の磨滅？)、内面は粗いケズリ。33・34ともに石英・花崗岩の粗砂を多く含む。SK25は須恵器よりIIIb期、6世紀後半か。(久住)

SK31(Fig.16)　調査区東側北寄りで出土した略長方形の土坑で、SK16のすぐ西側に位置する。長さ1.26m、幅0.85mの規模で、底面までの深さは0.18m、部分的に柱穴状に深くなる所があり、それまでの深さは0.26mである。遺物は須恵器坏、土師器高坏・甕などが出土している。須恵器の坏は須恵IIIb～IVに相当し、6世紀末から7世紀初頭のものであろう。

SK32(Fig.16)　調査区東側やや北寄りで出土した小型で浅い長方形土坑である。長さ1.1m、幅0.7m、深さ6㎝を測る。弥生土器片、須恵器坏蓋片が出土している。坏蓋は破片が小さく全体の様子は分らないが須恵IIIに相当しよう。遺構の時期は6世紀後半代か。

SK33(Fig.4)　調査区中央部北端に位置する溝状の遺構である。これは遺構ではなくて阿蘇IV火砕流に巻き込まれた木の痕跡である。ほぼ北方向に倒れ込でおり、火砕流が南側から流れ込んだことを示している。一部炭化した材も残っていた。比恵50次調査でも何本かの火砕流に巻き込まれた木が検出されており、丸いまま炭化したものや枝の一部が残っているものがあった。比恵36次調査でも同様なものを確認している。比恵36次・50次調査で出土した炭化木材はほぼ北方向をとっていて53次調査のものと方向が同一である。混入した遺物には、須恵器甕片と土師器甕片がある。

SK37(Fig.16)　SX11の北側に位置する小型で浅い略楕円形の土坑である。長さ1.0m、幅0.7m、深さは10㎝程度である。弥生後期の甕片が出土しているが時期は特定できない。

SK41(Fig.4)　調査区東側南端に位置し、一部分のみの確認で全体の様子は分らない。弥生土器片・土師器片が出土している。

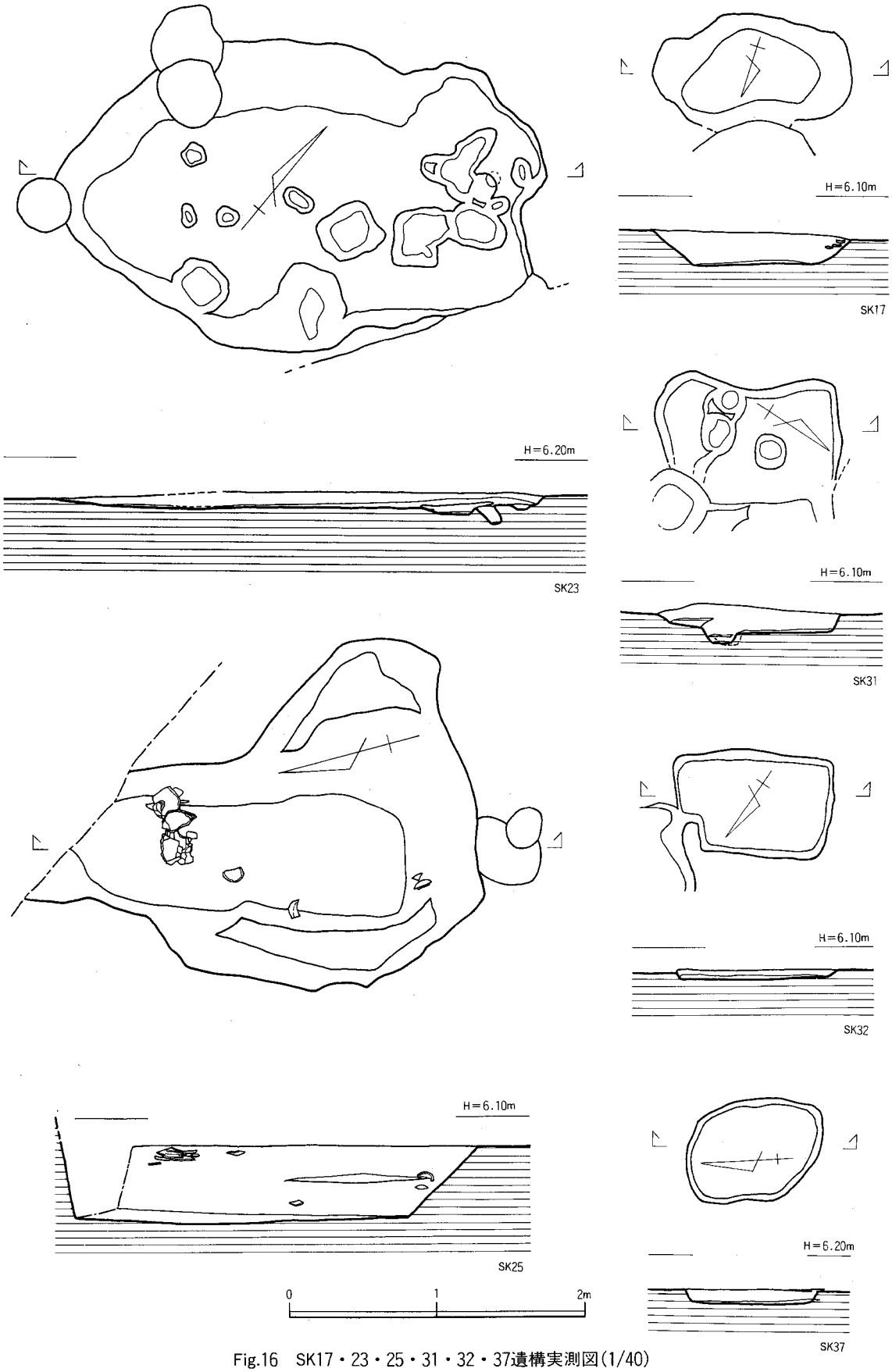



Fig.16　SK17・23・25・31・32・37遺構実測図(1/40)

SK43（Fig. 4） SK41の東側に位置し、大部分は調査区外に延びる。竪穴住居址の可能性もある。弥生後期後半の細頸壺の破片が出土している。

SK49(Fig. 4） 調査区西側南端部に位置し、大部分は未調査区へ延びる。一部分だけの確認であるが弧を描いて延びており、円形竪穴住居址の一部である可能性もある。

SK50(Fig. 4） 調査区西端部で検出された隅丸方形の浅い落ち込みである。南北長は2.78m、東西長は西側が撹乱で破壊されているので分らないが、1.2m分だけは残存している。小型の方形竪穴住居址の可能性もある。

SK56(Fig. 4） 調査区西側南端部に位置する方形の落ち込みである。東側は段落ちで切られ、南側は未調査区へ広がっており全体の様子は分らない。弥生土器片が出土しており弥生期のものであろうか。

SK58（Fig. 4） 調査区西側北端部に位置する不定形の落ち込みである。SE54の周囲を取り巻くように広がっている。遺物の出土が殆どないため時期は分らない。

SK60（Fig. 4） SK58の東側に位置し、SC59に切られている。一部分のみの確認である。

## 5 溝

溝は大小含めて25条検出している。弥生時代から中世までのものがあり、主に中央部の段落ち部分に主要な溝が集中している。方位は南北をとるものが多い。

SD01（Fig. 4・19・26、PL.62） 調査区中央部東寄りで検出された幅の広い溝である。南側から北の方に延びて北東方向に湾曲し、さらに北側に延びている。幅は2.2mで、南側はそれよりも幅広く、北側はやや狭くなっている。深さは0.3mである。溝底は凹凸がかなりみられる。遺物は、須恵器坏身・坏蓋・壺・甕、土師器甑、弥生土器片、白磁碗片、青磁碗片、砂岩製砥石片などが出土している。白磁碗片、青磁碗片は上面に混入したものである。須恵器の坏はIII～IVの段階で、6世紀末から7世紀初頭の時期であろう。

Fig.26－75は上面に混入したとみられる青磁碗底部である。底径5.0cm、胎土は淡灰色で密である。透明の灰緑色を呈した釉を全面に掛ける。ただし、外底部は露胎になる。全体的に雑な作りである。

SD02(Fig. 4・26、PL.62） SD01の東側に延びる浅い溝である。幅1.0m、延長6.0m、深さは15～16cmである。弥生土器片、白磁碗片、青磁碗片などが出土している。Fig.26－76は白磁皿である。口径9.7cm、底径3.4cm、器高2.7cmを測り、胎土は灰白色～淡黄褐色を呈し、灰白色の不透明釉が掛かる。口縁部は玉縁状に成形し、口縁頂部は釉を掻き取っている。77は片切彫りで鎬蓮弁文を施した青磁碗である。底径6.4cm、胎土は灰色で密、釉は半透明の深緑色である。内面には大きな氷裂がみられる。時期はII類の青磁碗が含まれることから13世紀の終りから14世紀前半代に属すると考えられる。

SD03（Fig. 4、PL.63） 調査区東側南寄りで出土した溝である。SD01の東側に位置し、ほぼ並行して延びている。幅0.8m、延長6.5m、深さは0.25m前後である。断面は「U」字形を呈する。遺物は、須恵器坏身・坏蓋・壺・甕・高台付碗、黒色土器、ヘラ切りの土師皿などが出土している。時期は10世紀の終りから11世紀代であろう。

SD08（Fig. 4、PL.63） 調査区中央部北端で出土した鍵型に曲がる浅い溝である。幅0.85m、深さは0.2m前後で、延長8.3mまで確認した。須恵器坏・甕、弥生土器片、滑石片などが出土している。古墳時代後期のものであろう。

SD09(Fig. 4・26） 調査区中央部北端に位置し、SD08に切られる短い溝である。幅0.7m、深さ0.22mで、延長は3.3mである。弥生中期末の甕・壺・無頸壺などが出土している。弥生中期末に属するも

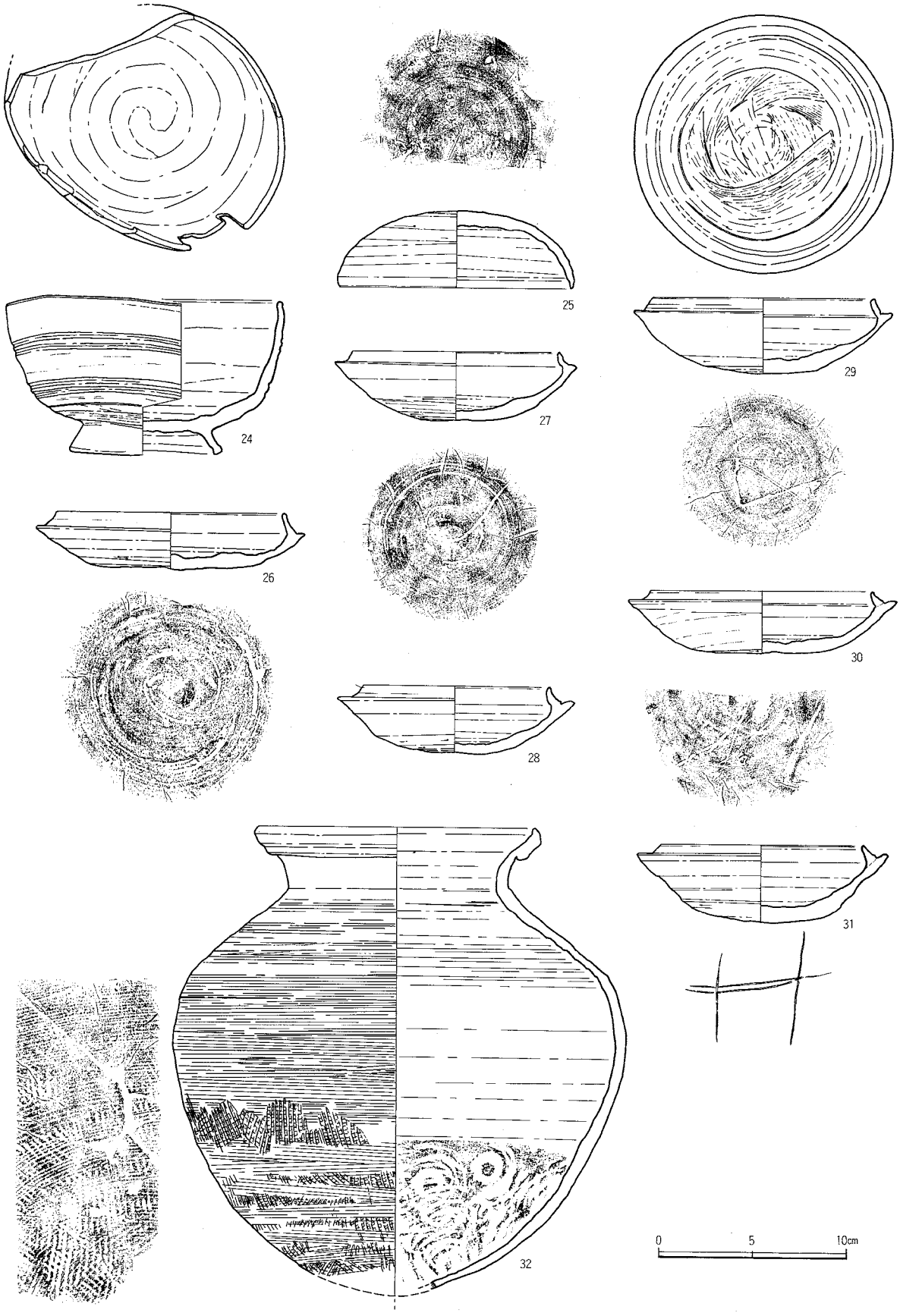



Fig.17　SK05・18・25　出土遺物実測図(1/3)

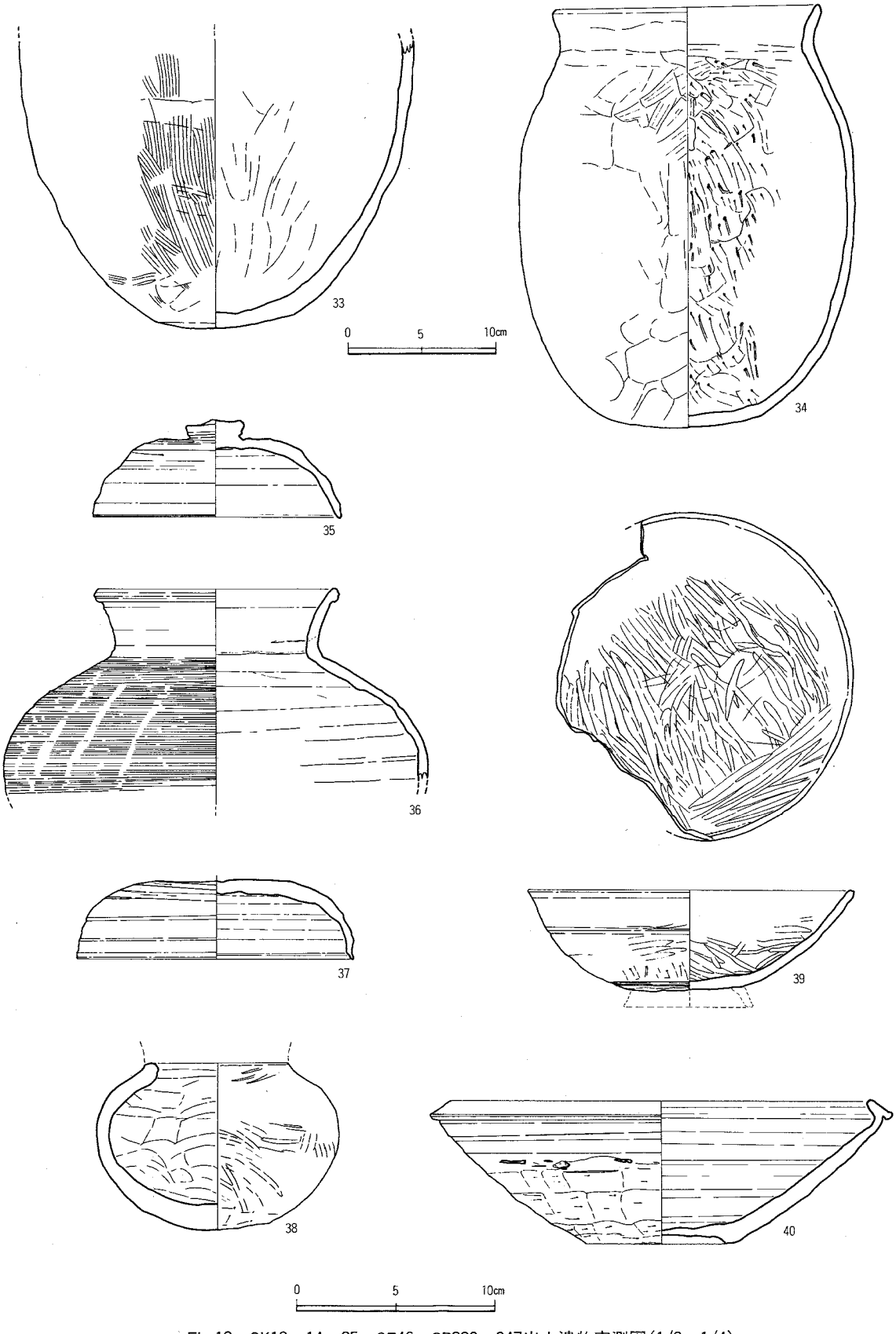
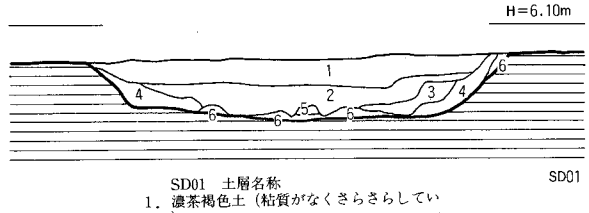



Fig.18　SK13・14・25、SE46、SP280・347出土遺物実測図(1/3・1/4)

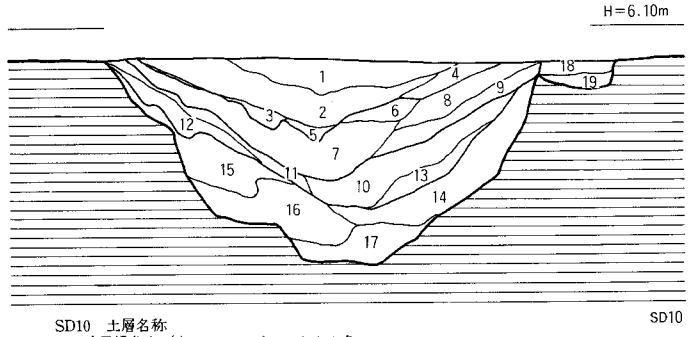
のであろう。Fig.26－91は土製石庖丁の一部ではなかろうか。残存長3.1cm、残存幅2.3cm、最大厚0.4cm、孔径0.6cmを測り、灰褐色から一部褐色を呈する。胎土には１～２㎜大の石英･長石粒を含む。二次的に火を受けているため焼成は分らない。

SD10（Fig.4・19～24・26、PL.64～66・71・72）　調査区中央部を南北に延びる大溝である。幅2.3m、深さ1.1mを測り「V」字に近い逆台形を呈する。延長は18.6mまで確認した。上層から中層の上半部にかけて、弥生中期末に属する多量の土器群（A群～E群）、竿頭形土製品、投弾、石庖丁、砂岩製砥石、敲石、窪み石などが出土している。これらの遺物は溝がかなり埋まった段階で投棄されたものであろう。

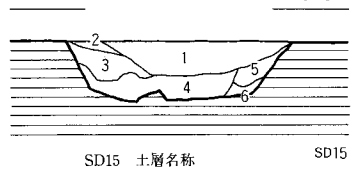
Fig.20～23－41～51、53～55は甕である。41は口径33.0cm、高さは口縁がかなり上下に歪むめ高いところで40.6cm、平均40.0cm、口縁端部は丸くおさめ、頸部に三角突帯が付く。底部はわずかに上げ底の平底。口縁付け根内側には甘い稜がある。胴部外面タテハケ、口縁部ヨコナデ、胴部内面ナデ。橙色～灰黄褐色。石英・花崗岩の砂粒をやや多く含む。42は小さな甕で口径18cm、高さは口縁が歪むため16.0～16.9cm、口縁は短く、その端部は丸くおさめるが面取りの痕跡を一部残し、付け根内側の稜は曖昧である。外面口縁下のヨコナデが広く。胴部外面タテハケ、内面は板ナデ及びナデ、浅黄橙色～淡橙色。焼成やや不良。43は口径24.7cm、高さ31.1cm。口縁端部はやや肥厚して丸くおさめる。付け根内側の屈曲は稜をなさない。底部はわずかな上げ底。胴部外面タテハケ、内面は磨滅し不明。口縁は丁寧なヨコナデ、にぶい橙色。石英・花崗岩の砂粒をやや多く含む。44は甕の下半。現存高17.8cm。平底。外面タテハケ、内面はナデで一部ヘラケズリ。器壁はやや厚い。橙色。石英･花崗岩（及び琉紋岩か？）の砂粒を多く含む。45は比較的小型の甕。口縁は平坦に近く外反し、付け根はやや内側に突出し端部は丸くおさめる。底部は厚目の平底。外面は胴部タテハケ、口縁から胴部上位にかけてヨコナデ、内




SD01　土層名称
1．濃茶褐色土（粘質がなくさらさらしている）
2．黒灰色粘質土（やや青味を帯びる）
3．黒灰色粘質土（２の質の上にロームまざる）
4．黒灰色粘質土（３よりもさらにロームが多く、べたついている）
5．ロームのかたまりは３・４同じ位の大きさだが分量が４の方がかなり多くなる。
6．黄褐色ローム基盤




SD10　土層名称
上層
1．暗黒褐色土（トスロームブロックやや多い）
2．暗黒褐色土（トスローム・八女粘土のブロック多い）
3．暗黒灰色粘質土（トスローム・八女粘土ブロック多い）
4．暗黒褐色土（２層に似るがロームブロックの粒がやや小さい）
5．黒灰色粘質土（粒子状のトスロームを含む）
中層(上)
6．黒灰色土（大きなトスロームブロックを多く含む）
7．黒灰色土（トスローム・八女粘土の大型ブロックを非常に多く含む）
8．茶褐色土（トス・八女粘土ブロックを多く含む）
9．黒褐色土（粒子状のトスロームブロックをやや多く含む）
中層(下)
10．黒色粘質土（トスロームおよび茶灰色粘質土ブロック〈5～10㎜大〉を含む）
11．黒色土・暗茶灰色土混合土（粒子状のトス・八女粘土を含む）
12．茶灰色粘質土（トスローム・八女粘土ブロックを層状に含む）
13．黒色粘質土（トスロームブロック〈10～20㎜大〉を含む）
下層
14．トスローム・八女粘土の混合土（地山が流れ込んだ土）
15．暗黒色土（20㎜以上のトスロームブロック含む）
16．トスローム崩落土
17．トスローム・八女粘土流入土
18．茶褐色土
19．18層にロームブロックを含む土




SD15　土層名称
上層
1．黒灰色粘質土
2．黒灰色粘質土（ローム小粒子をわずかに含む）
3．黒灰色粘質土（ローム小ブロックを多く含む）
下層
4．茶灰色粘質土（ローム小粒子をわずかに含む）
5．茶灰色粘質土（ロームブロックやや多く含む）
6．暗黒灰色粘質土

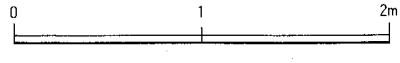



Fig.19　SD01・10・15土層断面図(1/40)

面はユビナデ。にぶい黄橙色。口径25cm、高さ22.9cmである。46は口縁付け根の内側の稜が比較的はっきりしており、「く」の字口縁に近づいたものである。口径31.3cm、高さ33.6cm。口縁はやや歪み、上から見て楕円を呈する。口縁端部はやや肥厚し、丸くおさめる。底部は薄めの平底。胴部外面タテハケ、口縁は丁寧なヨコナデ、内面は磨滅しているがナデのようである。外面中位前後に煤付着。橙色を呈し、1㎜前後の砂粒を含む。47は口径33.7cm、高さ35cm。口縁端部はやや肥厚し丸くおさめる。口縁の付け根内側の稜は甘い。胴部外面タテハケ、口縁部丁寧なヨコナデ、胴部内面はナデ。底部は薄く、やや上げ底気味の平底。橙色ないし黄橙色、赤彩の可能性もあるか。長石・石英を若干含む。49は口径21.1cmの小形の甕の上半、口縁端部は丸くおさめる。胴部外面タテハケ、口縁部ヨコナデ。口縁の付け根内側の稜はやや甘い。胴部内面はナデ。外面橙色、内面は明褐灰色。石英・長石をやや多く含む。外面煤付着。50は口縁部が欠損する甕。現存高23.8cm。底部は薄めだが、外面が凹凸あり雑な作りの平底。外面タテハケ、内面ナデで一部横の板ナデ。にぶい橙色～浅黄橙色。石英・長石・花崗岩の砂粒を含む。外面中位前後に煤付着。48は口径29.6cm、現存高24.0cm。口縁端部は丸くおさめる。胴部外面はタテハケ、内面は丁寧なナデ。口縁部は丁寧なヨコナデだが、特に口縁付け根外側は強く、回転的な擦痕が入る。口縁の付け根の内側の稜は曖昧である。浅黄橙色～橙色。胎土は密で砂粒は少ない。外面には煤が顕著に付着。51は現存高16.4cmの甕の下半部。平底。外面タテハケ、内面はハケ後ナデ。橙色～浅黄橙色。内面一部灰褐色。石英・花崗岩の砂粒を含む。外面若干煤あり。52は大型の鉢で、甕棺の上蓋に用いられるようなタイプである。復元口径67.8cm、現存高35.7cm。口縁部は鋤先状で、内外の端部は面取りの痕跡があるが、ヨコナデにより内側はやや丸く、外はやや凹んで仕上げられる。口縁の下に三角突帯が付く。胴部外面は下半はタテハケ、中位より上はナデ仕上げか。口縁部は丁寧なヨコナデ。内面は磨滅するがナデとみられる。橙色からにぶい黄橙色を呈するが、本来は丹塗りされていた可能性もある（磨滅気味で不明）。石英・花崗岩の粗砂を含む。Fig.22－53は口径30.3cm、現存高25.6cm。口縁端部はわずかに肥厚して丸くおさめる部分もあるが、ややすぼめ気味の部分もある。口縁は「く」字に近いが、付け根内側の稜は甘い。胴部はやや丸味を持つ。胴部外面タテハケ、口縁部ヨコナデ、内面は磨滅し不明。石英・花崗岩の砂粒をやや多く含む。橙色～にぶい黄橙色。55は現存高約18cmの甕の下半。底部は薄めで、やや上げ底気味の平底。外面タテハケ、内面は磨滅し不明。橙色～にぶい黄橙。石英・花崗岩の砂粒を多く含む。54は口径31cm、現存高24.5cm。口縁端部は丸くおさめるが、一部面取り痕あり。また口縁はやや歪み波打ち気味。胴部外面タテハケ、内面はナデ。口縁部はヨコナデだが、口縁部付け根外面は斜めのオサエが残り、これを消すために一部に工具によるヨコナデがあるが全周せず、内面はヨコナデ前のヨコハケが残る。口縁付け根内側の稜は非常に曖昧である。橙色～浅黄橙色を呈し、胎土には石英・花崗岩の小粒を若干含む。56～61は壷である。57は口径10.7cm、高さ25.5cmの袋状口縁壷。袋状になる口縁の上部は内に若干凹む。頸部から胴部の上方にかけて3条の低いM字状突帯が巡るが、やや波打っている。底部はわずかに上げ底の平底で薄い。外面調整は胴部が横のヘラミガキ、突帯間と口縁の下部は横の丁寧なナデの後タテの暗文風のヘラミガキを施し、口縁部中位はナデ後横のミガキ、端部はヨコナデ。内面調整は胴部がハケないし板ナデ後ナデ、頸部の上と下は顕著なユビオサエ、その間はシボリ痕が見られ、口縁部はヨコナデ。外面全体と口縁内面は赤彩される。地の色はにぶい橙色。胎土は密で比較的精選され、長石を少し含む。56は口径23.2cm、高さ33.2cmの広口壷である。口縁の上面には推定2ケ所の円形浮文があり、外方の端面中央は沈線状に凹みさらに刻み目が付される。頸部に1条、胴部中央に2条の低いM字突帯がある。底部はかすかに上げ底となる平底。外面調整は胴部が丁寧なナデ(ミガキ状)、胴部上方は一部ヨコハケあり、頸部から口縁部にかけては丁寧な横のナデ後暗文風のタテのヘラミガキ、

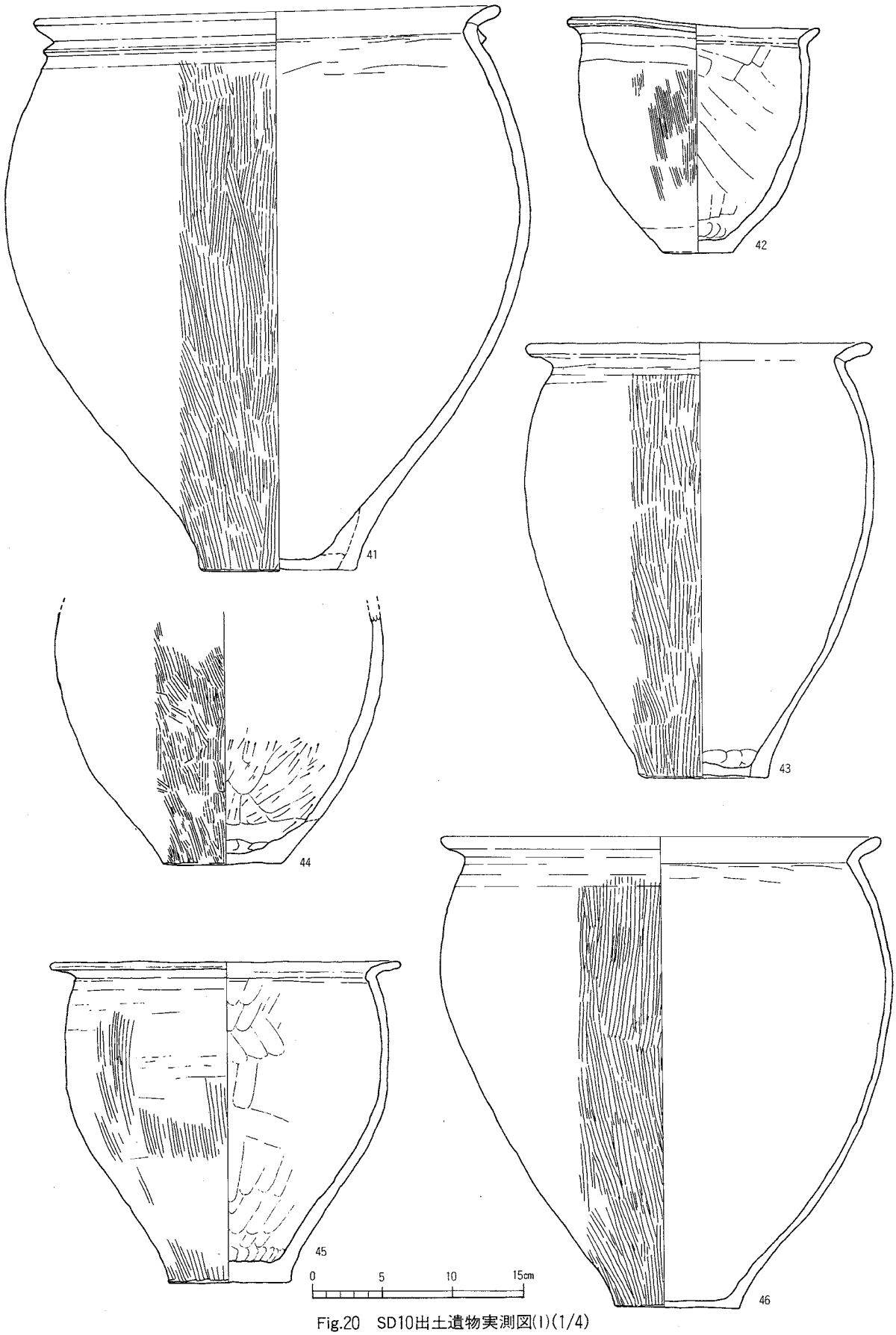



Fig.20　SD10出土遺物実測図(1)(1/4)

口縁部上面及び内面は丁寧なヨコナデ、内面は頸部は押捺およびナデ、胴部は磨滅しているがナデ。橙色を呈し、胎土は精選され砂粒少ない。58は壷の下半。現存高14.0cm。底部は薄めで平底。外面はタテハケ、内面は板ナデ後ナデ、灰白色から淡橙色を呈するが、内面は褐灰色。胎土はやや粗く、長石・石英を少し含む。Fig. 23－59は袋状口縁壷の頸部から口縁部。口径12.8cm、現存高9.0cm。袋部の屈曲には甘い稜が走り、複合口縁化の兆しを見せる。頸部の下には三角突帯が付く。頸部外面は磨滅しているがタテハケか。口縁部はヨコナデ。口縁端部は面取りの後丸くおさめる。頸部内面はナデか。淡橙色を呈するが、本来器面は赤彩されていた可能性あり。胎土は密だが、石英・長石と少量の雲母を含む。60は壷の底部と考えられる。底部はわずかに上げ底だが中央は焼成前穿孔である。全体的に磨滅し調整は不明。橙色から内面は灰褐色を呈する。胎土はやや粗く石英・花崗岩の砂粒を含む。61は小型の壷である。底部はやや厚い平底で、口縁端部は面取りされる。外面は胴部がタテハケ、頸部から口縁部はナデ、内面はナデおよび押捺、口縁部はヨコナデ。浅黄橙色を呈し、胎土は長石を若干含む。62は高坏。口縁は鋤先状で、内外の端部は面取り状である。外面調整は、坏部上方はタテハケ以下はナナメハケ後ナデ？(磨滅し不明確)、脚部はタテハケ及び強いナデ、脚裾部はやや広くヨコナデ。内面は坏部がハケメ、脚部は上方がシボリと押捺・ナデ、下方はナデ・ヨコナデ。磨滅しているが、外面全体と坏部内面は丹塗りされていたようである。脚裾の端部は面取りされる。淡橙色を呈する。砂粒は目立たないが長石・石英を含む。口径28.8cm、高さ20.8cm。63～65は小型の鉢。63は口径13.1cm、高さ9.0cm。口縁端部は丸くおさめる。底部は平底。外面は細かいタテハケ、口縁部はヨコナデ。内面はナデ。灰白色から淡橙色。石英・長石・花崗岩の砂粒と雲母を少し含む。64は口径18.9cm、高さ10.8cm。口縁端部は上方に面を有し、底部は平底。外面は粗いタテハケ、口縁部は強いヨコナデ。内面は口縁ヨコナデ、以下はナデ。灰白色～浅黄橙色。石英・花崗岩の砂粒をやや多く含む。65は口径15.2cm、高さ10.4cm。口縁は内に曲がり端部は丸くおさめる。底部は平底。外面タテハケ後ナデ。口縁部ヨコナデは外面はやや下方まで広がり擦痕を伴う。内面はナデ。明赤褐色から橙色。長石を若干含む。66～69は支脚とも器台ともつかない、作りの粗雑な土器である。67～69は中央の孔が縦に貫通するが、棒に粘土を巻きつけて製作した可能性も考えられる。66～69はどれも２次焼成を受け、赤色化している部分がある。いずれも手ずくね的で器面は汚ないナデのままで凹凸が激しい。66は高さ11.8cmで、上下両面が内に凹み、中央は穿孔状になっている。浅黄橙色ないし一部赤橙色。胎土は赤色砂礫、赤色土粒、石英・角閃石などを含む。筒状に作っておいてから上下を閉じ、穿孔したか？67は現存高12cm。器壁は極めて厚い。内面中位はシボリか。灰白色ないし浅黄橙色、一部赤橙色。石英･花崗岩の粗砂を多く含む。68は現存高9.5cm、器壁は極めて厚い。内面中位はシボリか。灰白色を呈し、裾部は橙色。赤色砂礫・石英の粗砂および角閃石を含む。69は、中央部は本来貫通していた孔に後から土を詰めたような模様。現存高12.4cm。器壁は極めて厚い。焼成不良。灰白色～浅黄橙色。赤色砂礫、赤色土粒、石英･灰白色砂粒（琉紋岩か）の粗砂、角閃石を含む。Fig.24－74は弥生中期末のやや大型の甕で高さに比して口径の広いタイプである。口径43.2cm、現存高19.3cm。口縁端部は丸くおさめ、口縁付け根内面は、内にやや突出した稜をなす。口縁の下には三角突帯を有する。外面はタテハケ、口縁部はヨコナデ、内面はナデ。橙色（外面）～赤色（内面）を呈す。胎土は密で石英・花崗岩の細粒を含む。以上のSD10の土器の取上げ時の出土地点は以下の通りである。41～43･56･58･61・62はⅠ区E群、44はⅠ区上層、45・46・57・63はⅢ区A群、47・49～51・65～69はⅢ区C群、48はⅢ区E群、52・59・60・64はⅠ区D群、53～55はⅢ区上層。これらSD10の土器の所属する様式を、中期末と見るか後期初頭と見るか問題となるが、「く」字に近い口縁の甕や、やや粗雑な小型の壷や高坏、複合口縁化直前の壷など新出要素もあるものの、立岩式甕棺に伴うだろう大形鉢や暗文を施す丹塗磨

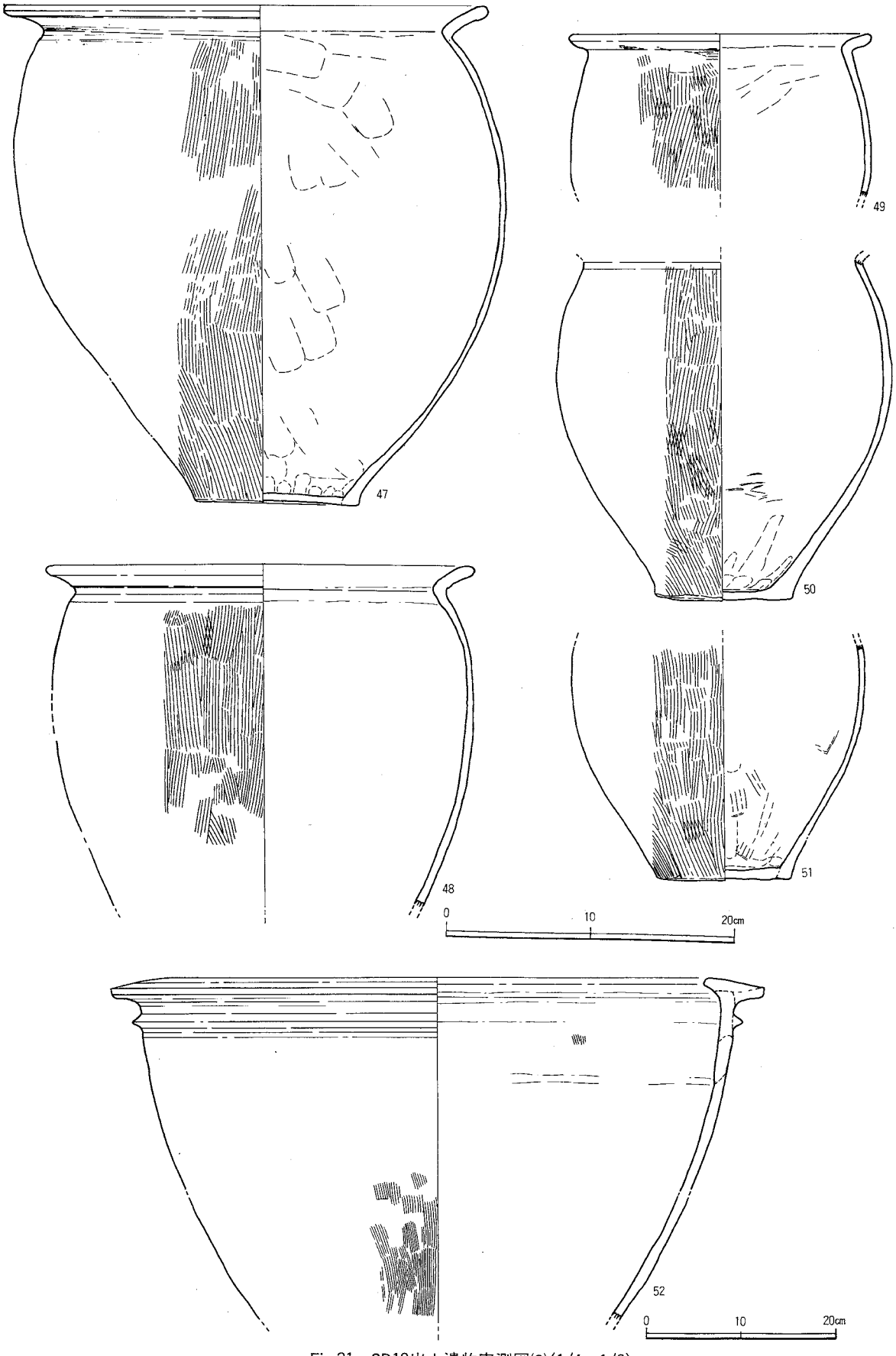



Fig.21　SD10出土遺物実測図(2)(1/4・1/6)

研の壷の一定の存在、加えて甕の口縁部が基本的には丁寧な（回転的な）ヨコナデを施し端部を丸くおさめるという技法の斉一性から見て、「須玖式」土器様式の最末期に位置付けるのが妥当ではないかと考えたい。（久住）

Fig.26－83は竿頭形土製品である。径4.7cm、残高5.1cm、器壁厚0.9cm、孔径0.3cmを測る。胎土には石英・長石・赤色粒子（１mm以下）を少量含むが精良で、胎土の色調は橙褐色を呈する。他の丹塗り祭祀土器と共通する胎土である。これまで発見されている竿頭形土製品では最も小型のものである。外面には丹塗り研磨が施され、内面はシボリ痕が観察される。頂部には小孔と放射状の沈線を施す。沈線は８本の可能性がある。これまで知られている竿頭形土製品は、壱岐原の辻遺跡、板付遺跡、那珂遺跡23次調査、同50次調査と本例である。祭祀土器の一種であろう。84・85は土製の投弾である。84はＩ区上層から出土したもので、残長4.3cm、径2.2×2.1cm、灰褐色から灰黒色を呈し、精良な胎土に赤色粒子を含む。焼成は良好である。下端部と裏側の一部が破損している。85もＩ区上層から出土したもので、全長4.2cm、径2.3cm、灰褐色を呈し、胎土に赤色粒子、角閃石、石英砂などを含む。焼成は良くなく表面はかなり磨滅している。

92・94～96は石庖丁である。92はＩ区上層から出土したもので、石材は輝緑凝灰岩か。灰色を呈している。端部が少し折損しており残存長12.4cm、最大幅4.5cm、最大厚0.7cm、孔間幅2.4cm、孔径0.5cmである。表面には縦方向の粗い研磨の後、横方向の磨きが施されている。刃部も横斜め方向に磨く。左裏折損部は再研磨が施され、右裏側には敲打痕がある。両刃部には使用された斜めの擦痕（使用痕）が観察される。使用痕の付き具合から左手で使用されたものである。94はII区中層下から出土した孔の部分が残る石庖丁片である。孔はあらかじめ敲打で窪ませておいて開けられたものとみられる。孔の内側には敲打痕が残っている。95はIII区C群から出土した輝緑凝灰製の石庖丁である。色調は小豆色を呈している。残存長6.7cm、最大幅4.0cm、最大厚0.6cm、孔径0.5cm、孔間幅2.7cmである。刃部及び両端部は欠損している。表面には粗調整のための縦方向の研磨痕が残る。96もIII区C群から出土したもので、石材は輝緑凝灰岩か。灰色を呈している。半分に折損しており残存長7.1cm、最大幅4.2cm、最大厚0.7cm、孔径0.5cm、孔間幅1.9cmである。研磨は先ず縦方向に粗く施され、その後横方向の研磨が加えられている。右端部は薄く仕上げられている。孔の周りには敲打痕が残る。

SD12（Fig.4、PL.67）　調査区中央部北端で検出した溝で、幅0.8m、深さ0.2～0.3m、長さは5.6mまで確認している。さらに西方の未調査区へ延びている。出土遺物は、須恵器甕・坏身・坏蓋、古式土師器、弥生土器などがある。６世紀後半代のものであろう。

SD15（Fig.4・26、PL.68）　調査区中央部で検出された溝で、南北方向に延び、北側で北西方向に折れて、さらに未調査区へ延びている。幅は１m前後、深さは0.2～0.3mで、断面は逆台形を呈する。延長19.2mまで確認した。遺物は須恵器甕・坏身・坏蓋・高坏、土師器甑、滑石製石鍋、白磁碗、口ハゲの白磁皿、青磁碗、縄目タタキの平瓦、太型蛤刃石斧などがあり、弥生中期から14世紀代までの遺物が出土している。溝の時期は14世紀であろう。

Fig.26－80は龍泉窯系の青磁碗である。復元口径は16.1cm、胎土は淡灰色で密、釉は暗黄緑色透明釉が厚くかけられている。内面には片切彫で雲文を施す。81は口ハゲの白磁皿である。口径11.8cm、底径6.2cm、器高3.6cmを測る。胎土は白色密で、青白色不透明釉が掛けられる。口縁端部は釉をカキ取り、いわゆる口ハゲになっている。82は白磁碗の底部である。底径5.9cm、胎土は灰白色で黒色細粒含み密である。釉は不透明灰白色で、高台は露胎となる。見込みに圏沈線を一条巡らす。

SD19（Fig.4、PL.64）　調査区中央部を略南北に通る幅0.35m、深さ0.1mの細長い浅い溝である。途中途切れてさらに北側に延びる。北側はさらに細くなっている。遺物は須恵器甕・坏蓋、土師器片、

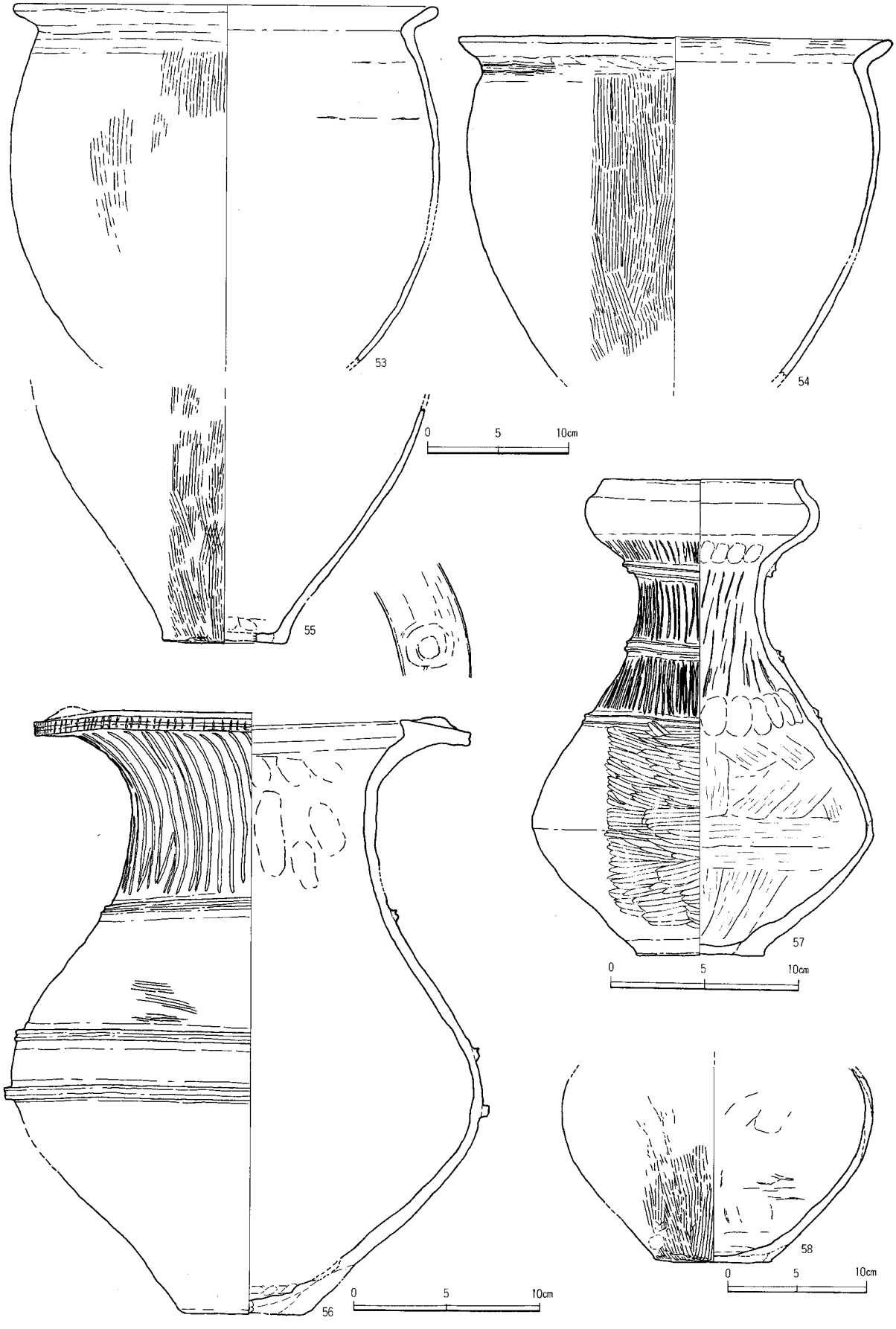



Fig.22　SD10出土遺物実測図(3)(1/3・1/4)

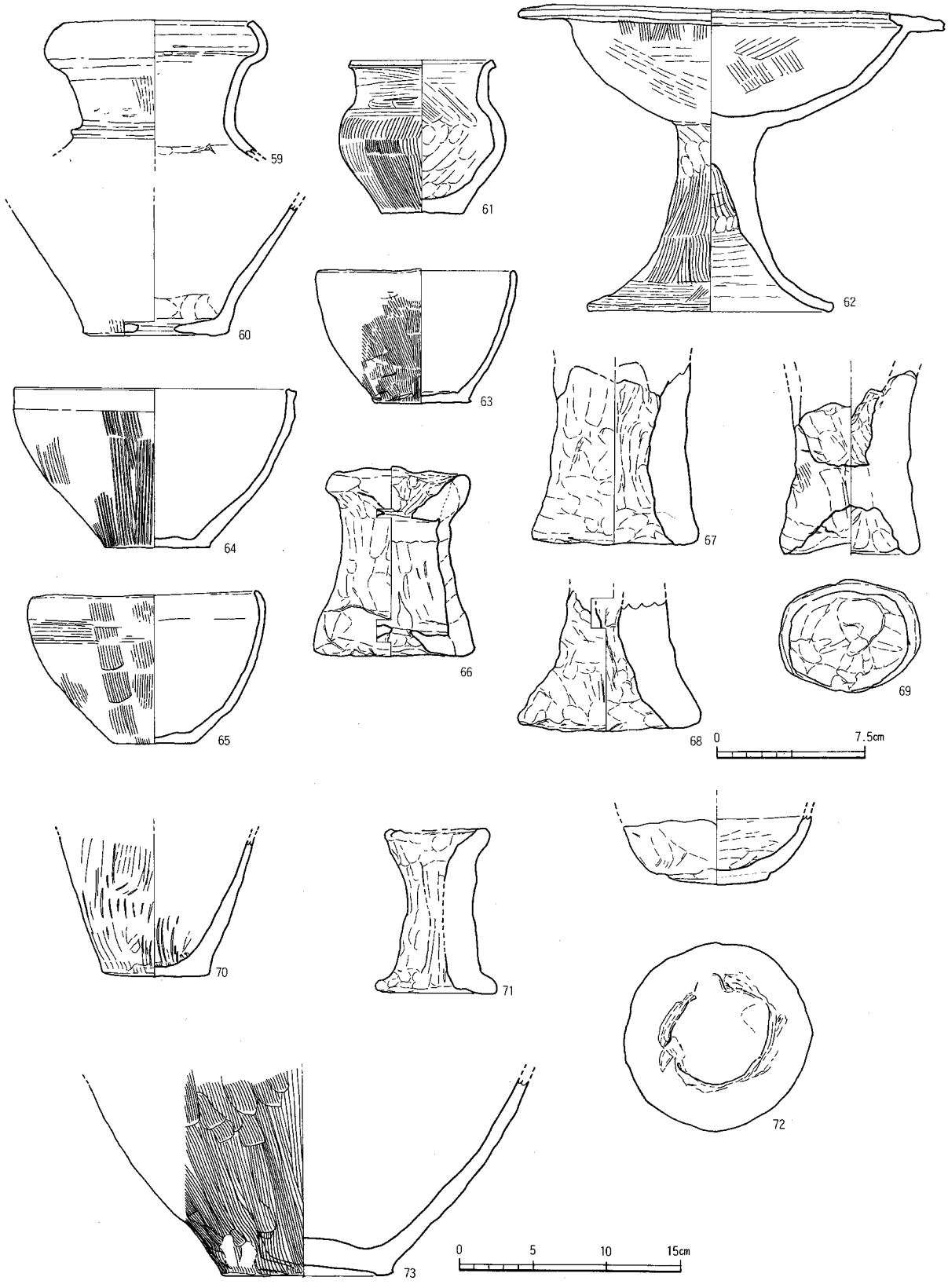



Fig.23　SK11、SE54、SP194・SP694、SD10出土遺物実測図(4)(1/3・1/4)

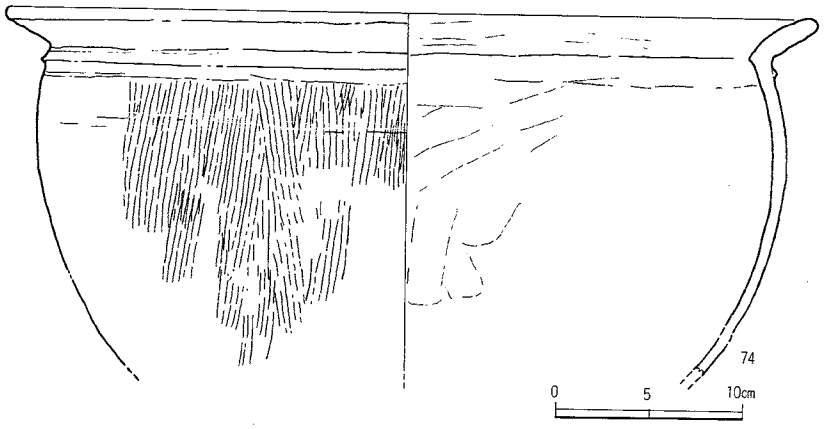



Fig.24　SD10出土遺物実測図(5)(1/4)

弥生土器片などが出土している。古墳時代後期のものであろう。

SD20(Fig. 4)　SD19のすぐ西側に位置する、細くて浅い溝である。長さも僅か1.1mしか残っていなかった。須恵器の壺などが極少量出土している。時期は特定しずらいが、古墳時代後期のものとしておきたい。

SD26(Fig. 4)　調査区中央部北寄りで出土した浅い溝である。幅0.55m、長さは2.5mである。土師器甕片が少量出土しているに過ぎない。6世紀後半代以降のものであろう。

SD28(Fig. 4)　SD01・SD10・SD29を切って東西に延びる浅い溝である。中世に属するものであろう。遺物は須恵器片、高台付土師器片が少量出土している。

SD29(Fig. 4、PL.64)　調査区中央部のSD01とSD10には挟まれて略南北方向をとる細い溝である。須恵器の甕片、土師器の甕片などが出土しており、古墳時代後期のものであろう。

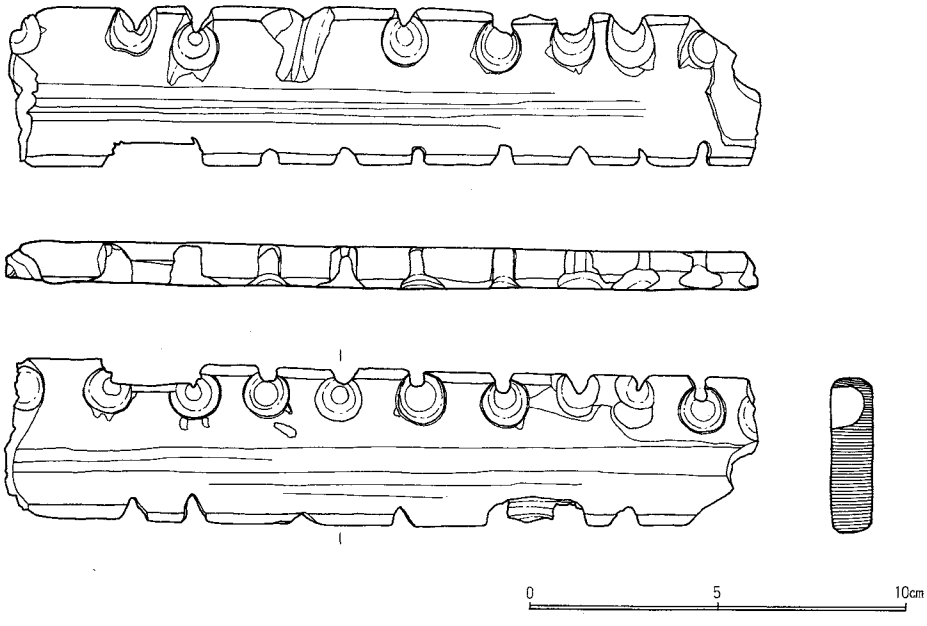



Fig.25　SE46出土火鑽臼実測図(1/2)

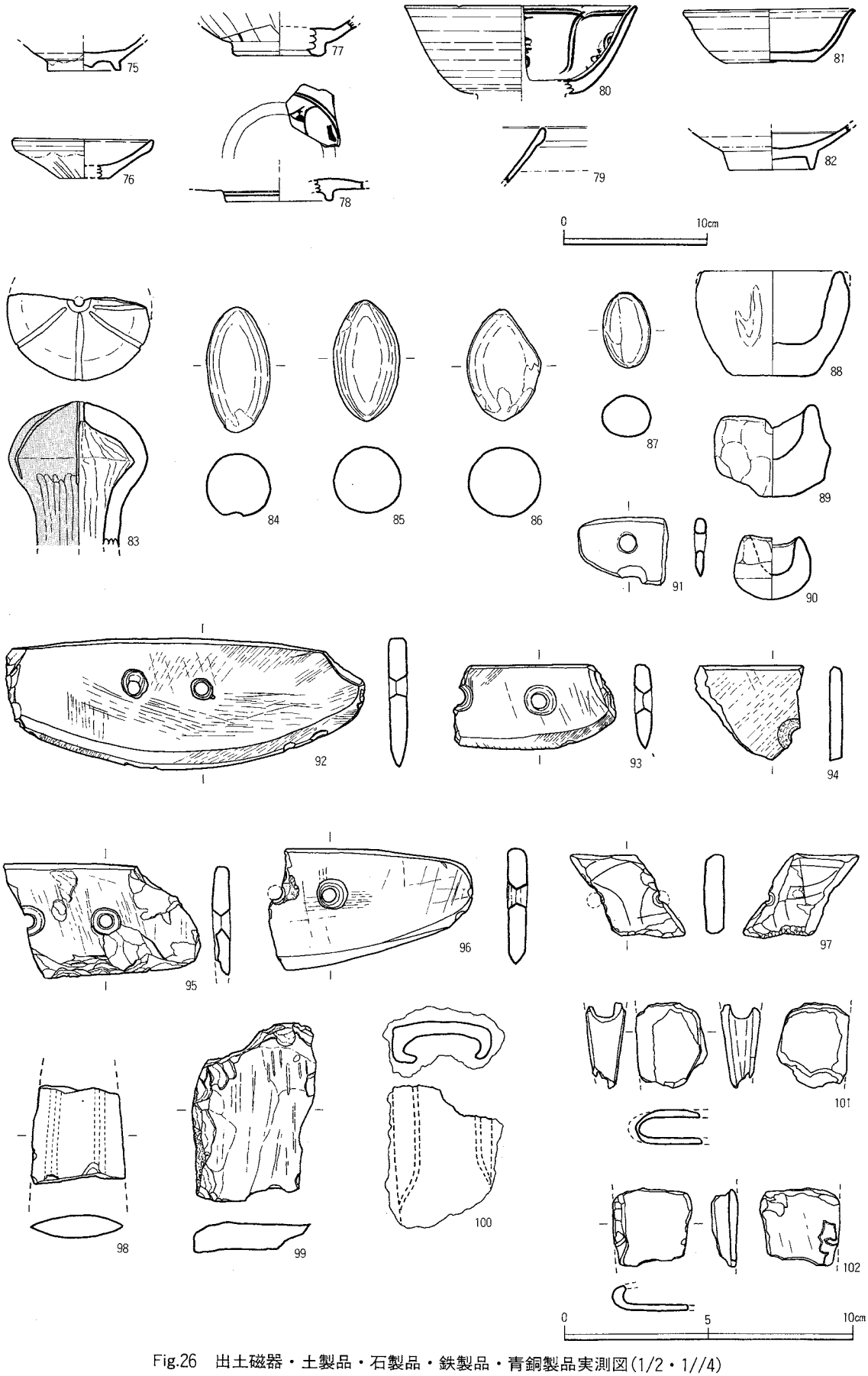



Fig.26　出土磁器・土製品・石製品・鉄製品・青銅製品実測図(1/2・1//4)

SD34・36（Fig. 4）　調査区東側台地部で検出した細い溝である。撹乱や段落ちで切られているがお互い並行して延びるとみられる。須恵器坏蓋片や土師器甕片などが出土していることから古墳時代後期に相当すると考えられる。

SD35・38・39・40・42（Fig. 4）　調査区東側台地部で検出された細い溝状遺構の一部である。竪穴住居址の壁溝の一部が含まれているかも知れない。殆ど古墳時代に属するものである。

SD55（Fig. 4）　調査区中央部で検出された細い溝状遺構の一部である。確認時では連続してあったが、非常に浅かったため途切れ途切れになってしまった。須恵器片が出土している。

SD48・57・61・63　調査区西側の台地部で出土した細い溝である。古墳時代のものであろう。

## その他の遺物

Fig.13－23は古式土師器の畿内系二重口縁壺の１次口縁の破片である。外面はナナメハケだが、垂下突帯がつくであろう剝離部分がある。内面もヨコハケを施すが、二次口縁がつく剝離部分がある。口縁の外側は面取りされ、やや大きめの円形浮文があり、竹管文が施される。類例としては博多遺跡62次調査の方形周溝墓出土の二重口縁壺がある。色は明るい橙色、胎土は２㎜位の長石・石英を少し含む。遺構検出時に出土。

Fig.18－37はSP280出土。須恵器の坏蓋である。口径14cm、高さ4.0cm。天井部と口縁部の間の外には弱い稜が巡り、口縁端部は内傾する面を有し沈線状に凹む。回転ヘラ削りは天井部の約１／２の頂部付近のみだが、削りは雑でかつ中央は削りがしっかりされていない。外面の回転ナデは工具使用か。II期か。38はSP347出土の土師器の広口小壺。但し口縁が欠けた面を擦り切って無頸壺風になっている。底部は厚く丸底気味。外面はナデ後ミガキ、内面は板ナデ後ナデ。底部外面はケズリ後ナデ。表面は内外とも炭素吸着化で黒色化するが一部灰黄褐色。胎土は精良。Fig.23－72はSP694出土。現存高4.7cm、底部に円板状に粘土を貼り付けたような感じである。おそらく製作途中の乾燥でひび割れたため補修したものであろう。調整は内外ともナデ、赤橙色（外面）～褐灰色（内面）を呈す。２次焼成か？弥生後期中頃～後半の甕の底部か。石英・花崗岩を多く含む。（久住）

Fig.26－78は遺構確認時に出土した明の染付皿である。胎土は灰白色で密、釉は透明な暗青灰白色である。見込みと外面に呉須の染付がある。畳付には目砂が付着している。79はSE14から出土した玉縁状口縁を有する白磁碗の口縁部片である。SE14の頁でもれてしまったのでここで取り上げておきたい。88はSP46から出土したミニチュアの鉢である。口径3.0cm、高さ3.6cm、底径3.0cmを測る。胎土には石英・長石・１㎜前後の赤色粒子を少量含む。外面は黒色～淡灰褐色、内面は淡灰褐色を呈する。焼成は良くなく表面は剝落している。胴の一部に高さ４㎜の突起状の高まりの残欠があり、耳状になっていたものであろうか。口縁端部は剝落していてもともとの口縁部かどうか判然としない。86は土製の投弾で、SC24の確認時に出土したものである。SC24は古式土師器の竪穴住居址であるので混入品であろう。全長3.9cm、径2.5cm、明褐色を呈し、胎土に１～５㎜大の石英砂粒を含む。焼成はあまり良くなく表面が剝落している。右上は押え付けた様に平坦部がある。93は排土から出土した石庖丁である。淡灰色を呈する頁岩製で両端部は欠損している。片面（裏面）の刃部は何度も研きがかけられている。全体的に縦方向の粗い研磨で、刃部は斜めに研がれている。刃部には使用痕があり右手で使用されたことが窺える。97はSP182から出土した石庖丁再利用線刻石製品である。灰色をした頁岩製で、両面に毛彫り状の細沈線で直線と弧線を組み合わせた直弧文状の文様を入れる。下端部には敲打痕がみられる。98はSP165から出土した石剣の身の一部である。頁岩製で表面は灰色を呈し脈がは入る。破断面は黒色である。残長3.4cm、最大幅3.2cm、最大厚0.8cmを測る。

# III　おわりに

比恵第53次調査では、計65の遺構群を検出した。時代的には弥生中期末から鎌倉時代に相当するものである。

SD10の大溝は、断面が「V」字に近い逆台形溝で、中層から上層にかけて多量の投棄された土器群が出土した。土器は日常生活に使用するものと丹塗りの祭祀用土器が混在していた。弥生中期末の一括資料としての資料価値は高い。溝は中期末には役目を終えていたと考えることができる。下層は八女粘土や鳥栖ロームの大きなブロックが混入していた。粘土ブロックとブロックの間の黒色粘質土の中には中期中葉から中期後半でもやや古い時期の甕の破片が出土しているので、溝が開削された時期もおおよそ同時期と考えることができそうである。比恵台地では、第35次調査、第40次調査、第15次調査、第46次調査と第41次調査でほぼ同時期の形状のよく似た大溝が検出されている。今回調査した大溝もこれらに繋がる一連のものと考えられよう。第46次調査では大溝が南北方向から90度折れて西側に曲がることが明らかにされており、さらに41次調査の略南北方向の溝に連続する可能性がある。これらの大溝のラインを結んでいくと比恵遺跡群の主要な場所を取り囲むように溝が巡る結果になる。まだ、中間部分がかなり開いていないので、本当に連続するものなのか、数本の別な溝が走っているのか今後の調査の結果を待たなければならないが、見通しとしてはこれらの溝は連続するものとみられ、弥生中期段階の環濠の一部になるものと推測される。したがって、SD10も環濠の一部になる可能性が高い。

今回出土した井戸や竪穴住居址の中に弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての遺物がまとまって出土していることは注目される。全体に削平を受けて遺構の数は少なかったが、同様な遺物を出土する遺構は隣接する調査区にも広がっており、かなり広い範囲で良好な資料が蓄積されつつある。SE27の遺物は、庄内式から布留式に対応し、外来系が比較的多い良好な資料で、山陰系の外来土器も含まれることは重要である。比恵遺跡群からは他にも外来系の土器が多く出土し、福岡平野の中でも中心的な位置を占めている。今後の検討が待たれるとこである。

出土状態は良くなかったが、青銅製鋤先が2点出土した。これまで5点出土していたので合計7点になる。那珂遺跡でも同様に7点出土しており合わせて14点の青銅製鋤先が一連の遺跡から発見されたことになる。最近、道路をはさんだ隣地の調査でさらに3点の青銅製鋤先が出土し合計17点になった。出土例は今後も増加するものと推測される。出土状態は殆どが使い減りして廃棄された様な状況である。那珂・比恵遺跡では青銅製鋤先は一般的な土掘り具であった可能性が高い。

その他、竿頭形土製品の出土や弥生時代の掘立柱建物群の出土も注目される。今後、周辺調査の成果と合わせて検討する必要があろう。

時間的余裕がなかったので粗雑な報告になってしまった。お許しを願いたい。